

京都府遺跡調査報告集

第190冊

犬飼遺跡第7・10次

2023

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



I 地区自然流路N R7100及び井堰出土状況(北東から)

序

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昭和56年に設立されて以来、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行うとともに、その成果を広く公開し、考古学・歴史学研究や、地域の歴史教育などにも活用していただけるように、さまざまな取り組みを実施してまいりました。また、これまで発掘調査を実施したすべての遺跡の調査報告は、『京都府遺跡調査報告書』『京都府遺跡調査概報』『京都府遺跡調査報告集』として刊行し、それぞれの遺跡がもつ考古学的・歴史学的な重要性について報告を行ってきたところです。

さて、本冊で報告する亀岡市犬飼遺跡第7・10次調査は、法貴谷川広域河川改修事業に伴い、京都府建設交通部の依頼を受けて実施しました。今般、整理等作業が完了し、調査成果をまとめましたので、『京都府遺跡調査報告集第190冊』としてここに刊行する次第です。

犬飼遺跡は、曾我部町の南西に位置し、近くには大阪府能勢町から池田市に通じる摂丹街道が通っています。発掘調査では、溝や柵で区画された中世の屋敷跡を検出するとともに、中国製青白磁の有蓋小壺や白磁椀が副葬された中世墓を検出しました。一方、下層では、古墳時代前期の井堰や多数の木製品が出土した自然流路を検出しており、当時の農業用水路の利用や管理の実態を明らかにすることができました。これらの調査成果は、今後、地域史や日本史研究を進めるうえで、重要な考古学的成果となることを確信しています。

最後になりましたが、発掘調査をご依頼いただきました京都府建設交通部をはじめ、ご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、心より御礼を申し上げます。

令和5年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 井 上 満 郎

例 言

1. 本書に収めた報告は下記のとおりである。

大飼遺跡第7・10次発掘調査報告書

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び報告の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
大飼遺跡 第7・10次	亀岡市曾我部町法貴 二ノ坪ほか	平成2年6月8日～ 令和3年1月12日 令和3年7月1日～ 令和4年1月17日	京都府南丹 土木事務所	桐井理揮 菅 博絵 名村威彦 引原茂治 松井 忍

3. 本書で使用している座標は、世界測地系国土座標第Ⅵ座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。

4. 土層断面等の土色や出土遺物の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』を使用した。

5. 本書の編集は、調査課調査担当者の編集原案をもとに、調査課編集担当が行った。

6. 現場写真は調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査課企画調整係武本典子が行った。

本文目次

犬飼遺跡第7・10次発掘調査報告

1. はじめに	1
2. 位置と環境	
1) 地理的環境	3
2) 歴史的環境	5
3. 調査の経過と方法	
1) 調査の経緯	9
2) 調査の方法	11
4. 基本層序	
1) 第7次調査	13
2) 第10次調査	15
5. 小規模調査の概要	
1) 第7次調査	16
2) 第10次調査	18
6. H・I・L・M地区の調査	
1) 中世	21
2) 古代	61
3) 古墳時代	63
4) 時期不明遺構	88
7. 自然科学分析	
1) 放射性炭素年代測定	90
2) 花粉分析、プラント・オパール分析	106
3) 珪藻分析	115
4) 大型植物遺体分析	120
8. 総括	
1) 犬飼遺跡出土瓦器碗の検討	128
2) 犬飼遺跡における各時期の様相	131

挿 図 目 次

第1図	調査地の位置	1
第2図	調査地周辺の環境	3
第3図	犬飼遺跡と周辺の遺跡地図	4
第4図	犬飼遺跡の既往の調査地位置図	10
第5図	地区割り設定図	12
第6図	第7・10次調査トレンチ配置図	13
第7図	第7・10次調査基本層序土層断面図	14
第8図	小規模調査トレンチ配置図	16
第9図	第7次調査1・2トレンチ実測図	17
第10図	第10次調査2・3・4トレンチ実測図	19
第11図	I地区遺構配置図(中世)	21
第12図	I地区 溝S D7036・7056実測図	23
第13図	I地区 溝S D7038実測図	24
第14図	I地区 溝S D7042・7037・7089実測図	25
第15図	M地区遺構配置図(中世上層)	26
第16図	M地区 溝S D10007実測図	27
第17図	M地区 溝S D10008・10011実測図	28
第18図	M地区 溝S D10012実測図	29
第19図	M地区遺構配置図(中世下層)	30
第20図	M地区 区画溝S D10020実測図	31
第21図	M地区 溝S D10029実測図	32
第22図	I地区 掘立柱建物S B7099実測図1	34
第23図	I地区 掘立柱建物S B7099実測図2	35
第24図	I地区 集石土坑S X7039・掘立柱建物S B7106実測図	36
第25図	M地区 掘立柱建物S B10001実測図	37
第26図	I地区 櫛列S A7068・7078・7091実測図	38
第27図	M地区 櫛列S A10085・10086実測図	39
第28図	I地区 土坑S K7043・土器溜まりS X7035実測図	40
第29図	M地区 ビット10035・10036・10047・10052・10058・10066実測図	41
第30図	M地区 中世墓S T10015実測図	42
第31図	M地区 中世墓S T10021実測図	43
第32図	犬飼遺跡出土瓦器椀の分類	45

第33図	溝 S D 7036 出土遺物	46
第34図	溝 S D 7037・7038・7042・7056 出土遺物	48
第35図	溝 S D 10002・10007・10008・10012・10020 出土遺物	50
第36図	集石土坑 S X 7039、掘立柱建物 S B 7099・7106、土器溜まり S X 7035 出土遺物	51
第37図	土坑 S K 7043・7103、中世墓 S T 10021 出土遺物	53
第38図	ピット及び第7・10次包含層出土遺物	55
第39図	掘立柱建物 S B 7099 出土柱根	56
第40図	掘立柱建物 S B 10001 出土柱根、櫛列 S A 10085 出土木杭	57
第41図	中世墓 S T 10015 出土木製容器	58
第42図	中世面出土銭貨・石製品	60
第43図	M地区遺構配置図(古代)	61
第44図	M地区古代土層断面図	62
第45図	L・M地区 古代出土遺物	63
第46図	H・I地区遺構配置図(古墳時代)	64
第47図	I地区 自然流路 N R 7100 実測図 1	65
第48図	I地区 自然流路 N R 7100 実測図 2	66
第49図	I地区 井堰 S W 7131 実測図	67
第50図	I地区 木器溜まり S W 7132 実測図	68
第51図	L地区 遺構配置図(古墳時代)	69
第52図	L地区 自然流路 N R 10030 実測図	70
第53図	I地区 溝 S D 7134 実測図	71
第54図	H地区 竪穴建物 S H 7005 実測図	72
第55図	L地区 竪穴建物 S H 10033、土坑 S K 10005 実測図	73
第56図	自然流路 N R 7100 15層出土遺物	75
第57図	自然流路 N R 7100・10030、溝 S D 7084 出土遺物	76
第58図	竪穴建物 S H 7005・10033、自然流路 N R 10030、溝 S D 7084、包含層出土遺物	79
第59図	古墳時代出土木製品 1	81
第60図	古墳時代出土木製品 2	82
第61図	古墳時代出土木製品 3	83
第62図	古墳時代出土木製品 4	84
第63図	古墳時代出土木製品 5	85
第64図	古墳時代出土木製品 6	86
第65図	古墳時代出土木製品 7	87
第66図	H・L地区遺構配置図	89
第67図	分岐地点の柱状図と分析試料の採取位置	91

第68図	年代測定を行った試料(報告No.178)	98
第69図	年代測定を行った試料(報告No.180)	99
第70図	年代測定を行った試料(報告No.179)	100
第71図	年代測定を行った試料(報告No.183)	101
第72図	暦年較正結果	102
第73図	犬飼遺跡における花粉分析図	109
第74図	4地点における植物珪酸体分布図	110
第75図	1地点の珪藻ダイアグラム	117
第76図	大型植物遺体分布図	122
第77図	犬飼遺跡と周辺遺跡の位置	128
第78図	瓦器碗分量分布図と年代の目安	130
第79図	古墳時代の遺構配置図	132
第80図	古代の遺構配置図	133
第81図	中世の遺構配置図	134
第82図	法貴谷川流域の水利慣行	135

付表目次

付表1	犬飼遺跡調査回数一覧	9
付表2	陶磁器数量表	44
付表3	分析試料一覧	90
付表4	ウィグルマッチング測定試料及び処理	95
付表5	単体測定試料及び処理	95
付表6	試料No.92の放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果	96
付表7	試料No.93の放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果	96
付表8	試料No.94の放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果	96
付表9	試料No. 8の放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果	96
付表10	単体測定試料の放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果	97
付表11	産出花粉孢子一覧表	107
付表12	4-1、4-2地点の試料1g当りのプラント・オパール個数	110

付表13	試料リスト	115
付表14	堆積物中の珪藻化石産出表	116
付表15	環境指標種群と本分析で産出した種	117
付表16	出土した大型植物遺体	123

写真目次

写真1	分析試料の採取状況1	92
写真2	分析試料の採取状況2	93
写真3	分析試料の採取状況3	94
写真4	産出した花粉化石	113
写真5	4地点No.2から算出した植物珪酸体	114
写真6	産出した珪藻殻	119
写真7	犬飼遺跡から出土した大型植物遺体	127

図版目次

巻頭図版 I地区自然流路NR7100及び井堰出土状況(北東から)

図版第1	(1)調査地遠景(北東から) (2)H地区全景(上が北)
図版第2	(1)I地区上層遺構面全景(上が北) (2)I地区上層遺構面全景(北東から)
図版第3	(1)溝SD7036検出状況(南から) (2)溝SD7036遺物出土状況(西から) (3)溝SD7036遺物出土状況(西から)
図版第4	(1)溝SD7036 b-b'断面(北から) (2)溝SD7036 c-c'断面(南から) (3)溝SD7036 d-d'断面(北から)
図版第5	(1)溝SD7036 e-e'断面(北から)

- (2) 溝 S D7036 木板片出土状況(北東から)
 (3) 溝 S D7036 木板片出土状況(北東から)
- 図版第 6 (1) 溝 S D7037 全景(北から)
 (2) 溝 S D7037 の北側検出状況(西から)
 (3) 溝 S D7037 遺物出土状況(西から)
- 図版第 7 (1) 溝 S D7038 検出状況(西から)
 (2) 溝 S D7038 遺物出土状況(南から)
 (3) 溝 S D7040 断面(南から)
- 図版第 8 (1) 溝 S D7042 遺物出土状況近景(南から)
 (2) 溝 S D7042 錢貨出土状況近景(南から)
 (3) 溝 S D7042 断面(西から)
- 図版第 9 (1) 集石土坑 S X7039 検出状況(北から)
 (2) 集石土坑 S X7039 東西断面(南から)
 (3) 集石土坑 S X7039 東西断面(北から)
- 図版第 10 (1) 集石土坑 S X7039 南北断面(東から)
 (2) 集石土坑 S X7039 完掘状況(南西から)
 (3) 掘立柱建物 S B7099 全景(東から)
- 図版第 11 (1) 掘立柱建物 S B7099 柱穴 S P7044 検出状況(東から)
 (2) 掘立柱建物 S B7099 柱穴 S P7044 断面(東から)
 (3) 掘立柱建物 S B7099 柱穴 S P7047 礎石残存状況(東から)
 (4) 掘立柱建物 S B7099 柱穴 S P7057 断面(南東から)
 (5) 掘立柱建物 S B7099 柱穴 S P7058 断面(西から)
 (6) 掘立柱建物 S B7099 柱穴 S P7059 断面(西から)
 (7) 掘立柱建物 S B7099 柱穴 S P7063 断面(西から)
 (8) 掘立柱建物 S B7099 柱穴 S P7066 断面(南から)
- 図版第 12 (1) 掘立柱建物 S B7099 柱穴 S P7087 残存状況(北西から)
 (2) 掘立柱建物 S B7099 柱穴 S P7088 断面(南から)
 (3) 掘立柱建物 S B7099 柱穴 S P7090 断面(西から)
 (4) 掘立柱建物 S B7099 柱穴 S P7095 柱材残存状況(南東から)
 (5) 掘立柱建物 S B7099 柱穴 S P7098 断面(南から)
 (6) 掘立柱建物 S B7099 柱穴 S P7101 断面(西から)
 (7) 掘立柱建物 S B7099 柱穴 S P7123 断面(南から)
 (8) 掘立柱建物 S B7099 柱穴 S P7128 断面(南東から)
- 図版第 13 (1) 掘立柱建物 S B7106 全景(東から)
 (2) 掘立柱建物 S B7106 柱穴 S P7065 検出状況(南西から)

- (3)掘立柱建物 S B 7106 柱穴 S P 7065断面(北から)
- 図版第14 (1)掘立柱建物 S B 7106 柱穴 S P 7064断面(北から)
 (2)掘立柱建物 S B 7106 柱穴 S P 7067断面(北から)
 (3)掘立柱建物 S B 7106 柱穴 S P 7122断面(南から)
- 図版第15 (1)櫓列 S A 7068、掘立柱建物 S B 7099全景(東から)
 (2)櫓列 S A 7068 柱穴 S P 7116断面(西から)
 (3)櫓列 S A 7068 柱穴 S P 7081断面(西から)
- 図版第16 (1)櫓列 S A 7078全景(南西から)
 (2)櫓列 S A 7078 柱穴 S P 7070・7071断面(北から)
 (3)櫓列 S A 7078 柱穴 S P 7074・7077断面(北から)
- 図版第17 (1)櫓列 S A 7091全景(北から)
 (2)櫓列 S A 7091 柱穴 S P 7092断面(西から)
 (3)櫓列 S A 7091 柱穴 S P 7093断面(西から)
- 図版第18 (1)土器溜まり S X 7035検出状況(東から)
 (2)土坑 S K 7043遺物出土状況(北西から)
 (3)土坑 S K 7043東側土器出土状況(南東から)
- 図版第19 (1)H・I地区下層遺構面遠景(東から)
 (2)H・I地区下層遺構面全景(右が北)
- 図版第20 (1)竪穴建物 S H 7005拡張部検出状況(北西から)
 (2)竪穴建物 S H 7005内 S K 7147遺物出土状況(南西から)
- 図版第21 (1)竪穴建物 S H 7005全景(北東から)
 (2)竪穴建物 S H 7005拡張部断面(東から)
- 図版第22 (1)竪穴建物 S H 7005南部遺物出土状況(北東から)
 (2)竪穴建物 S H 7005南部遺物出土状況(南西から)
- 図版第23 (1)自然流路 N R 7100全景(南西から)
 (2)井堰 S W 7131出土状況(北東から)
- 図版第24 (1)井堰 S W 7131木製品出土状況(北東から)
 (2)井堰 S W 7131出土状況(北西から)
 (3)井堰 S W 7131上部除去状況(西から)
- 図版第25 (1)木器溜まり S W 7132木製容器出土状況(東から)
 (2)木器溜まり S W 7132木製品出土状況(南西から)
 (3)木器溜まり S W 7132木製品出土状況(北西から)
- 図版第26 (1)自然流路 N R 7100断面 b—b`近景(北から)
 (2)自然流路 N R 7100、溝 S D 7084断面 c—c`近景(北東から)
- 図版第27 (1)自然流路 N R 7100、溝 S D 7084断面 c—c`近景(北東から)

- (2)自然流路NR7100、溝SD7084断面 a— a' (南から)
 (3)溝SD7031、堅穴建物SH7005断面(南西から)
- 図版第28 (1)溝SD7134全景(北から)
 (2)溝SD7084全景(南から)
 (3)自然流路NR7100完掘全景(南西から)
- 図版第29 (1)調査地遠景(南から)
 (2)L地区上層遺構面全景(上が北西)
- 図版第30 (1)M地区拡張後調査地遠景(南から)
 (2)L地区下層・M地区中世下層遺構面全景(上が北)
- 図版第31 (1)1トレンチ全景(北西から)
 (2)1トレンチ北壁断面(南東から)
 (3)2トレンチ全景(南西から)
- 図版第32 (1)2トレンチ北壁断面(南西から)
 (2)3トレンチ全景(南西から)
 (3)3トレンチ全景(北東から)
- 図版第33 (1)4トレンチ全景(北西から)
 (2)4トレンチ西壁断面(南東から)
 (3)L地区中世遺構面全景(南西から)
- 図版第34 (1)L地区盛り土断面(北から)
 (2)土坑SK10005遺物出土状況(西から)
 (3)土坑SK10005土層断面(北から)
- 図版第35 (1)土坑SK10032検出状況(北から)
 (2)土坑SK10032土層断面(南西から)
 (3)土坑SK10032土層断面(北東から)
- 図版第36 (1)柱状図⑬断面(東から)
 (2)柱状図⑭断面(東から)
 (3)溝SD10007南半検出状況(南東から)
- 図版第37 (1)溝SD10008北半検出状況(南東から)
 (2)溝SD10008北半遺物出土状況(南東から)
 (3)溝SD10008北半完掘状況(南東から)
- 図版第38 (1)中世墓ST10015検出状況(南東から)
 (2)中世墓ST10015土層断面(南から)
 (3)中世墓ST10015土層断面(西から)
- 図版第39 (1)中世墓ST10015木製容器・中世墓ST10021検出状況(北東から)
 (2)中世墓ST10015石組み検出状況(南東から)

- (3)中世墓 S T10015完掘状況(南東から)
- 図版第40 (1)中世墓 S T10021検出状況(南から)
(2)中世墓 S T10021遺物出土状況(北から)
- 図版第41 (1)中世墓 S T10021北側東西畦断面(北から)
(2)中世墓 S T10021南側東西畦断面(北から)
(3)中世墓 S T10021完掘状況(北から)
- 図版第42 (1)ビット S P10052断面(北東から)
(2)ビット S P10052炭層検出状況(北東から)
(3)ビット S P10052完掘状況(北から)
- 図版第43 (1)掘立柱建物 S B10001 柱穴 S P10034断面(北から)
(2)掘立柱建物 S B10001 柱穴 S P10072断面(西から)
(3)掘立柱建物 S B10001 柱穴 S P10071・10042断面(東から)
- 図版第44 (1)柵列 S A10086 柱穴 S P10082断面(南から)
(2)溝 S D10020遺物出土状況(南東から)
(3)掘立柱建物 S B10001全景(南東から)
- 図版第45 (1)柵列 S A10085検出状況(西から)
(2)柵列 S A10085断面(西から)
(3)M地区中世下層全景(南東から)
- 図版第46 (1)古代土層断面 b—b' (南から)
(2)畦状遺構 S X10086断面(北から)
- 図版第47 (1)L地区下層全景(北東から)
(2)L地区下層全景(南から)
- 図版第48 (1)自然流路 N R10030完掘状況(南から)
(2)自然流路 N R10030完掘状況(北から)
- 図版第49 (1)自然流路 N R10030遺物出土状況(北東から)
(2)自然流路 N R10030断面(北から)
(3)自然流路 N R10030断ち割り断面(北から)
- 図版第50 (1)竪穴建物 S H10033検出状況(南から)
(2)竪穴建物 S H10033土層断面(東から)
(3)竪穴建物 S H10033完掘状況(南から)
- 図版第51 出土遺物 1
- 図版第52 出土遺物 2
- 図版第53 出土遺物 3
- 図版第54 出土遺物 4
- 図版第55 出土遺物 5

図版第56	出土遺物 6
図版第57	出土遺物 7
図版第58	出土遺物 8
図版第59	出土遺物 9
図版第60	出土遺物 10
図版第61	出土遺物 11
図版第62	出土遺物 12
図版第63	出土遺物 13
図版第64	出土遺物 14
図版第65	出土遺物 15
図版第66	出土遺物 16
図版第67	出土遺物 17
図版第68	出土遺物 18

犬飼遺跡第7・10次調査発掘調査報告

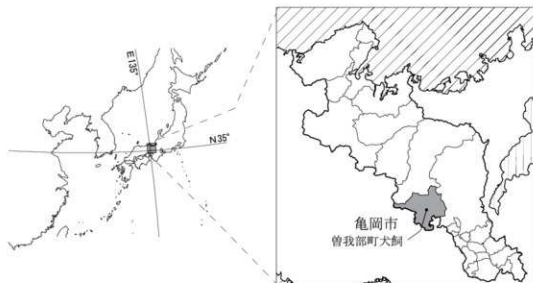
1. はじめに

亀岡市は、京都府中央部のやや南に位置し、その中央を流れる最大の河川である一級河川桂川（大堰川）には、左岸側からは三俣川・七谷川・愛宕谷川などが、右岸側からは千々川・犬飼川・曾我谷川・年谷川・西川・鶴ノ川などの小河川が流入している。

法貴谷川は、桂川の支川にあたる犬飼川の支流である。霊仙ヶ岳の南麓を源流とし、犬飼川と曾我谷川の間を北流して、曾我部町西条で犬飼川右岸に注ぐ流路延長3.97kmの河川である。

桂川流域圏内であるこの地域は、豊かな自然と恵まれた水量をもつ桂川の恩恵を受ける一方で、これまで洪水による浸水被害に度々見舞われ、近年の豪雨の局地化や激甚化によって、さらに洪水の発生頻度が高まると予想されている地域である。京都府がこの浸水被害対策の一環として計画したのが、桂川上流域圏河川整備計画である^(※1)。今回の発掘調査は、桂川上流域にある法貴谷川の整備計画として実施される河川の付け替え工事「法貴谷川広域河川改修(防災・安全)事業」に伴って行なったものである。遺跡範囲が河川の付け替え予定地全域に含まれることから、京都府教育委員会による現地踏査を経て、京都府南丹土木事務所と京都府教育委員会の協議が行われ、発掘調査について当調査研究センターが依頼を受けた。

また、現地調査にあたっては、曾我部町・禰田野町・吉川町・畑野町などの各自治会に御高配を賜るとともに、多くの地元の方々にご参加いただいた。また、京都府教育委員会・亀岡市教育委員会にご指導・助言をいただいた。記して感謝申し上げます。



第1図 調査地の位置

なお、調査に係る経費は京都府南丹土木事務所が全額負担した。

本文は、現地を担当した調査課各担当者が執筆した。

(松井 忍)

[調査体制等]

<犬飼遺跡第7次>

現地調査責任者	調査課長	小池 寛
現地調査担当者	調査課調査第1係長	村田和弘
	同 調査第1係副主査	引原茂治
	同 同 調査員	桐井理揮
	同 同 調査員	名村威彦
	同 同 調査員	松井 忍

調査場所 亀岡市曾我部町法貴二ノ坪

現地調査期間 令和2年6月8日～令和3年1月12日

調査面積 2,000㎡

<犬飼遺跡第10次>

現地調査責任者	調査課長	小池 寛
現地調査担当者	調査課調査第1係長	村田和弘
	同 調査第1係副主査	引原茂治
	同 調査員	菅 博絵

調査場所 亀岡市曾我部町法貴二ノ坪ほか

現地調査期間 令和3年7月1日～令和4年1月17日

調査面積 2,000㎡

<令和3・4年度整理作業>

整理作業責任者	調査課長	小池 寛
整理作業担当者	調査課調査第3係長	村田和弘
	同 主任	菅 博絵

整理作業期間 令和3年5月31日～令和4年3月31日

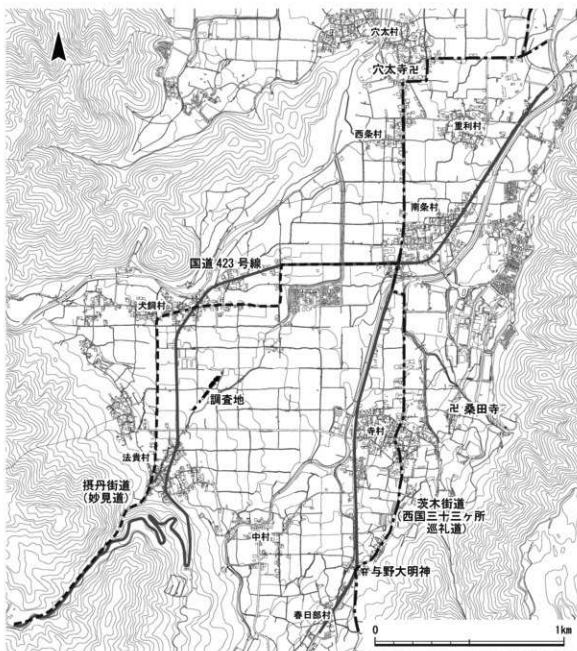
令和4年6月1日～令和5年3月31日

2. 位置と環境

1) 地理的環境

亀岡市は、京都府のほぼ中央に位置し、西側と南側が大きく突出した四角形状を呈している。面積約224.87km²で、東西約24.6km、南北約20.5kmの広さをもつ。北は南丹市、東は京都市、南及び西は大阪府高槻市・茨木市・豊能郡に接する。

犬飼遺跡の所在する亀岡市曾我部町は亀岡盆地の南西にあたり、大阪方面各所へと通じる交通路が通っている。曾我部町の西側には旧摂丹街道である国道423号線が通っており、亀岡市西別院町、大阪府能勢町を経て池田市に通じる。現在は犬飼集落の東側で大きく南に曲がっているが、



第2図 調査地周辺の環境



第3図 大銅遺跡と周辺の遺跡地図(国土地理院 1/50,000 京都西南部・京都西北部)

本来は重利集落付近から法貴谷川に沿って扇状地を上り、法貴峠へと至る道であったという。

現在の国道423号線よりも西側、現在のは場の中には南北に直線にのびる里道があり、近世には妙見社への巡礼道として利用された。また、中世には、源満仲が京から多田荘へ抜ける万寿越と呼ばれる峠であった。法貴峠の中腹には、天正年間に明智光秀が西別院町の笑路城を攻めた際に、攻めきれずに馬を戻したという伝承をもつ「明智の戻り岩」という巨岩がある。明智の戻り岩には「享徳三年戊辰三月廿日」の年紀をもつ題目が彫られており、この交通路も中世には活発に利用されていたことがうかがえる。

東側を通る府道407号線は旧茨木街道であり、亀岡市東別院町を経て大阪府茨木市に至る。茨木街道は、重利付近で摂丹街道と分岐し、曾我谷川に沿って南下する道であり、近世には穴太寺から総持寺に至る、西国三十三カ所の巡礼道でもあった。

これらの道は、近世に整備された、亀山城下から峠や谷筋を通して摂津方面に向かう道であり、前者は関明神越道、後者は烏居嶺道として『五畿内志』中にもみえる。近世には法貴村など一部の村が高槻藩領であった時期もあり、丹波の中でもとりわけ摂津との関係が深い地域である。^(B2)

2) 歴史的環境

(1) 周辺の遺跡(第3図)

弥生時代以前 これまでの調査では、曾我部町内では弥生時代以前の明確な遺構は検出されていない。

亀岡盆地に目を広げると、旧石器時代以前のものとして鹿谷遺跡で出土した黒曜石製の尖頭器や、千代川遺跡の有舌尖頭器を挙げるができる。

縄文時代では押型文土器が千代川遺跡や南条遺跡などで得られているものの、中期以前の遺構が検出された遺跡数はまだ少ない。遺跡数が増加するのは縄文時代後期以降であり、晩期の凸帯文土器は大堰川西岸を中心に多くの遺跡で出土している。

当地域の弥生時代前期の様相は明らかではなく、太田遺跡を挙げうる程度である。太田遺跡は畿内第Ⅰ様式末に形成が始まり、第Ⅱ様式まで継続した環濠集落である。東海地域や朝鮮半島との関係をうかがわせるような土器も出土しており、広範囲に及ぶ交流があったことを示唆している。第Ⅲ様式以降には盆地内の広い範囲で大規模な集落が形成されるようになる。大堰川西岸では、千代川遺跡や余部遺跡で、堅穴建物や方形周溝墓が検出されており、当地域の中心的な遺跡とみられる。弥生時代後期になると、中期までの遺跡の多くは断絶し、東谷遺跡・北金岐遺跡・太田遺跡など、小規模な遺跡が認められるが、集落構造は不明点が多い。

しかしながら、曾我部町内ではこれまで弥生時代に属する顕著な遺構は未検出であり、集落の形成は古墳時代を待たなければならない。

古墳時代 亀岡盆地内では、初期古墳は確認されていない。園部地域までを射程に入ると、前期初頭の黒田古墳(前方後円墳、52m)、前期中葉の園部垣内古墳(前方後円墳、82m)、中腹古墳(前方後方墳、75m)が相次いで築造されており、当地域の中心的な位置にあったのは園部盆地と考えられる。前期後半になると、亀岡盆地でも向山古墳など小規模な古墳が確認されるように

なる。中期以降、豊富な副葬品をもつ坊主塚古墳(方墳、38m)が挙げられる。葺石、埴輪を備えており、特に埴丘南側にとりつく造出からは埴輪が集中して出土した。また、仿製三角縁獣鏡や甲冑、鉄製武器類など、豊富な副葬品をもつ。後期になると全長82mの前方後円墳である千歳車塚古墳が築造される。これらの比較的有力な古墳は、いずれも大堰川東岸に築造される。他方、大堰川西岸では、200基以上からなる小金鼓古墳群や、石棚付石室を有する拝田古墳群・鹿谷古墳群、後述する法貴・法貴峠古墳群など、群集墳が多く確認されている。集落遺跡も多く、大堰川西岸では、100棟を越す堅穴建物が検出された鹿谷遺跡をはじめ、千代川遺跡や余部遺跡、佐伯遺跡などで小・中規模の集落遺跡が調査されている。

近年の曾我部町内での継続的な発掘調査では、古墳時代前期から中期前半の遺構が広範で検出されていることから、弥生時代以前の遺跡の形成が低調な曾我部町内でも、古墳時代になると安定的な居住域が形成されるようになったと考えられる。前期古墳は未確認であるが、穴太周辺で採取されたと伝わる筒形銅器が知られており、周辺に未知の前期古墳が存在する可能性は高い。犬飼遺跡第3次調査ではA地区で堅穴建物が検出されたほか、C地区で検出された自然流路から、古墳時代前期から古代にかけての土器・木製品が多量に出土した。木材集積遺構が確認されており、周辺で木材加工が行われたことが推定される。また、須恵器とともに出土した、樹皮が残存した木材の年輪年代は6世紀の第3四半期を示したことが注目される。犬飼遺跡の西側丘陵上には、中期後半の須恵器及び紡錘車形石製品、鉄刀の出土が伝わる犬飼古墳群や、埴丘内列石が調査された後期の法貴峠20号墳など、石室墳が密集しており、盆地内でも屈指の古墳集中地域となっている。

古代 飛鳥時代は、古墳時代と比較して盆地全体で集落の形成がやや低調であり、古墳時代後期末の首長居館である八木嶋遺跡も飛鳥時代には継続しない。集落遺跡としては、馬路遺跡や蔵垣内遺跡を挙げうる程度である。なお、これらの遺跡では堅穴建物が主体で、掘立柱建物の本格的な普及は8世紀半ば以降と考えられる。

古代の亀岡盆地内では複数の古代寺院が知られており、曾我部町内でも白鳳寺院とされる興能廃寺がある。興能廃寺は正式な発掘調査は行われていないが、塔心礎が残されており、周辺では瓦が採取されている。

奈良時代には、盆地全域で遺跡の数は急増する。大堰川東岸では7世紀末に池尻廃寺が、8世紀中葉には国分寺が築造され、周辺の遺跡でも建物の数が増加する。この時期、大堰川東岸では古山陰道が整備されており、これらは軌を一にした現象ととらえられる。推定山陰道に近接する時塚遺跡、車塚遺跡、池尻遺跡では8世紀になると掘立柱建物が急増する。池尻廃寺に隣接する池尻遺跡ではこの時期に正方位に沿う掘立柱建物や欄列が確認されており、官衙的な遺構の可能性も想定される。こうした集落遺跡の多くは8世紀で消滅し、9世紀には、丹波国府の推定地である千代川遺跡や、大型の掘立柱建物が検出されている太田遺跡など、大堰川西岸に中心が移動することとなる。

古代の生産遺跡としては、篠原業生産遺跡群(篠原)を挙げることができる。7世紀に操業を開

始した窯業は、11世紀まで須恵器、緑釉陶器、瓦などを、平安京をはじめ列島各地に供給した。窯業の他に、「山国柚」の存在も文献資料から知られており、丹波の木材が盆地内の「山川津」から大堰川を下り、平城京・平安京へ樽が運搬された。これまで、柚の位置としては大堰川上流の南丹市天若遺跡が想定されてきたが、考古学的な成果からは詳細な位置は不明であった。犬飼遺跡の調査では古代の木材加工の痕跡が検出されており、柚関連の遺跡として注目される。

中世 中世の亀岡盆地の集落遺跡としては、千代川遺跡や太田遺跡、天川遺跡などを挙げることでできるが、集落の全体像がわかる遺跡には恵まれない。曾我部町内でも近年、犬飼遺跡や金生寺遺跡などで事例が増加している。曾我部町の南条火葬墓群では、13世紀後半～14世紀前半にかけてのものとされる古瀬戸灰釉瓶子の骨磁器が検出されている。ただし、いずれの遺跡も14世紀前半には遺構が確認できなくなっており、中世後期には現集落に近い位置に居住城が形成されていた可能性が高い。

中世城館も多く確認されており、市内だけでも71城が知られている。曾我部町内には酒井氏が城主と伝わる法貴館跡や、盆地内でも屈指の縄張りをもつ法貴山城、周辺に「城ヶ裏」や「垣内」等城館関連地名を残す寺村館跡などがある。犬飼遺跡の北西丘陵上には犬飼城があり、『丹波志桑田記』によると、上原(福智)氏が応永元(1467)年より居住したとされる。ただし、南北朝時代以前にさかのぼるものとしては、犬飼遺跡や春日部遺跡で方形居館が検出されているほか、出雲遺跡で部分的に方形居館の一部と考えられる溝が検出されているのみである。

天正三(1575)年には、明智光秀による丹波国攻略が開始され、天正五(1577)年には亀山城を攻め落とした。先述の犬飼城も天正十(1582)年に落城している。天正八(1580)年には光秀は丹波29万石に封せられ、亀山城を整備するなど近世の城下町の礎を築いた。

(2) 文献史学からみた犬飼遺跡をとりまく環境

蘇蘇岐屯倉と犬飼遺跡 犬飼遺跡の所在する、京都府亀岡市曾我部町「犬飼」という地名は、古代氏族のひとつである犬養氏に結びつけて考えられてきた。犬養氏については黛弘道氏が総合的に整理しており、残証地名から「イヌカイ」と「ミヤケ」が近接してみられる例が複数あること、犬養氏がクラにかかわる氏族との関係が認められることを指摘した。そして、犬養氏の職掌について、犬の飼養だけでなく、大王の直轄領であるミヤケを守衛することであったと説く。その中で亀岡市の犬飼地名については、近隣に延喜式内社の三宅神社が所在していることから、「イヌカイ」と「ミヤケ」が関係する一例として挙げている^(註4)。その後、生田教司氏は犬養部自体がいくつかの系統に分別可能であることを説き、多様なイヌ需要に対してイヌを供出したことを指摘しているが、アガタやミヤケ、クラにかかわる可能性を排除しておらず、その点では黛氏は現在でも説得力がある^(註5)。

日本書紀安閑条には、安閑二(535)年五月に全国26か所にミヤケが設置され、その中には「丹波国蘇蘇岐屯倉」の記載が認められる。蘇蘇岐屯倉の詳細な所在地については不明であるが、先述の三宅神社付近が有力な候補の一つとされてきた^(註6)。対して、和田萃氏は、和名抄にみえる「宋我部郷」が、蘇我氏の私有部民が設置されたものと考え、黛氏の説を引用しつつ、蘇蘇岐屯倉が

蘇我稲目の主導で設置されたと指摘する。そして、その具体的な比定地には曾我部町犬飼周辺を想定している⁽⁸⁷⁾。犬養部が設置されたのは安閑朝期で、大宝令以降には見られないことから、遺存地名から犬養氏、さらにはミヤケとの関係を追及するには慎重である必要があるが、当地域周辺はミヤケとの関係を示す根拠が認められることは注意されてもよからう。

また、文献中に登場する「丹波直」や私部、部民の分類から、丹波自体が古代には中央政権とのつながりが強い地域であったことも指摘されている⁽⁸⁸⁾。

中世の曾我部町 奈良・平安時代の曾我部町に関する文献資料は少なく、様相は不明である。鎌倉時代になると、それまで平氏と密接な関係のあった丹波は後鳥羽上皇の知行となり、大内氏が守護の任にあたったとされる。承久の乱以降は、後高倉上皇の知行国となり、六波羅探題南方北条氏が守護を歴任した。鎌倉時代末期には、足利高氏が亀岡市篠八幡宮で挙兵したことに代表されるように、戦乱の舞台となり、多くの国人たちの記録が残されている。

高氏は、元弘三(1333)年に丹波の土豪や赤松則村らとともに六波羅探題を攻め、翌年、後醍醐天皇は建武新政を開始した。建武二(1335)年、後醍醐天皇と対立した尊氏は、久下時重・波々伯部次郎門尉為光・中沢三郎入道ら丹波の国人と通じ、丹波守護代を敗走させた。その後、尊氏は一度は天皇方に敗れて九州まで逃れることとなるが、体制を立て直し、淡川の戦いを経て入京した。この間、丹波国は尊氏の支配下にあったようで、京から地理的に近い桑田郡では、緊張状態にあった⁽⁸⁹⁾。

このように、一瞥しただけでも丹波の中世に関する史料は比較的豊富だが、曾我部町を取巻く環境は、文献史学からは明らかではなく、「犬飼」に関する記述も見られない。『新修亀岡市史』資料編では、「犬飼」の初出は慶長八(1603)年銘がある興能神社の棟札であり、犬飼村がほかの曾我部町5村とともに中世後期には成立していたことを示している。

この6か村は、先述の『和名抄』宋我部郷に起源をもつと考えられ、曾我部荘の荘域にあてられてきた。曾我部荘は竹内理三が『鎌倉遺文』中の嘉禄元(1225)年11月5日付「東大寺文書」にある東大寺東南院門跡領「丹波国一処曾我部荘」とあるのを桑田郡と考え、それ以降当地に比定する意見が多い⁽⁹⁰⁾。しかし、丹波には、後白河院法華堂領曾我部荘と、東大寺東南院門跡領曾我部荘があること、そして多紀郡と天田郡にも「ソガベ」の地名があることから、曾我部荘の比定地については定見をみない。

飛鳥井拓は、曾我部町の荘園について整理し、実際の史料上で確実にみえるのは「召継(次)保」であることを指摘する。この一連の「召次保」に関わる資料は、徳治三(1308)年の「鹿王院文書」を初出として14～16世紀に散見され、中世の土地利用にかかわる当地域の様相を断片的ながら知ることができる。『両足院文書』には、永享元(1429)年「丹波国桑田郡宗我部郷召次御保法貴村寺庵領」とあることから、現在の曾我部町法貴を含む「曾我部郷」に「召次保」がおかれたことは確実である。嘉暦四(1329)年には「桑田召次保重安名」という人物の田畠が伊予局の子孫に安堵されており、その宛名が「桑田下司」とされていることから、召次保の名の進退を掌管する存在が「桑田下司」であると指摘している⁽⁹¹⁾。

(桐井理揮)

3. 調査の経過と方法

1) 調査の経緯

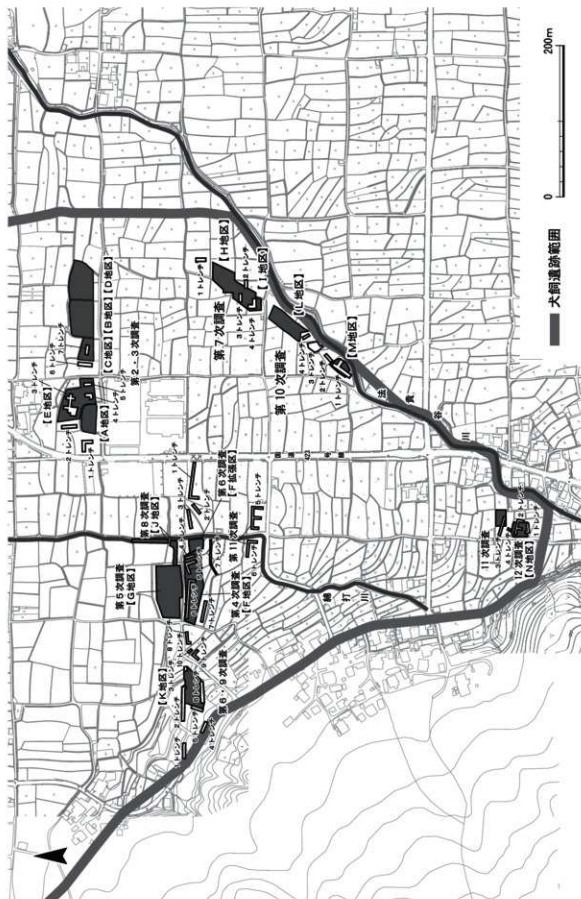
大岡遺跡では、平成23年度に亀岡市教育委員会による小規模調査が行われ、遺跡地内の広い範囲に遺構面の広がり認められることが明らかとなった。平成30年以降、当調査研究センターが継続的に発掘調査を行い、平成30年度・令和元年度に行った第2・3次調査では、中世の居館跡が確認されるなど令和4年度現在で12次にわたる調査が行われている。各地区の概要は、付表1の通りである。本書では、令和2年度に行った第7次調査及び令和3年度に行った第10次調査の報告を行う。

なお、一連の大岡遺跡の調査では、小規模調査には回数ごとに数字のトレンチ番号を、面的調査には、回数を超えてアルファベットの地区名を付している。

第7次調査 令和2年度の調査では、当初小規模調査区(1～4トレンチ)と、面的調査区(H地区)を設定した。いずれの調査区も重機で表土掘削を行ったのち、人力で遺構面の精査を行った。このうち、3・4トレンチにおいて、集石遺構、柱穴、及び遺物の集中する箇所が認められたことから、3・4トレンチを合わせて拡張し、I地区として面的に調査を行った。I地区では、中世の建物や溝などの遺構群を検出した。I地区ではさらに、西側で古墳時代の遺構面が存在したため、中世面の記録を行ったのち、重機掘削及び人力で精査し、下層遺構の調査及び記録を行った。また、当初は別の調査区としていたH地区とI地区の間も遺構の広がりを確認するため掘削

付表1 大岡遺跡調査回数一覧

回数	調査区	調査期間	調査面積	調査機関	調査要因	主な成果	報告書等
第1次	-	平成23年11月～12月	220㎡	亀岡市教育委員会	ほ場整備	範囲確認	亀岡市文化財報告書第82集
第2次	A・B・C・D・E	平成30年11月12日～平成31年3月14日	4,155㎡	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	ほ場整備	古墳～奈良の集落	京都府遺跡調査報告集第185冊
第3次	E	令和元年5月2日～令和元年10月3日	5,569㎡		ほ場整備	中世の方形居館	京都府遺跡調査報告集第185冊
第4次	F	令和元年5月15日～令和元年8月9日 令和元年11月7日～令和2年3月12日	2,600㎡		バイパス建設	古墳時代～古代の集落	京都府センター情報第138号
第5次	G	令和元年11月5日～令和2年2月12日	1,950㎡		ほ場整備	古墳時代前期の水路・地震痕跡	京都府センター情報第138号
第6次	F2・K	令和2年5月14日～令和3年1月6日	2,000㎡		バイパス建設	古墳時代中期初頭の産糞施設	京都府センター情報第139号
第7次	H・I	令和2年6月8日～令和3年1月12日	2,000㎡		河川改修	古墳時代前期の産糞施設・中世の屋敷跡	本報告
第8次	J	令和2年9月15日～令和2年10月29日	410㎡		ほ場整備	古墳時代中期初頭の流路	京都府センター情報第139号
第9次	K(第6次継続調査)	令和3年5月18日～令和3年12月21日	1,200㎡		バイパス建設	古代の集落	京都府センター情報第143号
第10次	小規模・L・M	令和3年7月1日～令和4年1月17日	2,000㎡		河川改修	中世の水路	本報告
第11次	小規模調査	令和4年1月29日～令和4年2月28日	540㎡		ほ場整備		京都府センター情報第143号
第12次	N(第11次継続調査)	令和4年5月23日～令和4年8月10日	670㎡		ほ場整備	中世の集落	京都府センター情報第144号



第4図 大内通跡の既往の調査地位位置図

を行い、補足の記録を作成した(H・I地区拡張区)。

なお、上層の中世遺構面、下層の古墳時代遺構面では、各面の調査終了後にドローンによる空中写真撮影を合計2回行った。調査期間は令和2年6月8日から令和3年1月12日で、調査面積は2,000㎡である。(松井 忍)

第10次調査 令和3年度の調査では、当初小規模調査区(1～4トレンチ)と面的調査区(L地区)を設定した。いずれの調査区も重機で表土掘削を行ったのち、人力で遺構面の精査を行った。このうち、小規模調査区の1トレンチでは、溝や土坑、3トレンチでは建物と考えられるピットが認められたことから、1・3トレンチをそれぞれ拡張し、1トレンチをM地区として面的調査を行った。その結果、1トレンチでは、中世の遺構群、飛鳥時代から奈良時代の水田跡、洪水堆積を検出した。3トレンチは拡張したものの、建物の復元には至らなかった。そのほか、土坑や土石流堆積を検出した。面的調査を行ったL地区では、中世包含層の下層で古墳時代の遺構面を確認した。いずれも中世面の記録を行ったのち、重機掘削及び人力掘削で精査を行い、下層の調査及び記録を行った。調査終了に伴い、上層の中世遺構面、下層の古墳時代遺構面でそれぞれラジコンヘリによる空中写真撮影を合計2回行った。調査期間は令和3年7月1日から令和4年1月17日で、調査面積は、2,000㎡である。(菅 博絵)

整理作業 調査終了後から令和4年度にかけて整理作業を行った。調査によって出土した遺物は、第7次調査で53箱、第10次調査で18箱であった。出土遺物については、台帳登録、洗浄作業を行い、その後注記・接合作業を行い、必要に応じて復元作業を行った。その作業と並行し、報告書に掲載する出土遺物の選別及び実測作業、写真撮影等を行った。本報告で使用した遺構図は、現地で作成したもののほか、空中写真撮影を基に作成した平面図を使用した。

2) 調査の方法

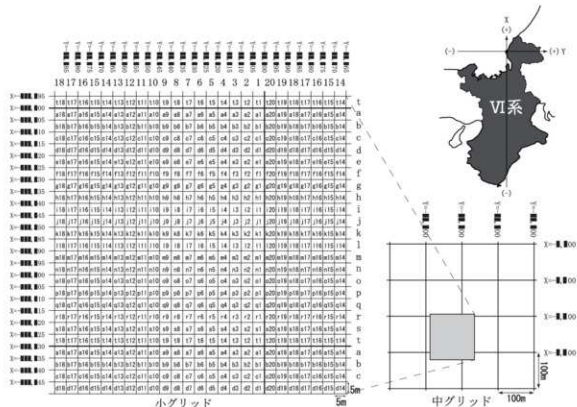
(1) 地区割りについて

大岡遺跡の調査では、面的調査地には調査回数に関わらずアルファベットの通しの地区名を、小規模調査地には、回数ごとに数字の地区名を付すこととしており、今回の報告では、第7次調査はH・I地区と1～4トレンチを、第10次調査は、L・M地区と1～4トレンチとしている。

遺物の取り上げには、平面直角座標系を利用した5mのグリッドを設定した。X、Yの座標値のうち、整数値の下二桁が00となる線を基準に100m四方の中グリッドを設定し、これを東西と南北でそれぞれ20等分した。VI系平面直角座標系は北東角を起点としており、南と西へ向かってX、Yの絶対値が増加する。この点を考慮して、南北方向は北からa～t、東西方向は東から1～20として、各小グリッドの名称はa 1、a 2などとする(第5図)。

(2) 遺構番号について

調査では、回数ごとにそれぞれ1から遺構番号をつけており、回数が異なれば同一の遺構番号が存在している。そこで、遺構番号の混同を避けるため、本報告では回数を遺構番号の最初に付して呼称する。例えば、第7次調査のSD36であればSD7036、第10次調査のNR30はNR10030とする。



第5図 地区割り設定図

また、それぞれの遺構番号の頭には遺構の性格を示す略号を付した。略号は調査の進展に伴って変更することもあったが、遺構番号は変更しないようにした。本書で使用した略号は以下の通りである。

SD：溝、SK：土坑、SB：掘立柱建物、SH：堅穴建物、SA：櫛列、SP：柱穴、NR：自然流路、SW：井堰・木器溜まり、ST：中世墓、SX：その他の遺構

(3)整理・報告について

報告に際しては、同じ犬飼遺跡であることを考慮し、調査の概要や基本層序などの項を除いて、敢えて地区別には報告していない。基本的には中世・古代・古墳時代の順に時代を遡って遺構・遺物をまとめて報告することとし、同時代の遺構に関しては、それぞれの遺構番号の順に報告を行うこととする。

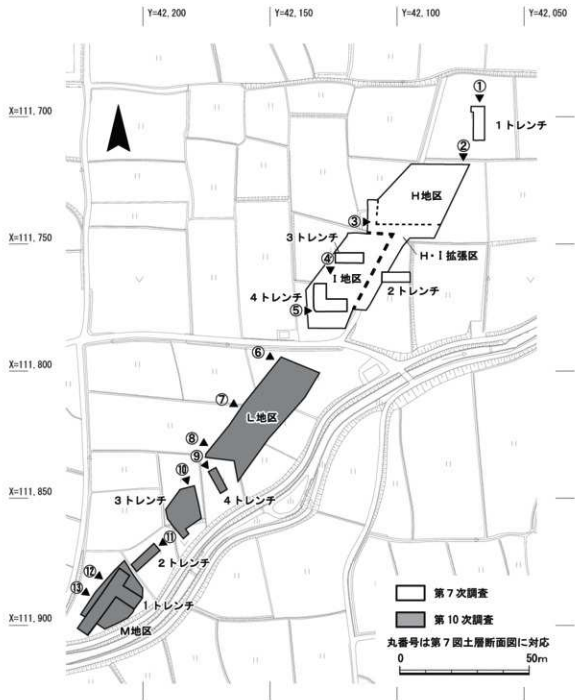
なお、本文の執筆については、小規模調査の基本層序及び概要については、第7次調査を名村、第10次調査を菅が、小規模調査を除く遺構については、第7次調査を桐井・松井、第10次調査を菅が、遺物については、第7次調査を桐井・引原・松井、第10次調査を桐井・菅・引原がそれぞれ行った。

(松井 忍)

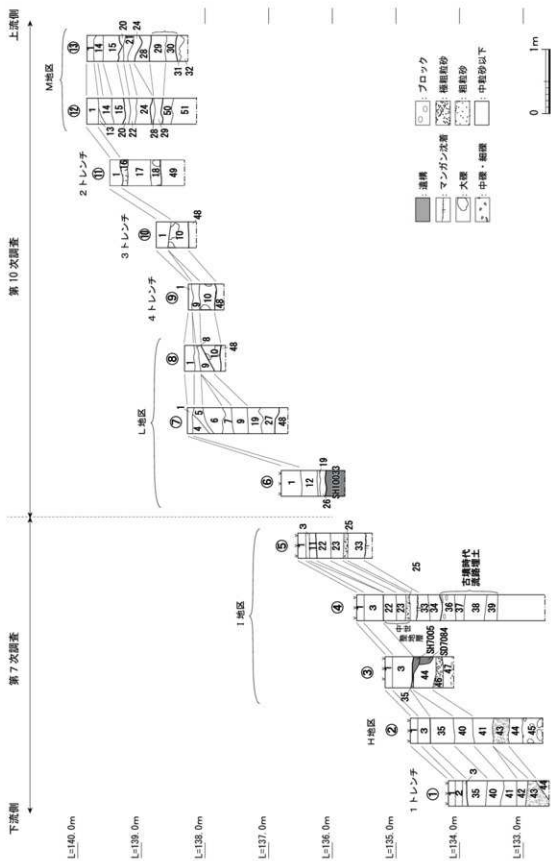
4. 基本層序

1) 第7次調査

調査前の標高は南西側(1地区)で136.5m、北東側(1トレンチ)で134.2mである。1層は耕作土、2・3層は現代の耕作に伴う造成土であり、調査範囲全体で確認している。35・40層はH地区より北東側で堆積しており、古墳時代の遺構を検出した。15~17層はI地区に堆積する中世の整地層で、瓦器椀などの遺物包含層である。I地区では顕著なマンガン沈着が確認できる33層とその下位にある34層の直下で古墳時代の流路を検出した。H地区で確認された43~47層はラミナが



第6図 第7・10次調査トレンチ配置図



第7図 第7・10次調査基本層序土層断面図

(前頁 第7図土層断面図層名)

1. 耕作土
2. 浅黄色 (2.5Y 7/4) 均質な細粒砂 (造成土)
3. 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 粗粒砂質細粒砂 (造成土)
4. にぶい褐色 (7.5Y 6/4) 中粒砂～細粒砂 (造成土)
5. 灰黄褐色 (10YR 6/2) 粗粒砂混じり細粒砂 (造成土)
6. 褐灰色 (10Y 6/1) 中粒砂～細粒砂 (造成土)
7. 灰黄色 (2.5Y 6/2) 中粒砂～細粒砂 (造成土)
9. にぶい黄褐色 (10YR 6/3) 極粗粒砂質細粒砂
10. 灰黄色 (7.5YR 6/4) 中粒砂～細粒砂 (亜角礫を20%含む・近世造成土)
11. 灰色 (7.5Y 6/1) 細粒砂質シルト
12. にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 中粒砂質極細粒砂
13. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 細～極細粒砂 (近世以降耕作土)
14. にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 中粒砂質極細粒砂 (近世以降耕作土)
15. にぶい黄褐色 (10YR 6/3) 細～極細粒砂 (近世以降耕作土)
16. 褐灰色 (10YR 6/1) 粗粒砂～中粒砂 (ラミナが見られる) (洪水堆積)
17. 黄灰色 (2.5Y 6/1) 中粒砂質極細粒砂
18. 灰黄褐色 (10YR 6/2) 粗粒砂質中粒砂 (5～10cmの亜角礫を10%含む、礫下層にラミナが見られる) (洪水堆積)
19. 暗褐色 (10YR 3/1) 極細粒砂 (中世遺物包含層)
20. 暗灰黄色 (2.5Y 5/3) 極細粒砂 (S X10015 (中世墓) 検出層)
21. 灰褐色 (7.5Y 5/2) 極細粒砂 (S D10008 (南北溝) 検出層)
22. 褐灰色 (7.5YR 6/1) 極細粒砂
23. 灰褐色 (5YR 4/2) 有機質含細粒砂質粗粒砂
24. 暗黄灰色 (2.5Y 4/2) 極細粒砂 (掘立柱建物検出層)
25. 褐灰色 (10YR 6/1) 中礫含中粒砂質粗粒砂
26. 浅黄 (2.5Y 7/3) 極細粒砂
27. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 粗粒砂質中粒砂 (5～10cmの亜角礫を30%含む)
28. 灰色 (10YR 6/3) 中粒砂混り極細粒砂 (洪水堆積)
29. 灰オリーブ色 (7.5Y 5/2) 極細粒砂 (水田)
30. 灰色 (10Y 4/1) 中粒砂混り極細粒砂 (礫を2%含む) (水田)
31. 灰オリーブ色 (5Y 5/2) 中～細粒砂 (河川堆積)
32. 褐灰色 (10YR 4/1) シルト質極細粒砂 (河川堆積)
33. 上位: 明黄褐色 (10YR 7/6) 下位: 黄灰色 (2.5Y 6/1) 細粒砂 (ラミナがみられる)
34. 灰色 (N 5/0) 極細粒砂質粘土
35. 黒褐色 (10YR 2/2) 均質な細粒砂
36. 灰色 (N 4/0) 細粒砂から極細粒砂質粘土 (中粒砂・粘土のブロックがみられる)
37. 暗灰色 (N 3/0) 粗粒から極細粒砂質粘土 (遺物を少量含む)
38. 暗灰色 (N 3/0) 粗粒砂質粘土
39. 黒褐色 (10YR 3/1) シルト～極細粒砂
40. 灰黄色 (2.5Y 7/2) 均質な細粒砂
41. にぶい黄褐色 (10YR 7/3) わずかに粗粒砂質粘土
42. にぶい黄褐色 (10YR 5/3) シルト質極細粒砂
43. 灰黄色 (2.5Y 6/2) 粗粒砂 (弱いラミナ・粘土ブロックがみられる)
44. 灰白色 (2.5Y 7/1) 粘土
45. オリーブ黒色 (7.5Y 3/1) 大礫から巨礫
46. 黄褐色 (2.5Y 5/3) 極細粒砂
47. 褐色 (10YR 4/4) 中亜角礫 (3cm程度) 含粗粒砂質中粒砂
48. にぶい褐色 (7.5YR 6/4) 中粒砂～細粒砂
49. 青灰色 (5B 6/1) 極細粒砂質シルト
50. オリーブ黒色 (7.5Y 3/1) 中粒砂混り極細粒砂 (安定面)
51. オリーブ黒色 (10Y 3/1) シルト (安定面)

確認できる層や粒度が異なる堆積物が混在しており、法貴谷川の氾濫などによる堆積層と考えられる。 (名村威彦)

2) 第10次調査

調査区は南から北に向かって低くなる地形で、調査前の標高は南側(M地区)で139.8m、北東側(L地区)で136.8mである。調査地内は、現水田地で1層は耕作土である。M地区では耕作土下は13～14層の近世以降の耕作土が続き、次に20～22・24層の中世遺構面となる。中世以降の下では、28層の洪水堆積が29層の奈良時代の水田層を覆い、29層下の古墳時代後期以降のシルト層より下は、河川堆積と判断する級化構造とそれを切る中礫が含まれる洪水堆積を確認した。2トレンチの表土下16層では洪水堆積と考えられるラミナ層を確認し、以下は洪水堆積が続き安定面は検出されなかった。3トレンチからL地区間に4～10層の近世以降の造成土が堆積する。19層は中世の遺物を含む包含層で、48層の安定面で古墳時代の遺構を検出した。 (菅博絵)

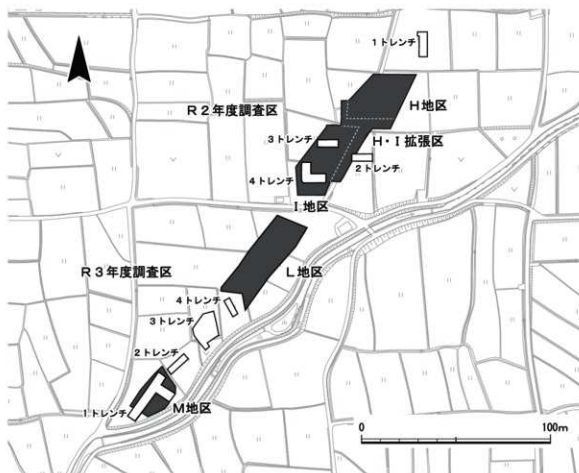
5. 小規模調査の概要

大剣遺跡は、亀岡市の南東部の扇状地上に位置する、古代から中世の集落跡である。これまでの調査では古墳時代前期～古代にかけての流路(第3次調査C地区)や建物群(同D地区)、中世の方形居館(同B地区)等、幅広い時期の遺構が確認されている。

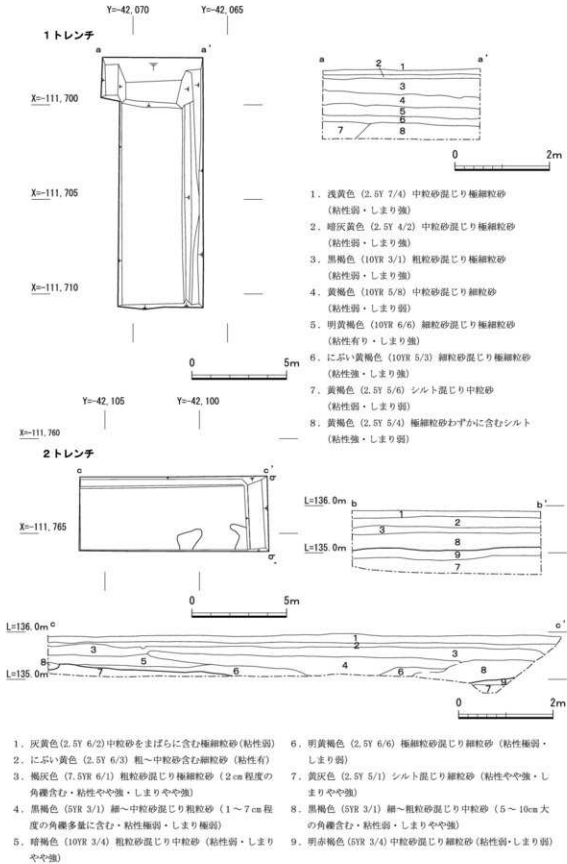
法貴谷川広域河川改修(防災・安全)事業では、法貴谷川の左岸側に隣接する農地が大剣遺跡の範囲に含まれていたため、調査対象地となった。調査対象地は平成23年度に亀岡市教育委員会によって行われた第1次調査の結果、周辺に遺構が広がることから明らかであった。そのため、試掘調査が行われた農地についてはH地区として面的な調査を行い、隣接する農地については遺構の広がりを確認するため小規模調査を行った。

1) 第7次調査

第7次調査では小規模調査区として1～4トレンチを設定し、調査を行った(第8図)。調査対象地は農道によって東西に分かれており、調査前の現況では西側の農地が東側に比べてやや高く、西側は法貴谷川の氾濫などによる削平が少ない可能性を想定した。そのため、調査区をやや西側に設定している。



第8図 小規模トレンチ配置図



第9図 第7次調査1・2トレンチ実測図

1 トレンチ(第9図) 調査対象地内の北側に設定した東西4.5m、南北13.0mのトレンチである。地表下約0.6mで安定した灰黄色土細粒砂層を確認したため、精査を行い、遺物及び遺構の確認に努めたが確認できなかった。下層確認のためトレンチ北側にサブトレンチを設定し、重機掘削を行った結果、地表下約0.9mより下層でラミナやブロックを確認したため、河川堆積層と判断した。遺構・遺物は確認できなかった。

2 トレンチ(第9図) 調査対象地の南東側に設定した、東西11.0m、南北4.0mの長方形のトレンチである。現在の地表面は標高136.0mである。地表下約0.9mまで重機掘削を行い、地表下約0.47～0.9mで中亜角礫や大亜角礫を多く含む層を確認した。土層の堆積物の粒度が不均質で、粒径が不揃いなことから洪水堆積層と判断した。地表下約0.9mで灰黄色細粒砂層を確認し、人力掘削及び精査を行ったが、顕著な遺物や遺構は確認できなかった。下層の確認のため東側にサブトレンチを設定して調査を行ったが、遺構面は確認できなかった。

3 トレンチ 調査対象地の南西側、北寄りに設定した、東西11.0m、南北4.0mの長方形のトレンチである。現地表面の標高は135.6mである。地表下0.42mまで重機掘削を行い、中世の遺物が多量に含まれる褐色極細粒砂層を確認したため、人力で掘削及び精査を行った結果、ビット等を検出した。地表下約0.4mから0.8mまで褐色極細粒砂層、灰褐色有機質含む細粒砂質粗粒砂層、褐色中礫含む中粒砂質粗粒砂層が堆積しており、いずれも中世の遺物を含む。下層確認のため、西側にサブトレンチを設定し、重機掘削を行った結果、地表下1.4mまで遺構・遺物を包含する層を確認したため、I地区として拡張し面的調査を行うことになった。

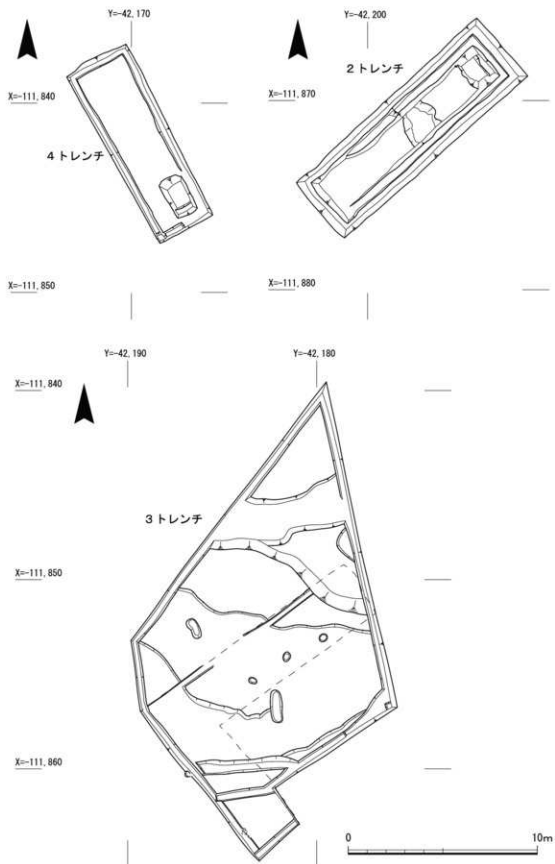
4 トレンチ 調査対象地の南西側、南寄りに設定した東西4.7m、南北10.7mのトレンチと東西8.0m、南北4.7mのトレンチをつなげた東に張り出すL字形のトレンチである。現地表面の標高は136.4mである。地表下約0.3mまで重機掘削を行い、中世の遺物が多量に含まれる褐色極細粒砂層を確認したため、人力で掘削及び精査を行った。その結果、集石遺構、礫を多量に含む溝、落ち込みを検出した。地表下約0.3mから0.8mまで褐色極細粒砂層、灰褐色有機質含む細粒砂質粗粒砂層、褐色中礫含む中粒砂質粗粒砂層が堆積しており、いずれも中世の遺物を含む。下層確認のため北側にサブトレンチを設定し、重機掘削を行い、地表下0.79mから上位が明黄橙色、下位が黄灰色のラミナが確認できる細粒砂層を確認した。遺構・遺物を包含する層を確認したため、3トレンチとともに拡張し、I地区として面的調査を行うこととなった。

(名村威彦)

2) 第10次調査

第10次調査では、第7次調査で検出した自然流路N R7100の広がりを確認するためにI地区南側を本調査区のほか調査対象地内に4つの調査区を設定した(第8図)。

1 トレンチ 調査対象地南端に設定した幅5mで南北24.2mの長方形のトレンチに北から5.2mの位置から、50m幅で東西方向に6.5mのびる「ト」の字状に設定した調査区である。地形は南から北に向かって低くなる地形で、現地表面の標高は139.2mである。地表下約0.4mまで重機掘削を行い、南北方向の溝を確認したため、人力で掘削及び精査を行った。その結果、南北方向の



第10図 第10次調査2・3・4トレンチ実測図

溝群と、中世遺物を含む包含層、下層遺構を確認した。溝の範囲と下層遺構の確認のため調査区の東西側を拡張し、M地区として面的調査を行った。

2 トレンチ(第10図) 1 トレンチの北東に設定した南北13.0m、幅4.0mの長方形の調査区で、調査面積は55.76㎡を測る。現地表面の標高は137.5mである。地表下約0.4mまで重機掘削を行い、黄灰色中粒砂質極細粒砂(第7図17層)で土色変化を確認したため、人力掘削及び精査を行った。その結果、北から東に49°振る耕作溝を検出したが、遺物は出土しなかった。下層確認のため北側にサブトレンチを設定し、重機掘削を行った。地表下約0.7mから河川堆積と考えられる青灰色極細粒砂質シルト(第7図49層)を確認した。49層検出面から約0.9m掘り下げたが、同様の堆積が続くため、下層に遺構はないと判断した。上層で検出した溝群は記録後、河川堆積上面の灰黄褐色粗粒砂質中粒砂(第7図18層)まで重機掘削し、人力による遺構検出を行ったが、顕著な遺構・遺物は確認されなかった。壁面の断面観察の結果、洪水によるラミナ層を複数確認し、洪水により遺構面は削平されたと考えられる。

3 トレンチ(第10図) 2 トレンチの北東側平坦面と、東側に一段下がる位置に設定したトレンチである。当初、幅3.0mで南北13.3m・東西6.7mのL字形のトレンチを設定した。現地表面の標高は138.8mを測り、地表面から深さ約0.6mまで重機掘削を行った。安定面であるにぶい橙色中粒砂から細粒砂(第7図48層)を確認したため、人力掘削及び精査を行った。

調査の結果、直線上に並ぶ3つの土坑を検出した。建物の柱穴である可能性が考えられたため、東西に拡張し、調査を実施した。調査の結果、新たに土坑2基を検出したが、土坑群は建物として復元するには至らなかった。トレンチ南側は中世の遺物を含む北東方向の土石流堆積を確認した。トレンチ北側は、低地に中世末から近世の陶器片と垂角礫を含む灰黄色中粒砂から細粒砂(第7図10層)によって平地が作られることから、整地が行われたと考えられる。トレンチ東側の一段下がる位置では、現代廃棄物を含む盛り土を確認し、東側の地形が現代の造成により形成されたと考えられる。下に安定面(第7図48層)を確認した。上層から切り込む現代暗渠を検出したが、遺構・遺物は検出されなかった。下層確認のため、東側にサブトレンチを設定して人力掘削を行った結果、標高137.8mで2 トレンチから検出した青灰色極細粒砂質シルト層を検出した。

4 トレンチ(第10図) 3 トレンチの北東部に設定した幅3.0m、長さ10.2mの長方形のトレンチである。現地表面の標高は138.3mで、地表面から深さ約0.6mまで重機掘削を行い、安定面であるにぶい橙色中粒砂から細粒砂(第7図48層)を確認したため、人力掘削及び精査を行った。

調査の結果、顕著な遺構は確認されなかったが、トレンチ西側では3 トレンチで確認した中世末から近世の遺物を含む垂角礫を含む灰黄色中粒砂から細粒砂(第7図10層)を安定面直上で検出した。調査区北東にサブトレンチを設定し、地表下約1.2mまで重機掘削を行った。安定面が約0.4m堆積しており、その下層には扇状地堆積と考えられる層が続く。3 トレンチから4 トレンチ間では、近世以降に造成が行われ、大きな削平を受けたと考えられる。(菅博給)

6. H・I・L・M地区の調査

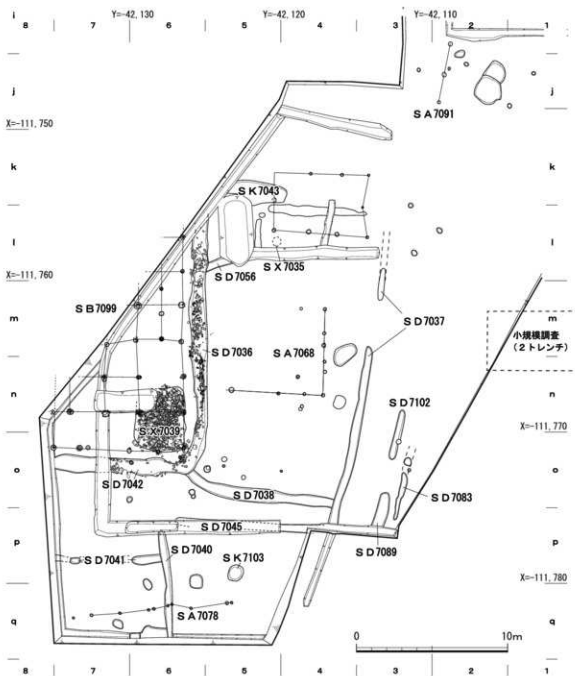
1) 中世

I・M地区では中世の遺構を検出した。I地区では、掘立柱建物に伴う遺構や複数の土坑や溝、M地区では中世の遺物を包含する南北方向の溝群の下に掘立柱建物と区画する溝、柵列やピットを検出した。L地区では中世の包含層を検出したが、遺構は検出されなかった。

(1) 検出遺構

① 溝

溝 S D 7036 (第12図) I地区(1~o5・6)で検出した南北方向の溝である。検出長15.6m、



第11図 I地区遺構配置図(中世)

幅0.84～0.96m、深さ0.06～0.24mを測り、断面は浅い「U」字形を呈する。溝内からは、多くの礫とともに、土師器皿・瓦器椀・瓦質土器羽釜・鍋・東播系須恵器の鉢・輸入陶磁器(第33図1～38)や銭貨(第42図192・193)などがまとめて出土した。土器の年代観を考慮すると、13世紀中頃から14世紀初め頃に機能していた可能性がある。特に、北側で遺物が集中しており、やや南(m・n6)の溝底付近では、薄い木板片が溝底に沿って南北方向に並んでいる状態で出土した。北側では、S D7056と溝を共有して途中から分流しており、溝底の標高は、北側で135.25m、南側で135.52mを測ることから、水は南から北に流れていたと考えられる。また、南側では、溝S D7042とつながり、逆L字状に屈曲する。溝S D7036の西側約1mには、掘立柱建物S B7099の東柱列が近接していることから、後述する掘立柱建物S B7099の雨落ち溝と考えられる。

溝S D7037(第14図) I地区(n3～o4)で、長さ14.9mにわたって検出した、断面が浅い「U」字形を呈する南北方向の溝である。北から東に13°振れており、現在の里道を踏襲する位置で確認した。幅0.42m、深さ0.08mを測る。南から11.9mの地点で3.1m途切れ、さらに北へ2.1m分が浅く残存していた。元々はさらに北側へ続いていた溝が、後世の整地等により削平されたものと思われる。途切れていた部分の西側には、掘立柱建物S B7099や柵列S A7068などが存在することから、屋敷地の出入口であった可能性がある。埋土からは瓦器椀片・土師器皿片とともに、13世紀前半～中葉頃の東播系の鉢(第34図39・40)が出土した。

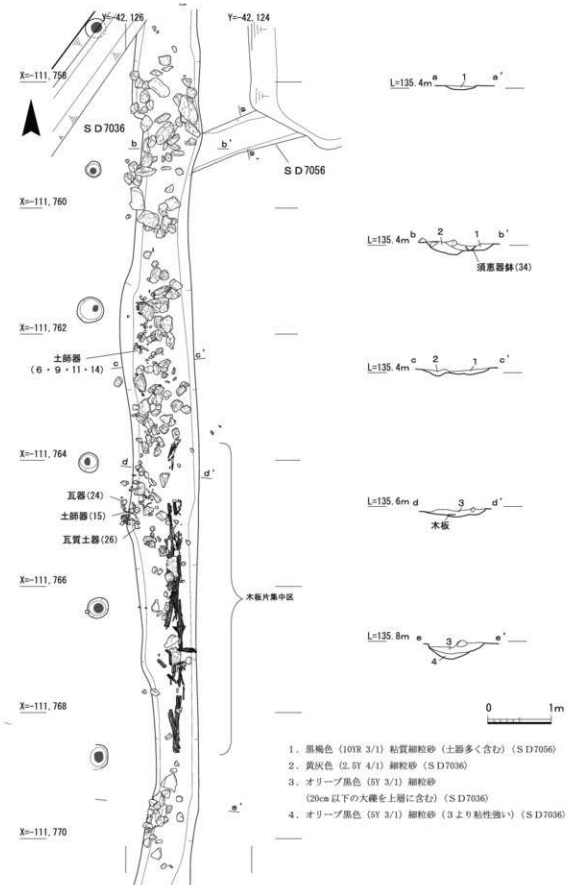
溝S D7038(第13図) I地区(o4～6)で検出した東西方向の溝で、長さ9.7mにわたって確認した。東側のS D7037から、西側のS D7042につながる溝であったと考えられる。溝の幅は0.74m、深さ0.10mを測る。断面は浅い「V」字形を呈する。黒褐色の均質な細粒砂の埋土から、瓦器椀(第34図41～44)と13世紀後半から14世紀前半の白磁椀(第34図45)が出土した。

溝S D7040(第11図) I地区(p・q6)で検出した南北方向の溝で、検出長6.9m、幅0.5m、深さ0.08mを測る。南側は調査区外、北側は小規模4トレンチの排水溝に削平されており、つながりは明らかではないが、埋土や溝の角度等から推察すると、S D7041及びS D7045とつながっていた可能性がある。

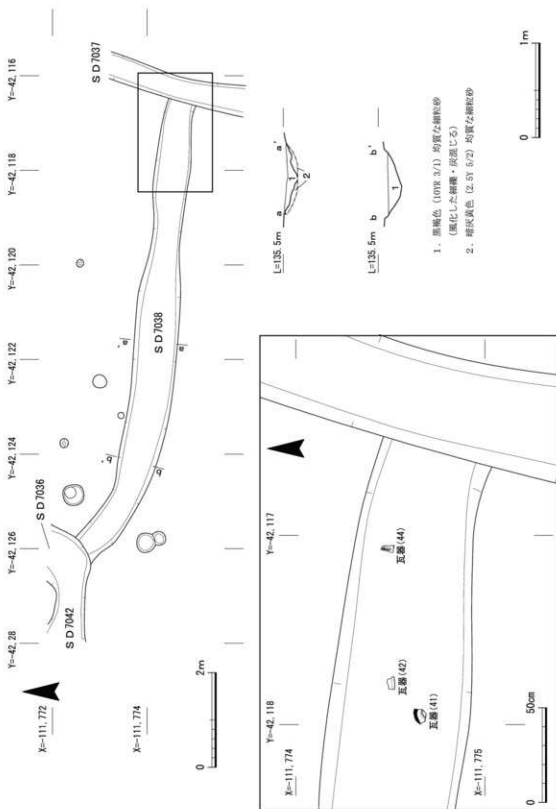
溝S D7042(第14図) I地区(o6・7)で検出した東西方向の溝で、S D7036へつながり、北へ向きを変える溝である。西側は調査区外となる。検出長8.4m、幅1.1m、深さ0.12mを測る。検出時には、溝の中央部周辺と西側の南岸に0.4m前後の礫がやや規則的に並ぶ箇所があり、中央部の溝内には石を据えた小さな柱穴を確認したことから、この部分に小さな橋のような構造物が存在した可能性がある。埋土からは瓦器椀(第34図46～48)などとともに、木板片や銭貨(第43図194)が出土した。S D7036と同様、掘立柱建物S B7099の雨落ち溝と考えられる。

溝S D7045(第11図) I地区南側(p4～6)で確認した東西方向の溝である。検出長10.1m、幅0.6m、深さは0.08mと浅い。小規模4トレンチの排水溝によってほぼ削平されており、西端部分はp6区でわずかに溝の肩部を確認した。図化はできなかったが、埋土から瓦器椀・瓦質土器の鍋・羽釜などが出土した。

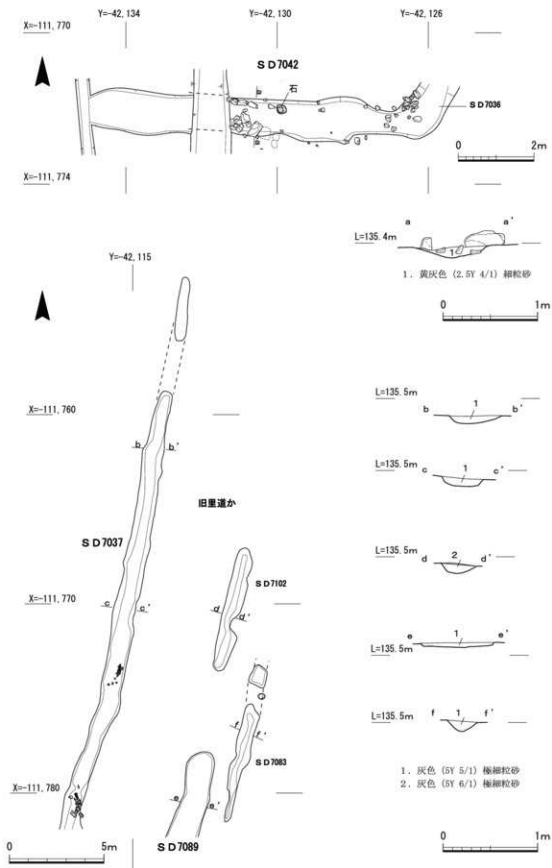
溝S D7056(第12図) I地区北西部(l5)で検出した、S D7036から北東方向に分流する溝



第12図 I地区 溝 S D 7036・7056実測図



第13図 I地区 溝S D 7038実測図

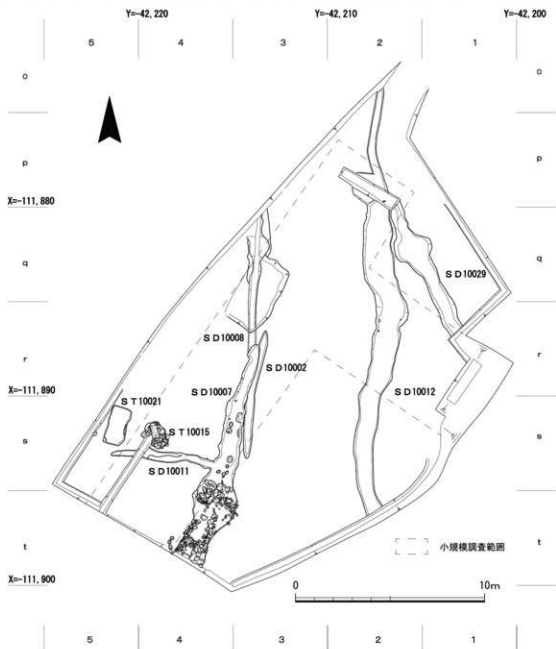


第14図 I地区 溝SD7042・7037・7089実測図

である。幅0.5m、深さ0.08mを測り、一部でS D 7036と共有している。堆積状況から、S D 7036がS D 7056に先行する溝と考えられる。遺物は土師器皿・瓦器碗のほか、12世紀後半から13世紀とみられる輸入陶磁器(第34図56～58)が出土した。

溝S D 7089(第14図) I地区(o・q 3)で検出した北から東に13°振る南北方向の溝である。検出長2.4m、幅0.78m、深さ0.05mを測る。S D 7037とほぼ平行に位置し、現在の里道の真下に存在していることから、S D 7102・7083とともに、旧里道に関わる溝と考えられる。図化はできなかったが、埋土から瓦器碗片が出土している。

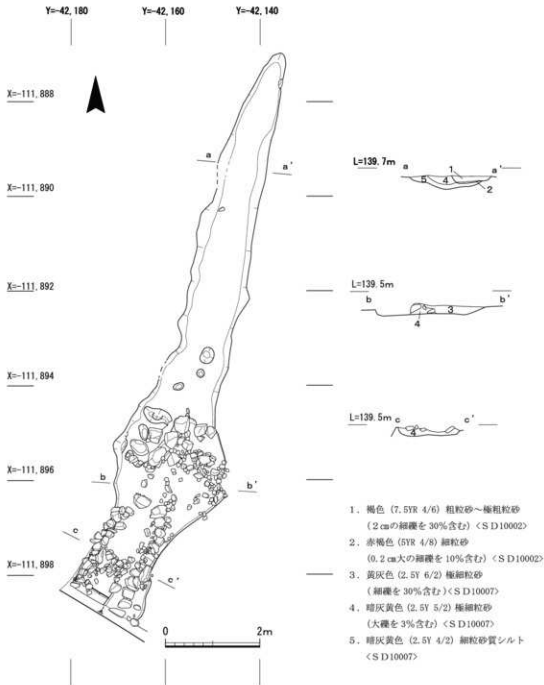
溝S D 10002(第15図) M地区(r・s 3)で検出した南北方向の溝である。全長6.7m、幅0.5m、深さ0.2mを測る。溝中ほどで南東方向にやや屈曲しており、溝北側で北から東へ4°、南側で北



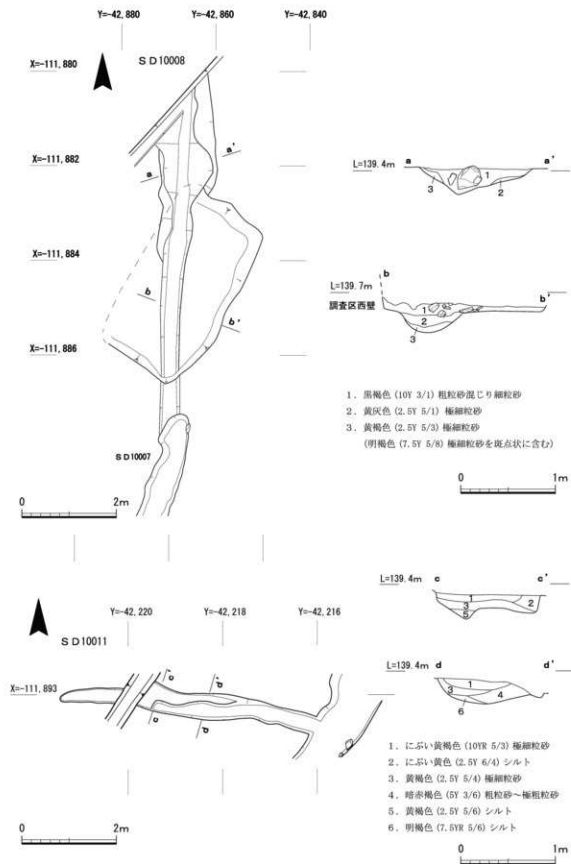
第15図 M地区遺構配置図(中世上層)

から東へ13°振る。溝の北端と南端は攪乱のため消失する。S D10002の掘形が後述する溝S D10007の埋土を切り込むことから、S D10007より後出する。12～13世紀の瓦質の羽釜(第35図59)が出土した。

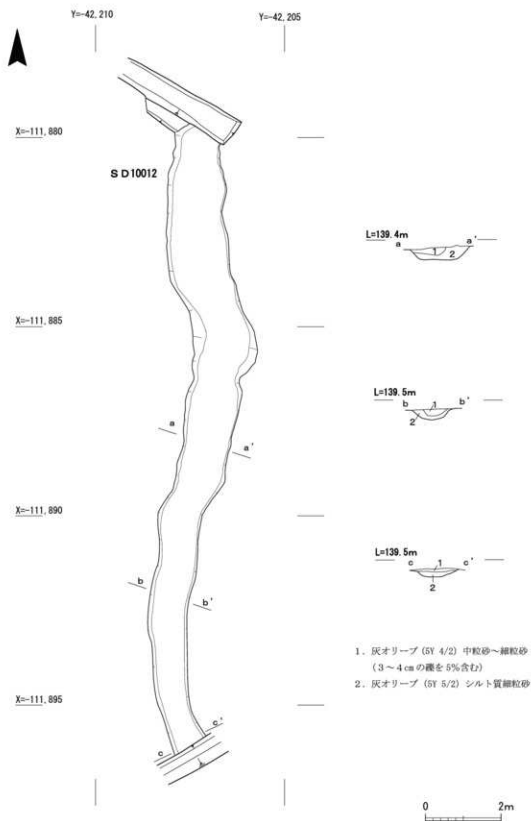
溝S D10007(第16図) M地区上層(r～t 4・3)で検出した北から西へ18°振る南北方向の溝である。S D10002とS D10008と重複し、検出長11.8m、幅0.20～0.23m、深さ0.28～0.34mを測り、断面は浅い「U」字形を呈する。溝内からは多くの大礫が出土した。溝底面は、南側では標高139.28m、北側で139.26mを測り北に向かってやや低く傾斜することから、水は北に向かっ



第16図 M地区 溝S D10007実測図



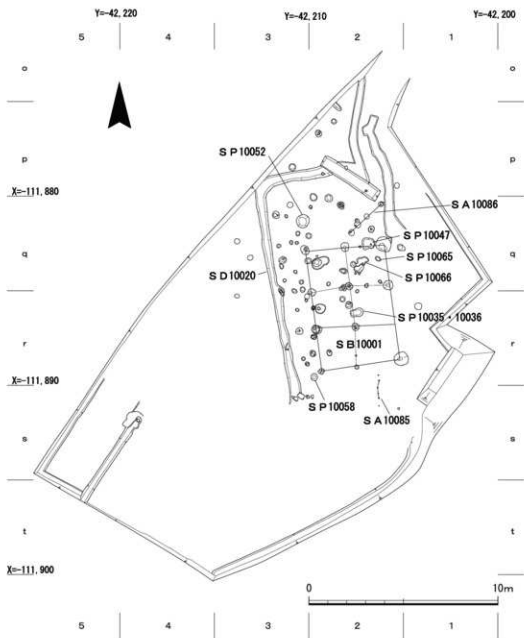
第17図 M地区 溝S D 10008・10011実測図



第18図 M地区 溝 S D 10012実測図

て流れたと考えられる。溝南側では大礫を含む暗灰黄色極細粒砂層(4層)の上に黄灰色極細粒砂(3層)が溝の東側に浅く堆積することから、溝からあふれた水が東に流れ込んだと考えられる。溝の北側は消失する。S D10002がS D10007の埋土を掘り込み、S D10008の埋土をS D10007の掘形が切り込むことからS D10002より後出し、S D10008より先行する。

溝S D10008(第17図) M地区上層(q・r3)で検出した北から東に3°振る南北方向の溝である。検出長6.84m、幅0.4m~1.2m、深さ0.16~0.31mを測り、断面は浅い「U」字形を呈する。後世の掘乱により溝の上部が削平され、南端はS D10007に切られて消失する。溝埋土である中礫から大礫を含む黒褐色層(1層)から、瓦器や土師器(第35図62~76)、銭貨(第42図203)が出土した。13世紀中葉には廃絶したと考えられる。



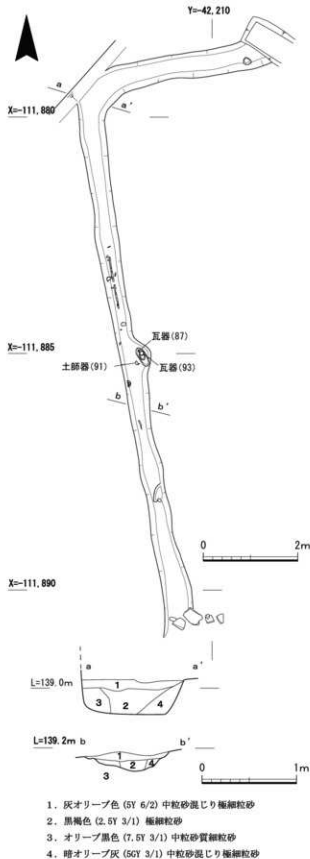
第19図 M地区遺構配置図(中世下層)

溝SD10011(第17図) M地区上層(s
4・5)で検出した北から西に87°振る東
西方向の溝である。検出長5.5m、幅0.33
~0.49m、深さ0.1~0.13mを測り、断面は
西側では「V」字形、東へ向かうにつれ「U」
字形となる。溝底部高は、西が標高139.36
m、東が標高139.09mであることから、水
は西から東に向かって流れていたと考えら
れる。

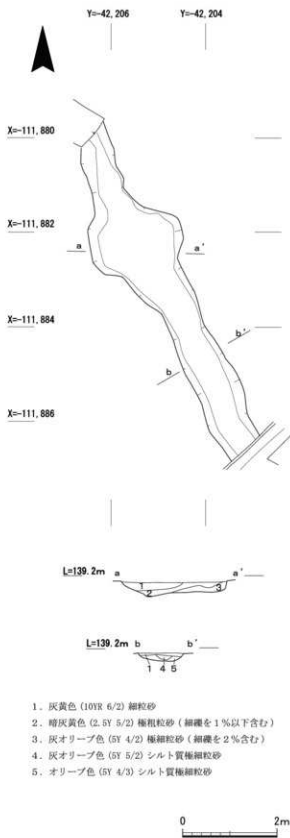
溝西側は、SD10007にほぼ直交してお
り、SD10007に排水していた可能性がある。

溝SD10012(第18図) M地区(q~s
2)で検出した南北方向のやや蛇行する溝
である。検出長16.3m、幅1.1~1.5m、深
さ0.2~0.4mを測り、断面は浅い「U」字
形を呈する。溝底面は、南側で標高139.05
m、北側で標高138.95mを測り北に向か
って低く傾斜することから、水は北に向
かって流れていたと考えられる。溝南側
は調査区外へ延び、北側は攪乱のため消
失する。溝埋土からは土器、銭貨(第35図
77~81・第42図201・202)が出土し、13世
紀前半以降に廃絶したと考えられる。

区画溝SD10020(第19・20図) M地
区下層(q2~s3)で検出した溝である。
北から西に10°振る南北方向の溝は、調査
区西壁付近で直角に屈曲し、東西方向に
方位を変える逆「L」字形の溝である。
検出長は、南北10.2m、東西5.3m、幅0.4
~0.6m、深さ1.4~1.6mを測り、断面形態
は浅い「U」字形を呈する。溝内からは
大礫と土器、木片や種子が出土した。S
D10020の東へ約1mの位置には掘立柱建
物SB10001の西側柱列があり、溝と建物



第20図 M地区 区画溝SD10020実測図



1. 灰黄色 (10YR 6/2) 細粒砂
2. 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 極粗粒砂 (細礫を1%以下含む)
3. 灰オリーブ色 (5Y 4/2) 極細粒砂 (細礫を2%含む)
4. 灰オリーブ色 (5Y 5/2) シルト質極細粒砂
5. オリーブ色 (5Y 4/3) シルト質極細粒砂

第21図 M地区 溝S D 10029実測図

主軸の振り角が近いことから、掘立柱建物 S B 10001の区画溝と考えられる。溝内から13世紀前半の土器(第35図82~97)が出土した。

溝S D 10029(第21図) M地区上層(r・s 1・2)で検出した北から西に27°振る南北方向の溝である。検出長7.5m、幅0.6~2.0m、深さ約0.1mを測り、断面は浅い「U」字形を呈する。溝埋土から須恵器杯H身が出土したが、遺物が出土したS D 10012より上層から切り込むため、S D 10012より後出する溝と考えられる。北端は近代以降の暗渠に削られ消失する。調査区東側に法貴谷川が流れていることから、川から田畠へ取水する水利の溝と考えられる。

溝の北東側は埋土に褐色粗粒砂礫が広がり、溝から溢れた水が東へ広がる。

S D 10007・10008・10012・10029の各溝は近接または重複していることから時期差が考えられ、遺構の重複関係や壁面の堆積状況から、S D 10029→S D 10012→S D 10008→S D 10007の順に掘削され、洪水などで溝が埋没するたびに掘り直されたと考えられる。S D 10008・10012の埋土から13世紀前半から半ばの土器が出土した。調査地西側は条里の方一町区画畦溝推定地であることから、条里地割の影響を大きく受けたと考えられる。

②掘立柱建物と付属施設

掘立柱建物 S B 7099(第22・23図) I地区(1~o 6・7)で検出した掘立柱建物である。北側と西側は調査区外となっており全容は不明であるが、南北6間以上、東西4間以上の大規模な建物で、屋敷の主屋と考えられる。東西の一部及び南側に1間分の張り出し部を確認している。柱穴 S P 7095・7098・

7126には柱根(第39図178~180)が残存しており、それぞれ直径0.18・0.10・0.14mを測る。柱穴 S P 7047・7059・7044・7066・7090・7087では、掘形の底で0.15~0.40m大の根石を確認している。掘形の規模は直径0.2~0.5mを測り、柱筋にはやや歪みが認められる。柱穴からは、土師器皿や瓦器碗等(第36図113~119)が出土した。残存した柱根の自然科学分析(第7章参照)では、12世紀後半から13世紀前半とやや古相を示し、出土土器の年代観とはやや開きがある。

なお、建物内部の南東隅では、拳から人頭大の礫を敷き詰めた片付けもしくは地業の痕跡と考えられる集石土坑 S X 7039を確認している。

集石土坑 S X 7039(第24図) I地区(n・o6)で検出した深さ0.4mを測る集石土坑である。掘立柱建物 S B 7099として復元した南東隅で検出した。北西部分は4トレンチの排水溝で削平されているものの、概ね東西3.2m、南北4.2m四方の範囲で5~50cm大の礫が無数に詰まっていた。検出時から礫は露出しており、その上面や礫の間からも土師器皿や瓦器碗などの遺物(第36図98~112)が出土した。礫を除去し、埋土掘削を進める際、S B 7099を構成する柱穴 S P 7088や S P 7118を検出したこと、礫が無秩序に集積していることから、片付けの痕跡である可能性がある。ただし、S X 7039の下層には古墳時代前期の自然流路 N R 7100が存在しており、当該地の地盤が軟弱であることから、土間を補強した地業痕跡であった可能性も合わせて考えておく。

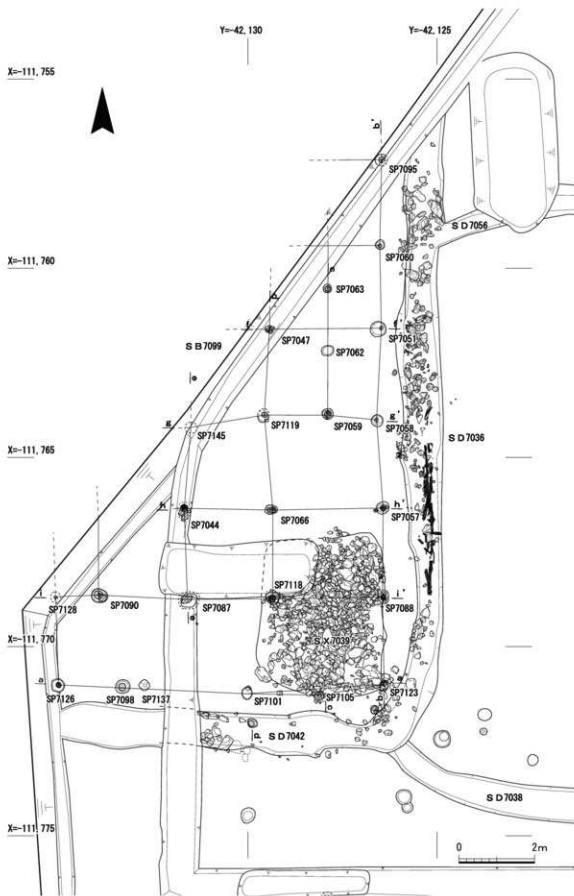
掘立柱建物 S B 7106(第24図) I地区(k・l3~5)で検出した東西3間、南北2間のやや小規模な掘立柱建物である。柱穴 S P 7064・7065・7067・7120~7122・7124・7125・7127で構成され、平均柱間は2.0mを測る。北西隅の柱穴は確認できなかったが、北側の柱穴列の深さは0.05~0.1m前後、南側の柱穴列の深さは0.2m前後と北側の方が浅く、残りが良くなかったことに起因していると思われる。規模等から考え、S B 7099の付属建物であった可能性がある。

掘立柱建物 S B 10001(第25図) M地区(s2)で検出した東西2間、南北3間、建物の主軸は北から西に8°振る総柱建物である。柱穴 S P 10050・10076・10072・10062・10042・10073・10056・10080・10079・10059・10077・10078で構成され、そのうち柱穴 S P 10050・10076・10072・10062・10042・10073・10056・10080・10078で柱根を検出した。掘形の規模は径0.2~0.8mを測り、柱筋には歪みが生じる。平均柱間は1.9mを測る。S P 10080埋土から13世紀前半と考えられる土師器が出土した(第38図155)。残存した柱の自然科学分析の結果から13世紀前半~中ごろと出土遺物と矛盾はない。

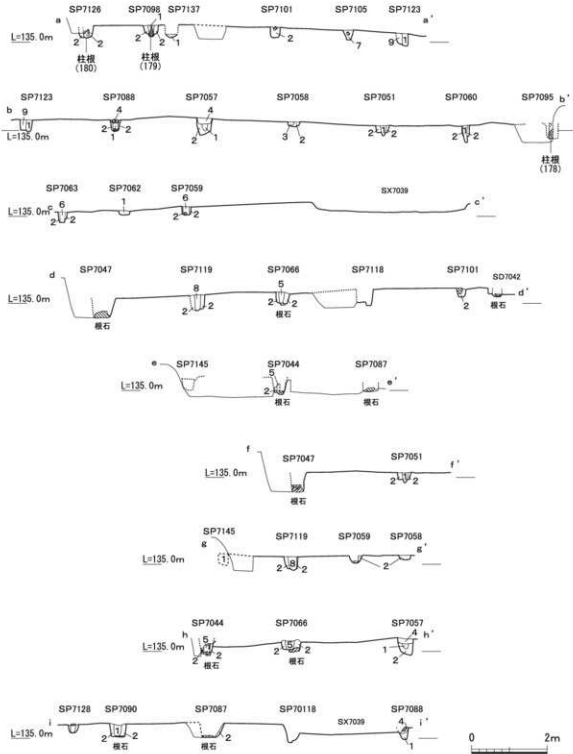
③欄列

欄列 S A 7068(第26図) I地区(m・n4・5)で検出した逆「L」字形の柱列である。南北5間、東西3間分を確認した。柱穴 S P 7061・7081・7082・7085・7108・7109・7116・7117で構成されるが、柱間の間隔や深さにばらつきがある。遺物は、S P 7082・7085から瓦器碗片等が出土した。

欄列 S A 7078(第26図) I地区(q5~7)で検出した東西方向8間の柱列である。柱穴 S P 7070~7077で構成され、各柱穴は、直径0.16~0.20m、深さ0.2mを測る。中央の S D 7040付近で屈曲し、柱間は0.3~2.4mとばらつきがある。

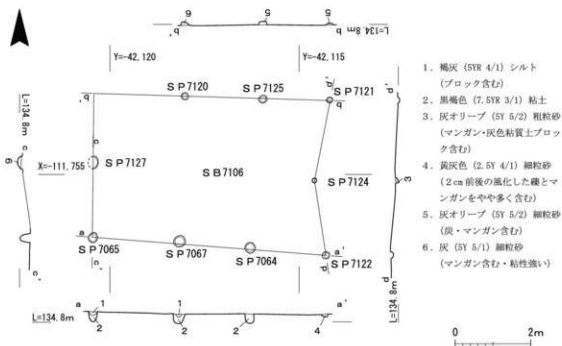
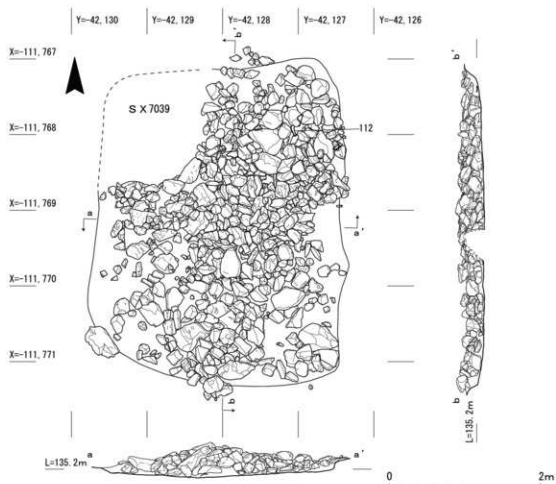


第22図 I地区 掘立柱建物S B 7099実測図1



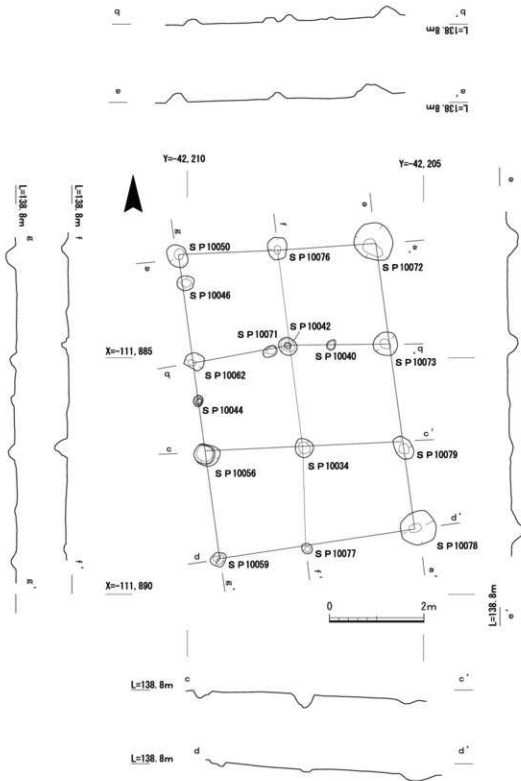
- | | |
|--|------------------------------------|
| 1. 灰色 (N 6/0) シルト | 6. 黄灰色 (2.5Y 4/1) 粘土 (有機質混じる) |
| 2. 暗緑灰色 (10GY 3/1) 粘質土 (均質) | 7. 灰褐色 (7.5YR 4/2) シルト (マンガン多量を含む) |
| 3. 黄褐色 (2.5Y 5/3) シルト (土器多く含む) | 8. 灰白色 (5Y 7/1) 極細粒 (マンガン多量を含む) |
| 4. 黄灰色 (2.5Y 4/1) シルト (礫多い) | 9. 灰オリーブ色 (5Y 5/2) シルト (ブロック多い) |
| 5. 黒褐色 (2.5Y 3/1) とオリーブ褐色 (2.5Y4/6) 混じり粘質土 | |

第23図 I地区 掘立柱建物S B 7099実測図2

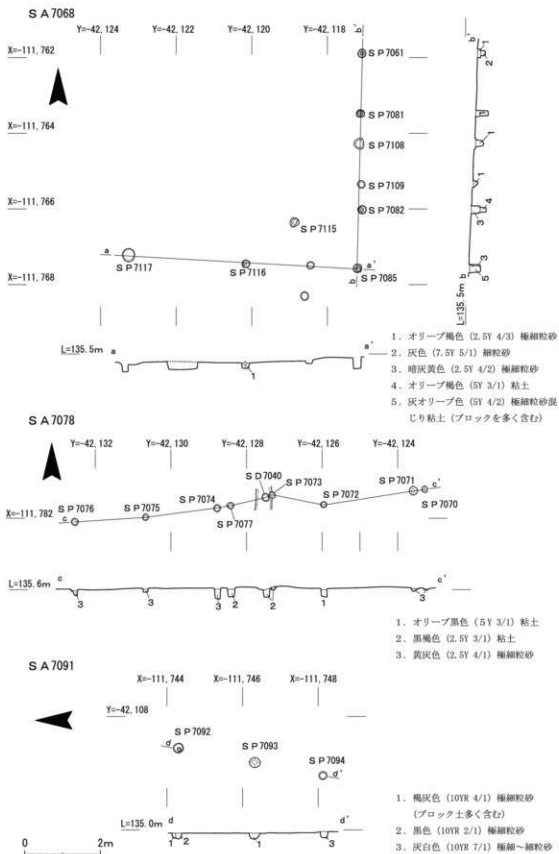


1. 楊灰 (5YR 4/1) シルト (ブロック含む)
2. 黒褐色 (7.5YR 3/1) 粘土
3. 灰オリーブ (5Y 5/2) 粗粒砂 (マンガン・灰色粘質土ブロック含む)
4. 黄灰色 (2.5Y 4/1) 細粒砂 (2cm前後の風化した礫とマンガンをやや多く含む)
5. 灰オリーブ (5Y 5/2) 細粒砂 (鉄・マンガン含む)
6. 灰 (5Y 5/1) 細粒砂 (マンガン含む・粘性強い)

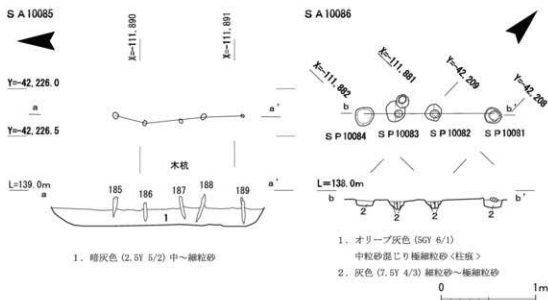
第24図 I地区 集石土坑 S X 7039・掘立柱建物 S B 7106実測図



第25図 M地区 掘立柱建物S B10001実測図



第26図 I地区 横列S A 7068・7078・7091実測図



第27図 M地区 横列 S A 10085・10086実測図

横列 S A 7091 (第26図) H・I 拡張区 (j 2) で検出した 2 間の柱列である。柱間は北から約 2.0m、1.8m を測る。やや東に角度を振り、溝 S D 7037 と概ね並行していることから、S D 7037 と同時期の遺構と考えられる。本調査区では、小グリッドの 2 区より東側は全体的に遺構の遺存状態が良くないことから、横列 S A 7091 も当初は南西方向に続いていた可能性がある。

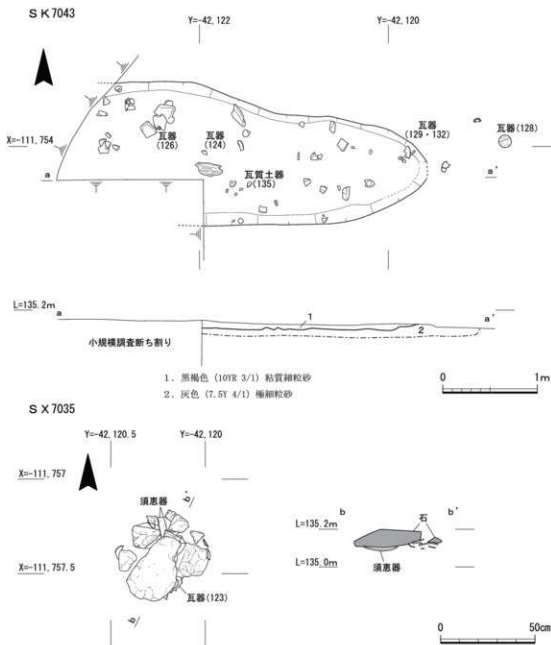
横列 S A 10085 (第27図) M 地区下層 (s 2) で検出した全長 1.4m、北から西に 1° 振る南北方向の横列である。長さ 22.2~36.5cm、幅 3.4~4.4cm の先端を加工した木杭 5 本 (第40図 185~189) が並んで出土した。木杭の間隔は北から 0.30m、0.36m、0.24m、0.31m とばらつきがある。

横列 S A 10086 (第27図) M 地区下層 (q 2) で検出した 3 間の東西方向の横列である。柱穴 S P 10081~10084 で構成され、各柱穴は、直径 0.16~0.20m、深さ 0.2m を測る。S P 10081 は根石の可能性のある面をもつ礫が置かれ、S P 10082・10083 には柱痕跡を確認した。直径 8~10cm を測る柱の間隔は、西から 0.35m、0.39m、0.64m を測る。北側は調査区外へとのびる可能性がある。

④ 土坑

土坑 S K 7043 (第28図) I 地区北西部 (k 5) で確認した東西に長い楕円形を呈する土坑である。西側は調査区外、南西部は小規模 3 トレンチの断ち割りによって削平されている。東西 1.96m 以上、南北 0.76m、深さ 0.07m を測る。土坑内部のほか、北東部約 1m の地点でも瓦器碗の完形品などが出土している。これらには掘形は認められなかったものの、この土坑の一部として報告しておく。埋土から、木片とともに土師器皿・瓦器碗・瓦質羽釜など (第37図 124~137) がまわって出土した。

土坑 S K 7103 (第11図) I 地区南部 (q 5) で検出した方形の土坑である。東西 0.8m、南北 0.9m、深さ 0.32m を測る。埋土から瓦器碗が出土した。



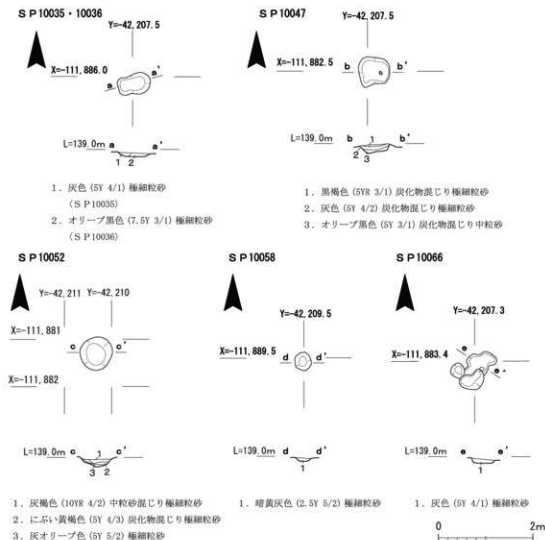
第28図 I地区 土坑S K 7043・土器溜まりS X 7035実測図

⑤その他

土器溜まりS X 7035(第28図) I地区(15)で検出した土器溜まりである。長さ37cm、幅23cm大の大きな礫と10~20cm大の中礫が集中し、礫の下から瓦器椀(第36図123)や須恵器片などが出土した。当初、柱穴状に礫がまともっており、建物の礎石が露出したものと考えられたが、周辺に並ぶ同様の遺構が検出できなかったことから、単独の遺構と考えておく。

ビットSP 10035(第19・29図) M地区下層、掘立柱建物S B 10001柱列中央(r 2)で検出したSP 10036と重複する南北0.37m、東西0.13m、深さ0.08mを測る円形のビットである。埋土から瓦器椀・土師器の皿(第38図152・157)が出土した。

ビットSP 10036(第19・29図) M地区下層、掘立柱建物S B 10001柱列中央(r 2)で検出し



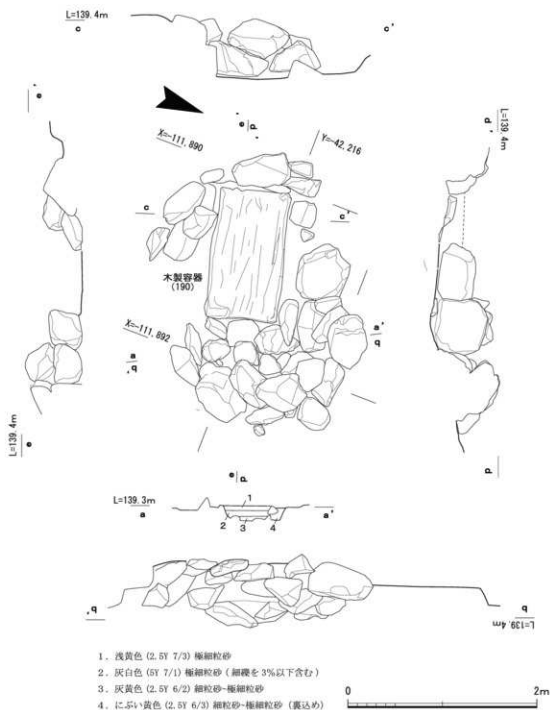
第29図 M地区 ビット10035・10036・10047・10052・10058・10066実測図

た南北0.32m、東西0.42m、深さ0.1mを測る円形のビットである。S P 10035と重複しており、S P 10036の埋土をS P 10035の掘形が掘り込むことから、S P 10036が後出する。埋土から瓦器椀(第38図150)が出土した。

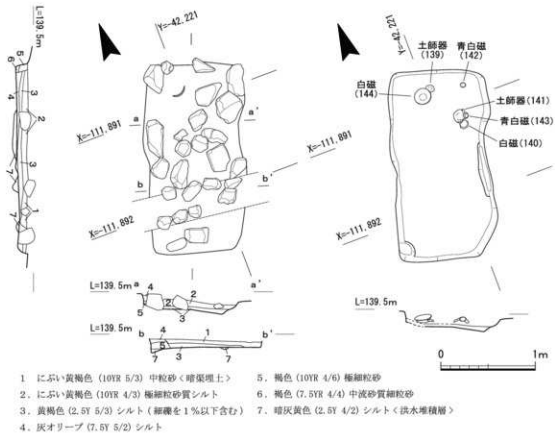
ビットS P 10047(第19・29図) M地区下層、掘立柱建物S B 10001北東側(q 2)で検出した南北0.65m、東西0.64m、深さ0.18mを測る円形のビットである。埋土から瓦器椀(第38図146)や土師器の皿(第38図153・156)が出土した。

ビットS P 10052(第19・29図) M地区下層、掘立柱建物S B 10001北西側(q 3)で検出した南北0.62m、東西0.7m、深さ0.19mを測る円形のビットである。埋土中に炭化物を多く含み、ビット上層の灰褐色中粒砂(1層)から瓦器椀(第38図145)が、下層の灰オリーブ色極細粒砂層(3層)から土師器の皿(第38図154)が出土した。

ビットS P 10058(第19・29図) M地区下層、掘立柱建物S B 10001の南東側(r 2)で検出した南北0.38m、東西0.32m、深さ0.1mを測る円形のビットである。埋土から瓦器椀(第38図148・149)が出土した。



第30図 M地区 中世墓 S T 10015実測図



第31図 M地区 中世墓ST10021実測図

ピットSP10066(第19・29図) M地区下層、掘立柱建物SB10001柱列内中央(q2)で検出した南北0.65m、東西0.64m、深さ0.08mを測る不定形のピットである。埋土から青白磁小壺の蓋(第38図159)が出土した。

中世墓ST10015(第30図) M地区上層(s4)で検出した、全長1.3m、幅0.85m、検出面からの深さ0.4mを測る石組みの墓である。四隅を巨礫から大礫で囲み、東側石は厚く積む。床面に礫は配置しない。石組みの中央に全長0.71m、幅0.38m、高さ0.26mの丸太を半分に刳り貫いた木製の容器(第41図190・191)を配する。容器の小口は木の節を利用して段が作られる。墓域内から遺物は出土せず、石組み検出面で瓦器片が出土した。ST10015から西に約1mの位置に中世墓ST10021が位置し、ST10015も中世墓の可能性が高い。

中世墓ST10021(第31図) M地区(s5)で検出した墓域である。全長3.9m、幅1.87m、検出面からの深さ0.16~0.20mを測る隅丸方形の墓域である。墓域南側は近世以降の暗渠に壊される。墓域内には巨礫や大礫が配され、墓域内側を囲むように配された巨礫は墓域底部に据えられ、それ以外の大礫は墓域埋土のにぶい黄褐色極細粒砂層から出土する。巨礫の内外面で埋土が異なることから、棺に納められていた可能性が高い。墓域北西側から12世紀後半と考えられる白磁碗、土師器皿、墓域北東側から青白磁小壺、青磁皿、土師器皿が出土した(第37図139~144)。

(首 博 諭・松井 忍)

(2)中世出土遺物

①土器

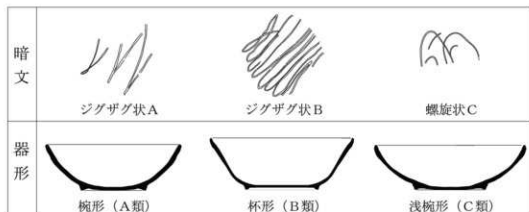
今回出土した土器の中では瓦器碗が最も多く、その他には土師器・瓦質土器・東播系須恵器・輸入陶磁器・国産陶磁器などがある。今回、数量が多かった瓦器・瓦質土器などについては、残念ながらすべてを図化及び数量確認するには及ばなかった。しかしながら、陶磁器類に関しては、図化したもの以外も含めたすべての器種・数量を確認している(付表2)。そこで、まずは陶磁器類から見られる傾向を確認しておきたい。

輸入陶磁器は全195点で、国産陶磁器に比べて多い。種類別の傾向では、白磁が青磁より多く、

付表2 陶磁器数量表

器種		輸入																		合計									
		白磁									青磁								白磁 or 青 白磁		陶器 黄釉 盤								
		碗					小碗	皿	瓶 or 壺	水注	碗				小碗	杯	皿	小壺				合子	小皿						
型式	II	IV	V	VI	II or IV or V	不明	不明	IX	不明	不明	II or III	I	II	III	不明	III	III	I	不明	不明	不明	不明							
出土 地	7 次	1	0	7	0	3	3	1	18	2	0	0	8	1	3	20	2	3	2	1	4	0	0	1	1	0	1	2	84
10 次	6	20	6	2	11	10	0	1	1	1	1	3	3	15	5	1	7	0	1	2	2	2	4	1	3	3	0	111	
合計	7	20	13	2	14	13	1	19	3	1	1	11	4	18	25	3	10	2	2	6	2	2	5	2	3	4	2	195	

器種		国産										合計	総 合計		
		焼締陶器			施釉陶器										
		常滑 系	丹波	不明	古瀬戸										
型式	甕 or 壺	甕	甕	壺	瓶	碗	壺	瓶 or 壺	鉢	皿	不明				
出土 地	7 次	1	1	0	0	0	1	2	0	0	0	0	4	9	93
10 次	1	0	1	12	1	0	5	1	1	1	2	1	26	137	
合計	2	1	1	12	1	1	7	1	1	1	2	5	35	230	



第32図 大銅遺跡出土瓦器碗の分類

青白磁や陶器がわずかに出土する。白磁については、第7次調査では碗V類、皿IX類が多いことに対し、第10次調査ではIV類をはじめ碗類が多い傾向である。国産のものでは、常滑系、丹波、古瀬戸、肥前系が出土し、器形がわかるものでは碗が多い。また、合子や小壺の出土も多い。器種の組成では、供膳具である碗・皿類が全体の76%と大半を占める。時期としては、11世紀後半～14世紀後半のものが出土しているが、12世紀後半～13世紀前半のものが特に集中している。

なお、今回は、17世紀以降の陶磁器類は除外した。

今回最も出土の多かったのは瓦器碗である。中でも大銅遺跡で出土する瓦器碗は、器形などの特徴から丹波型瓦器碗と呼ばれ、大きく3つの型が認められる(第32図)。

A類：丸みのある体部をもち、碗形を呈するもの

B類：高台際から口縁部までが直線的に立ち上がり側面観が台形を呈する、杯形のもの

C類：浅碗状を呈するもの

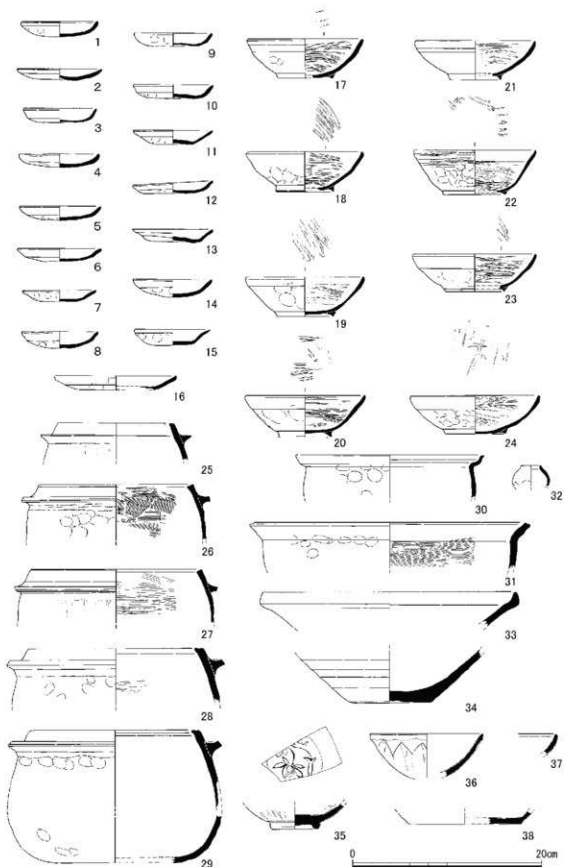
B類のうち、大銅遺跡第2・3次の報告の際には、13世紀後半以降の特徴として「内面見込み部分に顕著なユビ圧痕を残す」ことが指摘されていたが、今回の調査で出土した瓦器碗には、ほとんど認められなかった。また、内面の暗文には、やや角がシャープなジグザグ状A、丸みのあるジグザグ状B、螺旋状のCがある(第32図)。

土師器の編年については平尾正幸の「土師器再考」^(註13)を、其他瓦質土器・東播須志器などについては、中世土器研究会編1996^(註14)、及び日本中世土器研究会編2022を、輸入陶磁器類については宮崎亮一・山本信夫2000、九州近世陶磁学会2010^(註15)を参考にした。

以下、それぞれの遺構ごとに、報告する。

溝S D7036(第33図1～38) 1～16は、土師器皿である。いずれも皿Nの系列で、6Bから7C段階のものともみられる。口縁端部をヨコナデし、底部にはユビオサエの痕跡を残す。口縁端部は薄く引き上げられるものが多い。4の口縁端部には黒斑が残る。他の土師器皿と比べて器壁がやや厚く、立ち上がりが緩やかである。

17～24は瓦器碗である。側面観が碗状のA類(17・18・20・21・23)が多く、杯状のB類(19・22)、浅碗状のC類(24)もある。外面体部にユビオサエが認められ、内面には團練ミガキ、見込



第33図 溝S D 7036出土遺物

みにはやや丸みのあるジグザグ状暗文(B)が認められる。底部には、断面三角形の高台が貼り付けられる。22の口縁部外面にはヨコナデ後のミガキ痕跡が残る。

25～29は瓦質土器の羽釜である。口径が12.2cm程度のもの(25)と16～18cmのもの(26～29)がある。体部外面には、27を除くすべてにおいてユビオサエが認められ、27には縦方向のハケをナデ消した痕跡が残る。内面は26・28で細かいヨコハケ、27で粗いヨコハケが認められ、25・29はナデにより成形される。いずれも口縁部は内傾し、端部は断面が方形のもの(25～27)と、端部を内側に引き出し内傾するもの(28・29)がある。外面上方に貼り付けられた銹部はやや短いタイプである。26の内面に炭化物が、29の外面には、煤が付着している。

なお、29は上下での接点はないが、胎土等からみて同一個体として復元している。

30・31は瓦質土器の鍋である。30は口縁部が断面L字状に立ち上がる。31の内面は細かいヨコハケ、外面にはユビオサエが確認できる。32は瓦質の小壺である。器壁は2～3mmと薄い。

33・34は東播系須恵器の鉢である。33の口縁端部は内側上方に突出し、端面は丸みを帯びる。体部の器壁は6.5mmと薄く、Ⅲ-2類(13世紀前半～中葉)のものとみられる。

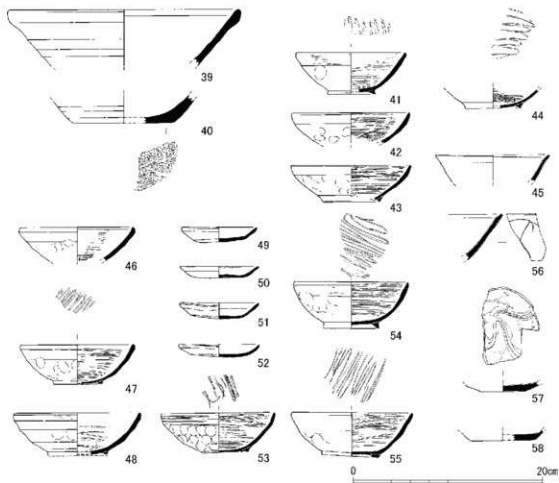
35は青磁碗で、外面に鑄蓮弁文、内面の見込みには印刻の草花文がある。龍泉窯系で、青磁碗Ⅱ-c類である。13世紀頃のものともみられる。36は青磁碗で、外面に鑄蓮弁文をもつ。内面は無文である。龍泉窯系で、青磁碗Ⅱ類である。13世紀頃のものともみられる。37は青磁の小碗である。口縁部内面端部の軸が割ぎ取られ、口禿となっていることから、蓋物が存在した可能性がある。龍泉窯の青磁碗Ⅲ-1a・b類とみられ、13世紀中頃から14世紀初め頃のものともみられる。38は白磁の皿である。白磁ⅨX-2類で、13世紀後半から14世紀前半のものともみられる。

溝SD7037(第34図39・40) 39・40は東播系須恵器の鉢である。口縁部の面が器壁に対して外傾し、端面は丸みを帯びる。体部の器壁は6mm前後と薄く、Ⅲ-2類(13世紀前半～中葉)のものとみられる。40の底部には、糸切り痕が認められる。

溝SD7038(第34図41～45) 41～44は瓦器碗である。41は、重ね焼きのためか半分燻されず素地のまま残る。41・43の側面観は碗状のA類とみられる。外面は、41の口縁部のみわずかにミガキが残るが、そのほかはヨコナデのみで、体部にはユビオサエが顕著に残る。内面は圏線ミガキ後、丸みのあるジグザグ状Bの暗文が施される。41～43は、口縁部外面に粘土帯を貼り付けた痕跡が認められ、口縁部より1cm下付近の器壁が肥厚する。44の外面には鉄銹様の付着物があり、外面の観察はできなかったが、内面には、ジグザグ状Bの暗文が認められる。

45は白磁の皿である。口縁端部が外反してやや開く。端部は口禿になっており、白磁ⅨX-1c類と考えられる。13世紀後半から14世紀前半のものともみられる。

溝SD7042(第34図46～48) 46～48は瓦器碗である。いずれも、口縁部の粘土帯の痕跡が残る、口縁部付近の器壁が厚い。断面観は碗状のA類である。外面は体部のユビオサエが顕著に残る。いずれも内面には圏線ミガキが観察されるが、47では途切れる部分がある。また、47では見込みにジグザグ状Bの暗文が認められる。46は、炭素の吸着が不十分な部分もあり、重ね焼きの痕跡とみられる。



第34図 溝S D7037・7038・7042・7056出土遺物

溝S D7056(第34図49～58) 49～52は土師器皿である。いずれも皿Nで、7A段階とみられる。口縁を強めのヨコナデによって仕上げ、底部にはユビオサエが残る。50・52は浅く、49・51はやや深めの作りとなっている。51の口縁端部には粘土接合痕が、52の底部外面には板状圧痕が残る。

53～55は瓦器碗である。側面観はいずれも碗状のA類で、見込みの暗文はすべてジグザグ状Bである。いずれも体部に粘土紐の輪積み痕と口縁部に粘土帯の痕跡が認められる。高台は断面三角形が多い中で、55は断面方形のものを貼り付けるが、所々ユビで押さえた痕が残る粗雑なものである。54には、炭素吸着が不十分な部分がある。

56は青磁碗で、外面に鎬連弁文をもつ。内面は無文である。龍泉窯系で、青磁碗Ⅱ類で、13世紀頃のものともみられる。57は青磁皿で、内面見込にヘラ描き文と櫛描きのジグザグ状文がある。外面は、施軸後に底部の軸を掻き取る。同安窯系で、青磁皿Ⅰ-2b類である。12世紀後半期頃のものともみられる。58は白磁皿の底部である。白磁皿Ⅲ類とみられ、13世紀後半から14世紀前半のものである。

溝S D10002(第35図59) 59は瓦質の羽釜である。口縁部下に鈿の貼り付け痕が残る。口縁端部は摩滅が著しいが、ヨコナデが認められる。

溝SD10007(第35図60・61) 60は白磁皿で、無文である。体部は丸味をもってなだらかに立ち上がる。内面の体部中位に沈線状の段をもつ。外面体部下位は施釉しない。高台径はやや小さい。焼成不良によるものか、釉の剥離がみられる。白磁皿VI-1b類で、11世紀後半から12世紀前半頃のものともみられる。61は土師器の皿Nである。6A段階のものともみられる。口縁端部ヨコナデし、薄く引き上げられ断面がやや丸みをおびた三角形を呈する。外面底部にユビオサエ痕跡が残る。

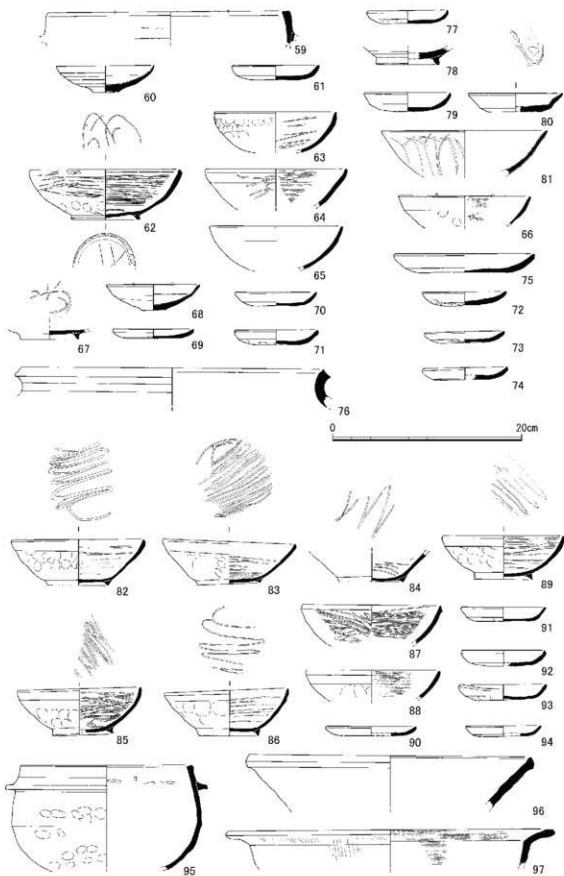
溝SD10008(第35図62~76) 62~67は瓦器椀である。62~66は椀状のA類で口縁端部はヨコナデし、肥厚する口縁端部をもつ。内面に細かい圏線ミガキをもつ62は、口縁端部にわずかに沈線もち、口縁部外面にミガキ、見込みには省略気味の螺旋状暗文Cが認められる。高台端部に板状の上に置いたと考えられる木目がみられる。63は外面に細かいユビオサエ痕跡が残る。65は摩滅が著しい。焼成は軟質で内外面とも黒色ではなく浅黄橙色を呈するが、内面に灰白色を帯びる部分がある点、口縁端部が肥厚する特徴から瓦器椀と判断する。68は白磁皿で、無文である。体部は丸味をもってなだらかに立ち上がる。内面の体部中位に沈線状の段をもつ。外面体部下は施釉しない。白磁皿VI-1b類で、11世紀後半から12世紀前半頃のものともみられる。69~75は土師器の皿である。内外面はナデで成形し、口縁端部は上方を向き断面が三角形を呈する。70~73は底部にユビオサエ痕が残る。76は東播系須恵器の甕である。

溝SD10012(第35図77~81) 77は土師器の皿Nで、6B段階のものともみられる。口縁端部断面が三角形を呈し、底部外面にユビオサエ痕が残る。78は灰軸陶器の底部である。79は瓦器皿である。口縁部は強いヨコナデで薄く引き上げ、断面は三角形を呈する。80は青磁皿で、内面見込みにヘラ描き文と櫛描きのジグザグ状文がある。外面は、施釉後に底部の釉を掻き取る。同安窯系で、青磁皿I-2b類と考えられる。12世紀後半期頃のものともみられる。81は青磁椀で、外面に鎬蓮弁文をもつ。内面は無文である。龍泉窯系で、青磁椀II-b類と考えられる。13世紀頃のものともみられる。

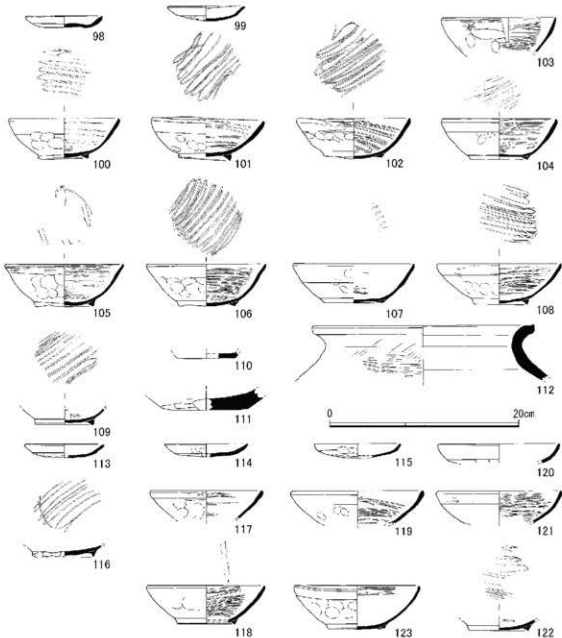
区画溝SD10020(第35図82~97) 82~89は瓦器椀である。82~84は杯状のB類である。口縁端部は肥厚し、内面に粗い圏線ミガキと見込みにジグザグ状暗文A及びBが認められる。底部には断面三角形の高台が張り付けられる。82・83は外面にユビオサエ痕を残す。85~89は椀状のA類である。内面に細かい圏線ミガキをもつものが多く、断面三角形の高台を貼り付ける。87は外面に単位が不明瞭な粗いミガキが認められる。88は口縁部に強いヨコナデを施しやや凹みをもつ。

90~92・94は土師器の皿Nで、6B段階のものともみられる。口縁部を強くヨコナデし、断面が三角形を呈する。93は瓦器皿である。土師器皿よりやや厚い体部で、口縁部はヨコナデで断面が三角形を呈する。

95は瓦質羽釜である。口縁部内面に粘土紐痕がみられる。96は東播系須恵器の鉢である。口縁端部が器壁に対し外傾し、口縁端部下側がやや肥厚する。97は土師質の鍋である。外面に煤が付着する。



第35図 溝S D10002・10007・10008・10012・10020出土遺物



第36図 集石土坑 S X7039、掘立柱建物 S B7099・7106、土器溜まり S X7035出土遺物

集石土坑 S X7039(第36図98～112) 98・99は土師器皿である。いずれも皿Nの系列で、7A段階のものとみられる。98は口縁部がやや厚手で、底部は外面からのユビオサエによって薄くなる。99は全体的に薄手で浅い。胎土に雲母を含む。

100～109は瓦器碗である。側面観は、碗形のA類(100～102・105・107)、杯形のB類(104・106)、浅碗形のC類(108)がある。いずれも、内面には圏線ミガキ、見込みにはジグザグ状Bの暗文が施される。体部外面にはすべてユビオサエが認められ、口縁部のみに粘土帯の痕が残るもの(100～102・104～107)、体部粘土板(左巻き)に口縁部粘土帯が残るもの(108)がある。また、103の体部外面には、焼成前に描いたとみられる線刻が認められる。

110は白磁皿の底部である。白磁皿X類とみられ、13世紀後半から14世紀前半のものである。

111は東播系須恵器の底部片である。底部内面の中央部は円滑で、外面は板に載せた際の痕跡が認められる。112は瓦質の甕である。頸部から体部外面にタタキを施し、頸部はタタキをナデ消す。口縁部は外反させる。焼成は軟質である。図化はしていないが、土坑S K7043でも同様の甕が出土している。

掘立柱建物 S B 7099 (第36図113~119) 113~115は土師器皿である。いずれも皿Nで、6 B~7 A段階とみられる。いずれも浅い作りで、115は端部をやや上方に引き上げる。

116~119は瓦器椀である。全容がわかるものは少ないが、118は側面観が杯形のB類である。116の底部内面には、暗文の下に一次調整であるハケの痕跡が残る。117は、内外面ともに器表面の炭素吸着が少なく、一部土師質のような焼き上がりになっている部分がある。また、口縁部外面には、わずかにミガキの痕跡が残る。

掘立柱建物 S B 7106 (第36図120~122) 120は土師器皿である。口縁部のヨコナデと底部のエビオサエの境界にわずかな段が認められ、皿N系の6 B段階とみられる。S P 7064から出土した。121・122はS P 7065から出土した瓦器椀である。いずれも胎土等が似ており同一個体の可能性もあるが、明確な接点がないため、今回は別個体として報告している。121の口縁部外面には、わずかにミガキの痕跡が認められる。

土器溜まり S X 7035 (第36図123) 123は瓦器椀である。側面観は、椀形のA類である。全体的に摩滅が著しいが、口縁部内面にわずかに圏線ミガキの痕跡が認められる。口縁部及び体部外面には部分的に粘土帯の痕跡が残る。

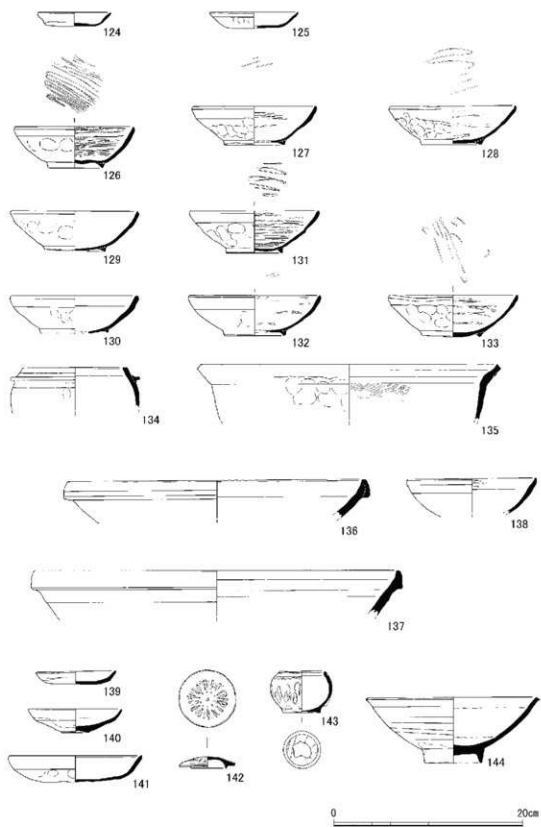
土坑 S K 7043 (第37図124~137) 124・125は土師器皿である。125は摩滅し、器壁が薄くなっている。124はやや強めのヨコナデによって底部からの立ち上がりが屈曲し、底部は粗雑なエビオサエが残る。どちらもやや深めであるが、皿Nの7 A段階頃のものともみられる。

126~133は瓦器椀である。いずれも側面観は、椀形のA類である。口縁部のみに粘土帯の痕跡が残るもの(126・129・130・133)と、体部輪積み痕と口縁部粘土帯の痕跡が残るもの(128)がある。見込みの暗文は、131がジグザグ状A、126・128・133はジグザグ状Bである。128の体部外面には、一次調整のハケとみられる痕跡がエビオサエの下でわずかに認められる。131は、炭素の吸着が不十分な部分があり、重ね焼きの痕跡とみられる。

134は瓦質土器羽釜である。小片のためおおよそではあるが、復元口径10.9cmと小振りである。135は瓦質土器鍋である。外面には、粘土接合痕及びエビオサエが、内面には細かいハケメが認められる。136・137は東播系須恵器の鉢である。口縁部端部のナデがやや弱くなり、稜線が丸みを帯びる特徴から、Ⅲ-2類とみられ、13世紀前半から中葉のものと考えられる。

土坑 S K 7103 (第37図138) 138は瓦器椀である。口縁部外面及び内面にわずかなミガキが認められる。口縁部はやや内湾する。

中世墓 S T 10021 (第37図139~144) 139・141は土師器の皿Nで、6 B段階のものともみられる。139の内面及び141の外面には、土中成分由来と考えられる付着物が認められる。139は外面に底部から口縁部にかけて切り込みの跡がみられることから、円板に切り込みを入れて成形したと考



第37図 土坑 S K 7043・7103、中世墓 S T 10021出土遺物

えられる。口縁端部はヨコナデにより薄く引き上げる。141は口径13.8cmを測り、口縁端部はヨコナデにより薄く引き上げ、断面は三角形を呈する。外面にユビオサエ痕跡が認められる。12世紀後半頃のものともみられる。140は白磁皿で、無文である。なだらかに立ち上がる体部は中位で屈曲して上方に立ち上がる。内面の屈曲部には沈線状の段を有する。底部はわずかな萁筒底状に削られる。焼成が不十分で、白色を呈さない。白磁皿Ⅵ-1 a類で、11世紀後半から12世紀前半頃のものともみられる。142・143は青白磁の蓋及び小壺で、いずれも型成型である。蓋の上面には花文を配し、下面には返り部を貼り付け、天井部に施軸する。壺の側面には蓮弁文が巡る。口縁部は施軸後にケズリ整形する。外面高台部は無軸である。144は白磁碗で、口縁端部に面をもつ。外面のケズリは口縁部付近に及ぶ。高台は高く細めで、露胎である。内面見込みに圈線状の段をもつ。白磁碗Ⅴ-4 a類で、11世紀後半から12世紀前半頃のものともみられる。

ピット(第38図145~159) 145~159はM地区のピットから出土した。145・154はS P 10052、146・153・156はS P 10047、147・158はS P 10065、148・149はS P 10058、150・151はS P 10036、152・157はS P 10035、155はS P 10080、159はS P 10066から出土した。

145~150は瓦器碗である。145~149は碗状のA類で口縁端部が肥厚する。外面はナデ調整し、ユビオサエ痕跡、内面はやや粗い圈線ミガキが認められる。145・146は見込み部にジグザグ状暗文Bが認められる。145は口縁部が強いヨコナデのため外面がややへこみ。146は細かい圈線ミガキが認められる。147は口縁部外面が強いヨコナデのためややへこみ、口縁端部もつまみ上げてヨコナデするため面をもつ。内面に粗い圈線ミガキが認められる。150は杯状のB類である。外面口縁部まで不定方向のミガキ、内面にやや粗い圈線ミガキが認められる。

151~157は土師器の皿Ⅲで、6A~6B段階のものともみられる。底部にユビオサエ痕跡が残り、口縁部をヨコナデする。口縁端部を引き上げ、断面は三角形を呈す。12世紀後半~13世紀前半頃のものともみられる。158は東播系須恵器の鉢である。器壁が薄く口縁端部が器壁に対し外傾し、口縁端部下側が肥厚する。12世紀後半~13世紀前半頃のものともみられる。

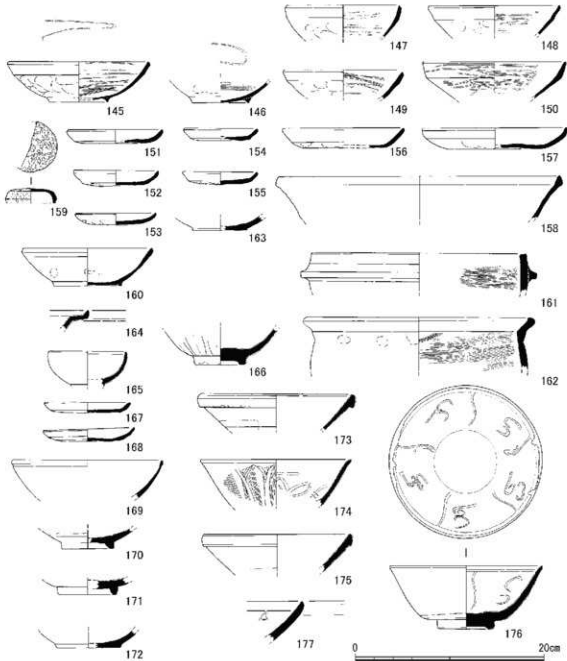
159は青白磁合子蓋で、型成型である。上面には小花文を輪状に配する。側面は、施軸後に下半部を削る。内面は、天井部に施軸する。

第7次調査包含層(第38図160~166) 160は瓦器碗である。内面が剝離しており、正確な厚さではないものの、口縁部直下が肥厚していることから、口縁部に粘土紐を足して成形したとみられる。3トレンチ暗渠(14)から出土した。

161は瓦質土器の羽釜である。3・4 o・p区から出土した。162は瓦質土器の鍋である。外面をユビオサエ、内面は細かいハケメによって成形されている。外面には、煤が付着している。接点はないが、底部の破片もある。4トレンチ精査中に出土した。

163は山茶碗の底部である。内外面を回転ナデで成形し、底部は回転系切りの痕跡が残る。I地区14区から出土した。

164は青磁杯で、口縁部は折れ縁状になり、端部は上方につまみ上げる。体部内面には、花弁状の縦方向の凹面ケズリが認められる。龍泉窯系の青磁杯Ⅲ-3 b類である。13世紀後半頃のものともみられる。



第38図 ビット及び第7・10次包含層出土遺物

ものとみられる。NR7100の上層から出土した。165は青磁小碗である。口縁端部内面が口壳になっていることから、蓋物が存在した可能性がある。青磁小碗Ⅱ類とみられ、13世紀中頃から14世紀初め頃のものと思われる。I地区S D7036で出土している第33図37と同類か。166は青磁碗で、外面に錦蓮弁文をもつ。内面は見込みも含めて無文である。龍泉窯系で、青磁碗Ⅱ-b類と考えられ、13世紀頃のものともみられる。k4区から出土した。

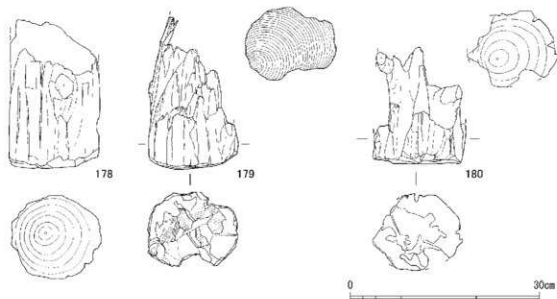
第10次調査包含層(第38図167～177) 167～174は中世上層面西側から出土したものである。167・168は土師器の皿Nで、6B段階のものともみられる。168は底部に切り込みの跡がみられることから、円板に切り込みを入れて成形したと考えられる。

169は白磁碗で、口縁端部は細めの玉縁状である。体部はやや丸味をもつ。白磁碗Ⅱ類で、11世紀後半から12世紀前半頃のものともみられる。170は白磁碗の高台である。高台高は低く、高台幅も広めである。白磁碗Ⅳ-2類か。11世紀後半から12世紀前半頃のものともみられる。171は白磁碗の高台である。高台高は低めであり、白磁碗Ⅳ-2類と考えられる。11世紀後半から12世紀前半頃のものともみられる。173・175は白磁の碗で、口縁部は玉縁状に肥厚する。白磁碗Ⅳ類で11世紀後半から12世紀前半のものともみられる。175は中世下層面(r1)で出土した。174は青磁碗で、外面に蓮弁文をもつ。蓮弁文は、縦方向の櫛目文を施してから片彫で施文される。内面には、片彫の草花文を施す。櫛目文の痕跡も見られる。龍泉窯系で、青磁碗Ⅰ-6類である。12世紀後半頃のものともみられる。176は青磁碗で、外面は無文である。内面は、緩い「S」字状の縦方向の2条の刻線で5分割され、それぞれの区画の中央に飛雲文を配する。見込みにも花文状の文様があるとみられるが、明確ではない。内面口縁端部には2条の圏線が巡る。龍泉窯系である。口縁端部は輪花状ではなく、青磁碗Ⅰ-4a類である。12世紀後半頃のものともみられる。3トレンチ及び土石流内から出土した。172は灰釉陶器の底部である。底部に回転糸切り痕が認められる。177は丹波焼鉢の口縁部である。口縁端部は尖り気味に丸く終わる。胎土では細かい白色砂粒を含む。内面口縁端部にヘラ彫の「△」形の窯印をもつ。中世末~近世初頭頃にかけてのものともみられる。4トレンチ造成土から出土した。

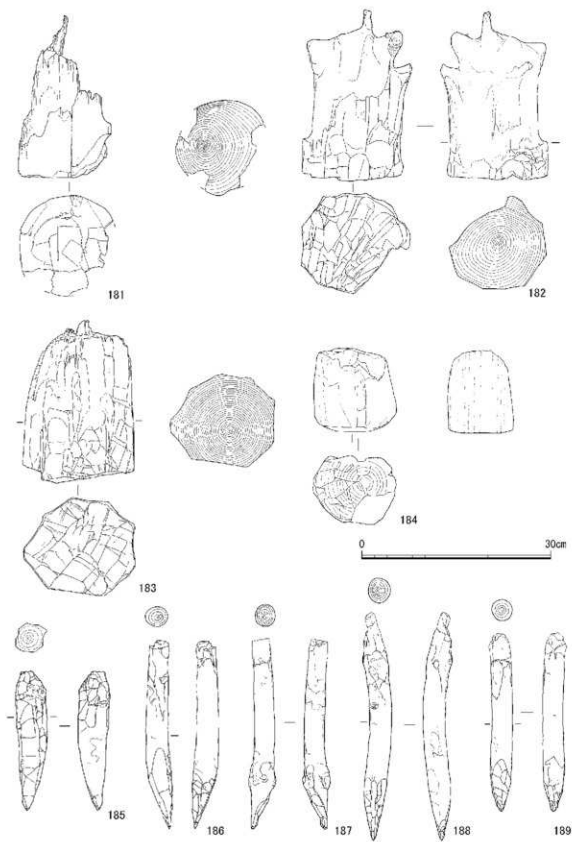
②木製品・木材

掘立柱建物S B 7099 (第39図178~180) 178~180はI地区で検出した掘立柱建物S B 7099を構成する柱穴内で検出した柱根で、いずれも芯持材である。

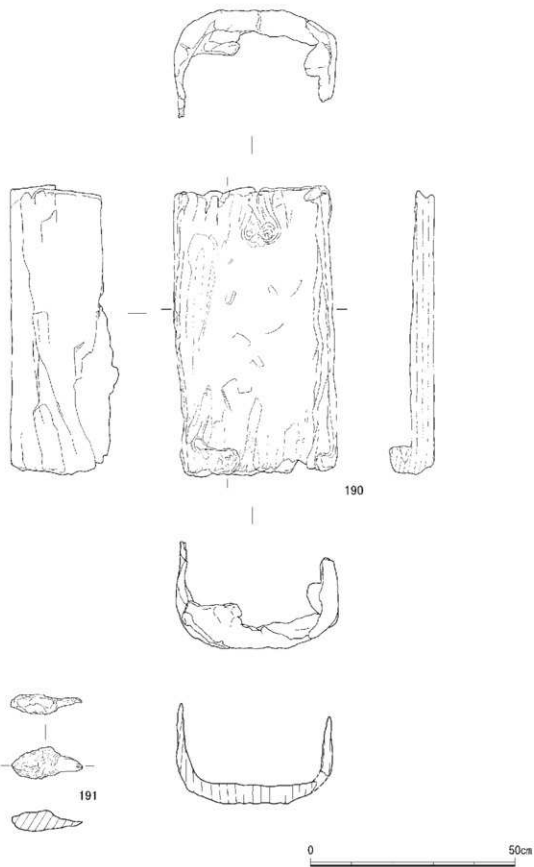
178はS P 7095内で検出したもので、上下とも腐食している。自然科学分析(第7章参照)の結果、12世紀後半~13世紀前半頃のものと考えられる。179はS P 7098内で検出したもので、据えていた部分には、わずかにのこぎり等で切った加工痕が残る。自然科学分析の結果、13世紀前半のもの



第39図 掘立柱建物S B 7099出土柱根



第40図 掘立柱建物S B10001出土柱根、欄列S A10085出土木杭



第41図 中世墓S T10015出土木製容器

のと考えられる。180はS P 7126で検出した。かなり腐食がすすむが、一部にのこりのような工具痕が残る。自然科学分析の結果、13世紀初頭～前半のものと考えられる。

掘立柱建物 S B 10001 (第40図181～184) M地区で検出した掘立柱建物 S B 10001からは柱根9点が出土し、そのうち残存状態が良好な3点を報告する。181はS P 10073から出土した柱根である。直径16.2cmの芯持材で長さ26.0cmが残存する。下部は腐食が少なく、加工面が残存する。丸太材を切断し、幅3cm程の刃部をもつ工具で平面になるように加工した痕跡がみられる。182はS P 10050から出土した。直径16.0cmの芯持材で、長さ26.6cmが残存する。下部は腐食が少なく、加工面が残存する。側面にも加工痕が残存することから丸太材を切断し断面が八角形に、底面は幅1～2.4cmほどの刃部をもつ工具で平面になるように加工したとみられる。183はS P 10076から出土した柱根である。長軸17.8cm、短軸15.0cmの芯持材で長さ26.0cmが残存する。下部は腐食が少なく、加工面が残存する。側面にも加工痕が残存することから、幅3.5cm程度の刃部をもつ工具で断面を八角形に、底面が平面になるように加工したとみられる。底面は柱の垂直方向に対してやや角度をつけて切断する。184はS P 10056から出土した。

柵列 S A 10085 (第40図185～189) M地区で検出した柵列 S A 10085から5点の杭が出土した。北から順に185・186・187・188・189を検出した。杭は加工の方法から2つに分類できる。分類基準は『京都府遺跡調査報告集』第185集に準じる。⁽³⁹⁾

i 類：先端のみを加工するもの

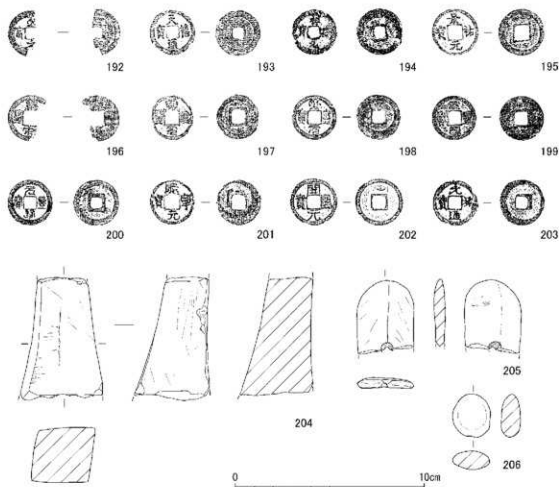
ii 類：高い位置から、面をもつように加工するもの

iii 類：一方向のみから深い抉りをもつように加工するもの(先端のみ全面加工するものもある)
このうち、柵列 S A 10085からは ii 類と iii 類が出土した。185は ii 類である。片面が高い位置と、加工面から3分の2ほどの位置から加工する。186・187・188・189は iii 類である。187・188は先端のみ全面加工する。

中世墓 S X 10015 (第41図190・191) 190はM地区で検出した木製の容器である。全長71cm、幅38.8cm、高さ26.7cmを測る丸太材を半裁し、削り貫いたものである。小口側は節を利用して縁をつくる。腐食が激しく、加工痕は観察できない。樹種同定の結果、マキ科マキ属イヌマキである。花粉分析(第7章自然科学分析参照)の結果、調査地ではマキ科マキ属の花粉の出土がないため、周辺の樹木を加工した可能性は低い。

③ 銭貨(第42図192～203)

192は、至道元寶とみられる。「道」の部分は欠損する。書体は行書で、995年初鑄の北宋銭である。I地区(o6)精査中に出土しており、S D 7036のものであった可能性がある。193は、天禧通寶である。書体は真書で、1017年初鑄の北宋銭である。I地区(m6) S D 7036から出土した。194は、祥符元寶である。書体は真書で、1009年初鑄の北宋銭である。I地区 S D 7042から出土した。195は、景祐元寶である。書体は真書で、1034年初鑄の北宋銭である。4トレンチ精査中に出土した。196は、皇宗通寶とみられる。「通」の部分は欠損する。書体は真書で、1038年初鑄の北宋銭である。I地区(n7)西壁から出土した。197は、篆書で「元寶」のみ判読できる。I



第42図 中世面出土銭貨・石製品

地区包含層から出土した。198は、熙寧元寶である。書体は篆書で、1068年初鑄の北宋銭である。I地区包含層から出土した。199は、元豊通寶である。書体は篆書とみられ、1078年初鑄の北宋銭である。1トレンチ包含層から出土した。200は、元豊通寶である。書体は篆書で、1078年初鑄の北宋銭である。4トレンチ精査中に出土した。201は、熙寧元寶である。書体は真書で、初鑄年は1068年である。背に錯范が認められる。202は、開元通寶である。書体は真書で、初鑄年は960年である。201・202は、S D10012から出土した。203は、元祐通寶である。書体は真書で、初鑄年は1086年の北宋銭である。背上面に月星が認められる。S D10008から出土した。時期としては、南唐から北宋にかけてのものが出土した。

④石製品(第43図204～206)

204は凝灰岩製の砥石である。上下は欠失しているが、残り4面に使用痕が残る。I地区(n6) S D7036周辺で出土した。205は有孔石製品である。両面から穿孔されているが、表面や端部の加工痕は、顕著ではない。製作途中に穿孔部分で割れたものとみられ、用途等を含め詳細は不明である。I地区(k5)精査中に出土した。206は礮石とみられる。平らで乳白色を呈し、材質は石英とみられる。I地区S B7099を構成する柱穴S P7044の最下層、礎石直上(図版第11(2))で出土した。

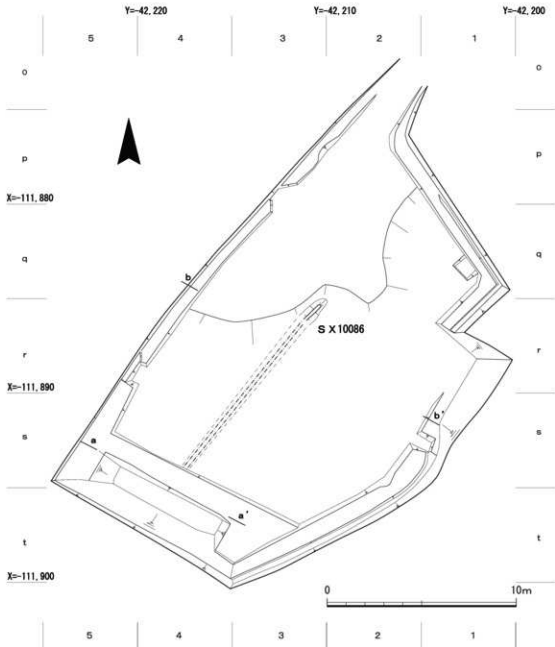
(著 博絵・引原茂治・松井忍)

2) 古代

M地区の中世遺構面より0.3m下層で、古代と考えられる畦状遺構、北に向かって高くなる自然地形を確認した。調査区南半では、古代と推定される層より下層で河川堆積が累重しており、基盤面は確認できなかった。自然科学分析の結果、飛鳥時代以前の年代が示されており、河道であった可能性がある。

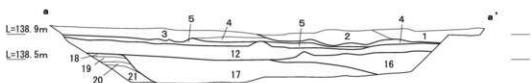
(1) 検出遺構

畦状遺構 S X 10086 (第43図) 畦状遺構は北から東に40°振り、南側断ち割りとは調査区中央断ち割りの断面観察で確認した。畦状遺構は検出長6.3m、幅0.35m、高さ0.1~0.15mを測る。調査



第43図 M地区遺構配置図(古代)

南壁



中央断ち割り



断面位置は第43図



- | | |
|--|--|
| <p>1. 灰色 (7.5Y 6/1) 中粒砂混じり細粒砂
(細礫から中礫を5%含む) < 洪水堆積 ></p> <p>2. 暗灰色 (2.5Y 5/2) 中～細粒砂
(細礫から中礫を5%含む) < 洪水堆積 ></p> <p>3. 灰黄褐色 (10YR 6/2) 中～細粒砂
(細礫を3%含む) < 洪水堆積 ></p> <p>4. 灰色 (10YR 6/2) 中～細粒砂</p> <p>5. 褐灰色 (5YR 6/1) 極細粒砂</p> <p>6. オリーブ黄色 (5Y 6/3) 極細粒砂 < 畦畔 ></p> <p>7. 灰オリーブ色 (7.5Y 6/2) 極細粒砂 < 畦畔 ></p> <p>8. 灰色 (7.5Y 6/1) 極細粒砂 < 畦畔 ></p> <p>9. オリーブ灰色 (5G 5/1) 細粒砂 < 畦畔 ></p> <p>10. 灰色 (5Y 6/1) 中～細粒砂 < 水田層 ></p> <p>11. 褐灰色 (5YR 6/1) 極細粒砂 < 水田層 ></p> | <p>12. オリーブ灰色 (5G 5/1) 細粒砂 < 水田層 ></p> <p>13. オリーブ黒色 (7.5Y 3/1) 中粒砂混じり極細粒砂 < 水田層 ></p> <p>14. 灰オリーブ色 (4/2) 中粒砂混じり極細粒砂 < 洪水堆積層 ></p> <p>15. オリーブ黒色 (5Y 3/1) 中～細粒砂 < 洪水堆積層 ></p> <p>16. にぶい黄褐色 (10YR 6/3) 中～細粒砂
(中礫を5%含む) < 土石流堆積 ></p> <p>17. 褐灰色 (10YR 6/1) 中～細粒砂
(中礫を3%含む) < 土石流堆積 ></p> <p>18. 黄灰色 (2.5Y 6/1) 中粒砂混じり極細粒砂 < 河川堆積 ></p> <p>19. にぶい黄褐色 (10YR 6/1) 細～極細粒砂 < 河川堆積 ></p> <p>20. 灰黄色 (2.5Y 6/2) シルト質極細粒砂 < 河川堆積 ></p> <p>21. 灰黄色 (7.5YR 6/2) シルト < 河川堆積 ></p> <p>22. オリーブ黒色 (10Y 3/1) シルト < 基盤面 ></p> |
|--|--|

第44図 M地区 古代土層断面図

区北側で検出した基盤層と考えられる締まりの良いオリーブ黒色シルト(第44図22層)前で止まり、南側は調査区外へとのびる。オリーブ灰色細粒砂(第44図12層)層から須恵器(第45図209)が出土した。畦状遺構を検出した12層の自然科学分析を行った結果、イネ科の珪酸体が多く検出され、イネ科の植物が繁茂する環境にあったと考えられる。炭素年代測定では、飛鳥時代から奈良時代の年代を示しており、出土した須恵器の時期と相違ない。以上のことから、12層上面は飛鳥時代から奈良時代に水田として利用されていた可能性が高い。

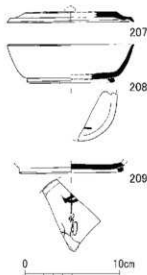
(2) 古代出土遺物

古代の遺物はL・M地区包含層とM地区水田層から出土した。

遺物の記載にあたっては、神野恵^(R20)2005、神野恵・森川実^(R2)2010を参考にした。

第45図207～209は須恵器である。207はL地区古墳時代の自然流路NR10030(g12)上から出土した杯Bの蓋である。平らな天井部の中心に宝珠つまみをもち、口縁部は屈曲し、かえりをもたない。8世紀後半頃と考えられる。

208・209は杯Bである。208はM地区北東端(r4)の包含層から出土した。底部のやや内側に貼り付け高台をもち、脚は外反する。口縁部は斜めにまっすぐのび、端部は丸くおさめる。底部に墨書が一部見られる。209はM地区水田層(r2)出土の杯Bの底部である。底部外側の屈曲部近くに貼り付け高台をもち、脚はやや外反する。底部に「中道」の墨書が見られる。



第45図 L・M地区古代出土遺物
(菅博経)

3) 古墳時代

(1) 検出遺構

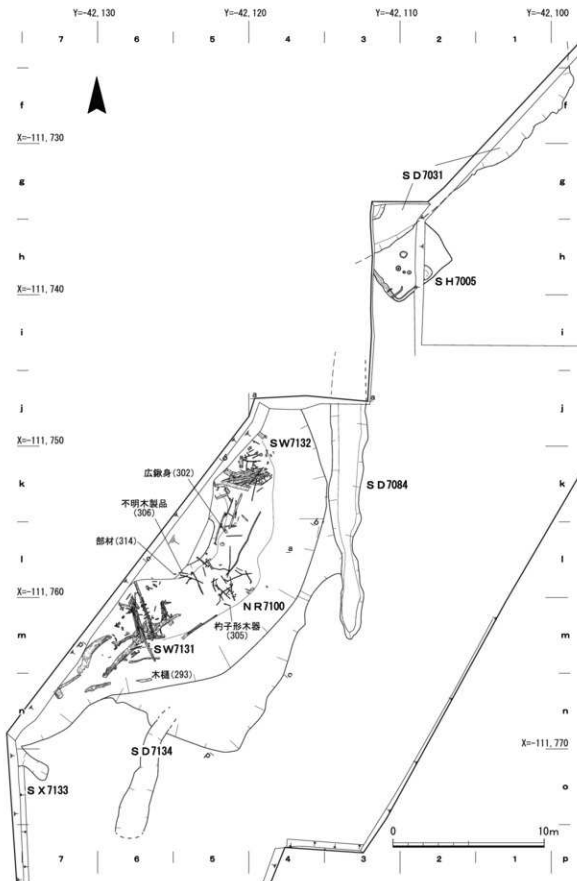
自然流路NR7100(第46～48図) I地区西半で検出した自然流路である。検出幅は最大で11.5mであり、西岸は検出できていないものの、幅15m以上に復元できる。深さは最も深い地点で2.1mを測る。

1～3層は灰褐色から褐色を呈する中世包含層であり、上層遺構のベース土となっている。調査区の南側よりも北側に厚く分布しており、下層のいびつな堆積を水平に均すための整地土と考えられる。4～11層は弱いラミナからなる砂質土で、洪水に伴う埋土と考える。部分的にブロック土の層(8層など)や礫層(7層)を含むことから、洪水堆積だけでなく、人為的な整地や地業も含まれるとみられるが、出土遺物がなく、明確な時期は不明である。なお、一部は後述のSD7084の埋土を含んでいることから、古墳時代後期よりは後出する。

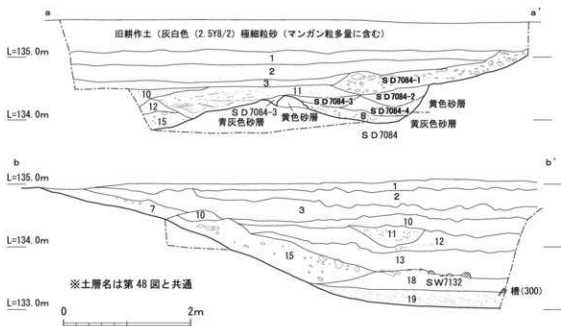
12・14層は灰色から暗灰色の砂質土で、弱いラミナが認められる。SW7131は14層掘削中に検出した。また、13層は中央アゼ、SW7131の北側付近のみ認められた層序で、SW7131による弱い流れを伴う堆積とみられる。12層と14層は色調や粒径は類似しているが、12層はブロック土や礫を含むことから、14層廃絶後の層序である。

15～17層は礫や遺物を多量に含み、極めて締まりが強い粘土である。流路の西肩部にのみ張り付くように検出しており、護岸的な性格を有する層であると判断した。出土遺物は古墳時代前期後半を中心とするが、1点初期須恵器とみられる破片(第56図210)を伴っており、古墳時代中期初頭の堆積と考えておく。

18層は有機質を多量に含む泥炭(ビート)層で、木製品・木材を多く含む。土層の観察ではラミナは認められず、流路内部は滞水状態に近かったと考えられる。調査区北端付近では水器溜まり



第46図 H・I地区遺構配置図(古墳時代)



第47図 I地区 自然流路NR7100実測図1

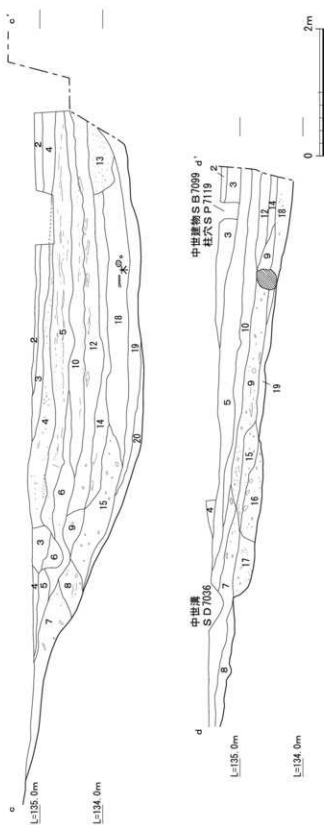
SW7132を検出しており、あるいはSW7132が水流を堰き止めた影響かもしれない。古墳時代前期の土器を伴う。19・20層は砂質土で、18層の泥炭層以前の堆積である。

井堰 SW7131 (第49図) NR7100で検出した井堰である。NR7100の18層(第48図)の黒色泥炭層が堆積したのちに構築されたものである。調査区外にのびるように構築材が検出されており、さらに西側へ展開するとみられるが、全長は不明である。約0.3mの間隔をあげ、上流側と下流側2か所に横方向の部材を縦杭で固定する。上流側のものをSW7131-1、下流側をSW7131-2とする。

SW7131-1と2を比較すると、SW7131-1の方が第59図の278・279など、より長大な部材を使用し、深い部分では板を3段に重ねるなど、堅牢な構造となっている。東端を流路東壁に接するように構築していることから、水を堰き止め、上流側に滞留させることを主たる目的としているとみられる。

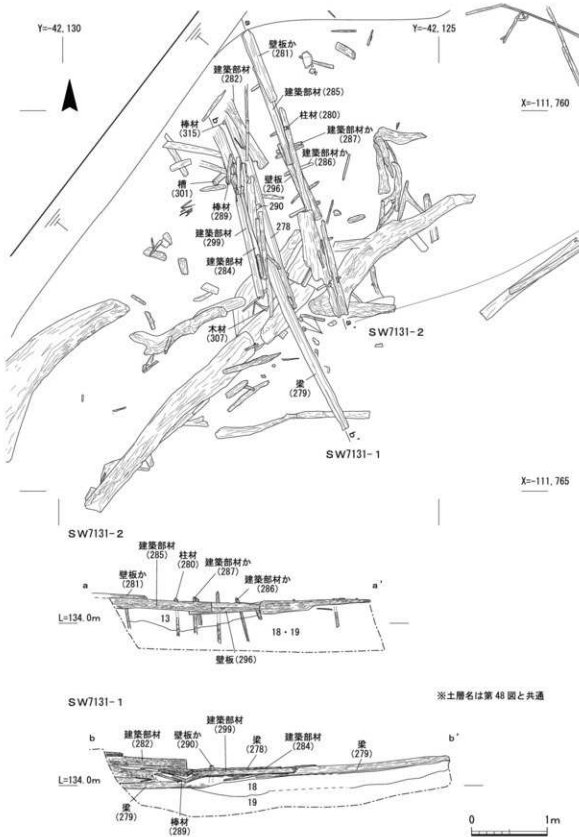
それに対して、SW7131-2は、縦杭の本数はSW7131-1よりも多いものの、横板は上下1段のみであり、下から水が通る構造となっている。SW7131-2の横板の下層では弱いラミナ堆積が認められたことから、わずかながら水流があったものと想定される。SW7131-2は上流の水を堰き止めるのではなく、過剰な水量を調整することが主たる目的と考えられる。

SW7131の上部からNR7100の検出面までは1m以上の比高があり、西側が未検出であることを考えても、SW7131がNR7100から別の水路への配水を目的としたものではないことは明らかである。したがって、一部を欠失している可能性も否めないものの、上流側のSW7131-1は流路の水を堰き止め、それを越流した水量がSW7131-2の下層を通るという構造であると判断した。両者が一体となり、流路の下流に流れる水量を一定に調整する機能をもっていたと推測される。

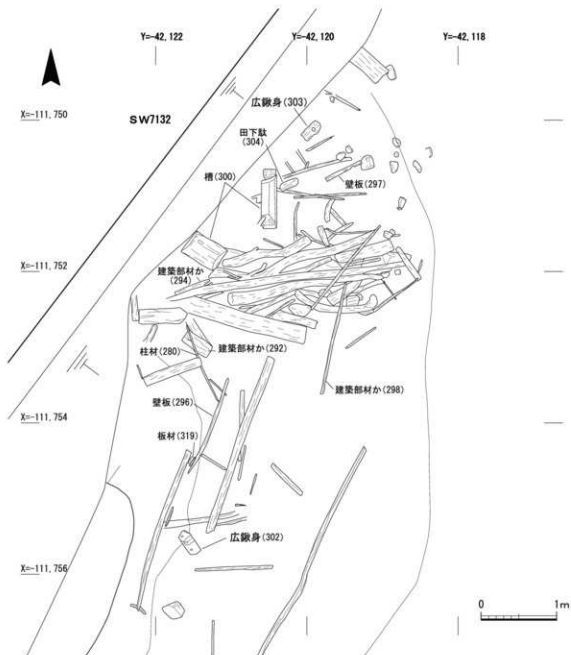


1. 灰褐色 (T.5YR 6/2) 極細粒砂 (マンガン粒・粗砂・中世遺物を含む)
2. 褐色色 (T.5YR 6/1) 極細粒砂 (マンガン粒・粗砂を含む)
3. 灰褐色 (T.5YR 4/2) 細～粗粒砂 (粗砂多い・有機質含む)
4. 褐色色 (10YR 6/1) 中粒砂・粗砂多く含む砂質土 (浮いた土)
5. 明黄褐色 (10YR 7/6) 細粒砂 (ラミナ・下部は黄褐色 (土5YR/1))
6. 黒色 (7.5Y 3/1) 粗粒砂 (内れた砂質土・ブロック多く含む)
7. 黒色 (N 1.5/1) シルト～極細粒砂質土 (マンガン粒含む・粗砂～小礫含む)
8. 黒色 (N 1.5/1) 粘土 (砂質土・ブロック含む)
9. 明灰色 (N 3/1) 内れた粘土・砂質土・ブロック多く含む
10. 灰色 (N 5/1) 極細～細粒砂 (弱いラミナ)
11. 灰色 (N 5/1) 粗粒砂～小礫・しまりのない粗砂礫層 (2・3アゼの層より北にしかない)
12. 灰色 (N 4/1) 粘土層脚～細粒砂含むブロック状に砂質土・粘土含む・礫多い
13. 明灰色 (N 3/1) 粘土・細粒砂多く含む (S.D7134埋土)
14. 明灰色 (N 3/1) 粘土・極細粒砂混じり粘砂質土 (遺物少量含む) (SW7131 構造に伴う)
15. 黒色 (N 2/1) 粘土・細～遺物を多量に含む (赤黒色顔料粘土・取り上げた遺物あり。陶質土器はこの層から)
16. 暗オリーブ灰色 (土5GY 4/1) 中～粗粒砂・礫・ブロック多量に含む
17. 黒色 (N 1.5/1) 粘土・粗粒砂～礫を多く含む
18. 黒褐色 (10YR 3/1) シルト～極細粒砂・弱いラミナ・炭灰層・木炭屑・土器を含む
19. 灰色 (N 5/1) 細砂・均質な砂質土。遺物少ない。
20. 黒褐色 (10YR 3/1) 礫層 (地山由来か)

第48図 1地区 自然流路N.R7100実測図2



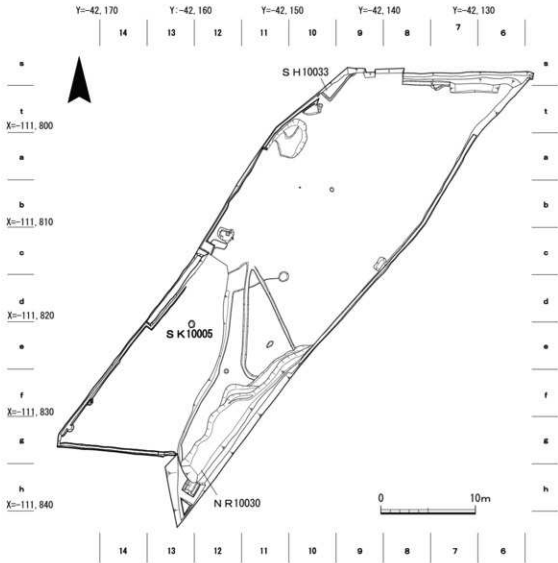
第49図 I地区 井堰SW7131実測図



第50図 I地区 木器溜まりSW7132実測図

木器溜まりSW7132(第50図) NR7100の18層で検出した木器溜まりである。調査区外に延びるように構成材が検出されており、さらに西側へ展開するとみられるが、全容は不明である。建築部材や完形に近い槽(第63図300)などを含む木器、木材がまとめて出土した。NR7100出土木器のほとんどが流路と並行となるように出土しているのに対し、SW7132を構成する木器・木材は、流路の向きと直行するように出土していることから、人為的に据え置かれた水場のような性格を想定したい。NR7100と同様、古墳時代前期後半の遺構である。

自然流路NR10030(第51図・52図) L地区南東端(e10~h13)で検出長19.4m、検出最大幅3.9m、深さ0.68~1.48mを測る自然流路の西肩部を検出した。開析谷は中世包舎層(1層)下から



第51図 L地区 遺構配置図(古墳時代)

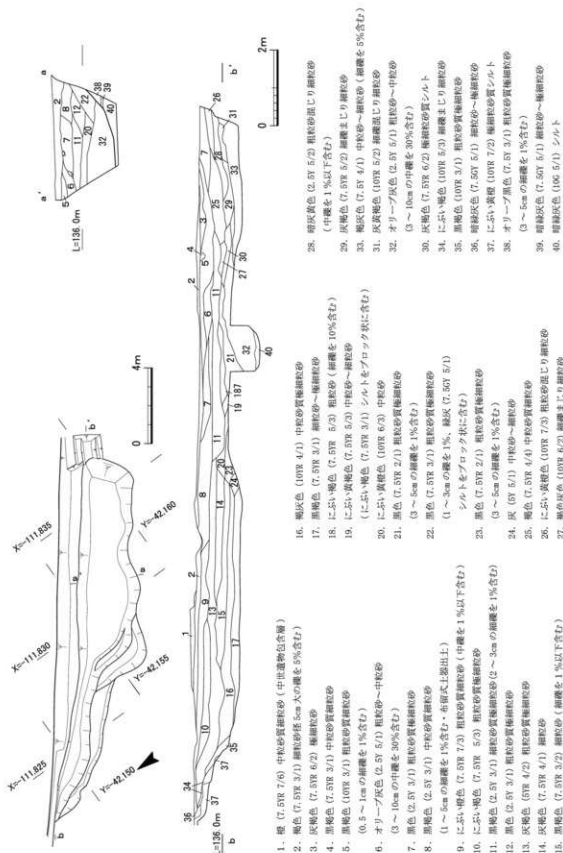
検出され、包含層下の2層から古墳時代後期の遺物(第58図275)が出土したことから、古墳時代中期にはほぼ埋没した状態であったと考えられる。

埋土は肩部から土が流入していると考えられ、22層にブロック状に含まれる緑灰色シルトは地山の崩落に由来するものと考えられる。自然科学分析の結果から、埋土に珪酸化石や花粉がほとんど残存しておらず、陸域の堆積物であることから、肩部から土砂が流入したことを示す。底部から遺物などの年代を特定し得る資料が出土しなかったため、形成については不明である。

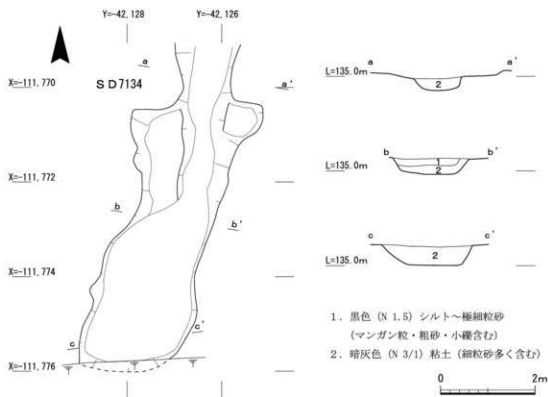
なお、掘削については安全確保のため、断ち割り(a-a')にて地山面を確認した。

溝S D7031(第46図) H地区西壁際で検出した溝である。大半は調査区外で全形は不明。断面形は緩い「U」字状を呈し、調査区際でさらに深く掘り込まれる。出土遺物は小片のみだが、S H7005の北東を掘り込むように検出されており、古墳時代前期以降の遺構である。

溝S D7084(第46図) N R7100の東岸を掘り込むように検出された南北方向の溝である。H



第52図 L地区 自然流路NR10030実測図

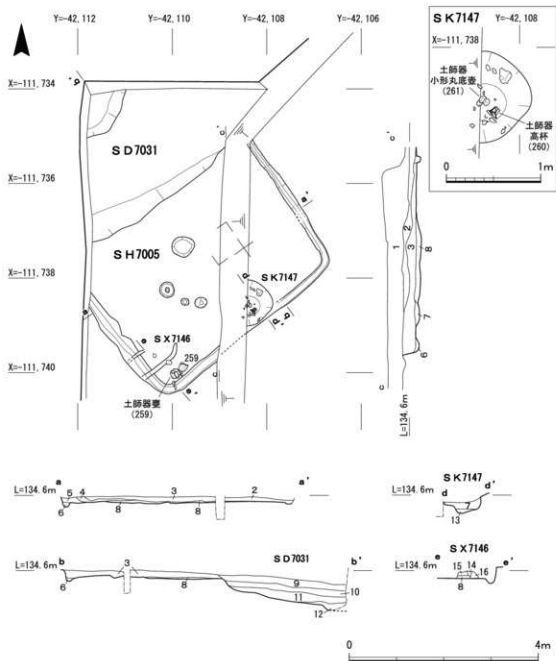


第53図 I地区 溝S D 7134実測図

地区中央付近から掘削されており、北は調査区外へのびる。自然流路N R 7100掘削中に検出したため、西屑は明らかではないが、最大で幅約1.5m、深さ約1mを測る。埋土は礫を多く含む砂質土であり、N R 7100の11・12層と同様、洪水によって埋没したものと考えられる。埋土中から古墳時代後期から飛鳥時代の須恵器(第58図269～271)が出土しており、最終埋没は飛鳥時代前半と考えられる。

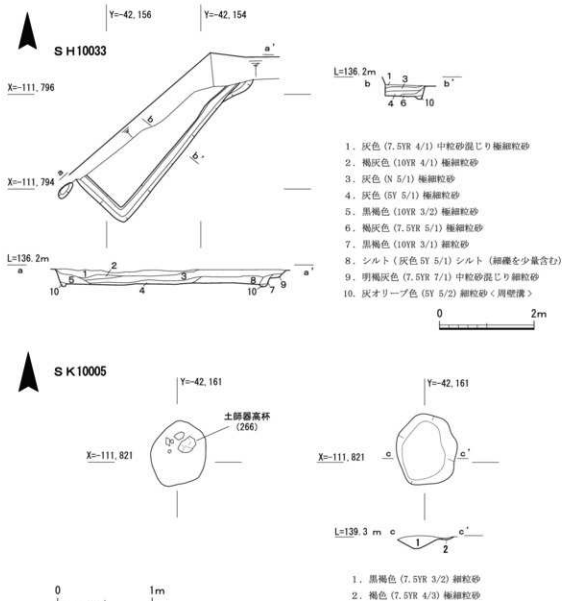
溝S D 7134(第53図) N R 7100の南側に取り付く、深さ0.32m、幅1.2～2.0mの溝である。中世の遺構面と同一面で検出したため、当初中世の遺構と考えていたが、古墳時代前期の遺物しか含まないことから、N R 7100の一連の遺構と評価した。断面は逆台形状で、埋土には流水の痕跡は認められない。溝ではなく、S W 7131に関連する作業道のような性格である可能性もあるが、明らかにしえなかった。なお、N R 7100の上層を掘削中に、S D 7134との合流点付近で木樋の残欠とみられる木製品(第61図293)が出土している。

竪穴建物S H 7005(第54図) 1辺4.9mを測る方形の竪穴建物である。北西部分は溝S D 7031に削られる。残存深は0.37mで、壁際には深さ0.1mの屋内周壁溝が巡る。床面は8層で、粘砂質土からなる貼り床と考えられる。南西隅には粘土の張り出しS X 7146があり、火処の可能性があるが、遺存率が悪く不明である。S X 7146の南側では土師器甕(第58図259)が据え置かれた状態で出土した。また、南東辺中央では深さ0.24mの円形の掘り込みS K 7147を検出した。埋土中から完形に近い土器(第58図260・261)が出土しており、貯蔵穴の可能性もある。



- | | | |
|---|---|---|
| 1. 床土 | 7. 黒褐色 (10YR 2/2) 細粒砂 (2 cm 以下の礫少量含む) (S K7147) | 12. 黄褐色 (2.5Y 5/3) 砂 (円礫含む) |
| 2. 黒褐色 (2.5Y 3/2) 細粒砂 (5 cm 以下の中礫を多く含む) (S H7005) | 8. 灰褐色 (7.5YR 4/2) 細粒砂 (貼り床) | 13. 褐灰色 (10YR 4/1) 細粒砂 (ベース底じり) |
| 3. 黒褐色 (2.5Y 3/2) 細粒砂 (0.5 cm 以下の中礫をやや多く含む) (S H7005) | 9. 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 細粒砂 (2 ~ 5 cm の礫を含む) | 14. 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 極細粒砂質土 |
| 4. 黒褐色 (7.5YR 3/1) シルト (S H7005) | 10. 黄灰色 (2.5Y 4/1) 細粒砂 (1 ~ 2 cm の礫を含む) | 15. 黒褐色 (2.5Y 3/1) 極細粒砂 (炭をわずかに含む) |
| 5. 黒色 (10YR 2/1) シルト (S H7005) | 11. 褐灰色 (10YR 4/1) シルト | 16. 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 細粒砂 (0.5 cm 以下の中礫をやや多く含む) |
| 6. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂 (S H7005) | | |

第54図 H地区 竪穴建物 S H7005実測図



第55図 L地区 竪穴建物SH10033、土坑SK10005実測図

竪穴建物SH10033(第55図) L地区北西端(t9・10)で竪穴建物の南東隅を検出した。北西側は調査区外へとのび、平面規模は明らかでない。検出長南北3.86m、東西1.36m、床面までの深さ0.23mを測り、幅0.08m、深さ0.06~0.08mの周壁溝を検出した。調査区北端で階段状遺構を確認した。竪穴建物の出入り口の可能性がある。床面で布留形彫の小片(第58図263・264)が出土しており、古墳時代前期から中期と考えられる。

土坑SK10005(第55図) L地区(r12)で検出した楕円形の土坑である。南北0.75m、東西0.65m、深さ0.17mを測る。上層から古墳時代前期の土師器の高杯(第58図266)が出土した。

(桐井揮揮・菅博絵)

(2) 出土遺物

① 土器

自然流路 N R 7100・15層(黒褐色礫粘土層)(第56図210～233) N R 7100の中で、15層に含まれていた土器を一括する。15層には細片だけではなく、比較的残りの良い破片も多く、器面の荒れも顕著ではない。流路の護岸に際し、意図的に混入されたものと考えられる。

210は須恵器広口壺である。口縁はややいびつに焼けひずむ。断面は灰褐色(5YR6/2)を呈し、須恵器としては軟質である。口縁は内湾しながら内傾する端部に至る形状で、体部以下は完全に欠損する。外面は2条の沈線によって3区分され、下位、中位にはピッチの細かい波状文が施される。中位の波状文は2単位に分けて施文されている。内面は丁寧なユビナデ。N R 7100出土の須恵器はこの1点のみで、層位的にも確実に古式土師器に伴う資料である。陶邑濁り池窯⁽⁸²²⁾に類例があり、T K 73型式並行の初期須恵器とみられる。

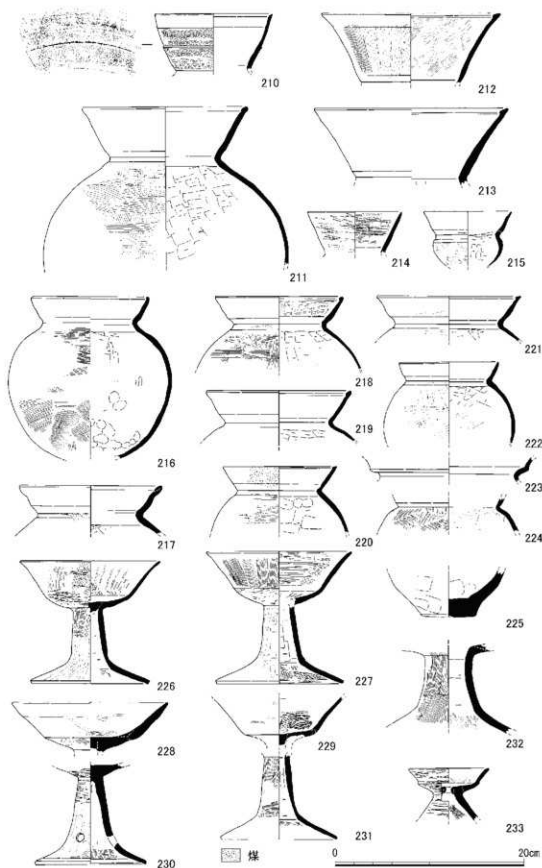
211～213は土師器直口壺である。211は212や213と比較して口縁部が短く、直線的に外傾する。肩部には横方向のハケメが認められる。212・213は長く外反気味の口縁部で、外面は粗い縦方向のハケメ。端部は大きく肥厚する。213の外面には煤が付着する。内面にも弱いコゲが認められることから、使用時の痕跡であろう。

214・215は小形丸底壺である。ともに布留2式並行とみられる。

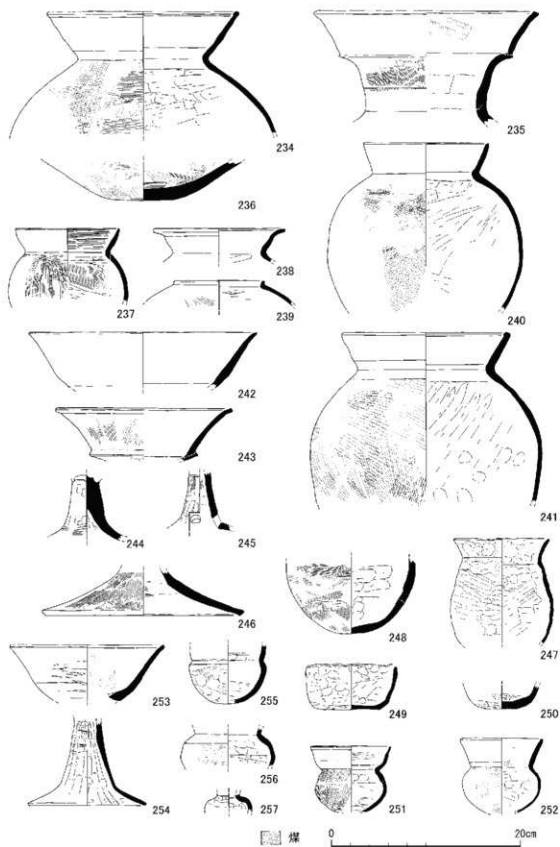
216～222は布留形甕である。端部はバリエーションが多いが、いずれの口縁部もゆるく内湾して立ち上がる通有の布留形甕である。216は強いナデでやや受け口状となる、在来系統の影響を受けたものである。222を除きいずれも中形品である。唯一222は小形品である。外面肩部付近には1条の沈線が認められる。

225は甕あるいは壺の底部である。厚手で外面にはタタキメやハケメの痕跡は認められない。胎土中には大振りの砂粒を比較的多く含み、焼き上がりも異質である。弥生時代後期にさかのぼる遺物、あるいは搬入品であろうか。搬入品とした場合、東海以東に類例があり、一つの候補となろう。223は甕口縁部である。端部を欠くが、口縁部は外方に大きく引きのばされる。頸部外面には粗いナメハケが認められる。いわゆる東海系の「S」字甕の系譜をひく土器であろう。外面は厚くコゲが付着する。224は甕の頸から肩部で、外面には矢羽根状のタタキメを残す。矢羽根状タタキは弥生時代後期後半から終末期に奈良盆地を中心に畿内地域では散見するものの、丹波以北での出土例は極めて稀である。胎土は肉眼観察では他の土器と大きな違いは認めがたい。焼き上がりは異なり、断面が黒色を呈する。確定することはできないが、搬入品の可能性が高い。

226～232は高杯である。227は杯部の一部を欠く高杯である。ヨコナデとハケメで仕上げられるⅡ群系統のものであるが、脚柱部内面や杯部外面下位などで部分的にヘラケズリが認められ、器壁も薄い。228・229は杯部の破片である。ナデとハケメで仕上げられるもので、ミガキは認められない。228は杯部に口縁部を乗せるように接合した後、内面屈曲部に補強の粘土を充填するため、器壁が極めて厚い。229は脚柱部上位から杯部にかけて細かいミガキが認められ、胎土も密である。杯部内面と脚柱部には煤が付着するが、使用時か廃棄後の痕跡かは不明。231は胎土



第56図 自然流路NR7100 15層出土遺物



第57図 自然流路N R7100・10030、溝S D7084出土遺物

に微細な砂粒を多く含み、ハケメで仕上げられる。232は径の大きい筒状で短脚の脚部で、大形の有段高杯とみられる。

233は小形器台である。内外面とも緻密なミガキが施される。杯部中央には小孔が穿たれる。

15層出土遺物は、層位資料だが比較的大きな破片も多く、器面の荒れも目立たないものが多い。流路の護岸に際して一括投棄された可能性も考えられるものである。古式土師器を中心としつつも、1点初期須恵器を含むことから、古墳時代中期前半、TK73型式並行期に接点があると考えられる。

自然流路 N R 7100 (第57図234～240、242～252) N R 7100の機能時の土器である。237・247・249は最下層の泥炭層から出土したもので、放棄流路の水棲状況が変化し泥炭が堆積し始めた時期である。ほかのものは掘削中や断ち割り時に出土したもので、機能時の土器として一括する。

234は直口壺である。口縁は内湾気味に立ち上がり、端部が肥厚する。肩部の横方向のハケメ、体部内面のヘラケズリなど、布留形甕と同様の製作技術を看取できる。

235はいわゆる山陰系統の二重口縁壺である。頸部に縦方向のハケメを施す以外は、ユビナデで仕上げられている。胎土は地元の土器と大きな違いは認められない。N R 7100の中でも木器溜り S W 7132に伴って出土した。236は大形の壺の底部である。内外面ともハケメで、外面には漆とみられる黒色の付着物が認められる。茶褐色を呈するが、角閃石は肉眼では確認できない。

237は小形の甕で、内外面とも目の細かいブラシ状のハケで仕上げられる。238は内外面ともナデによる凹凸が残る粗製の甕の口縁部である。弥生時代にさかのぼる遺物であろうか。240は布留形甕である。口縁部はやや上方に立ち上がり、端部の肥厚は顕著ではない。外面には調理痕跡が残る。

242～246は高杯である。242は大形の高杯杯部とみられる。屈曲はゆるく器壁も厚いため、壺の口縁の可能性もある。243は有段高杯杯部である。ユビナデにより外反させながら大きく広がる形状である。杯部端をわずかに上方につまみ上げ、その上に口縁部を乗せるようにして接合する。244は厚手の脚部である。脚柱部は中実で、部分的にタタキメのような痕跡が残る。内面に当て具痕は認められないが、ユビオサエの痕跡があり、手持ちでタタキを施しながら成形したものと考える。245は3方向にスカシがある高杯で、弥生系であろうか。246は大形の高杯脚裾部か。わずかに残る脚柱部にはヘラケズリが認められる。

247～250は粗製の土器である。247は甕である。左上がりの粗いタタキで成形され、口縁部はユビナデで接合した痕跡を残す。胴部にはコゲが付着する。東部瀬戸内系の製塩土器か。248は甕か壺の体部とみられ、器壁は極めて厚い。外面底部付近はヘラケズリ。内面も同様にヘラケズリが認められるが、器面の凹凸が著しい。外面上位は細かい目のハケメが認められる。底部付近には黒斑が認められ、煤が付着する。内面に明確なコゲは認められない。249は完形の平底鉢である。手づくねで内外面ともユビナデによる凹凸を顕著に残す。底部には煤とみられる黒色物がわずかに付着し、内面には汚れ、あるいはコゲがわずかに認められる。250は端部を欠くが、248

のような粗製の甕・壺類、あるいは平底鉢である。

251・252は小形丸底壺である。いずれもハケメとユビナデで仕上げる、いわゆるⅡ群系統のものである。251は口縁部がやや受け口状となる、地元の技術との混交がみられるものである。

N R7100出土遺物は、須恵器を含まず土師器のみで構成される。甕、壺が厚手化していることや、小形丸底壺の口縁の伸長度合いからみて、古墳時代前期後半から古墳時代中期初頭までの幅をもたせて考えておきたい。

井堰 S W7131 (第57図253～257) 253・254は井堰 S W7131直下から出土したものである。厳密には S W7131構築以前の N R7100下層に伴うものかもしれない。

255～257の3点の小形丸底壺は埋土掘削中に出土したもので、S W7131に伴う遺物である。255は粗製で口縁と体部の屈曲は不明瞭である。257はミニチュア化した小形丸底壺と考えられる。高杯は古墳時代前期に遡りえる型式のものだが、先述の15層堆積後に井堰が構築されていることから、少なくとも古墳時代中期に下る資料である。

自然流路 N R10030 (第57図241・第58図267) 241は「く」の字状口縁の甕である。布留形甕の系譜を引くものだが、端部の肥厚はなく、口縁の立ちあがりの角度も緩い。N R10030の中層から出土した。267は断ち割り中に出土した土師器高杯脚部である。古墳時代中期に下るものとみられる。

溝 S D7084 (第58図269～271) 269は T K23・47型式の杯身である。270は低脚の無蓋高杯である。脚部は低く、透かし穴はない。271は壺・瓶類の口縁部である。S D7084に伴う遺物は少ないが、古墳時代後期後半から飛鳥時代前半に接点があると考えられる。

竪穴建物 S H7005 (第58図258～262) H地区で検出した竪穴建物である。259は南西隅の S X7146に接するように置かれていたほぼ完形の布留形甕である。外面は肩部付近まで煤が付着し、被熱により一部が剥落する。内面は胴部最大径付近に、やや水平から傾くようにコゲが認められる。器壁は薄く、内面底部付近のみ指圧痕が残る。

258・259・262以外は南壁際の貯蔵穴とみられる土坑 S K7147から出土した。260は高杯脚部である。261は小形丸底壺である。小形品で、胴が張る。器面の荒れが著しく調整は不明瞭。262は凝灰岩製の砥石である。小口面以外の全面に使用痕跡があり、特に1面は磨り減りが著しい。

N R7100出土の甕と比較すると、259の方が薄手で肩部にヨコハケを残すなど古い型式学的特徴ととどめている。小形丸底壺の型式から見ても、N R7100とはほぼ同時期か、若干先行するものと捉えておく。

竪穴建物 S H10033 (第58図263・264) 小片だが、布留形甕の口縁部(263)と肩部(264)である。同一個体の可能性が高いが、接点はない。古墳時代前期後半から中期前半とみられる。

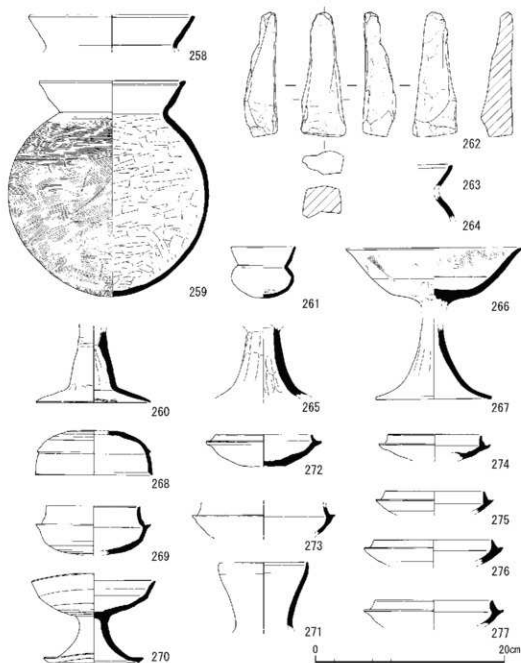
土坑 S K10005 (第58図266) 266は S K10005から単独で出土した土師器高杯杯部である。古墳時代前期後半か。

包含層・その他の遺構 (第58図265・268・272・273・274・276・277) 包含層のほか、後世の遺構から出土した古墳時代の土器を一括する。

265はM地区包含層で出土した土師器高杯脚部である。268は端部に沈線をもつ杯H蓋である。TK23・47型式である。272は中世の溝S D7056から出土した完形の杯Hである。底部のケズリは天井部まで及び、内面も平滑にされ、丁寧なつくりである。古墳時代後期後半、TK43併行とみられる。273はI地区で出土したもので、古墳時代後期末から飛鳥時代にかけての杯Hか。268・273はNR7100の上層から出土しており、NR7100は古墳時代中期後半から後期にかけて埋没が進んだとみられる。

274はI地区で出土したもので、古墳時代後期末から飛鳥時代にかけての杯Hか。

276・277は各地区の包含層から出土した、TK43から飛鳥時代前半の須恵器杯Hである。この



第58図 竪穴建物S H7005・10033、自然流路NR10030、溝S D7084、包含層出土遺物

時期の遺構としてはI地区の溝SD7084があるが、建物などの明確な遺構は検出できていない。いずれも器面の荒れが著しく、上流からの流れ込みである可能性が高い。

②木製品

木製品はほぼ全てが自然流路NR7100、及びその内部の井堰SW7131、木器溜まりSW7132を構成するものである。SW7131・7132では、建築部材を転用したものが圧倒的に多く、NR7100からは一定数の製品も出土している。一方、木屑などの加工痕跡はほとんど見られず、雑木や丸太、加工前の板材などの量も少ない。したがって、調査区付近で加工したのではなく、別の場所で使用されていたものを廃棄・転用したものと考えられる。

井堰SW7131(第59図278・279、第60図280～285、第61図286～290、第62図296・299、第64図307・第65図316～318) 278・279はSW7131-1の最上位に転用されていた、ほぼ同形の建築部材である。全長はいずれも445.2cmで、扁平な板目材を加工している。両端は三角形に加工されており、柄と組み合うようになっている。中央部には半円形の抉りが認められ、丸太材等の他の部材と組み合う箇所であろう。掘立柱建物の梁材とみられる。

280は残存長390.8cmの丸太材である。先端は片側のみ残存しており、もう一方は腐食により折損する。特に端の50cm程は腐食が顕著であることから、掘立柱建物の柱材で、腐食が顕著な部分は地中部分にあたると思われる。281は追柵目の板材である。長辺側には一部欠損があるが、短辺側は両端とも残存する。長辺側は斜めに切り落とされており、壁板の一部であろうか。

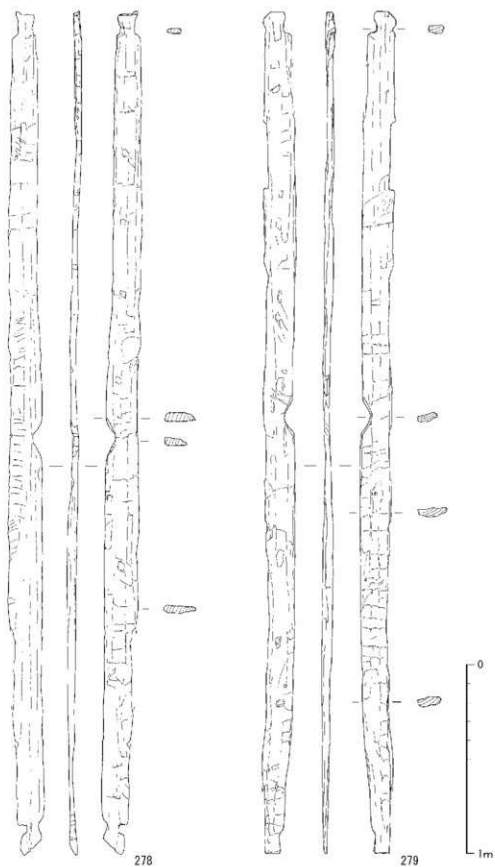
282は丸太を加工した梁材で、先端付近には欠き込みがある。先端付近からくびれるように弱く細くなるが、表面には加工が認められるため、腐食ではなく本来的な形状を反映しているとみられる。片側は折損する。283・284は板目の板材であり、283には方形の仕口が2か所に認められる。285は追柵目の部材で、片側は折損する。遺存する頂部は腐食が著しいものの、段をもたせるように加工されていることから、何らかの建築部材とみられる。

286・287はともに追柵目の板材で、反りが著しい。片側は折損する。全面に手斧、あるいは鉋による加工痕跡があり、単に割り裂いた材ではなく、何らかの部材と判断した。288・289はともに断面形状が方形を呈する棒材である。290は柵目の板材であり、長辺及び短辺の片側が断面三角形に削り出される。壁材であろうか。

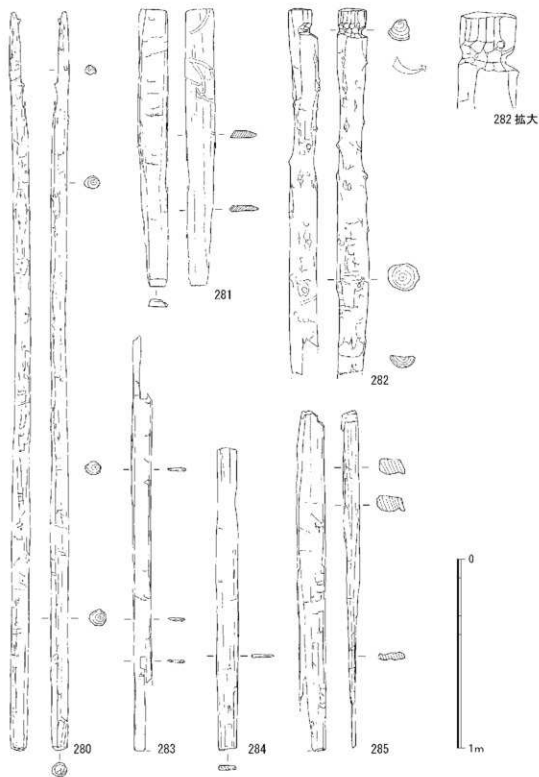
296はほぼ完形の柵目の板材である。長さ113cm、幅16.6cm、厚さ3.2cmを測る。1か所に方形の仕口が認められ、短辺側の片側は断面三角形に作り出される。壁材とすると、逆側は本来溝状となっていた可能性があるが、腐食が進んでおり、折損しているのかどうか不明。299はほぼ完形に近い建築部材で、全長は145cmである。片側は仕口が認められる。

307は、断面三角形で片側が扁平となる木材である。製品や部材ではなく、加工屑の可能性もある。

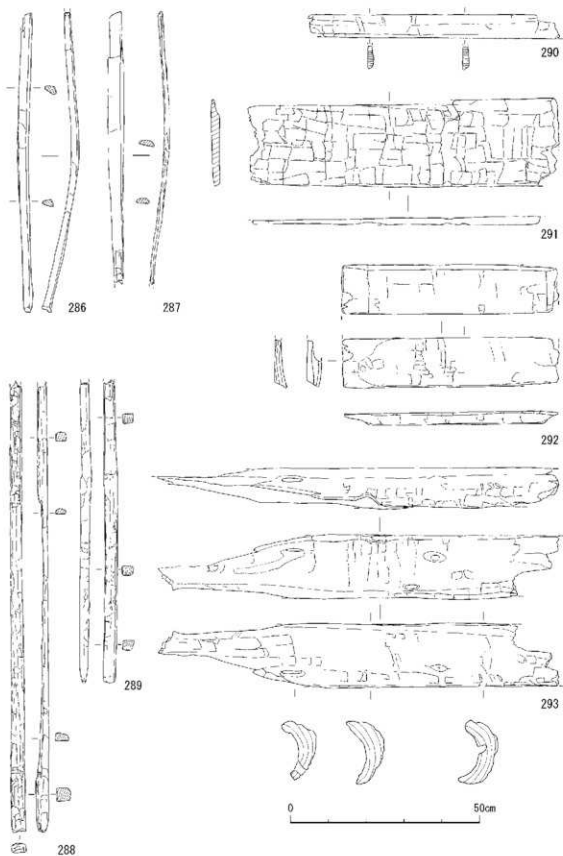
316は割り裂いた材の片側が被熱するもので、いわゆる燃えさしである。SW7131付近から出土した。317はSW7131の下層のビート層から出土した板材で、齧車とみられる。長さ15.0cm、幅2.2cm、厚さ0.7cmを測る。片側のみ尖頭に加工される。318は平面長方形の部材で、全面に手



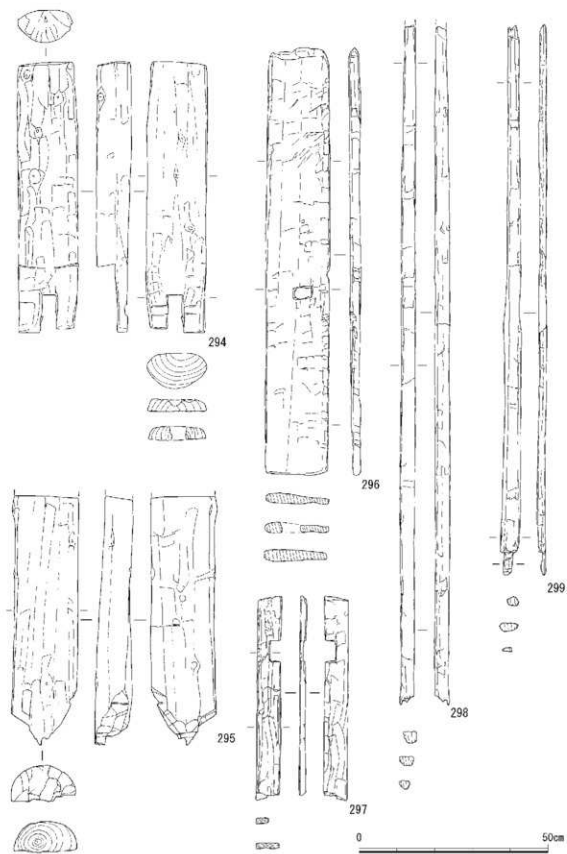
第59図 古墳時代出土木製品1



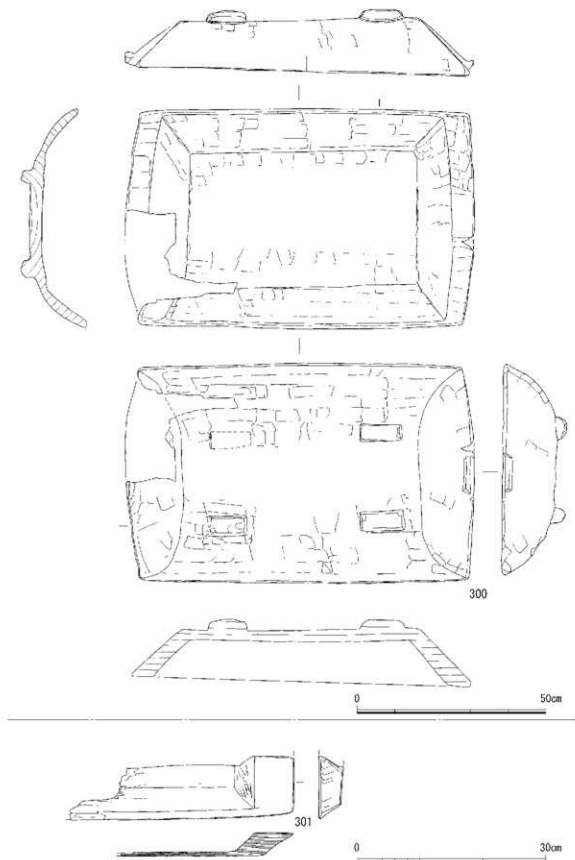
第60図 古墳時代出土木製品 2



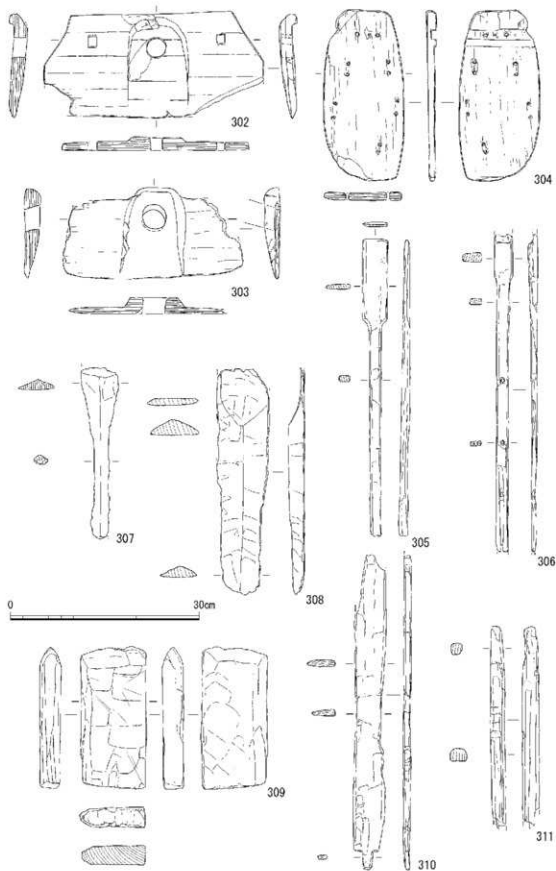
第61圖 古墳時代出土木製品3



第62図 古墳時代出土木製品 4



第63図 古墳時代出土木製品5

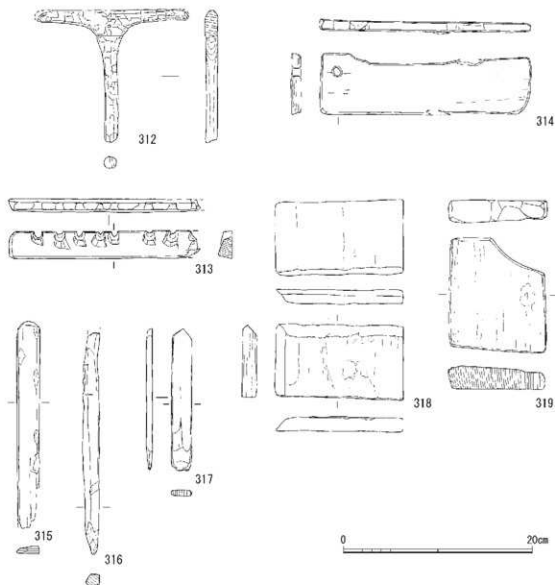


第64図 古墳時代出土木製品6

斧とみられる工具痕が残る。長辺側、短辺側いずれも片側ずつ断面三角形になるように加工されている。

木器溜まり SW7132 (第62図294・295・297・298、第64図303・304・310) 294は先端に欠きこみが施された部材である。欠損はなく、前面に丁寧な加工が施された部材とみられるが、用途は不明。芯去材。295はSW7132で出土した木材で、さらに調査区外に続いていたが、掘削することができなかつたため、現地で切断して取り上げたものである。したがって、片側は現地に残されたままで、全形は不明である。芯持丸太で、残存する側は手斧により荒く三角形に造り出されている。297は欠き込みがある板目の板材である。片端を折損する。298は断面形状が方形に近い棒材である。両側とも折損しており全形は不明。建築部材の一部とみられる。

303は直柄の広銀身である。304は組合せ型の田下駄の踏み板である。2孔1対の小孔が5か所に認められる。裏面には、棧に組み合うための幅1.5cmの蟻溝があり、その部分にも3孔の小孔



第65図 古墳時代出土木製品7

が穿たれていることから、棧を固定するための目釘孔の可能性はある。310は板目の板材である。片側は仕口が作り出され、もう片側は折損する。

自然流路 N R7100 (第61図291～293、第63図300・301、第64図302・305・306・308・309・311、第65図312～315・319) 291は追柵目の建築部材である。表面が手斧によって加工される。292は板目の板材である。一部折損するが、ほぼ全形が分かるもので、長さ52.4cm、幅12.9cm、最大幅3.2cmを測る。短辺側に、両側とも弧状に抉りが認められる。建築部材か。293はN R7100の上層掘削中に出土した木製品である。遺存状況が極めて悪いが、木目に沿うように内側が繰り抜かれており、木桶の一部である可能性が高い。

300は槽で、端部の一部を欠く以外は完形である。半裁した丸太の木表側を削り抜いて作られており、短辺側には方形の把手が作り出される。断面形は舟形で、脚は4か所に認められる。301は小片だが槽の端部とみられる。300と比較して浅手で小形のもので、本来の平面形状は長方形とみられる。

302は直柄の広楕身である。305は小形の櫂とみられる。いずれも泥炭層からほぼ完形の状態で単独で出土している。306は残存長50.9cmを測る追柵目の木製品で、両端は折損する。先端にかけて幅と厚みを増し、平面は羽子板状となる。3か所に方形の柄穴が認められる。308は断面三角形で、片側が扁平となる木材である。製品や部材ではなく、加工屑の可能性もあるが、詳細は不明。309は平面長方形の部材で、全面に手斧とみられる工具痕が残る。長辺側、短辺側いずれも片側ずつ断面三角形状になるように加工されている。311は棒材である。表面を面取りするなど、平滑にする加工が施されている。

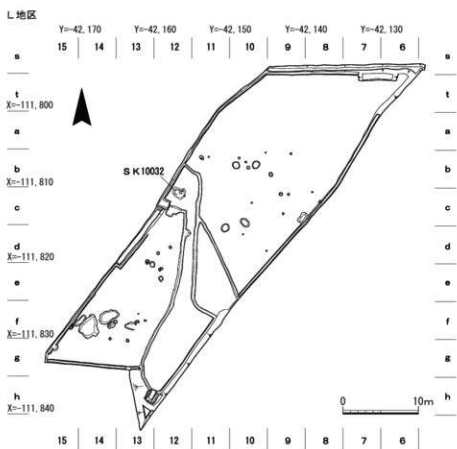
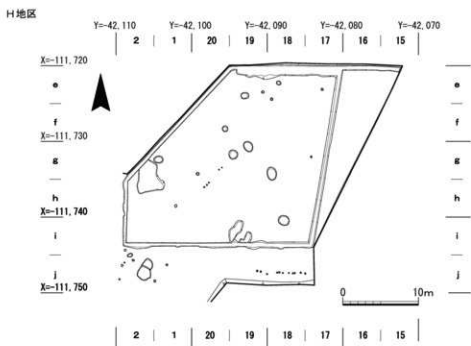
312は糸巻具で、いわゆる櫂の支え木である。「T」字状に2つの部材が組まれており、結合部には木釘が残る。313は火きり臼である。欠損のため、全長は不明。長辺片側のみが使用されている。314は板目の板材である。1か所に小孔が穿たれ、長辺側は抉りがある。全体が比較的丁寧に加工される。315は長さ6.5cm、幅2.4cmを測る板目の部材である。一部に欠損があるがほぼ全形が残る。片側の長辺側には抉りがあり、径約1.5cmの小孔が1か所に認められる。

317は全長15.0cmを測る索申である。318は何らかの部材である。一部に加工痕が残る。319は最大長12.2cm、最大幅10.3cm、厚さ2.2cmを測る柵目の部材である。欠損はなく、一部に弧状の抉りがある。
(桐井理揮・菅博絵)

4) 時期不明遺構

H地区(第66図) H地区では、土坑及びピットを多数検出した。ピットは杭痕のような規模の小さいものが多く、断面でも掘形や柱痕を確認することはできなかったことから、建物を復元するには至らなかった。顕著な出土遺物もなく、時期や性格等については不明である。

L地区(第66図) L地区西端(e12)で検出した土坑SK10032は、長軸1.7m、短軸1.2m、深さ0.3mを測り、土坑北東側には0.1～0.4mの石を方形に配置する。埋土から遺物は出土しなかったため時期は不明である。埋土2・3層で底が平坦になることから、M地区で検出したST10021のような墓の可能性もある。
(菅博絵・松井忍)



第66図 H・L地区遺構配置図

7. 自然科学分析

1) 放射性炭素年代測定

(1) はじめに

2020年度調査区(第7次)、2021年度調査区(第10次)で採取した試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

(2) 試料

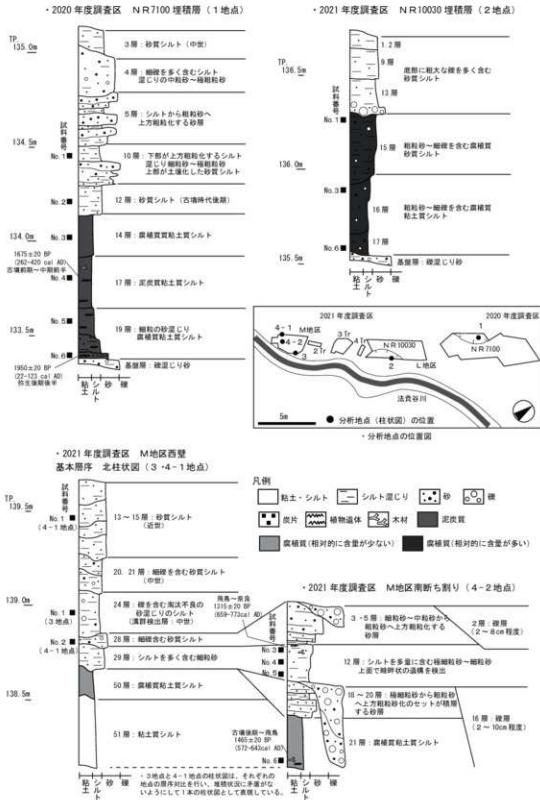
ここでは、年代測定試料とともに、併せて採取を行った花粉分析、植物珪酸体分析、珪藻分析、大型植物遺体分析の堆積物試料の採取位置も示す。付表3に、放射性炭素年代測定、植物珪酸体分析、花粉分析、珪藻分析、大型植物遺体分析の試料一覧を、第67図に試料採取地点の柱状図と試料採取位置を、写真1～3の1～16に分析試料の採取位置を示す。また、放射性炭素年代測定については、測定試料を写真3の17～20及び第68～71図-1・3・5・7に、測定試料の情報、調製データを付表4(ウィグルマッピング試料)と付表5(単体測定試料)に示す。

(3) 方法

試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製 1.5SDH)を用いて

付表3 分析資料一覧

調査区	遺構 / 採取位置	地点	層位	試料番号	花粉	植物珪酸体	珪藻	大型植物遺体	年代	年代値 (cal AD)	時期
2020年度調査区(7次)	I地区 NR 7100	1地点	10層	1	○	-	○	-	-	-	-
			12層	2	○	-	○	○	-	-	古墳時代後期
			14層	3	○	-	○	-	-	-	-
			17層	4	○	-	○	-	○	260 - 420	古墳時代前期～中期前半
			19層	5	○	-	○	○	-	-	-
				6	○	-	○	○	○	20 - 120	弥生時代後期後半
2021年度調査区(10次)	I地区 NR 10030	2地点	15層	1	○	-	○	-	-	-	-
			16層	3	○	-	○	-	-	-	-
			17層	6	○	-	○	-	-	-	-
	M地区 中世遺構面(調査区東壁)	3地点	24層	1	○	-	○	○	-	-	12-13世紀
			M地区 調査区西壁	4-1地点	13～15層	1	○	○	-	-	-
	28層	2			○	○	-	-	-	-	-
	M地区 南断ち割り	4-2地点	12層	3	○	○	-	○	○	660 - 770	飛鳥時代～奈良時代
				4	○	○	-	-	-	-	-
				5	○	○	-	-	-	-	-
			21層	6	○	○	-	-	○	570 - 640	古墳時代後期～飛鳥時代



第67図 分岐地点の柱状図と分析試料の採取位置



1. 2020年度調査区のNR7100の検出状況



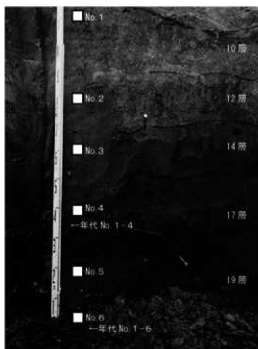
2. 2020年度調査区のNR7100の堆積状況（その1）



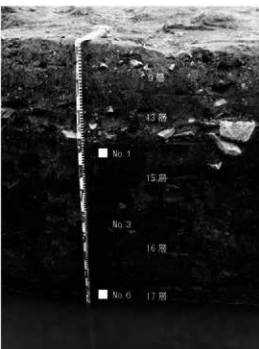
3. 2020年度調査区のNR7100の堆積状況（その2）



4. 2021年度調査区（L地区）のNR10030の試料採取位置



5. NR7100（1地点）の分析層準



6. L地区のNR10030（2地点）の分析層準

写真1 分析試料の採取状況1



7 2021年度調査区のM地区の南断ち割り



8 M地区の南断ち割りトレンチの畦状遺構の検出状況



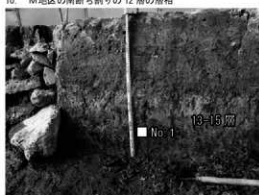
9 M地区の南断ち割り(4-2地点)の分析層準



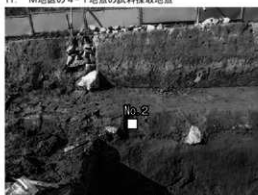
10 M地区の南断ち割りの12層の層相



11 M地区の4-1地点の試料採取地点



12 M地区の4-1地点の分析試料 No. 1の分析層準



13 M地区の4-1地点の分析試料 No. 2の分析層準



14 M地区の4-1地点の分析試料 No. 2の堆積状況

写真2 分析試料の採取状況2



15 2021年度調査区のM地区の東壁断面（3地点）



16 M地区の東壁断面（3地点）の分析用準



17 測定試料 No. 1-4 (PLD-46924)



18 測定試料 No. 1-6 (PLD-46925)



19 測定試料 No. 4-6 (PLD-46926)



20 測定試料 No. 4-3 (PLD-46927)

写真3 分析試料の採取状況3

測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

(4)結果

付表4(ウィグルマッチング試料)、付表5(単体測定試料)に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した。第68~71図にウィグルマッチング結果を、第72図に単体測定試料の暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代(yrBP)の算出には、

付表4 ウィグルマッキング測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-46108	試料 No.92 遺構：S P 7095 (S B 7099) 調査区：I 地区 報告 No.178	採取位置：外側から1～5年輪目（最終形成年輪以外樹皮に近い部分）を採取	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：12 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：12 mol/L）
PLD-46109	その他：年輪数：37年 種類：生材 試料の性状：最終形成年輪以外樹皮に近い部分を採取 器種：柱根	採取位置：外側から16～20年輪目	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：12 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：12 mol/L）
PLD-46110	状態：dry	採取位置：外側から31～35年輪目	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：12 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：12 mol/L）
PLD-46111	試料 No.93 遺構：S P 7126 (S B 7099) 調査区：I 地区 報告 No.180	採取位置：外側から1～5年輪目（最終形成年輪以外樹皮に近い部分）を採取	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：12 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：12 mol/L）
PLD-46112	その他：年輪数：48年 種類：生材 試料の性状：最終形成年輪以外樹皮に近い部分を採取 器種：柱根	採取位置：外側から21～25年輪目	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：12 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：12 mol/L）
PLD-46113	状態：dry	採取位置：外側から41～45年輪目	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：12 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：12 mol/L）
PLD-46114	試料 No.94 遺構：S P 7098 (S B 7099) 調査区：I 地区 報告 No.179	採取位置：外側から1～5年輪目（最終形成年輪以外樹皮に近い部分）を採取	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：12 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：12 mol/L）
PLD-46115	年輪数：43年 種類：生材 試料の性状：最終形成年輪以外樹皮に近い部分を採取 器種：柱材	採取位置：外側から21～25年輪目	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：12 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：12 mol/L）
PLD-46116	状態：dry	採取位置：外側から36～40年輪目	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：12 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：12 mol/L）
PLD-46928	試料 No. 8 遺構：S P 10076 (S B 10001) 調査区：M地区 報告 No.183	採取位置：外側から1～5年輪目（最終形成年輪）	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：12 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：12 mol/L）
PLD-46929	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪	採取位置：外側から16～20年輪目	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：12 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：12 mol/L）
PLD-46930	器種：柱 年輪数：36年輪 状態：wet	採取位置：外側から31～35年輪目	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：12 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：12 mol/L）

付表5 単体測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-46924	遺構：1 地点 試料 No.14	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：12 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：12 mol/L）
PLD-46925	遺構：1 地点 試料 No.16	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：12 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：12 mol/L）
PLD-46926	遺構：4 地点 試料 No.46	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：12 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：12 mol/L）
PLD-46927	遺構：4 地点 試料 No.43	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：12 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：12 mol/L）

付表6 試料No.92の放射性炭素年代測定、暦年較正、ウイグルマッチングの結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年年代範囲	2 σ 暦年年代範囲
PLD-46108 試料 No.92 報告 No.178	-24.50 \pm 0.12	863 \pm 20	865 \pm 20	1175-1195 cal AD (34.35%) 1199-1219 cal AD (33.92%)	1055-1057 cal AD (0.38%) 1158-1226 cal AD (95.07%)
PLD-46109 試料 No.92 報告 No.178	-25.08 \pm 0.14	855 \pm 20	855 \pm 20	1176-1194 cal AD (31.20%) 1200-1221 cal AD (37.07%)	1161-1229 cal AD (92.82%) 1245-1256 cal AD (2.63%)
PLD-46110 試料 No.92 報告 No.178	-24.60 \pm 0.12	908 \pm 19	910 \pm 20	1049-1081 cal AD (38.00%) 1135-1136 cal AD (0.54%) 1152-1177 cal AD (24.54%) 1193-1201 cal AD (5.19%)	1044-1085 cal AD (41.18%) 1093-1105 cal AD (3.74%) 1120-1213 cal AD (50.53%)
最外試料年代				1185-1205 cal AD (68.27%)	1179-1212 cal AD (89.64%) 1214-1221 cal AD (5.81%)
最終形成年輪の年代				1187-1207 cal AD (68.28%)	1181-1214 cal AD (89.64%) 1216-1223 cal AD (5.82%)

付表7 試料No.93の放射性炭素年代測定、暦年較正、ウイグルマッチングの結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年年代範囲	2 σ 暦年年代範囲
PLD-46111 試料 No.93 報告 No.180	-23.62 \pm 0.11	838 \pm 19	840 \pm 20	1179-1191 cal AD (14.95%) 1204-1229 cal AD (41.29%) 1245-1256 cal AD (12.03%)	1168-1170 cal AD (0.81%) 1175-1196 cal AD (21.38%) 1198-1262 cal AD (73.26%)
PLD-46112 試料 No.93 報告 No.180	-24.25 \pm 0.13	854 \pm 19	855 \pm 20	1177-1194 cal AD (30.36%) 1201-1221 cal AD (37.91%)	1161-1228 cal AD (93.45%) 1246-1254 cal AD (2.00%)
PLD-46113 試料 No.93 報告 No.180	-22.91 \pm 0.13	877 \pm 19	875 \pm 20	1165-1181 cal AD (26.06%) 1187-1212 cal AD (42.21%)	1053-1061 cal AD (2.51%) 1067-1075 cal AD (1.72%) 1156-1220 cal AD (91.22%)
最外試料年代				1204-1229 cal AD (68.27%)	1200-1244 cal AD (95.45%)
最終形成年輪の年代				1206-1231 cal AD (68.28%)	1202-1246 cal AD (95.46%)

付表8 試料No.94の放射性炭素年代測定、暦年較正、ウイグルマッチングの結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年年代範囲	2 σ 暦年年代範囲
PLD-46114 試料 No.94 報告 No.179	-21.80 \pm 0.12	806 \pm 19	805 \pm 20	1224-1234 cal AD (20.12%) 1238-1261 cal AD (48.15%)	1219-1269 cal AD (95.45%)
PLD-46115 試料 No.94 報告 No.179	-22.47 \pm 0.12	908 \pm 19	910 \pm 20	1049-1081 cal AD (38.00%) 1135-1136 cal AD (0.54%) 1152-1177 cal AD (24.54%) 1193-1201 cal AD (5.19%)	1044-1085 cal AD (41.18%) 1093-1105 cal AD (3.74%) 1120-1213 cal AD (50.53%)
PLD-46116 試料 No.94 報告 No.179	-24.05 \pm 0.14	886 \pm 19	885 \pm 20	1160-1181 cal AD (32.53%) 1187-1212 cal AD (35.74%)	1052-1078 cal AD (12.79%) 1155-1218 cal AD (82.66%)
最外試料年代				1221-1232 cal AD (68.27%)	1216-1238 cal AD (95.45%)
最終形成年輪の年代				1223-1234 cal AD (68.28%)	1218-1240 cal AD (95.46%)

付表9 試料No.8の放射性炭素年代測定、暦年較正、ウイグルマッチングの結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年年代範囲	2 σ 暦年年代範囲
PLD-46928 試料 No.8 報告 No.183	-25.35 \pm 0.24	815 \pm 17	815 \pm 15	1221-1232 cal AD (25.10%) 1240-1260 cal AD (43.17%)	1217-1267 cal AD (95.45%)
PLD-46929 試料 No.8 報告 No.183	-26.10 \pm 0.28	830 \pm 18	830 \pm 20	1215-1233 cal AD (36.21%) 1239-1260 cal AD (32.06%)	1178-1193 cal AD (9.66%) 1201-1265 cal AD (85.79%)
PLD-46930 試料 No.8 報告 No.183	-27.86 \pm 0.29	855 \pm 19	855 \pm 20	1177-1194 cal AD (30.65%) 1201-1220 cal AD (37.62%)	1161-1228 cal AD (93.75%) 1246-1254 cal AD (1.70%)
最外試料年代				1232-1248 cal AD (68.27%)	1219-1254 cal AD (95.45%)
最終形成年輪の年代				1234-1250 cal AD (68.27%)	1221-1256 cal AD (95.45%)

付表10 単体測定試料の放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年年代に校正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-46924 試料 No.14	-28.28 \pm 0.21	1677 \pm 20	1675 \pm 20	364-416 cal AD (68.27%)	262-276 cal AD (8.67%) 346-420 cal AD (86.78%)
PLD-46925 試料 No.16	-29.50 \pm 0.20	1950 \pm 18	1950 \pm 20	30-41 cal AD (10.23%) 60-85 cal AD (29.94%) 94-118 cal AD (28.10%)	22-123 cal AD (95.45%)
PLD-46926 試料 No.46	-24.44 \pm 0.17	1466 \pm 19	1465 \pm 20	585-609 cal AD (37.60%) 620-639 cal AD (30.66%)	572-643 cal AD (95.45%)
PLD-46927 試料 No.43	-27.45 \pm 0.17	1314 \pm 18	1315 \pm 20	664-683 cal AD (31.43%) 744-760 cal AD (27.69%) 766-772 cal AD (9.24%)	659-704 cal AD (49.10%) 740-773 cal AD (46.35%)

^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年校正、ウィグルマッチング法の詳細は以下のとおりである。

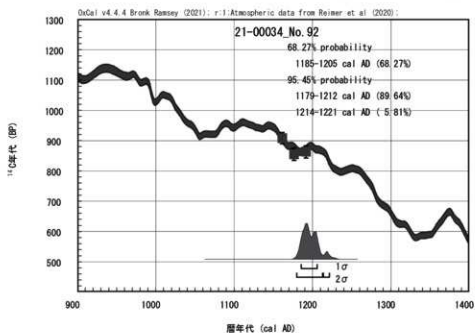
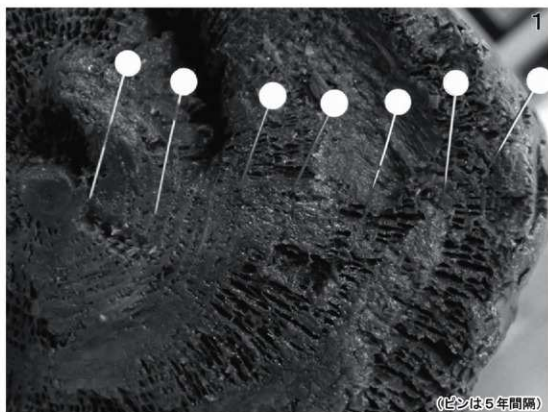
[暦年校正]

暦年校正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い(^{14}C の半減期5730 \pm 40年)を校正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年校正にはOxCal4.4(校正曲線データ: IntCal20)を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 σ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年校正曲線を示す。

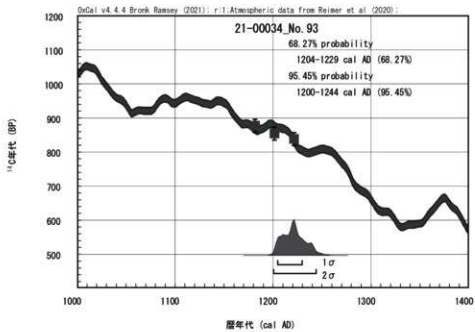
[ウィグルマッチング法]

ウィグルマッチング法とは、複数の試料を測定し、それぞれの試料間の年代差の情報を用いて試料の年代パターンと校正曲線のパターンが最も一致する年代値を算出することによって、高精度で年代値を求める方法である。測定では、得られた年輪数が確認できる木材について、1年毎あるいは数年分をまとめた年輪を数点用意し、それぞれ年代測定を行う。個々の測定値から暦年校正を行い、得られた確率分布を最外試料と当該試料の中心値の差だけずらしてすべてを掛け合わせることで最外試料の確率分布を算出し、年代範囲を求める。なお、得られた最外試料の年代範囲は、まとめた試料の中心の年代を表している。したがって、試料となった木材の最外年輪年代を得るためには、最外試料の中心よりも外側にある年輪数(今回の試料は2年輪:2.5年輪を小数以下切り捨て)を考慮する必要がある。



1. 試料No. 92 年輪計測結果 (PLD-46108～PLD-46110)
2. 試料No. 92 ウィグルマッチング結果

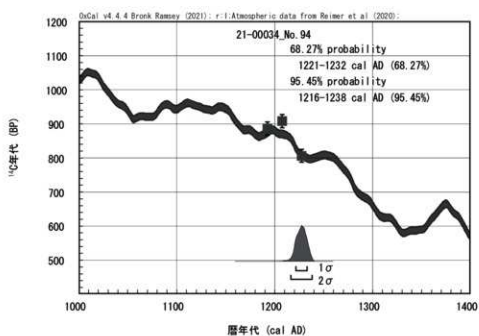
第68図 年代測定を行った試料(報告No.178)



3. 試料No. 93 年輪計測結果 (PLD-46111~PLD-46113)

4. 試料No. 93 ウィグルマッピング結果

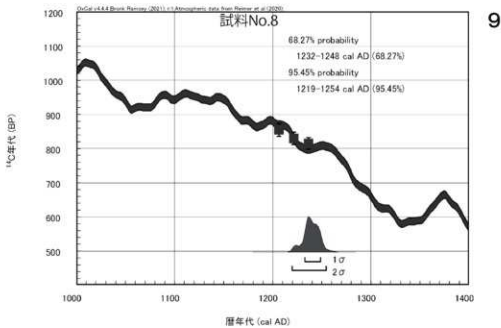
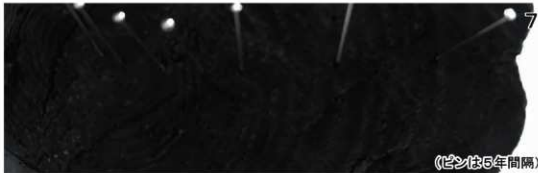
第69回 年代測定を行った試料(報告No.180)



5. 試料No. 94 年輪計測結果 (PLD-46114~PLD-46116)

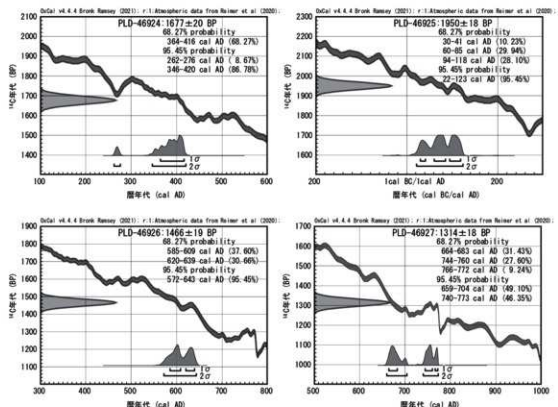
6. 試料No. 94 ウィグルマッピング結果

第70図 年代測定を行った試料(報告No.179)



- 7. 試料 No. 8 年輪計数結果 (PLD-46928 ~ 46930)
- 8. 試料 No. 8 試料採取位置 (PLD-46928 ~ 46930)
- 9. 試料 No. 8 ウィグルマッチング結果

第71図 年代測定を行った試料(報告No.183)



第72図 暦年較正結果

(5) 考察

① 測定結果について

2020年度調査区で検出されたN R 7100の流路の埋積層のセクション断面(1地点)で採取された試料の測定結果(以下の較正年代は 2σ の値)は、基底部の19層の試料No.1-6(PLD-46925)の14C年代が 1950 ± 20 BP、較正年代が22-123 cal AD (95.45%)で、1世紀前半～2世紀前半の暦年代である。流路下半部を埋積する泥炭質泥層の中部で採取された18層の試料No.1-4(PLD-46924)は、 ^{14}C 年代が 1675 ± 20 BP、較正年代が262-276 cal AD (8.67%)及び346-420 cal AD (86.78%)で、3世紀後半～5世紀前半の暦年代である。

春成ほか(2011)によれば、奈良県桜井市を中心とした遺跡から出土した土器の附着炭化物の集中的な年代測定結果にもとづく ^{14}C 年代と土器型式の関係は、大和V-1様式が2000 ^{14}C BP台、大和VI-2様式が1970 ^{14}C BP台、VI-3様式が1960 ^{14}C BP台、庄内0式期と1式期が1920 ^{14}C BP台、庄内3式期が1880 ^{14}C BP台、布留0式期が1840～1800 ^{14}C BP台、布留1式期が1790～1715 ^{14}C BP台となる。この結果をふまえると、N R 7100の流路基底部の19層の試料No.6の年代値は、弥生時代後期後半に対比される。また、泥炭質泥層の中部の18層の試料No.4については、岸本(2011)をふまえると、古墳時代前期～中期前半に対比される。

2021年度調査区では、M地区で採取した試料について放射性炭素年代測定を実施している。調査区南端部に設定されたM地区の南断ち割り断面の4-2地点の基底部の21層から採取された試料No.4-6(PLD-46926)は、 ^{14}C 年代が 1465 ± 20 BP、較正年代が572-643 cal AD (95.45%)で、6

世紀後半～7世紀中頃の暦年代である。水田畦畔と判断される畦状の高まりが検出された12層上面で採取されたNo.4-3 (PLD-46927) は、 ^{14}C 年代が 1315 ± 20 BP、較正年代が659-704 cal AD (49.10%)及び740-773 cal AD (46.35%)で、7世紀中頃～8世紀後半の暦年代である。

上記の岸本(2011)及び古墳時代以降の時期区分に関しては兎玉編(2018)に従うと、4-2地点の基底部の21層が古墳時代後期～飛鳥時代、畦状遺構検出層準の12層が飛鳥時代～奈良時代に対比される。

なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる(古木効果)。今回の単体測定試料は、すべて最終形成年輪が確認できない部位不明の木片である。したがって、測定結果は古木効果の影響を受けている可能性があり、その場合、木が実際に枯死もしくは伐採されたのは測定結果よりも新しい年代と考えられる。

また、ウィグルマッチング法を適用した結果、 2σ の較正年代の最外年輪年代は、S P 7095の試料No.92(報告No.178)が、1181-1214 cal AD (89.64%)及び1216-1223 cal AD (5.82%)で12世紀後半～13世紀前半である。S P 7126の試料No.93(報告No.180)は、1202-1246 cal AD (95.45%)で13世紀初頭～前半である。S P 7098の試料No.94(報告No.179)は、1218-1240 cal AD (95.46%)で13世紀前半である。S P 10076の試料No.8(報告No.183)は、1221-1256 cal AD (95.45%)で13世紀前半～中頃の暦年代を示した。

②堆積環境

N R 7100(2020年度調査区) N R 7100は、継続的かつ活動的な河床堆積物と判断できる砂～砂礫からなる粗粒の堆積物が堆積しておらず、泥質堆積物で埋積される。このような層相から、流路のN R 7100は当時、扇状地氾濫原上を流下していた主流路ではなく、氾濫流路と解釈できる(増田編著, 2019)。N R 7100の流路埋積層は、層相から流路下半部と上半部の上下の2つの層準に大別できる。

流路下半部は、泥炭質、腐植質の泥層である19層～15層で埋没する。この層準は、年代測定の結果から、弥生時代後期後半から古墳時代前期～中期前半に埋没したと捉えられ、出土遺物とも矛盾のない測定結果を示す。よって、N R 7100では、流路下半部の堆積が進んだ弥生時代後期後半から古墳時代前期～中期前半に、泥炭質ないし腐植質泥層が連続的に累重し、近傍の流域に生育する植生由来の植物遺体が集積するような安定した堆積環境が維持されていたと判断できる。したがって、19層～15層に含まれる植物遺体は、局地性が高いと考えられる。本層準に含まれる植物遺体の産状については、別報の花粉・プラントオパール分析及び大型植物遺体分析の報告に詳細を示している(花粉・プラントオパール分析、大型植物遺体分析の項参照)。さらに、別報の珪藻分析の結果では、19層から15層の泥炭質の泥が堆積する時期にかけて、流路内の相対的水位が上昇傾向にあった状況も確認される(珪藻分析の項参照)。流路下半部の層相変化と珪藻分析結果にもとづくと、泥炭質の泥による流路内の埋積の進行により、弥生時代後期後半から古墳時代～中期前半にかけてのN R 7100の流路底は、湿潤化の傾向を強めていったと捉えられる。N R

7100で実施した分析の結果と現地での流路埋土の観察結果をふまえると、弥生時代後期後半から古墳時代～中期前半のN R 7100では、河床において安定的な排水不良の湿地が広がっており、そのなかを周囲からの地下水で主に涵養され流下する、浅くて流れの穏やかな流路が存在していたと推測される。

流路上半部は、層状に累重する洪水堆積層の砂層の12層、10層、5層、4層で埋積される。最上部の3層は、中世の耕作土である。10層の堆積年代は、出土遺物から古墳時代後期と考えられる。10層より上位の層準では遺物が出土せず、さらに年代測定試料も得られなかったため、堆積年代が不明である。ただし、流路上半部の洪水砂層では、古土壌などの一定時間の堆積間隙を示すような堆積相が挟在しない。よって、流路上半部は洪水によって比較的短期間に連続的に埋積されたと認識できる。層相及び10層の出土遺物の時期をふまえると、流路上半部は古墳時代後期ないし古墳時代後期以降の比較的早い段階に、洪水により埋没が進行した可能性が指摘できる。

以上から、N R 7100は、弥生時代後期後半ないしそれ以前に、氾濫原を深く侵食するような強い営力が生じる洪水によって氾濫流路として形成されたと考えられる。N R 7100の基底の最深部は、周囲の氾濫原面より約1.5m下刻されており、谷状を呈する流路であったとみられる。弥生時代後期後半から古墳時代前期～中期前半にかけては、流路内において湿地の堆積環境が維持されながら、泥炭質、腐植質の泥層によって徐々に埋積が進む。そして、古墳時代後期ないし古墳時代後期以降のある段階にかけて、流路内は洪水砂層によって急激に埋積された。

N R 10030 (2021年度調査区) 2021年度調査区のL地区では、N R 7100と同様に氾濫原を下刻する流路N R 10030が検出されている。流路N R 10030からは、埋積層の上部で布留式や古墳時代後期の土器片がわずかに検出されたのみである。また、流路埋積層からは、年代測定試料も得られず、堆積年代の特定が難しい。珪藻分析では、N R 10030埋積層から珪藻化石は産出せず、陸域の堆積物由来である可能性が指摘される(珪藻分析の項参照)。N R 10030の埋積層では、相対的に珪藻化石の保存状態が良かったN R 7100の下半部のように植物遺体が挟在しない。さらに、埋土に多く含まれる腐植については、層相から、流路周辺の氾濫原上に発達していたと推定される表層付近の土壌物質に由来すると推定され、珪藻分析の結果とも矛盾はない。N R 10030の分析地点は、流路肩部に位置している。流路N R 10030では、肩部付近に周辺の氾濫原の表層からの土壌物質が多く再移動して集積するような堆積環境が形成されていたと考えられる。

M地区 (2021年度調査区) 法貴谷川の現流路に最も近いM地区では、掘削深度の最深部の基底から中世の遺構・遺物の検出層準まで、斜交層理・層理の発達する砂礫ないし砂層で埋積されており、洪水性の一時的な河床堆積物と考えられる堆積物で埋まった浅く小規模な流路が多く検出される。基底部では、洪水性の流路の基盤層として、土壌化した腐植質の層準を挟在する泥層が堆積する。4-2地点では、21層の最下部から採取した木材片(試料No.4-6)から古墳時代後期～飛鳥時代の年代値が得られている。M地区の基底部の泥層については、堆積状況の観察が部分的に留まり、詳細な堆積状況を把握できていない。近傍の2021年度調査区のL地区の流路N R 10030や、2020年度調査区の流路N R 7100の基盤層などでは、古墳時代以降の遺構確認面に相当

する、しまりの良い砂礫層などの堆積層が表土直下に近い層準に存在する。これに対し、M地区では、古墳時代以降の遺構確認面となるしまりの良い層準が検出されない。さらにM地区では、L地区や2020年度調査区の流路以外の領域で顕著に堆積しない、古墳時代後期～飛鳥時代以降から近世以前までの流路や洪水層が厚く累重する。

上述のようなM地区と周囲の調査区の堆積状況をふまえると、M地区内に累重する堆積層は、2020年度のNR7100と同様の氾濫流路内の堆積層に相当する可能性が高いと考えられる。発掘調査により、M地区では、特に12世紀～13世紀の段階に、3地点、4・1地点の24層から21・20層に相当する洪水性の氾濫流路や、このような流路を再掘削したとみられる溝群であるNR10009などの流路もしくは溝が多く形成される。一方で、12世紀～13世紀代の層準の直上を被覆する近世の層準では、洪水性の氾濫流路が検出されなくなる。ただし、近世の層準では、浮遊洪水堆積物を母材とした砂質泥～泥質砂の耕作土が累重しており、M地区に流路からの洪水堆積物が流入しやすい堆積環境が近世にも継続していたと考えられる。

M地区の発掘調査で着目される点の1つとして、12世紀～13世紀代の遺構の検出層準より上位で、洪水性の氾濫流路の流下が認められなく状況が挙げられる。現法貴谷川は、現況から築堤によって人為的固定された人工流路と考えられる。さらに、京都府埋蔵文化財調査研究センター(2022)に示された付近の地形判読結果から、M地区については、埋没流路の痕跡が明瞭に確認され、現法貴谷川の河床が北側に向かって分岐しやすい地形上に位置している状況が読みとれる。上記のようなM地区をとりまく地形及び景観的な様相と、調査区の堆積状況及び発掘調査成果をふまえると、法貴谷川が現景観のように築堤によって人為的に固定された時期は、M地区内に氾濫流路の侵入が途絶えた12世紀～13世紀以降とする解釈が成り立つと考えられる。M地区では、12世紀～13世紀代の遺構群として、下層に掘立柱建物、上層に南北方向に走行する再掘削が繰り返される溝群が検出されている。上層の溝群は、法貴谷川の人為的固定と連動した付近の灌漑水路の整備を示している可能性も考えられる。この溝群については、埋土1点について珪藻分析を実施しており、閉鎖的ではない浅い水の流れのある流況が予想され、灌漑水路であった場合の堆積環境と矛盾しない分析結果が得られている。

ところで、M地区では、近世の堆積層の累重も目立つ。このような近世の堆積層の累重は、12世紀～13世紀代以降に法貴谷川が人為的に固定されたものの、M地区とその近傍の領域が、まだ流路沿いの凹地として残存しており、洪水層が流入しやすい地形であったと推測される。

以上、2021年度調査区のM地区については、少なくとも古墳時代後期～飛鳥時代以降から中世にかけて氾濫流路が繰り返し形成される凹地部に位置していたと考えられる。2020年度調査区で検出されたNR7100は、古墳時代後期頃に埋没が進行した状況が確認できる。古墳時代後期～飛鳥時代以降の氾濫流路が形成されたM地区の範囲は、NR7100の流路埋没後に新たに形成された、埋没と侵食を繰り返す谷状をなす流路帯に相当している可能性が高い。よって、遺構として畦畔状の高まりが検出され、植物珪酸体分析の結果(別報)から水田層とみられる飛鳥時代～奈良時代の12層については、周囲の原状地氾濫原面よりも地形的に低く、谷状をなす凹地内に形成された

水田であった可能性がある。12層については、4-2地点で示されるように、直下と直上に洪水性の砂礫で埋積される流路(16層、2層)や洪水砂層(18~20層、3・5層)といった不安定な堆積環境を示す粗粒堆積物が累重する。水田が検出された12層を挟在する層間的な層相変化をふまえると、水田は、谷状をなす凹地内において、相対的に粗粒洪水堆積物の流入の影響を受けにくくなり、堆積環境が安定した時期に形成されたと捉えられる。植物珪酸体分析の結果によると、12層では下部から上位にかけてイネが多産する傾向にある。植物珪酸体分析と分析層準の層相にもとづくと、12層では洪水の影響がなかったわけではなく、泥質の浮遊洪水堆積物の供給を受けながら、水田が維持管理されていた可能性が指摘できる。

(パレオ・ラボAMS年代測定グループ=伊藤 茂・加藤和浩・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadize・辻 康男)

2)花粉分析、プラント・オパール分析

(1)はじめに

2020年度、2021年度調査区での古環境復元を目的として、堆積物試料が採取された。以下では、試料について行った花粉分析とプラント・オパール分析の結果を示し、遺跡周辺の古植物について検討した。なお、同じ堆積物試料から得られた試料を用いて珪酸分析、大型植物遺体分析、放射性炭素年代測定も行われている(別項参照)。

(2)試料

分析試料の一覧については、放射性炭素年代測定の報告の付表3に示す。また、分析試料の採取層準と堆積状況や岩質などについては、放射性炭素年代測定の報告の第67図と写真1-1~写真3-16に示している(放射性炭素年代測定の項参照)。

分析試料は、2000年度調査区の1地点の流路N R7100から採取された6試料と、2001年度調査区の2地点の流路N R10030から採取された3試料、3地点の包含層(中世遺構面)から採取された1試料、4地点(4-1地点、4-2地点)の調査区基本層序から採取された6試料の、計16試料である。このうち、花粉分析には全ての試料を、プラント・オパール分析には4地点の6試料を供した。

(3)方法

①花粉分析

試料(湿重量約3~4g)を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え、10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え、1時間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1の割合の混酸を加え20分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し、保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。プレパラートは樹木花粉が200を超えるまでカウントし、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。また、十分な量の花粉化石が得られなかった試料については、プレパラート1枚の全面を検鏡するに留めた。さらに、主要な分類群の単体標本(PLC.3621~3627)を作製し、

付表11 産出花粉胞子一覧表

学名	和名	3地点		4-1地点		4-2地点		2地点		1地点							
		中世遺構跡		調査区西端		南西9割りトレンチ		NR 10030		NR 7100							
		1	2	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6		
薪木																	
<i>Abies</i>	モミ属	3	-	-	-	2	20	1	-	-	8	4	1	1	7	4	
<i>Taxus</i>	ツグ属	3	-	1	-	6	-	-	-	-	2	1	1	-	-	1	
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属雄雄黄葉亜属	56	-	2	-	-	10	-	-	-	5	1	-	-	4	-	
<i>Pinus subgen. Haploxylon</i>	マツ属雄黄葉亜属	2	-	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Pinus (unknown)</i>	マツ属(不明)	32	-	3	-	1	6	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	6	-	31	-	12	7	-	-	-	2	-	-	-	2	8	
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	23	-	20	-	7	1	84	-	-	66	88	54	18	41	52	
<i>Taxaceae - Cephalotaxaceae</i>	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	-	-	-	-	18	-	-	-	30	19	9	10	26	4	
<i>Capnosaceae</i>	ヤナギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	1	
<i>Salix</i>	ヤナギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
<i>Phorocarya - Juglans</i>	ヤワグルミ属-クルミ属	-	-	2	-	1	-	1	-	-	1	1	-	-	-	1	
<i>Carpinus - Ostrya</i>	クマシメダ属-アザミ属	5	-	3	-	-	1	-	-	-	3	3	1	1	4	2	
<i>Betula</i>	カハノキ属	1	-	1	-	1	1	1	-	-	-	-	-	-	1	-	
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	3	-	1	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	1	
<i>Fagus</i>	ブナ属	1	-	-	-	1	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	25	-	10	-	12	1	8	-	-	2	5	5	4	4	16	
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	19	-	48	-	25	9	30	-	-	21	64	29	9	55	67	
<i>Castanea</i>	タリ属	13	-	70	-	50	5	6	1	-	23	37	80	157	53	19	
<i>Castanopsis - Paeonia</i>	シイノ木属-マケハシイ属	4	-	15	-	11	-	2	-	-	2	4	26	2	3	10	
<i>Ulmus - Zelkova</i>	エスレ属-ケヤキ属	2	-	2	-	2	-	3	-	-	-	1	-	-	4	3	
<i>Celtis - Aphananthe</i>	エノキ属-ムクノキ属	5	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	2	1	
<i>Phellodendron</i>	キハヤブ属	5	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
<i>Rhus - Toxicodendron</i>	スズノ木属-ウルシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	
<i>Ilex</i>	ホトチノ木属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	
<i>Asclepias</i>	トチノ木属	-	-	1	-	1	-	3	-	-	15	3	-	3	9	9	
<i>Vitis</i>	ブドウ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Parthenocissus</i>	ツタ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
<i>Artocarpus</i>	ウコギ科	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	
<i>Oleaceae</i>	モクセイ科	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Calycarpus</i>	ムラサキシキブ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	
<i>Lonicera</i>	スイカズラ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
葎木																	
<i>Alisma</i>	サジメモダカ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
<i>Sagittaria</i>	ホモダカ属	-	-	1	-	1	-	2	-	-	-	10	6	2	-	-	
<i>Gnaphalium</i>	イネ科	423	-	75	-	95	21	99	-	-	16	20	6	9	95	18	
<i>Cyperaceae</i>	カヤツリグサ科	5	-	2	-	2	2	6	-	-	3	-	1	-	1	-	
<i>Asteraceae</i>	イボクサ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
<i>Moraceae</i>	タワウソ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	5	-	
<i>Ranaceae</i>	ギンギョリ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	サナギタカ目-ウナギツカ目	2	-	2	-	-	1	1	-	-	-	-	1	1	2	-	
<i>Echinochloa</i>																	
<i>Polygonum sect. Reynoutria</i>	イタドリ目	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Fagopyrum</i>	フナ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Chenopodiaceae - Amaranthaceae</i>	アザミ科-ヒユ科	4	-	-	-	3	-	-	-	2	1	-	1	1	5	2	
<i>Portulaca</i>	スベリヒユ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Caryophyllaceae</i>	ナデシコ科	17	-	-	-	8	2	2	-	-	1	1	-	-	3	-	
<i>Brassicaceae</i>	アブラナ科	5	-	4	-	11	2	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
<i>Leguminosae</i>	マメ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
<i>Impatiens</i>	フリフソウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	1	1	5	-	-	
<i>Rutaceae</i>	キシシブ科	5	-	2	-	8	-	1	-	-	1	1	-	-	-	-	
<i>Aplousaceae</i>	セリ科	1	-	2	-	-	-	1	-	-	-	-	4	-	2	1	
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	7	-	4	-	-	9	-	-	1	33	3	3	1	26	19	
<i>Tubulariaceae</i>	キク亜科	4	-	2	-	-	1	-	-	-	-	2	1	-	5	1	
<i>Liguliflorae</i>	タンポポ科	11	-	8	-	9	6	1	-	-	-	1	-	-	4	-	
シダ植物																	
monolete type spore	単条溝胞子	8	-	109	-	12	9	6	-	-	1	1	-	-	13	-	
trilete type spore	三条溝胞子	13	-	20	-	10	1	1	-	-	1	-	-	-	2	1	
Arboreal pollen	樹木花粉	205	-	212	-	126	26	208	2	-	201	237	206	207	222	200	
Nonarboreal pollen	草本花粉	489	-	102	-	137	34	125	-	-	4	61	40	26	19	149	41
Spores	シダ植物胞子	21	-	129	-	22	10	7	-	-	1	2	-	-	-	15	1
Total Pollen & Spores	花粉・胞子総数	715	-	443	-	285	70	340	2	-	7	364	277	232	226	286	242
unknown	不明	2	-	6	-	-	-	-	-	-	-	10	2	2	-	4	8

写真を写真4に載せた。

②プラント・オパール分析

秤量した試料を乾燥後、再び秤量する(絶対乾燥重量測定)。別に試料約1g(秤量)をトールビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ(直径約0.04mm)を加える。これに30%の過酸化水素水を約20~30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波洗浄機による試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残液よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定及び計数は、機動細胞珪酸体由来するプラント・オパールについて、ガラスビーズが300個に達するまで行った。また、植物珪酸体の写真を撮り、写真5に載せた。

(4)結果

①花粉分析

16試料から検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉30、草本花粉22、形態分類のシダ植物胞子2の、総計54である。これらの花粉・胞子の一覧表を付表11に、花粉分布図を第73図に示した。花粉分布図において、樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を基数とした百分率、草本花粉と胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。また、図及び表においてハイフン(-)で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。さらに、クワ科とマメ科の花粉には樹木起源と草本起源の分類群があるが、各々に分けるのが困難なため、便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

検鏡の結果、6試料(2地点のNo.1、No.3、No.6、4地点のNo.1、No.3、No.5)では十分な量の花粉化石が得られなかった。十分な量の花粉化石が得られた試料では、層位によって樹木花粉の組成が異なっており、弥生時代後期から飛鳥時代あたりの層準ではスギ属やコナラ属アカガシ亜属が、鎌倉時代~室町時代の層準ではマツ属複雑管東亜属の産出が目立つ。また、クリ属は1地点の1地点の流路N R7100のNo.3~5、4地点のNo.2、No.4で産出が目立つ。

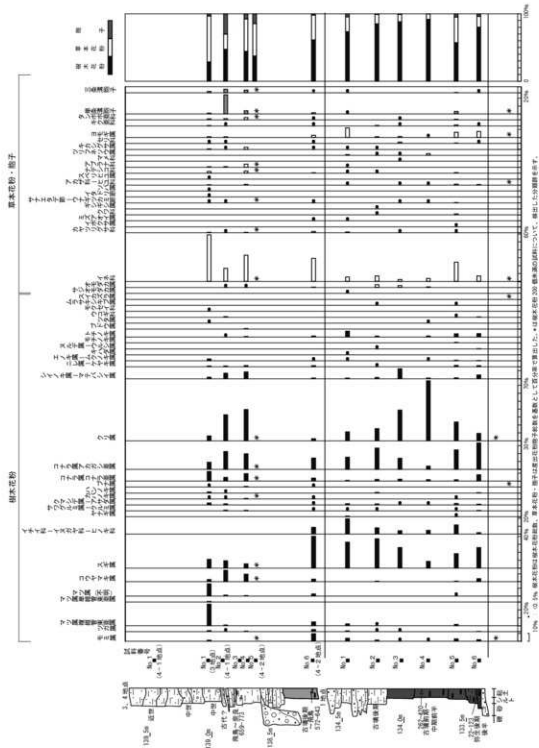
②プラント・オパール分析

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め(付表12)、分布図に示した(第74図)。

4地点の6試料を検鏡した結果、イネ機動細胞珪酸体とネザサ節型機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪酸体、ヨシ属機動細胞珪酸体、シバ属機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の7種類の産出が確認できた。また、No.2ではイネの稃殻に形成される珪酸体(イネ穎破片)の産出も確認された。イネ機動細胞珪酸体は全ての試料から産出しており、No.6からNo.4では上位層準に向かって増加する。ネザサ節型機動細胞珪酸体も全ての試料から産出しており、No.5から上位層準に向かって減少する。ヨシ属機動細胞珪酸体はNo.1とNo.2で産出が確認された。

(5)考察

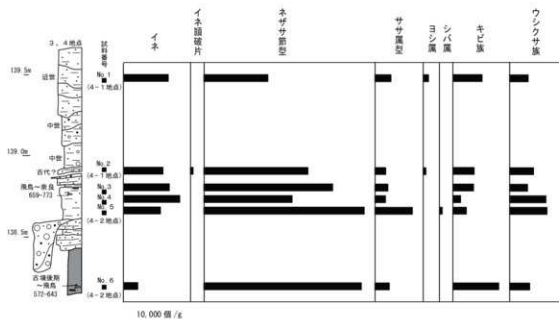
弥生時代後期後半から古墳時代後期までの層位的に連続した分析結果が得られている1地点の流路N R7100では、スギ属の産出が目立ち、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科やモミ属を伴って



第73図 犬飼遺跡における土層分析図

付表12 4-1、4-2地点の試料1g当たりのプラント・オパール個数

	イネ (個/g)	イネ類破片 (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	ササ属型 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
No.1	21,200	0	29,900	7,500	2,500	0	13,700	8,700	13,700
No.2	18,700	1,200	48,700	5,000	1,200	0	10,000	11,200	26,200
No.3	21,700	0	60,300	6,000	0	0	9,700	8,400	14,500
No.4	26,700	0	41,300	4,900	0	0	3,600	17,000	13,400
No.5	17,500	0	75,100	17,500	0	1,300	6,300	17,500	38,800
No.6	6,700	0	73,800	6,700	0	0	21,500	9,400	29,500



第74図 4地点における植物珪酸体分布図

る。よって、当該期のN R7100周辺の台地などには、スギ林を主体する温帯性針葉樹林が分布していたと考えられる。また、コナラ属アカガシ亜属の産出も目立ち、シノキ属・マテバシイ属を伴っているため、カシ類やシイ類からなる照葉樹林も分布を広げていたと考えられる。こうしたなか、古墳時代前期～中期のNo.4 (17層)では、クリ属が突出した産出率を示しており、クリ属の花粉塊も検出された(写真4-4)。クリ花粉については散布状況が詳細に調べられており、ほとんどの花粉がクリ林内に落下し、広範囲に散布されにくいという実証的なデータがある(吉川, 2011)。クリ花粉の散布の特性やクリ属花粉塊の検出を踏まえると、No.4 (17層)におけるクリ属花粉の高い産出率は、古墳時代前期～中期には流路N R7100のすぐそばにクリ林が存在していた可能性を示唆する。

草本花粉では、全ての試料でイネ科とヨモギ属が産出しており、NR7100周辺に分布していたと考えられる。また、No.4(17層)より上位層準では、サジオモダカ属やオモダカ属、ミズアオイ属、ツリフネソウ属、キサシグサ属といった好湿性植物が産出する。同一試料で行われた珪藻分析の結果によると、流路基底部のNo.6(19層底部)からNo.4(17層)にかけて水位が上昇し、No.4(17層)からNo.1(10層)にかけては水位が低下していたと考えられている(珪藻分析の項参照)。好湿性植物が多く産出する層準は水位が低下する時期であり、水位の低下によって上記の好湿性植物が生じやすい湿潤な環境が成立したと考えられる。

一方で、NR7100と同様の流路埋積層である2021年度調査区のL地区の流路NR10030(2地点)では、十分な量の花粉化石が得られなかった。一般的に、花粉は湿乾を繰り返す環境に弱く、酸化的環境下で堆積すると紫外線や土壌バクテリアなどによって分解され、消失してしまう。したがって、堆積物が酸素と接触する機会が多い堆積環境では、花粉化石が残りにくい。珪藻分析においても、2地点の流路NR10030の3試料からは珪藻化石が得られておらず、乾燥の環境であったと推測されている(珪藻分析の項参照)。流路NR10030を埋積する分析層準の時期には、流路内が酸化的環境であったと考えられる。

2021年度調査区のM地区の古墳時代後期～飛鳥時代の堆積層の4-1地点のNo.6(21層)の樹木花粉をみると、古墳時代後期～飛鳥時代においても、2020年度調査区のNR7100で得られた古墳時代前期～中期と同様な樹木植生が広がっていた可能性がある。すなわち、スギ属を主体にイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科やモミ属を伴う温帯性針葉樹林が成立しており、カシ類やシイ類からなる照葉樹林も分布を広げていたと考えられる。しかしながら、その上位層の飛鳥時代～奈良時代のNo.4(12層中部)や中世のNo.2(28層)になると、スギ属やイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、モミ属は減少し、コナラ属アカガシ亜属やシイノキ属-マテバシイ属が増加している。この分析結果から、飛鳥時代～奈良時代及びその時期以降には、スギ属を主体とする温帯性針葉樹林の分布が縮小し、カシ類とシイ類からなる照葉樹林の分布が拡大していた可能性がある。さらに、No.4(12層中部)とNo.2(28層)においてもクリ属が増加しており、飛鳥時代～奈良時代及びその時期以降には、M地区近傍にクリ林が分布していた可能性がある。

4地点の草本類では、イネ科の産出率が高い。4地点の調査区基本層序ではプラント・オパール分析を行ったため、イネ科についてはプラント・オパール分析の結果に基づいて検討する。4地点では、いずれの試料においてもイネ機動細胞珪酸体やネザサ節型機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体が産出した。このうち、一定方向の産出傾向が見られたのが、イネとネザサ節型の機動細胞珪酸体である。イネ機動細胞珪酸体はNo.6(21層)からNo.4(12層中部)にかけて増加しており、No.4(12層中部)以上の層準においても比較的高い産出量を示している。一方で、ネザサ節型機動細胞珪酸体はNo.5(12層下部)から上位層準に向かって減少傾向を示している。なお、発掘調査では、12層上部で畦畔状の遺構が検出され、水田面に相当すると判断できる。さらに、層相観察結果から、No.1(近世)、No.2(古代頃)は、耕作土と考えられている。こうした植物珪酸体の産出傾向と堆積環境を考慮してイ

ネ科植物相の変遷を考えると、次のようになる。

古墳時代後期～飛鳥時代の氾濫原にはネザサ節型のササ類が生育しており、NR7100周辺には、水田もしくはイネが持ち込まれるような領域が存在していた可能性がある。そして、古墳時代後期～飛鳥時代以降になると、氾濫原のネザサ節型のササ類は次第に分布を縮小し、イネが多く堆積するようになる。このようなイネ科草本の群集変化は、大飼遺跡での発掘調査成果をふまえると、2020年度、2021年度調査区で検出された谷状の氾濫流路内ないしその近傍での、水田を中心とする耕作地開発と連動していると推定される。

2021年度調査区のM地区では、年代測定結果から飛鳥時代～奈良時代には水田が形成され、水田作土相当層準においてイネ機動細胞珪酸体が集積する。さらに当該期には、水田周辺にネザサ節型のササ類も分布しており、ネザサ節型機動細胞珪酸体も堆積していた。近世と古代頃のNo.1とNo.2の耕作土においてもイネ機動細胞珪酸体が産出している。耕作土からイネ機動細胞珪酸体が検出される要因としては、水田作土以外にも、耕作土で陸稲が栽培されていた可能性や、保温や施肥のために稲藁が持ち込まれていた可能性、水田が畑に転用された可能性など、いくつかの可能性が考えられる。また、No.1とNo.2の耕作土にはヨシ属機動細胞珪酸体の産出も認められるため、耕作土の堆積時には、周辺にヨシ属が生育できる湿地的環境の場所も存在していた可能性がある。

包含層(中世遺構面)である12世紀～13世紀に埋没した3地点では、マツ属複雑管束亜属の産出が目立つため、当該期にはニヨウマツ類からなる二次林が形成されていた可能性が高い。草本花粉では、イネ科が多産し、水田雑草を含む分類群としても知られるキカシグサ属を伴うため、3地点の包含層(中世遺構面)周辺に水田が存在していた可能性がある。また、ソバ属の産出も確認でき、周辺でソバ栽培が行われていた可能性がある。

なお、以上に述べた花粉分析の結果と、過去に大飼遺跡第2・3次で行われた花粉分析の結果(京都府埋蔵文化財調査研究センター、2022)を比較すると、より詳細な植生変遷がみえてくる。すなわち、以前に行われたC区の開析谷NR50及び堀S D01の分析結果では、古墳時代前期後半～奈良時代から13世紀後半～14世紀のどこかでスギ属の減少が起こったとされていたが、今回の4地点の分析結果を見ると、スギ属の減少は古墳時代後期から奈良時代の間のどこかで起こっていたとわかる。また、以前の分析結果では、マツ属複雑管束亜属の増加が13世紀後半～14世紀のS D01で確認される。今回の分析により、マツ属複雑管束亜属の増加は、既に12世紀～13世紀に増加傾向にあった状況が判明した。なお、ハンノキ属の産出率は前回の第2・3次と今回の分析地点では異なっており、第2・3次のS D01で産出率が高い。よって、ハンノキ属はS D01周辺の局地的な植生であった可能性がある。さらには、今回の調査区で確認されたクリ属の高率は第2・3次の分析では確認されておらず、クリ属も局地性が高い植生であったと考えられる。

(パレオラボ＝森 将志)

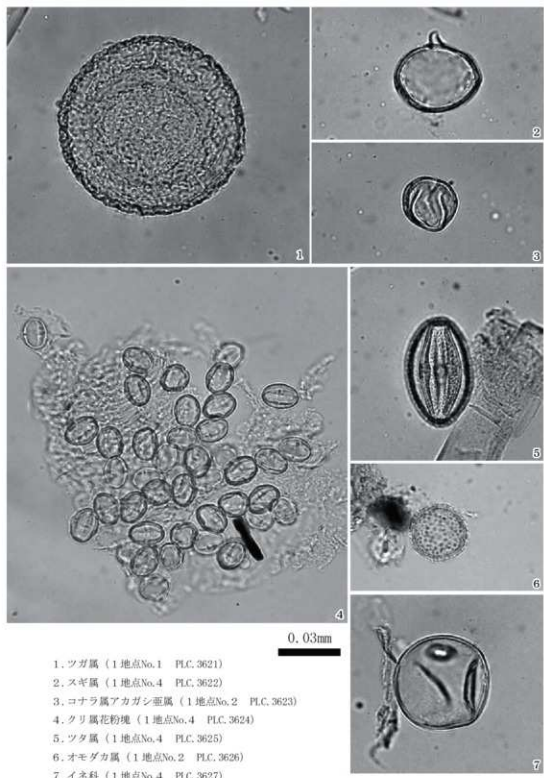


写真4 産出した花粉化石

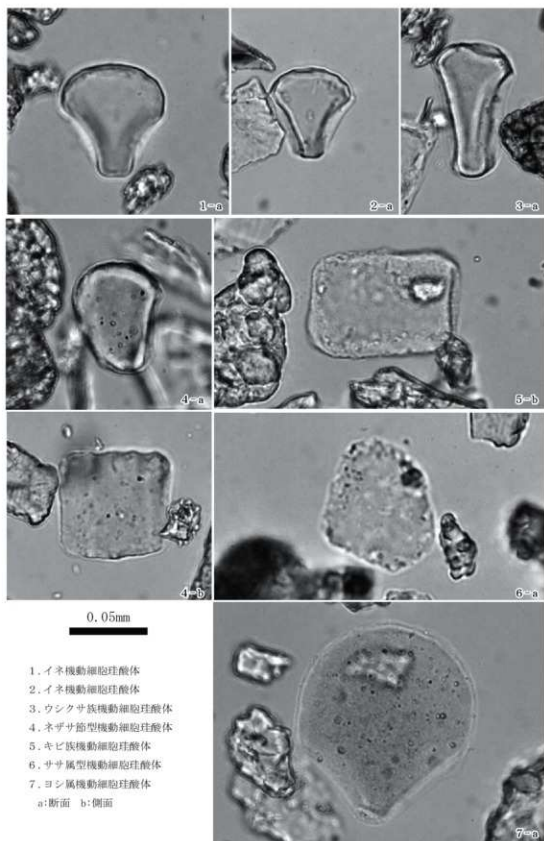


写真5 4地点No.2から産出した植物珪酸体

3) 珪藻分析

(1) はじめに

2020年度、2021年度調査区で採取された試料について、珪藻分析を行った。なお、同じ堆積物試料から得られた試料を用いて花粉分析、大型植物遺体分析、放射性炭素年代測定も行われている(別項参照)。

(2) 試料と処理方法

分析対象は、犬飼遺跡の3地点から採取された堆積物試料計10点である(付表13)。今回の分析試料の一覧については、放射性炭素年代測定の報告の付表3に示す。また、分析試料の採取層準と堆積状況や岩質などについては、放射性炭素年代測定の報告の第67図と写真1-1～写真3-16に示している(放射性炭素年代測定の項参照)。

各試料について以下の処理を行い、珪藻分析用プレパラートを作製した。(1)

乾燥させ、秤量した試料をビーカーに移し、30%過酸化水素水を加えて加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。(2)反応終了後、水を加え、1時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。(3)遠心管に回収した懸濁残渣をシリンジで適量取り、カバーガラスに滴下し、乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入し、プレパラートを作製した。

プレパラートを顕微鏡下200倍で予察したところ、2地点の3試料からは珪藻殻がほぼ産出せず、1地点の3試料は珪藻殻が希薄であった。

(3) 結果

各試料の計数を行ったところ、1地点と3地点の試料では、乾燥重量1gあたりの珪藻殻数が $7 \times 10^2 \sim 1 \times 10^6$ 個と見積もられた。2地点の試料では、破片となった*Synedra ulna*が検出されたが、非常に希薄であった。検出した珪藻は31属50種52分類群に同定された。計数結果は付表14のとおりである。10殻以上を検出した珪藻の写真を写真6に付す。各試料について順に特徴を述べる。種の特徴の説明にあたっては、主に小杉(1988)及び安藤(1990)が設定し、千葉・澤井(2014)により再検討された環境指標種群(付表15)を用いている。

1地点の産出結果を第75図に珪藻ダイアグラムとしてまとめた。ただし、100殻に満たない試料を含むため、統計的には意味を持たない産出傾向として理解されたい。1地点の1層(以下1-1と表記。他試料も同様に表記する)は、堆積物の乾燥重量1g中の珪藻殻数は 7×10^2 個で、非常に希薄であった。22個の珪藻殻を検出し、その半数を占める*Synedra ulna*をはじめ、大半の珪藻殻は破片で産出した。1-2でも21個で産出が少なく、1-1では確認されなかった沼沢湿地付

付表13 試料リスト

分析NO.	地点	遺構	試料番号	層位	計量(g)	
1	1地点	自然流路	NR 7100	1	10層	0.35
2				2	12層	0.33
3				3	15層	0.31
4				4	18層	0.25
5				5	19層	0.32
6				6	19層	0.36
7	2地点	自然流路	NR 10030	1	15層	0.38
8				3	16層	0.36
9				6	17層	0.42
10	3地点	中世遺構面		1	24層	0.39

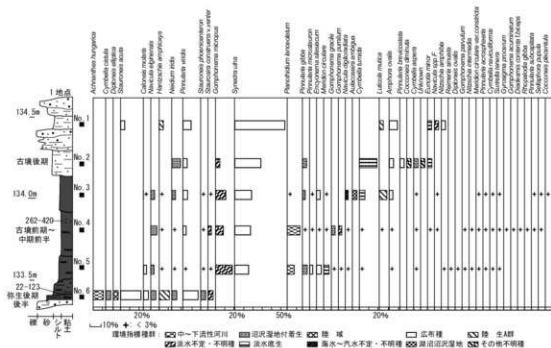
付表14 堆積物中の珪酸化石産出表(種群は、千葉・澤井2014による)

分類群		1.1	1.2	1.3	1.4	1.5	1.6	2.1	2.3	2.6	3.1
1	<i>Phocopspha</i> <i>abbreviata</i>	C1									1
2	<i>Nitroclava</i> <i>digitiformis</i>	U2		3	4	1					3
3	<i>Nitroclava</i> <i>brevispinis</i>	U3									1
4	<i>Cicciocella</i> <i>plumbicella</i>	F		1							1
5	<i>Cymbella</i> <i>taxicola</i>	F		4	6	9	4				12
6	<i>Elonoria</i> <i>minor</i>	F	1	1		8					2
7	<i>Merklinia</i> <i>circulata</i>	F			2	9	10				1
8	<i>Stilpnotera</i> <i>papula</i>	F			1	3					5
9	<i>Diploneis</i> <i>ovata</i>	F					1				
10	<i>Achnanthes</i> <i>longiraris</i>	K						2			
11	<i>Merklinia</i> <i>circulata var. varicosinervis</i>	K		1	1	2					
12	<i>Pleurodictyon</i> <i>leucodanum</i>	K		1	42	13					5
13	<i>Achnanthes</i> <i>stansata</i>	K					1				
14	<i>Stauroneis</i> <i>apiculata</i>	N									
15	<i>Achnanthes</i> <i>ambigua</i>	N		5							
16	<i>Cymbella</i> <i>distalis</i>	O					1				
17	<i>Gomphonema</i> <i>acuminatum</i>	O									
18	<i>Gomphonema</i> <i>gracile</i>	O			12	1					
19	<i>Nitroclava</i> <i>digitiformis</i>	O		4	20	6	1				8
20	<i>Nitroclava</i> <i>ovata</i>	O	2	4	6	3	1				10
21	<i>Planolonia</i> <i>acroplicata</i>	O		1	8	5					
22	<i>Planolonia</i> <i>gibba</i>	O	1	3	9	9					4
23	<i>Stauroneis</i> <i>plumbicostriata</i>	O		2	7	5	1				9
24	<i>Cymbella</i> <i>aspera</i>	O	1	1	1	1					
25	<i>Diploneis</i> <i>obliqua</i>	Q						1			3
26	<i>Ilmenkia</i> <i>amphioxys</i>	Qs	1	1	6	3	2				
27	<i>Leptocleis</i> <i>maackii</i>	Qs	1	8	5						
28	<i>Ilmenkia</i> <i>costata (Shiroya)</i>	Qs			3						
29	<i>Planolonia</i> <i>subcapitata</i>	Qb			1	1					
30	<i>Cladopora</i> <i>ovata</i>	W	2	1	4	5	5				18
31	<i>Calanella</i> <i>maackii</i>	W		2	2	6	1				9
32	<i>Cymbella</i> <i>anticalifornica</i>	W		2	4	2					5
33	<i>Acrostoma</i> <i>obtusatum</i>	W		4	6	9					7
34	<i>Gomphonema</i> <i>parvulum</i>	W			3	1					
35	<i>Gomphospha</i> <i>procerum</i>	W			1						5
36	<i>Nitroclava</i> <i>amphioxys</i>	W	1			1					1
37	<i>Nitroclava</i> <i>attenuata</i>	W			2	2					5
38	<i>Planolonia</i> <i>brevispinis</i>	W	1								1
39	<i>Planolonia</i> <i>microstoma</i>	W		1	5	6					5
40	<i>Planolonia</i> <i>stans</i>	W	2	1	5	11	5	3			14
41	<i>Altopedidia</i> <i>gibba</i>	W			1						13
42	<i>Stauroneis</i> <i>acuta</i>	W	1					4			2
43	<i>Stauroneis</i> <i>tenax</i>	W			2	6	4				7
44	<i>Stauroneis</i> <i>alta</i>	W	12	6	18	33	26		1	1	14
45	<i>Popillaria</i> <i>capitata</i>	U5									
46	<i>Gomphonema</i> <i>maackii</i>	U5		1	11	26	31				7
47	<i>Gomphonema</i> <i>parvulum</i>	U5				11	3				1
48	<i>Nitroclava</i> <i>sp. F</i>	U5	1		1	3					18
49	<i>Stauroneis</i> <i>costriata var. minor</i>	U5			2	11	4	1			2
50	<i>Epithemia</i> <i>sp. F</i>	U5									2
51	<i>Altopedidia</i> <i>operculata</i>	U6									3
52	<i>Cocconeis</i> <i>obovata</i>	U6		1							
53	<i>ankonora</i>	U6		1							1
1	基本定群	C1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2	準一汽水不足、不明種	U2	0	0	3	4	1	0	0	0	3
3	汽水不足、不明種	U3	0	0	0	0	0	0	0	0	2
4	汽水定群	F	1	5	10	29	15	0	0	0	21
5	準一汽水定群	N	0	0	2	43	16	2	0	0	5
6	汽水定群	N	0	0	5	0	0	0	0	0	0
7	汽水定群	O	0	1	15	65	30	4	0	0	31
8	群 域	Q	0	0	0	0	0	1	0	0	3
9	群 域	Qs	2	0	9	14	3	2	0	0	6
10	群 域	Qb	0	0	1	1	0	0	0	0	0
11	広布群	W	18	9	38	92	62	8	1	1	106
12	汽水不足、不明種	U5	1	1	14	34	28	1	0	0	32
13	その他不明種	U6	0	2	0	0	0	0	1	0	4
1	基本群		0	0	0	0	0	0	0	0	1
2	準一汽水群		0	0	3	4	1	0	0	0	3
3	汽水群		0	0	0	0	0	0	0	0	2
4	汽水群		22	19	91	300	169	18	1	1	204
	合計		22	21	97	304	170	18	2	1	214
	有機物 1g中の個数 (個)		7.8E+02	1.8E+04	2.8E+05	1.2E+06	3.8E+05	3.8E+03	3.8E+02	2.8E+02	6.8E+04

付表15 環境指標種群と本分析で産出した種

種群名(以下、「指標種群」を略す)	環境指標となる現生種の出現環境や生態学的特徴など	本分析で産出した[代表種]・主要構成種・「標識種」・不定	
海水藻場	C1	塩分が12%以上の水域の海藻に付着する(アマモなど)	<i>Rhoicosphenia abbreviata</i>
海～汽水不定・不明種	U2	海域から汽水域に出現するが、種まで同定できなかった分類群や生態未詳な種	-
汽水不定・不明種	U3	汽水域に出現するが、種まで同定できなかった分類群や生態未詳な種	-
淡水底生	F	塩分が2%以下の淡水域の底質や水草に付着(河岸や湖畔)	<i>Cocconeis placentula</i> , <i>Cymbella tumida</i> , <i>Meridion circulare</i> , <i>Sellaphora pupula</i>
中～下流性河川	K	中下流域に出現する(河川沿いの河成段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地)	<i>Meridion circulare var. constricta</i> , <i>Planotidium lanceolatum</i> , <i>Reimeria sinuata</i>
湖沼沼沢湿地	N	湖沼において浮遊性種及び付着性種として優占する	<i>Aulicoseira ambigua</i> *
沼沢湿地付着生	O	水深が1.0m内外で、湿地及び植物が一面に繁茂している沼沢湿地において、付着状態で生育する	<i>Cymbella cistula</i> , <i>Gomphonema acuminatum</i> , <i>Gomphonema gracile</i> , <i>Navicula eginensis</i> , <i>Neidium iridis</i> , <i>Pinnularia acrospheria</i> , <i>Pinnularia gibba</i> , <i>Stauroneis phoenicenteron</i> , <i>Cymbella aspera</i>
陸域	Q	ジメジメとした湿り気のある陸域に生息する	<i>Dipleoneis elliptica</i>
陸生A群	Qa	耐乾性が強い	<i>Hantzschia amphioxys</i> , <i>Luticola mutica</i> , <i>Dudesmis contenta</i> , <i>I. biceps</i>
陸生B群	Qb	陸生A群に随伴し、湿った環境や水中にも生育する	<i>Pinnularia subcapitata</i>
広布種	W	淡水域に生育し、生態に幅のある種	<i>Pinnularia viridis</i>
淡水不定・不明種	U5	淡水域域に出現するが、種まで同定できなかった分類群や生態未詳な種	-
不明種	U6	生育域はじめの生態情報が得られなかった種	-

- ・代表種：その環境のみにも出現し、かつ高率である種
- ・主要構成種：他の環境にも出現するが、その群集において主要な構成要素となる種
- ・標識種：高率には出現しないが、その環境の良い指標となる種
- ・不定：千葉・澤井(2014)で記載されたが上記には属さない種



第75図 1地点の珪藻ダイアグラム

着生指標種群(O)の珪藻が産出した。珪藻殻数は 4×10^4 個とである。1-3は97個の珪藻殻を検出し、珪藻殻数は 2×10^5 個であった。淡水底生指標種群(F)と沼沢湿地付着生種群(O)、広布種(W)の珪藻が多く見られた。1-4は、今回の分析では唯一300個を超える珪藻殻が計数できた試料であり、珪藻殻数は 1×10^6 個であった。中～下流性河川指標種群(K)と沼沢湿地付着生種群(O)、広布種(W)の珪藻が多く見られた。1-5では170個の珪藻を検出し、珪藻殻数は 3×10^5 個であった。産出数は少ないが、1-4と似た産出傾向であった。1-6は珪藻殻数が 3×10^3 個と少なく、18個の珪藻を検出した。2-1では、*Synedra ulna*が1個と同定できなかった珪藻殻が1個の計2個、2-3では*Synedra ulna*を1個検出し、2-6では珪藻が検出されなかった。3-1では214個の珪藻を検出し、珪藻殻数は 3×10^6 個であった。淡水底生指標種群(F)と沼沢湿地付着生種群(O)、広布種(W)の珪藻が多く見られた。広布種の中では、*Amphora ovalis*、*Pinnularia viridis*、*Rhopalodia gibba*、*Synedra ulna*が多く産出している。渡辺ほか(2005)によれば、*Amphora ovalis*は好清水性種で好アルカリ性種、止水域にも流水域にも出現する種であり、*Synedra ulna*は好アルカリ性で流水域に生育する普遍種とされる。*Pinnularia viridis*と*Rhopalodia gibba*は、どちらも汚濁に対しては広適応性、pHに関しては中性種とされる。

(4)考察

2020年度調査区で検出された自然流路のNR7100(1地点)の埋積層を採取した1地点では珪藻殻の産出数が少なく、統計的に評価できない試料が多いが、淡水底生種(F)や沼沢湿地付着生種(O)の産出は水深が浅い環境を示唆している。珪藻殻数の増減から、流路底部の19層(1-6)から流路埋積層中部の18層(1-4)にかけて水位が上昇し、18層(1-4)から10層(1-1)にかけては水位が低下していったと考えられる。

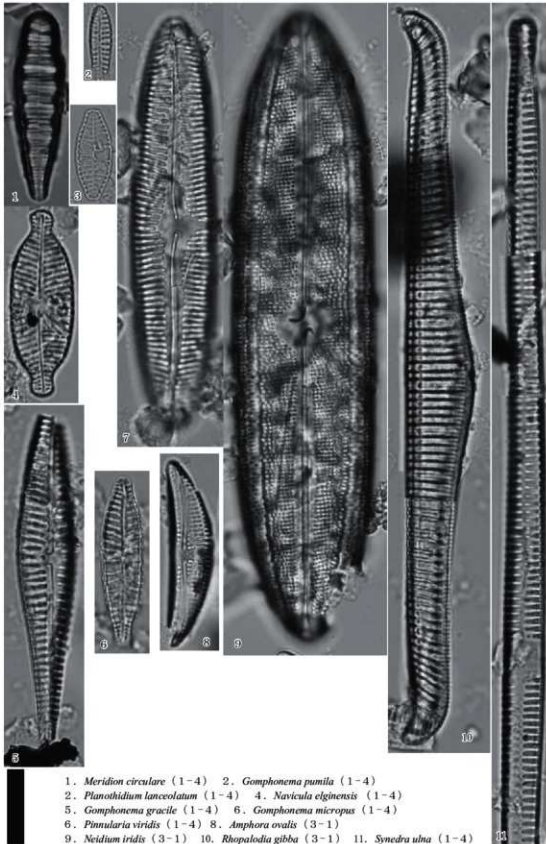
2021年度調査区のL地区で検出された自然流路のNR10030(2地点)の埋積層は、珪藻がほぼ産出しない産状から、珪藻の生息しない陸域の堆積物であると考えられる。3個の珪藻殻が検出されたが、偶然入り込んだ殻を計数していると考ええる。

2021年度調査区のM地区の12世紀～13世紀に埋没した中世遺構面の埋積層(3地点)は、淡水底生指標種群(F)と沼沢湿地付着生種群(O)、広布種(W)の珪藻の産出から、水深が浅い環境であったと考えられる。広布種のうち多産した4種(*Amphora ovalis*、*Pinnularia viridis*、*Rhopalodia gibba*、*Synedra ulna*)の生態を考慮すると、「水の流れがあつてきれいな弱アルカリ性水域」が推定されるが、具体的な環境は未詳である。

(5)おわりに

珪藻分析の結果、NR7100(1地点)では水深の浅い流路で、堆積開始時には水位・水量は上昇・増加傾向にあり、珪藻殻数が最多となる17層が堆積するため、17層から10層にかけて水位が低下傾向に変化したと考えられる。NR10030(2地点)では珪藻がほとんど産出しないため、陸域の堆積物であると考えられる。12世紀～13世紀に埋没したSD10007など溝群の検出層(3地点)では、水の流れがあつてきれいな弱アルカリ性水域であったと推定された。

(バレオ・ラボ=石川 智)



1. *Meridion circulare* (1-4) 2. *Gomphonema pumila* (1-4)
 3. *Planothidium lanceolatum* (1-4) 4. *Navicula elginensis* (1-4)
 5. *Gomphonema gracile* (1-4) 6. *Gomphonema micropus* (1-4)
 7. *Pinnularia viridis* (1-4) 8. *Amphora ovalis* (3-1)
 9. *Neidium iridis* (3-1) 10. *Rhopalodia gibba* (3-1) 11. *Synedra ulna* (1-4)

写真6 産出した珪藻殻(括弧内は撮影した試料)

4) 大型植物遺体分析

(1) はじめに

2020年度、2021年度調査区での古環境復元を目的として、堆積物試料が採取された。以下では、試料について行った大型植物遺体分析の結果を示し、遺跡周辺の古植生について検討した。

(2) 試料と方法

分析試料は、1地点の流路NR7100から採取された弥生時代後期後半のNo.6と、古墳時代前期～中期のNo.4、古墳時代後期のNo.2の3試料、4地点の飛鳥時代～奈良時代のNo.3、3地点の中世遺構面のNo.1の、計5試料である。

なお、分析試料の一覧については、放射性炭素年代測定の結果の付表3に示す。また、分析試料の採取層率と堆積状況や岩質などについては、放射性炭素年代測定の結果の写真1-1から写真3-16に示している(放射性炭素年代測定の項参照)。

試料は、パレオ・ラボにて各試料200ccを最小0.5mm目の篩を用いて水洗した。大型植物遺体の抽出及び同定は、実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。その他の同定困難な微細な破片、小穂軸以外の穂殻、芽、昆虫遺体の破片は、おおよその数を記号(+)で示した。同定された試料は、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターに保管されている。

(3) 結果

同定した結果、木本植物では針葉樹のモミ葉1分類群、広葉樹のキイチゴ属核とカジノキ属核、クワ属核、クリ果実、アカメガシワ種子、イイギリ種子、サンショウ種子、ヒサカキ属種子、マタタビ属種子、ムラサキシキブ属核、ニワトコ核、タニウツギ属種子、タラノキ核の13分類群、草本植物ではヘラオモダカ果実・種子とオモダカ属果実・種子、ホッソモ種子、ツクサ種子、イボクサ種子、コナギ種子、スゲ属アゼスゲ節果実、スゲ属A果実、スゲ属B果実、カワラスガナ果実、ヒメタグ果実、カヤツリグサ属果実、ホタルイ属果実、メヒシバ属有ふ果、ヒエ属有ふ果、イネ穂殻・炭化穂殻・炭化種子(穎果)、エノコログサ属有ふ果、イネ科炭化種子(穎果)、ムラサキケマン種子、タガラシ果実、キンボウゲ属果実、オランダイチゴ属-ヘビイチゴ属果実、カナムグラ核、クワクサ種子、カラムシ属果実、ミズ属果実、カタバミ属種子、エノキグサ属種子、スミレ属種子、タネツクバナ属種子、ヤナギタデ果実、サナエタデ-オオイヌタデ果実、イヌタデ果実、ボントクダテ果実、ミゾソバ果実、ギシギシ属果実、ノミノフスマ種子、ウシハコベ種子、アカザ属種子、スベリヒユ属種子、ツリフネソウ属種子、ナス種子、ナス属種子、オオバコ属種子、トウバナ属果実、シロネ属果実、エゴマ果実、シソ属果実、アザミ属果実、タカサブロウ果実、キツネアザミ属果実、アキノノゲシ属果実、コウゾリナ果実、メナモミ属果実、キク科果実、チドメグサ属種子、オトコエシ属果実、セリ果実の58分類群の、計72分類群が見いだされた。このほかに、科以上の詳細な同定ができなかった種実を不明A炭化種実とし、不明の芽は一括した。種実以外には、炭化子囊菌が含まれていた。また、不明昆虫遺体も得られたがここでは同定の対象外とした(付表16、第76図)。

以下に、大型植物遺体の産出傾向について、時期ごと、遺構別に記載する(不明炭化種実を除く)。

弥生時代後期後半 NR7100 No.6 : イネがやや多く、キイチゴ属とマタタビ属、ニワトコ、タラノキ、スゲ属アゼスゲ節、スゲ属B、ヒエ属、カラムシ属、ウシハコベが少量、アカメガシワとイイギリ、ヘラオモダカ、ヒメクグ、ミス属、スマレ属、タネツケバナ属、ヤナギタデ、イスタデ、ポントクタデ、ミゾソバがわずかに得られた。この他の分類群は、産出数が3点未満であった。

古墳時代前期～中期 NR7100 No.4 : ヘラオモダカが多く、ヒエ属とイネ、カラムシ属、タネツケバナ属がやや多く、クワ属とオモダカ属、イボクサ、コナギ、スゲ属アゼスゲ節、スゲ属A、ホタルイ属、ミス属、ヤナギタデ、ポントクタデ、ミゾソバ、ツリフネソウ属が少量、キイチゴ属とクリ、カナムグラ、スマレ属、イスタデ、ノミノフスマ、ナス属、シロネ属、シソ属、キツネアザミ属、メナモミ属、セリがわずかに得られた。この他の分類群は、産出数が3点未満であった。3点未満の分類群のうち、栽培植物としてはナスが得られた。

古墳時代後期 NR7100 No.2 : ヒエ属が多く、イネがやや多く、オモダカ属とイボクサ、コナギ、ヒメクグ、カヤツリグサ属、エノコログサ属、カラムシ属、ヤナギタデ、ノミノフスマが少量、キイチゴ属とヘラオモダカ、ホッスモ、カワラスガナ、ホタルイ属、オランダイチゴ属-ヘビイチゴ属、カナムグラ、ミス属、カタバミ属、スマレ属、タネツケバナ属、イスタデ、ウシハコベ、ツリフネソウ属、メナモミ属がわずかに得られた。この他の分類群は、産出数が3点未満であった。

飛鳥時代～奈良時代 4地点No.3 : キイチゴ属とアカメガシワ、イイギリがわずかに得られた。

中世 遺構面(包含層) No.1 : イネとオランダイチゴ属-ヘビイチゴ属、ノミノフスマ、チドメグサ属が少量、キイチゴ属とヘラオモダカ、ホッスモ、イボクサ、ヒメクグ、カヤツリグサ属、タネツケバナ属、サナエタデ-オオイスタデがわずかに得られた。この他の分類群は、産出数が3点未満であった。

次に、得られた主要な分類群の記載を行い、写真4に示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田(2003-)に準拠し、APGⅢリストの順とした。

①キイチゴ属 *Rubus spp.* 核 バラ科

赤褐色で、上面観は幅広の両凸レンズ形、側面観は先端が湾曲した腎形。表面には不定形な多角形状の稜による網目状隆線がある。長さ22mm、幅14mm。

②クワ属 *Morus spp.* 核 クワ科

黄褐色で、側面観はいびつな広倒卵形または三角状倒卵形、断面は卵形または三角形。背面は稜をなす。表面にはゆるやかな凹凸があり、厚く、やや硬い。基部に嘴状の突起をもつ。長さ21mm、幅15mm。

③クリ *Castanea crenata Sieb. et Zucc.* 果実 ブナ科

黒褐色で、完形ならば側面観は広卵形。表面は平滑で、細い縦筋がみられる。底面にある殻斗着痕はざらつくが、残存していない。残存高64mm、残存幅33mm。

付表16 出土した大型植物遺体(括弧内は破片数)

分類群	種名	地点			
		No.	1地点	3地点	42地点
			2	2R 700	中京遺跡群
水浸量(cc)	4	6	1	3	
雑草			200		
ホトケシザメ	根	3 (2)	5	31 (5)	2 (2)
カンゾウ根	根	(1)			(1)
タケノコ	根	1	5 (6)		
タケ	葉茎		(2)		
アオノボシ	種子			1 (2)	(1)
イモボシ	種子			(2)	(1)
サンシユウ	種子		(1)		
ヒヨクサ	種子				1
マツタケ	種子		1	4 (10)	
ムクゴキ	根	(1)		(2)	
ユウゴ	根			3 (10)	
チムラクサ	種子				1
チムラクサ	葉茎	(2)		1 (6)	
ヘクサ	種子	2 (1)	212 (18)	6	3
オモダマ	葉茎	22	19		
	種子	17	4		2
ホトケ	種子	2 (1)			1 (3)
ツムクサ	種子	2			3
イモボシ	種子	10	23	2	5
コナギ	種子	18	20		
スガ	葉茎	2	16	22 (3)	
スガ	葉茎		15		
スガ	葉茎			24	
カワラナ	葉茎	6			
ヒメナ	葉茎	15		4	9
ヒメナ	葉茎	27		1	3
ホトケ	葉茎	5	12 (1)	2	2
メヒシ	根茎			1	1
ヒメ	根茎	108 (12)	80 (2)	14 (6)	1
イモ	根茎	25 (***)	24 (***)	1 (***)	3 (***)
	炭化植物			(*)	6
	炭化種子 (顕微)				1 (5)
エノコ	炭化種子 (顕微)	9 (9)	2		
イモ	炭化種子 (顕微)				1
ムクゴキ	種子	(2)			
アザミ	葉茎				1
キン	葉茎	2			
オウゴン	葉茎	5 (2)	(1)		9 (10)
オウゴン	根	(1)	(3)		
タケノコ	種子	2		1	
カナム	葉茎	17 (1)	50 (11)	14 (3)	
ヒメ	葉茎	8 (1)	20	6	
カナム	種子	2 (2)	2	1 (1)	
エノコ	種子			(1)	
スミ	種子	4	3	1 (2)	(1)
チムラクサ	種子	3	94	3	6
ヤブ	葉茎	4 (11)	16 (9)	2 (2)	
ヤブ	葉茎				1 (2)
イモ	葉茎	3	5 (1)	3 (3)	
オウゴン	葉茎		9 (3)	3 (2)	
エノコ	葉茎	(1)	11 (25)	4 (6)	
ギン	葉茎		1		
ノミ	種子	19	3		26
カナム	種子	4 (2)	1	21 (4)	
アザミ	種子	(1)			
スミ	種子				1
ツリ	種子	1 (2)	2 (20)		
オウ	種子		(1)		
ナシ	種子	1	3 (1)	2	(2)
オウ	種子		1		
トウ	葉茎	1			
シロ	葉茎	2	3		
エノコ	葉茎		1		
シロ	葉茎		1 (2)		
アザミ	葉茎	(1)			
チムラクサ	葉茎				1
チムラクサ	葉茎	1	3		
アザミ	葉茎		1		
コウ	葉茎	1			
メヒシ	葉茎	2 (2)	5 (2)		
キノ	葉茎	1	2		
チムラクサ	種子	1			6 (1)
オウ	葉茎			1	
オウ	葉茎	1	6	1	
不明	炭化植物		(1)		
不明	炭		(*)		
不明	炭化植物	5			
不明	炭化植物		(**)		
不明	炭化植物		(***)		
不明	炭化植物		(***)		
不明	炭化植物		(***)		
不明	炭化植物		(***)		

*10-10-10-10-10-10

④マタタビ属 *Actinidia* spp. 種子 マタタビ科

濃赤褐色で上面観は長楕円形、側面観は倒卵形または楕円形。表面には五角形や六角形、円形、楕円形などの窪みが連なる規則的な網目状隆線がある。壁は薄く硬い。長さ1.7mm、幅1.2mm。

⑤ニワトコ *Sambucus racemosa* L. subsp. *sieboldiana* (Miq.) H.Hara 核 ガマズミ科

赤茶色で、上面観は扁平、側面観は倒卵形で基部がやや尖る。基部に小さな着点があり、縦方向にやや反る。表面は波状の凹凸が横方向に走る。長さ2.7mm、幅1.6mm。

⑥タラノキ *Aralia elata* (Miq.) Seem. 核 ウコギ科

赤褐色で上面観は扁平、側面観はやや四角い半円形。背面はなだらかな円弧状で厚みがあり、ざらつく。腹面は直線状で端部が突出する。稜に沿って網目状の構造がある。長さ2.1mm、幅1.4mm。

⑦ハラオモダカ *Alisma canaliculatum* A.Braun et C.D.Bouché 果実・種子 オモダカ科

果実は赤褐色で、上面観は扁平、側面観は倒卵形。周囲が肥厚し、中央は薄く、種子が透けて見える。長さ2.6mm、幅1.7mm。種子は濃赤褐色で、上面観は扁平、側面観は歪んだ長楕円形。着点突出する。長さ1.4mm、幅0.6mm。

⑧オモダカ属 *Sagittaria* spp. 果実・種子 オモダカ科

果実は淡黄褐色～赤褐色で、上面観は扁平、側面観は歪んだ倒卵形。翼は黄白色で、厚く柔らかく、弾力がある。長さ2.7mm、幅2.6mm。種子は褐色で、中心部がいびつなU字形をしている。長さ1.8mm、幅1.1mm。

⑨コナギ *Monochoria vaginalis* (Burm.f.) C.Presl ex Kunth 種子 ミズアオイ科

黄褐色で、上面観は円形、側面観は楕円形。表面には縦方向の低い隆起があり、隆起の間には横方向の線が密に入る。長さ1.1mm、幅0.6mm。

⑩スゲ属アゼスゲ節 *Carex* sect. *Carex* sp. 果実 カヤツリグサ科

暗褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は下端が窄まる楕円形。表面には微細な網目状隆線があり、先端は明瞭に突出する。長さ2.1mm、幅1.4mm。

⑪スゲ属A *Carex* sp. A 果実 カヤツリグサ科

濃赤褐色で、上面観は三稜形、側面観はやや下端が窄まる狭倒卵形。表面には微細な網目状隆線がある。長さ1.4mm、幅1.0mm。

⑫スゲ属B *Carex* sp. B 果実 カヤツリグサ科

暗褐色で、上面観は三稜形、側面観は広卵形。両端が徐々に細くなる。表面には微細な網目状隆線がある。長さ1.6mm、幅1.0mm。

⑬ヒエ属 *Echinochloa* spp. 有ふ果 イネ科

濃赤褐色で、紡錘形。縦方向に細かい筋がある。内穎は膨らまず、外穎は中央部が最も膨らむ。長さ2.9mm、幅1.8mm。那須(2017)に示された現生種の長幅比と比較すると、栽培型のヒエよりも野生植物のタイヌビエやヌビエの長幅比に近い。

⑭イネ *Oryza sativa* L. 籾殻・炭化籾殻・炭化種子(穎果) イネ科

稃殻は濃赤褐色で、上面観が楕円形、側面観が長楕円形。縦方向に明瞭な稜線があり、基部は突出する。表面には規則的な縦方向の顆粒状突起がある。長さ6.4mm、残存幅3.8mm。炭化種子(穎果)の上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形。下端の胚は残存していない。両面に縦方向の2本の浅い溝があるが、不明瞭。残存長4.0mm、幅2.5mm。

⑮エノコログサ属 *Setaria* spp. 有ふ果 イネ科

赤褐色で、上面観は楕円形、側面観は長楕円形で先端がやや突出する。アワよりも細長く、乳頭突起が畝状を呈する。長さ2.7mm、幅1.6mm。

⑯イネ科 *Poaceae* sp. 炭化種子(穎果)

上面観は楕円形、側面観は長楕円形。表面は平滑で下端に胚がある。長さ1.1mm、幅0.7mm。

⑰カラムシ属 *Boehmeria* sp. 果実 イラクサ科

赤褐色で、上面観は両凸レンズ形。側面観は上下が尖り、ゆがんだ円形。表面はざらつく。長さ1.1mm、幅0.8mm。

⑱ミズ属 *Pilea* spp. 果実 イラクサ科

赤褐色で、上面観は扁平。側面観は倒卵形で、両端がやや尖る。種皮は柔らかく、表面は平滑であるが、光沢はない。長さ1.2mm、幅0.8mm。

⑲ナス *Solanum melongena* L. 種子 ナス科

黄褐色で、上面観は長楕円形、側面観は楕円形。着点は明瞭に窪む。表面には畝状突起が覆瓦状となる細かい網目状隆線がある。長さ1.8mm、幅2.1mm。

⑳ナス属 *Solanum* spp. 種子 ナス科

赤褐色で、上面観は扁平、側面観は楕円形。表面には細かい畝状突起をもつ網目状隆線がある。長さ1.1mm、幅1.5mm。

㉑エゴマ *Perilla frutescens* (L.) Britton var. *frutescens* 果実 シソ科

濃赤褐色で、いびつな球形。端部にやや突出する着点がある。表面には不規則で多角形の低い網目状隆線がある。網目部分の周囲はわずかに凹む。長さ2.2mm、幅2.0mm。

㉒シソ属 *Perilla* spp. 果実 シソ科

赤褐色で、いびつな球形。端部に着点があり、表面には低い隆起で多角形の網目状隆線がある。エゴマ以外のシソ属である。長さ1.5mm、幅1.3mm。

㉓不明A Unknown A 炭化種実

破片のため全体形は不明。種皮は光沢があるが、識別可能な構造はなかった。残存長6.5mm、残存幅5.2mm。

(4)考察

流路や溝などから出土した大型植物遺体を同定した結果、草本植物を中心とした多種類の大型植物遺体が得られた。

以下、産出した大型植物遺体について、時期ごとに考察する。

自然流路N R 7100の弥生時代後期後半のNo.6 (19層)では、木本植物の産出数が少なく、草本

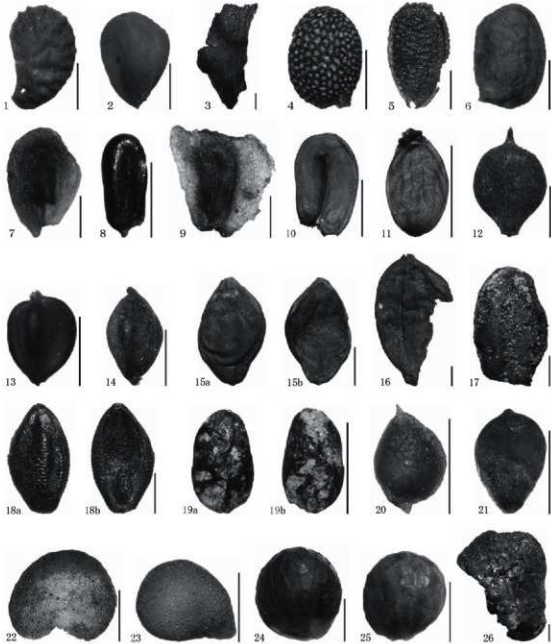
植物の産出数が多かった。草本植物では、栽培植物である水田作物のイネの糠殻が得られており、周辺から流れ込んで堆積した可能性がある。野生の草本植物では、湿った場所にヘラオモダカとイボクサ、スゲ属アゼスゲ節、スゲ属B、ヒメクグ、カヤツリグサ属、ホタルイ属、ヒエ属、タネツケバナ属、ヤナギタデ、ボントクタデ、ミゾソバ、セリ、比較的乾燥した場所にメヒシバ属とクワクサ、カタバミ属、エノキグサ属、スマレ属、イスタデ、ウシハコベ、ナス属、オトコエシ属などが生育していたと考えられる。また、林縁に生育する草本植物であるカラムシ属やミズ属などがみられ、林分が流路のごく近くに存在した可能性がある。木本植物では、高木のアカメガシワとイイギリ、小高木または低木のニワトコ、低木のキイチゴ属とムラサキシキブ属、タラノキ、つる植物のマクタブ属が得られており、これらの樹木が弥生時代後期の流路周辺に生育していたと考えられる。

自然流路N R7100の古墳時代前期～中期(18層)のNo.4と古墳時代後期のNo.2(10層)でも、草本植物の産出数が多かった。栽培植物では、水田作物のイネと畑作物のナスとエゴマが産出する。これらの栽培植物は、流路周辺からの再堆積と考えられる。野生の草本植物としては、水田雑草でもある抽水～湿地性植物のヘラオモダカやオモダカ属、イボクサ、コナギ、ヒエ属、沈水植物のホッソモが産出する。さらに、湿生植物のスゲ属アゼスゲ節やスゲ属A、カワラスガナ、ヒメクグ、カヤツリグサ属、ホタルイ属、タネツケバナ属、ヤナギタデ、ボントクタデ、ミゾソバ、ノミノフスマ、シロネ属、セリなどや、やや湿った道端に生育するツリフネソウ属も産出した。乾いた草地や荒地、畑などに生育するツクサやエノコログサ属、ムラサキケマン、キンボウゲ属、オランダイチゴ属～ヘビイチゴ属、クワクサ、カタバミ属、スマレ属、イスタデ、ウシハコベ、アカザ属、ナス属、シソ属、キツネアザミ属、メナモミ属、キク科、チドメグサ属などが得られており、流路周辺には草地が存在したと考えられる。また、林縁に生育するカラムシ属やミズ属も得られた。

飛鳥時代～奈良時代の水田面の4地点のNo.3(12層)から得られたのは木本植物のみで、のキイチゴ属とアカメガシワ、イイギリが得られた。

中世の遺構面(包含層)であるNo.1(24層)からは、栽培植物のイネが得られている。イネは糠殻だけでなく、炭化糠殻・炭化種子が含まれており、これらは燃やされた後に廃棄されて堆積した可能性が考えられる。イネとともに、水田雑草でもある抽水植物のヘラオモダカやオモダカ属、イボクサ、ヒエ属、タガラシ、沈水植物のホッソモ、湿生植物のヒメクグ、カヤツリグサ属、ホタルイ属、タネツケバナ属、ノミノフスマなどや、やや湿った道端に生育するタカサブロウが産出した。ほかにも、乾燥した場所に生育するメヒシバ属やイネ科、オランダイチゴ属～ヘビイチゴ属、スマレ属、サナエタデーオオイスタデ、スベリヒユ属、ナス属、チドメグサ属も産出しており、これらの草本類が溝周辺の乾いた場所に生育していたと考えられる。木本植物では、小高木または低木のヒサカキ属とタニウツギ属、低木のキイチゴ属とカジノキ属が得られており、溝周辺に生育していたと考えられる。

(パレオ・ラボ=バンダリ スダルシヤン)



スケール 1-26:1mm

1. キイチゴ属核 (NR7100, No. 6)、2. クワ属核 (NR7100, No. 4)、3. クリ果実 (NR7100, No. 4)、4. マタタビ属種子 (NR7100, No. 6)、5. ニワトコ核 (NR7100, No. 6)、6. タラノキ核 (NR7100, No. 6)、7. ヘラオモダカ果実 (NR7100, No. 4)、8. ヘラオモダカ種子 (NR7100, No. 4)、9. オモダカ属果実 (NR7100, No. 4)、10. オモダカ属種子 (NR7100, No. 2)、11. コナギ種子 (NR7100, No. 4)、12. スズ属アゼスグ節果実 (NR7100, No. 6)、13. スズ属A果実 (NR7100, No. 4)、14. スズ属B果実 (NR7100, No. 6)、15. ヒエ属有ふ果 (NR7100, No. 4)、16. イネ籾殻 (NR7100, No. 2)、17. イネ炭化種子 (穎果) (NR7100, No. 1)、18. エノコログサ属有ふ果 (NR7100, No. 2)、19. イネ科炭化種子 (穎果) (中世遺構面, No. 2)、20. カラムシ属果実 (NR7100, No. 4)、21. ミズ属果実 (NR7100, No. 2)、22. ナス種子 (NR7100, No. 4)、23. ナス属種子 (NR7100, No. 6)、24. エゴマ果実 (NR7100, No. 4)、25. シソ属果実 (NR7100, No. 4)、26. 不明A炭化種実 (NR7100, No. 4)

写真7 犬飼遺跡から出土した大型植物遺体

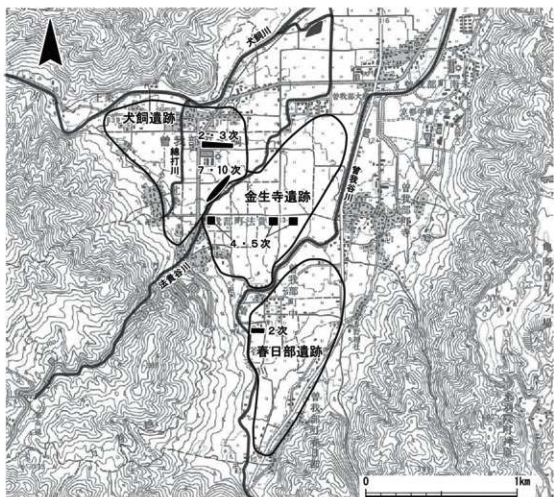
8. 総括

1) 犬飼遺跡出土瓦器碗の検討

今回、犬飼遺跡で出土した瓦器碗は、いわゆる丹波型瓦器碗と呼ばれるものである。丹波型瓦器碗は、橋本久和によって設定された瓦器碗の型式で、12世紀中頃に楠葉型から分化して成立する⁽¹⁸²⁰⁾。口径に比して大きな高台が付き、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は肥厚し、外面を強くヨコナデすることが特徴である。その後示された編年案では、3期9段階のものを経て、器形を基に3分類し、丹波全域で4大別11小期に編年されたが、伴資料を基に瓦器碗を組型したもので、瓦器碗自体の編年は不十分であった。

犬飼遺跡では、第2・3次調査において、比較的まとまった量の瓦器碗が出土したことをふまえ、亀岡盆地における瓦器碗の変遷が法量分布図等によって示された。瓦器碗は、時期が下るに従って次第に口径が減じることが示され、第2・3次調査で出土した瓦器碗は、13世紀後葉から14世紀初頭頃と想定されている⁽¹⁸²⁶⁾。

平成30年度以降に行われている曾我部町内の調査でも、瓦器碗がまとめて出土する遺跡が増加しており、各遺跡によって様相が少しずつ異なっていることが注目される。そこで、犬飼遺跡第2・3次調査の報告の際に作成された瓦器碗の法量分布図⁽¹⁸²⁷⁾に、今回の犬飼遺跡第7・10次、さ



第77図 犬飼遺跡と周辺遺跡の位置

らに周辺遺跡である金生寺第4・5次(報告集第191冊参照)、春日部遺跡第2次^(R20)の資料を加筆したのが、第78図である。ただし、考察の対象としたものは、大洞遺跡第2・3次の報告と同様、いずれも口縁部残存率が4分の1以上のものに限定している。以下、時期が古いものから順に特徴をみていく。

春日部遺跡第2次では、建物の柱穴及び土坑S K01から少量出土している。瓦器碗より黒色土器を中心とし、口径15.6~17.0cm、器高平均は5.6cmと大きい。口縁端部に段状の沈線をもち、内外面に細かい暗文を施す。共伴土器にいわゆる「て」の字形の土師器皿を伴い、10世紀から11世紀に位置付けられている。

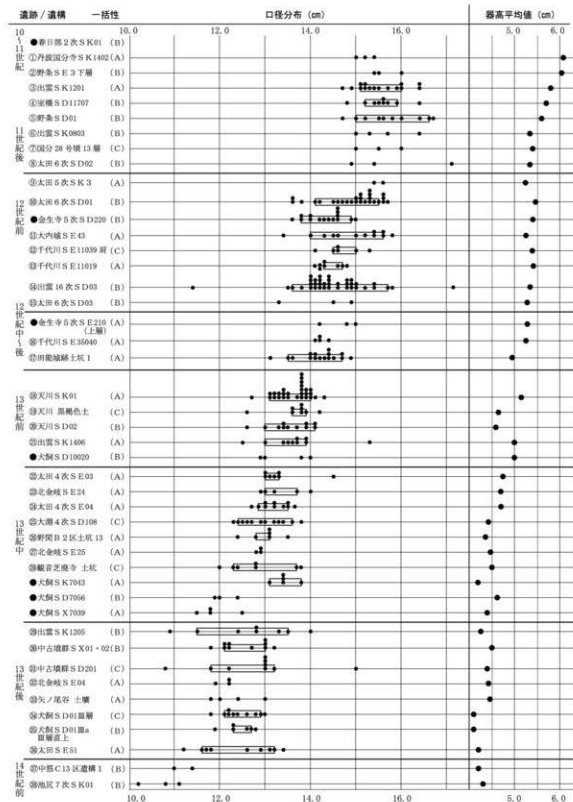
金生寺遺跡第4・5次では、井戸S E210及び建物の区画溝の可能性のある溝S D220から、まとまった数の瓦器碗が出土している。S E210の資料は、残りの良い上層のものを提示している。口径14.2~15.0cmに分布し、器高平均は5.3cmを測る。口縁端部に沈線をもつものが認められ、見込みの暗文は螺旋状のものとジグザグ状のものがあり、口縁部外面にミガキが残るものもある。高台は断面三角形も一部あるが、台形で高さのあるものも多い。S D220の資料は、13.8~14.6cmに集中し、器高平均は5.4cmを測る。口縁端部に沈線をもつものが一部含まれ、内外面に施される暗文はジグザグ状のものである。口縁部外面には、細かいミガキが認められるものも少しある。5B~6A段階とみられる土師器皿Nが多く共伴するが、一部「て」の字口縁をもつ4B・4C段階の個体も認められることから、調査担当者はS D220の掘削時期を11世紀半ばから12世紀初頭とみている。以上のことから、井戸及び溝の廃絶期は、12世紀中頃とみられる。

なお、S E210の資料については、井戸枠内から出土したものはすべて細片であるが、特徴としては、見込みの暗文は螺旋状や放射状を呈し、外面には口縁部から体部まで細かいミガキが施される。丹波型を含まず、楠葉型・大和型・和泉型の瓦器碗のみで構成されていることから、井戸の機能時として考えられる年代は、12世紀前半とみるのが妥当であろう。

大洞遺跡第10次では、建物の区画溝S D10020で瓦器碗がややまとまって出土している。口径は13.0~14.0cmに分布し、器高平均は5.0cmを測る。内面には細かい圏線ミガキをもつものが多い。外面はほとんどがユビオサエで調整するが、中には口縁部や体部上半にミガキを残すものもある。高台は断面三角形のしっかりしたものを貼り付けるものが多い。共伴土器や口径の分布状況から、13世紀前半頃とみられる。

大洞遺跡第7次では、土坑S K7043、溝S D7056・S D7036、集石土坑S X7039で残りのよい瓦器碗が出土している。口径12.0~13.6cm周辺に分布し、器高平均は4.4cmを測る。内面に圏線ミガキが認められるが、やや粗いものが多く、外面はユビオサエのみがほとんどで、口縁部にミガキが認められるものはほとんどない。高台は断面三角形のものほとんどであるが、高さはあまりなく、高台貼り付け時の工具痕を残すような粗雑なものが混じる。共伴土器や口径の分布状況から、13世紀中頃から後半頃とみられる。

大洞遺跡第2・3次では、居館を取り囲む堀S D01からまとまった瓦器碗が出土している。口径12.2~12.9cm周辺に分布し、器高平均は4.1cmを測る。特徴としては、圏線ミガキや見込みの



※ 資料は原則として口径が計測可能なもの（口径の平均以上が残存するもの）に限った。その認定は、実尺資料以外は遺物観察表による。未実尺かつ遺物観察表、遺物写真が未掲載の場合は、実尺図で欠けないものを対象に、実尺図から計測を行った。
 ※ 口径分布に関しては、計測は1mm毎に●をプロットし、5点以上がある遺構に関しては80%のものが分布する範囲を示した。
 ※ 遺構の一括性の基準は以下の通り。
 (A) 発掘の一括性が高く、混入の可能性が少ない遺構。
 (B) 出土状況からは発掘の一括性が高いことが想定されるが、溝など後の混入の可能性を排除できない遺構。
 (C) 同じ遺構から出土しているが、後に混入した可能性が高いものも含まれる遺構。あるいは出土状況が明確にされていない遺構。

第78図 瓦器輪法量分布図と年代の目安

暗文は粗く、全体的に粗雑な作りが目立つ。底部内面に残されたユビオサエは、高台接着時のユビ匠痕が残ったもので、制作の粗雑化を顕著に示す要素と指摘されている⁽⁹⁾⁽²⁰⁾。13世紀後葉から14世紀初現である。

このように、曾我部町内では、調査地点によって瓦器碗の様相が異なっており、時期が下るにつれ、春日部第2次→金生寺第4・5次→犬飼第10次→犬飼第7次→犬飼第2・3次と、居住の拠点が徐々に北へと移動していることは注目に値する。周辺の未調査地で出土事例が増加する可能性もあるが、開発の範囲が次第に扇状地端まで及んでいったとも捉えることができよう。今後とも局所的な分析を蓄積することが必要であろう。

2) 犬飼遺跡における各時期の様相

今回の調査では、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が出土した。以下、各時期の様相をまとめ、総括とした。

(1) 弥生時代以前

今回の調査区では、弥生時代にさかのぼる遺物は出土していない。それは今回の調査区だけでなく、犬飼遺跡あるいは曾我部町内のこれまでの調査でも同様で、地域全体で弥生時代以前の土地利用は低調であったと考えられる。

一方、I地区で検出された自然流路の最下層で採取された有機質の年代測定では、 2σ 暦年代範囲22-123 cal ADの年代が得られており、流路の形成時期は弥生時代後期の中に求められる。珪素分析から、水流がある環境が復元可能であり、ある時期の法貴谷川の流路であった可能性も考えられる。

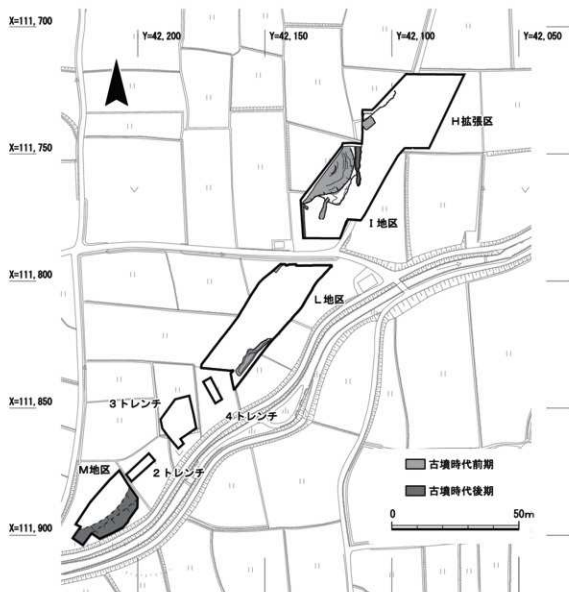
(2) 古墳時代(第79図)

古墳時代前期の遺構としては堅穴建物が2棟確認されている。2・3次の調査でもこの時期の堅穴建物が3棟確認されており、古墳時代前期後半は犬飼遺跡で居住域が形成され始める時期である。しかし、いずれの調査区でも建物の密度は低く、居住域の中心は未調査の別の地点にあるのだろう。

弥生時代後期に形成された自然流路NR7100周辺では、下層から古墳時代前期後半の土器が出土している。流路の護岸層(15層)からは、古式土師器に伴ってTK73型式期の須恵器が出土しており、護岸層に伴う大規模な井堰SW7131が検出された。珪素分析では、SW7131の機能時の層位で水位の上昇が見込まれている。しかし、井堰の構造からは流路の水を周辺に配水するような用途は想定しがたく、むしろ水位を調整することが目的であったと考えられる。

なお、流路の機能時の堆積物から採取された有機質の年代は、 2σ 暦年代範囲346-420 cal ADであり、矛盾はない。M地区の自然流路NR10030は、出土遺物から同時期の遺構とみられる。

曾我部町内において、犬飼遺跡B地区、同G地区、あるいは金生寺遺跡F地区などで同時期の溝から水利施設が見つかっている。流路の形成時期はこれまで不明であったが、今回の調査結果を受け、弥生時代後期に形成された放棄流路を古墳時代前期後半から中期前半に利用していると考えられるようになった。いずれも段丘化した扇状地上で導水・貯水するための施設であり、地



第79図 古墳時代の遺構配置図

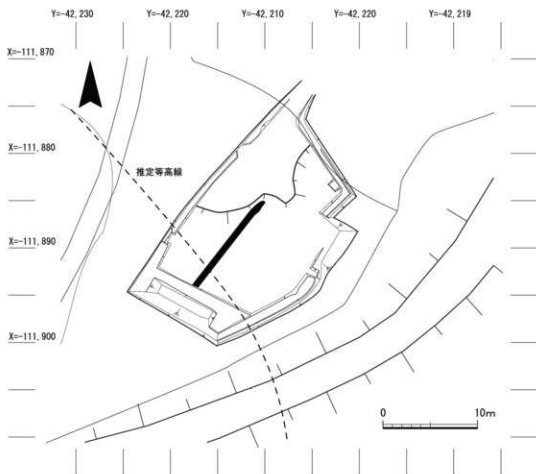
域全体で大規模な開発が行われたことがうかがえる。

埋没の確実な時期は不明だが、中層の洪水砂層から古墳時代中期後半の須恵器が、上層の溝からは古墳時代後期から飛鳥時代の須恵器が出土しており、古墳時代後期には確実に埋没していた。古墳時代後期から飛鳥時代の遺物は調査区全域で散発的に出土しているが、明確に遺構に伴うものではない。

(3) 古代(第80図)

古代の遺構としては、M地区で検出した畦状遺構があげられる。

現在も亀岡盆地に広く展開する農地区画には、正方位碁盤目の条里の地割が残存し、本調査区周辺においても、条里の地割と小字名に「二ノ坪」と条里坪番号が遺存している。条里制の最も早い例として、天平十五(734)年の弘福寺田数帳の「路里十七口利田二段七十二歩」⁽⁸⁰⁾が知られ、8世紀前半には条里呼称が取り入れられていたことがわかる。亀岡盆地では平安時代末期以降の



第80図 古代の遺構配置図

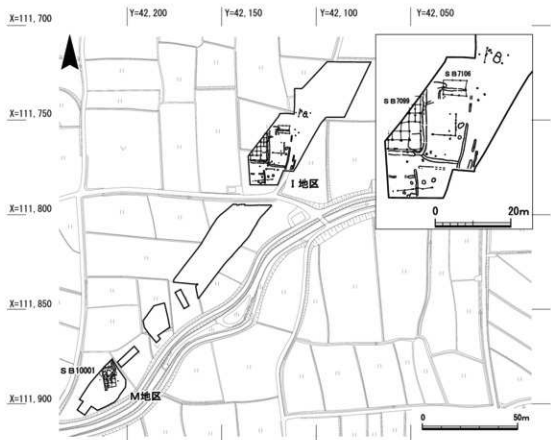
条里資料が残存するのみで、その施工時期も含め不明な点が多い。

今回検出した畦状遺構は北から東に40°振っており、条里施工前の水田であると考えられる。調査区は、南部に位置する黒柄山山地から南流する曾我谷川、法貴谷川の扇状地に位置し、北東に向かって低く傾斜する地形である。畦状遺構は等高線に直交するように造られていることから、地形に則した水田が造られたと考えられる。水田層(第7図12層)からは、須恵器の杯B底部が出土し、自然科学分析の結果、水田層は7世紀中ごろから8世紀後半の暦年代を示す。出土遺物が1点ではあるが、須恵器の年代観に当てはめると、8世紀段階までは当地に条里が施工されていないことが判明した。

また、本調査区から南へ約200mの位置で発掘調査を実施した金生寺遺跡第5次調査では、奈良時代後半と考えられる東西方向の畦畔を伴う耕作土層が検出されている。これより、犬飼遺跡を含む曾我部町内では、8世紀中葉から後半の間に条里制が施工されたと考えられる。

(4) 中世(第81図)

B地区で方形居館やN地区で建物跡が検出されている。今回の調査で中世の遺構として掘立柱建物や南北方向、東西方向の溝群があげられる。I地区で検出した掘立柱建物S B7099は、掘立柱建物S B7106、M地区で検出したS B10001と比較すると建物の規模が大きく、輸入陶磁器の出土が多いことから有力層に関連する建物である可能性があるが、建物の全容が明らかでない

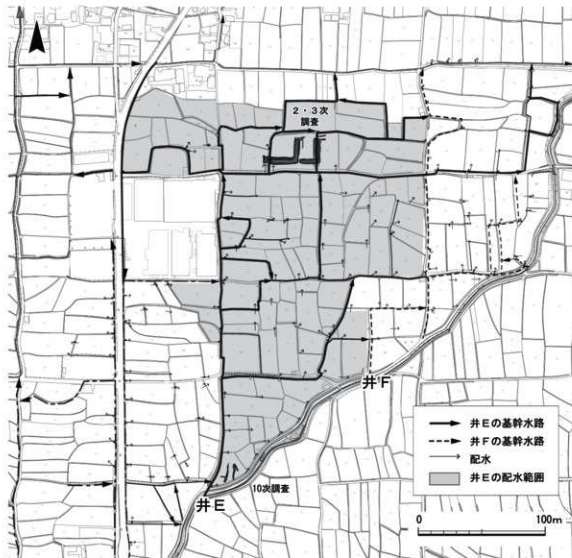


第81図 中世の遺構配置図

め、その性格は不明である。掘立柱建物 S B 7099、掘立柱建物 S B 7106の建物の主軸はほぼ正方位であり、両建物の主軸が近いことから同時期の可能性が高い。出土した柱根の自然科学分析の結果から、微差ではあるが掘立柱建物 S B 7099は、掘立柱建物 S B 10001より先行して建てられることを示す。また、建物に付属する溝出土遺物から、S B 7099は瓦器編年のⅢ-2・3期(13世紀半ば)、掘立柱建物 S B 10001はⅢ-1・2期(13世紀前半)に相当し、後者の方が古い年代を示すことから、掘立柱建物 S B 10001は掘立柱建物 S B 7099より先に廃絶したと考えられる。M地区は古墳時代以降、洪水堆積をたびたび確認しており、中世遺構検出面においても、溝 S D 10029や溝 S D 10007の溝内からあふれた粗粒砂が低地の南東方向に流れ込む堆積を確認しており、当地が洪水の影響を頻繁に受けたことがわかる。これらのことから、掘立柱建物 S B 10001は洪水等により短期間で廃絶し、下流に位置する I地区では洪水等の影響をあまり受けず、掘立柱建物 S B 7099は長期間存続したと考えられる。

建物の廃絶後、M地区では南北方向の溝が掘削され、墓地や耕作地として利用されるようになる。B地区で検出された方形居館は、13世紀後半から14世紀初頭頃のものである。居館に付随する堀は水利施設としての役割をもつことから、法貴谷川扇状地の開発と水路の整備、居館の構築が密接なつながりをもって行われたことが指摘されている。M地区で検出した南北方向や東西方向の溝群はこれらの開発に伴うものであり、13世紀前半には調査区周辺で開発が行われたと考えられる。

(桐井理揮・菅博絵・松井忍)



第82図 法貴谷川流域の水利慣行

注1 淀川水系桂川上流圏域河川整備計画 平成30年8月 京都府ホームページ<https://www.pref.kyoto.jp/shingikai/kasen-03/20katsuragawa.html>

注2 藤永正明ほか編1990『西国・丹波街道』歴史の道調査報告書6 大阪府教育委員会

注3 周辺の遺跡の記述に当たっては、個別の発掘調査報告書の他、以下の文献を参考にした。

石崎善久・小池 寛2013「池尻庵寺とその周辺」『第19回京都府埋蔵文化財研究会発表資料集 古代寺院と律令体制下の京都府～なぜ寺はそこにあるのか～』京都府埋蔵文化財研究会

石崎善久編2013『京都府中世城館跡調査報告書』第2冊—丹波編—、京都府教育委員会

本村豪章・望月幹夫・古谷 毅・中村 浩編1994『東京国立博物館所蔵須恵器集成』I（近畿編）

東京国立博物館

桐井理揮2017「南丹地域における縄文・弥生移行期の様相」『第24回京都府埋蔵文化財研究会発表資料集 弥生文化出現期前後の集落について』京都府埋蔵文化財研究会

桐井理揮・名村威彦2021「京都府における集落の構造と変遷—丹波国桑田郡内におけるケーススタディー—」『古代集落の構造と変遷1』第24回古代官衙・集落研究会報告書、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

財機構奈良文化財研究所

- 亀岡市史編纂委員会1965『亀岡市史』
- 亀岡市史編さん委員会1995『新修亀岡市史』本文編第1巻
- 亀岡市史編さん委員会2000『新修亀岡市史』資料編第4巻
- 高野陽子2014「南丹波における古墳時代中期集落の動態」『古代学研究』201 古代学研究会
- 高橋誠一1989「亀岡盆地の条里と丹波国府」『人文地理学の視園』1986
- 高橋照彦・中久保辰雄編2012『篠原跡群大谷3号窯の研究』（大阪大学文学研究科考古学研究報告第5冊）大阪大学考古学研究室篠原調査団
- 中澤 勝1995「官衙遺跡からみた古代の地域構造の変質－丹波国桑田郡－」『亀岡市文化資料館報』第4号 亀岡市文化資料館
- 橋本義則・百瀬正恒・岡田文男1997「柚・木材の漕運と京内の津」『長岡京左京出土木簡』1（京都市埋蔵文化財研究所調査報告第16集）（財）京都市埋蔵文化財研究所
- 注4 熊弘道1965「犬養氏および大養部の研究」『学習院史学』2号 学習院大学
- 注5 生田教司2018「犬養氏と大養部の理解に関する現状と課題」『日本書紀研究』第32冊 日本書紀研究会
- 注6 上田正昭1961「丹波眼の発展」『篠村史』篠村史編纂委員会
- 注7 和田 幸1995「丹波と倭王権」『新修亀岡市史』本文編第1巻 亀岡市史編さん委員会
- 注8 小林敏男1979「旦波大県主をめぐる歴史的世界－丹後の地の古代史によせて－」『地方史研究』第157号 地方史研究会
- 磯野浩光1987「古代丹波・丹後の居住氏族について」『京都府埋蔵文化財論集』第1集（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注9 松崎健太2013「歴史学から見た丹波中世史」『京都府中世城館跡調査報告書』第2冊－丹波編－ 京都府教育委員会
- 注10 竹内理三編1976『荘園分布図』4 吉川弘文館
- 注11 飛鳥井拓2020「文献資料にみる丹波の中世城館と領主」『中世の騒乱と武士の館』第144回京都府埋蔵文化財セミナー資料集（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注12 桐井理輝ほか2022『京都府遺跡調査報告集』第185冊（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注13 前掲注12と同じ
- 注14 平尾正幸2019「土師器再考」『洛史 研究紀要』第12号（公財）京都市埋蔵文化財研究所
- 注15 中世土器研究会編1996『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 注16 日本中世土器研究会編2022『新版 概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 注17 宮崎亮一・山本信夫2000「大宰府条坊跡X V」（大宰府市の文化財 第49集） 太宰府市教育委員会
- 注18 九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』
- 注19 前掲注12と同じ
- 注20 神野 恵2005「3－1－3土器類」『平城京発掘調査報告』XVI（独）奈良文化財研究所
- 注21 神野 恵・森川 実2010「土器類」『図説平城京辞典』終風社
- 注22 田中 英夫 1999「濁り池須恵器窯址」信太山遺跡調査団濁り池窯址班
- 注23 橋本久和1980「瓦器の地域色と分布」『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会
- 注24 石井清司・引原茂治・伊野近富1985「亀岡盆地出土の瓦器について」『京都考古』第37号 京都考古刊行会
- 注25 伊野近富1995「中世土器の編年（上）」『京都府埋蔵文化財情報』第57号（公財）京都府埋蔵文化財調

査研究センター

伊野近富2021「丹波型瓦器椀の分類と編年」『京都府埋蔵文化財論集』第8集（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注26 桐井理揮2022「7. 考古学的検討 1）丹波型瓦器椀の編年と中世犬飼遺跡の変遷」『京都府遺跡調査報告集』第185集（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注27 前掲注26の第122図

注28 黒坪一樹2022「（2）春日部遺跡第2次」『京都府遺跡調査報告集』第185集（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注29 前掲注26と同じ

注30 金田章裕1982「条里プランと小字地名」『人文地理』第34巻第3号 人文地理学会

注31 足利健亮1995「第六節 村落と条里」『新修亀岡市史』亀岡市史編纂委員会

注32 桐井理揮2022「1. 金生寺遺跡第5・7次（F地区）」『京都府埋蔵文化財情報』第139号（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注33 中尾真琴2023「6. 犬飼遺跡第12次」『京都府埋蔵文化財情報』第144号（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注34 前掲注26と同じ

注35 桐井理揮2022「7. 考古学的検討 3）犬飼遺跡と中世曽我部地域の景観」『京都府遺跡調査報告集』第185集（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

（引用・参考文献）

1)放射線炭素年代測定

Bronk Ramsey, C., van der Plicht, J., and Weninger, B. (2001) 'Wiggle matching' radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 43(2A), pp.381-389

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), pp.337-360.

春成秀爾・小林謙一・坂本 稔・今村峯雄・尾寄大真・藤尾慎一郎・西本豊弘2011「古墳出現期の炭素14年代測定」『国立歴史民俗博物館研究報告』163 p.133-176.

岸本直文2011「古墳編年と時期区分」、一瀬和夫・福永伸哉・北條秀隆編『古墳時代の考古学1 古墳時代の史の枠組み』pp.34-44 同成社

見玉幸多編2018『標準日本史年表』p.66 吉川弘文館

（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター2022『京都府遺跡調査報告集』第185冊 p.407

増田富士雄編著2019『ダイナミック地層学』pp.219 近未来社

中村俊夫2000「放射性炭素年代測定法の基礎」日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編『日本先史時代の¹⁴C年代』pp.3-20 日本第四紀学会

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62(4), 725-757. doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

2)花粉分析、プラント・オパール分析

(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター2022「京都府遺跡調査報告集」第185冊 pp.407

吉川昌伸2011「クリ花粉の散布と三内丸山遺跡周辺における縄文時代のクリ林の分布状況」『植生史研究』
18 pp.65-76

3)珪藻分析

安藤一男1990「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42 pp.73-88

千葉 崇・澤井裕紀2014「環境指標種群の再検討と更新」『Diatom』30 pp.7-30

小杉正人1988「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究』27 pp.1-20

渡辺仁治・浅井一視・大塚泰介・辻 彰洋・伯耆晶子2005「淡水珪藻生態図鑑」p.784 内田老鶴園

4)大型植物遺体分析

那須浩郎2017「縄文時代にヒエは栽培化されたのか?」『SEEDS CONTACT』4 pp.27-29

米倉浩司・梶田 忠2003「BG Plants 和名-学名インデックス(YList)」<http://ylist.info>

付表17 大創遺跡出土土器観察表

(凡例)・小数点第2位を四捨五入、第1位で表示
・() : 復元(底・口)径・残存高

・残存率は基本的に口径で表記

・該当なし: -

・口)口縁部、頸)頸部、底)底部・高台、脚)脚部、受)受部

報告 番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	調整	備 考
					口径	器高	底径					
1	土師器	皿	I地区 (m7)	S D 7036	80	17	-	14/12 完形	灰白 (10YR8/2)	密	内外面: ナテ・ヨコナテ	
2	土師器	皿	I地区 (n6)	S D 7036	88	13	-	9/12	灰白 (10YR8/2)	密 (1mm 以下の黒色 粒含む)	内外面: ナテ・ヨコナテ	
3	土師器	皿	I地区 (m6)	S D 7036	76	16	-	3/12強	灰白 (10YR8/1)	密	内外面: ナテ・ヨコナテ	
4	土師器	皿	I地区 (m7)	S D 7036	83	15	-	14/12 完形	灰白 (10YR8/2)	密 (1mm 以下の白・ 褐・灰色粒含む)	内面: ナテ・ヨコナテ/外 面: ヨコナテ、ユビオサエ	
5	土師器	皿	I地区 (m6)	S D 7036	86	16	-	6/12強	灰白 (10YR8/2)	密	内外面: ナテ・ヨコナテ	
6	土師器	皿	I地区	S D 7036	88	14	-	5/12	浅黄橙 (7.5YR8/4)	密	内外面: ナテ・ヨコナテ	
7	土師器	皿	I地区 (m6)	S D 7036	78	13	-	6/12	灰白 (10YR8/2)	密	内面: ナテ・ヨコナテ/外 面: ヨコナテ、ユビオサエ	
8	土師器	皿	I地区 (n6)	S D 7036	80	18	-	4/12	内: 浅黄橙 (10YR8/3)、 外: にぶい橙 (7.5YR7/4)	密		
9	土師器	皿	I地区	S D 7036	82	14	-	5/12	浅黄橙 (7.5YR8/3)	密	内面: ナテ・ヨコナテ/外 面: ヨコナテ、ユビオサエ	
10	土師器	皿	I地区 (m6)	S D 7036	84	15	-	6/12	灰白 (10YR8/2)	密	内面: ナテ・ヨコナテ/外 面: ヨコナテ、ユビオサエ	
11	土師器	皿	I地区	S D 7036	84	15	-	5/12	橙-浅黄橙 (5YR7.6 ~ 10YR8/3)	密	内面: ナテ・ヨコナテ/外 面: ヨコナテ、ユビオサエ	
12	土師器	皿	I地区 (n6)	S D 7036	84	14	-	6/12	灰白 (10YR8/1)	密		
13	土師器	皿	I地区 (m6)	S D 7036	86	20	-	14/12 完形	灰白-浅黄 橙 (2.5Y8/2 ~ 10YR8/3)	密	内外面: ナテ・ヨコナテ	
14	土師器	皿	I地区	S D 7036	84	19	-	11/12	灰白-にぶい 橙 (10YR8/1 ~ 7.5YR7/4)	密	内面: ナテ・ヨコナテ/外 面: ヨコナテ、ユビオサエ	
15	土師器	皿	I地区	S D 7036	80	18	-	14/12 完形	明褐色-灰白 (7.5YR7/1 ~ 10YR8/1)	密	内面: ナテ・ヨコナテ/外 面: ヨコナテ、ユビオサエ	
16	土師器	皿	I地区	S D 7036	128	(15)	-	3/12弱	灰白 (7.5YR8/2)	密	内外面: ナテ・ヨコナテ	
17	瓦器	椀	I地区 (16)	S D 7036	120	42	58	口) 15/12 底) 3/12	灰 (N5/0)	密 (1mm 以下の白・ 黒・灰色粒含む)	内面: ヨコナテ・ナテ・暗 文・ミガキ/外面: ヨコナ テ・ユビオサエ	
18	瓦器	椀	I地区 (n6)	S D 7036	120	43	60	口) 1/12 底) 3/12	暗灰 (N3/0)	密	内面: ヨコナテ・暗文・ミ ガキ/外面: ヨコナテ・ユ ビオサエ	
19	瓦器	椀	I地区 (16)	S D 7036	123	42	59	2/12	内外: 暗灰 (N3/0)、 断: 灰 (N5/0)	やや密 (1mm 以下 白・黒色砂粒やや多 含む)	内面: ヨコナテ・ナテ・暗 文・ミガキ/外面: ヨコナ テ・ユビオサエ	
20	瓦器	椀	I地区 (16)	S D 7036	125	44	56	口) 8/12 底) 完 存	オリブ黒 (5Y3/1)	密	内面: ヨコナテ・ミガキ・ 暗文/外面: ヨコナテ・ユ ビオサエ	
21	瓦器	椀	I地区 (m7)	S D 7036	125	42	53	3/12	灰 (N4/0)	密 (1mm 以下の白・ 黒色粒含む)	内面: ヨコナテ・ナテ・ミ ガキ/外面: 摩滅	
22	瓦器	椀	I地区 (16)	S D 7036	128	47	65	5/12強	内外: 暗灰 (N3/0)、 断: 灰白 (2.5Y8/1)	密	内面: ヨコナテ・暗文/外 面: ヨコナテ・ユビオサエ・ ミガキ	
23	瓦器	椀	I地区 (16)	S D 7036	130	40	62	4/12弱	内外: 暗灰 (N3/0)、 断: 白・灰 (N9/0・ 5/0)	密	内面: ヨコナテ・ナテ・暗 文か・ミガキ/外面: ヨコ ナテ・ユビオサエ	
24	瓦器	椀	I地区	S D 7036	135	41	63	底) 9/12	内外: 灰 (N4/0)、 断: 白・灰白 (N9/0・ 7/0)	密	内面: ヨコナテ・ナテ・暗 文・ミガキ/外面: ヨコナ テ・ユビオサエ	
25	土師器	羽釜	I地区 (n6)	S D 7036	122	(39)	-	2/12弱	灰白 (2.5Y8/1)	密 (1mm 以下の灰・ 赤色砂粒少し含む)	内外面: ナテ・ヨコナテ	
26	瓦質 土器	羽釜	I地区	S D 7036	163	59	-	2/12	内外: 暗灰・ 灰白 (N3/0・ 7.5YR8/1)、断: 灰 (N6/0)	粗 (2mm 以下の白・ 薄茶・灰色粒を多く 含む)	内面: 細かいハケ/外面: ヨコナテ、ユビオサエ	内面に炭 化物付着

報告 番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	調整	備 考
					口径	器高	底径					
27	瓦質 土器	羽釜	I地区 (m6)	S D 7006	17.9	5.7	-	2/12強	内外:暗灰 (N3/0)、 新:灰白・灰 (N8/0・ 6/0)	やや粗 (1mm以下の 白・黒色粒含む)	内面:粗いハケ/外面:ヨ コナデ、ハケ・ナデ	
28	瓦質 土器	羽釜	I地区 (n6)	S D 7006	18.6	(6.0)	-	3/12	灰 (N4/0)	密 (2mm以下の白・ 黒色粒含む)	内面:ハケ・ナデ/外面: ナデ・ユビオサエ	
29	瓦質 土器	羽釜	I地区 (n6)	S D 7006	16.6	(14.0)	-	3/12強	内:灰 (N4/0)、外: 黒 (N2/0)	密 (6mm以下の黒色 粒わずか、15mm以 下の灰・白色粒多く 含む)		底部に煤 付着
30	瓦質 土器	鍋	I地区 (n5)	S D 7006	(19.9)	(4.6)	-	1/12以下	黒褐 (10YR3/1)	密 (2mm以下の褐色 粒少し含む)	内面:ヨコナデ/外面:ヨ コナデ・ユビオサエ	外面煤付 着
31	瓦質 土器	鍋	I地区 (16)	S D 7006	28.6	(4.8)	-	1.5/12	灰 (N4/0)	やや粗 (2mm以下の 白・黒・灰・茶色粒 多く含む)	内面:ハケ・ナデ/外面: ナデ・ユビオサエ	
32	土師器	小壺	I地区 (n5)	S D 7006	2.0	1.8	-	5/12	灰白 (2.5Y8/1)	密	内外面:ヨコナデ・ナデ	
33	須恵器	鉢	I地区 (n5)	S D 7006	(26.6)	(3.8)	-	1/12	灰白・黒 (N7/0・ 2/0)	密	内外面:回転ナデ	東播系
34	須恵器	鉢	I地区	S D 7006 b-b	-	(5.6)	89	底)完 存	青灰 (5PB6/1)	密 (2mm以下の白・ 黒色粒少し含む)	内外面:回転ナデ	東播系
35	青磁	椀	I地区 (n6)	S D 7006	-	(2.5)	5.2	底) 8/12	素地:灰白 (N8/0)、 釉:灰オリーブ (5Y5-2)	精良		龍泉窯系 青磁椀 Ⅱ-c類
36	青磁	椀	I地区 (m7)	S D 7006	12.2	(4.4)	-	2/12強	素地:灰白 (N8/0)、 釉:明緑灰 (5G7/1)	精良		龍泉窯系 青磁椀 Ⅱ類
37	青磁	小椀	I地区 (m6)	S D 7006	/	(2.4)	-	1/12	胎:灰白 (5Y8/1)、 釉:オリーブ灰 (2.5GY6/1)	精良		龍泉窯 青磁椀 Ⅰ-a、 b類
38	白磁	皿	I地区	SD7006と SX7039 の間	-	(1.3)	(12.0)	1/12	胎:灰白 (5Y8/1)、 釉:灰白 (10Y8/1)	精良		白磁皿 Ⅱ-2類
39	須恵器	鉢	I地区 (n3)	S D 7037	(24.4)	(6.0)	-	1/12	灰 (N6/0 ~ 5/0)	密	内外面:回転ナデ	東播系
40	須恵器	鉢	I地区	S D 7037	-	(2.4)	10.8	底) 3/12弱	灰白 (2.5Y7/1)	密	内外面:回転ナデ	東播系
41	瓦器	椀	I地区	S D 7038	11.4	4.4	5.2	4/12	灰白 (2.5Y8/1) ~ 灰 (N4/0)	密	内面:ヨコナデ・暗文・ミ ガキ/外面:ヨコナデ・ユ ビオサエ	
42	瓦器	椀	I地区	S D 7038	12.3	(3.3)	-	2/12	暗灰 (N3/0)	密 (0.5mm以下の茶 色粒含む)	内面:ヨコナデ・ミガキ・ 暗文/外面:ヨコナデ・ユ ビオサエ	
43	瓦器	椀	I地区 (o5)	S D 7038	12.4	3.9	6.1	4.5/12	黒 (N2/0)	密	内面:ヨコナデ・ミガキ・ 暗文/外面:ヨコナデ・ユ ビオサエ	
44	瓦器	椀	I地区	S D 7038	-	(2.1)	5.8	底) 5/12	暗灰 (N3/0)	密 (0.1mm以下の白 色粒含む)	内面:ヨコナデ・ミガキ・ 暗文/外面:ヨコナデ・ユ ビオサエ	
45	白磁	皿	I地区 (o5)	S D 7038	(12.0)	(3.0)	-	1/12以下	胎:灰白 (N8/0)、 釉:灰白 (5Y7/1)	精良		
46	瓦器	椀	I地区 (o6)	S D 7042	12.0	(3.6)	-	3/12	浅黄緑 (7.5YR8/2) ~ 暗灰 (N3/0)	密	内面:ヨコナデ・暗文・ミ ガキ/外面:ヨコナデ・ユ ビオサエ	
47	瓦器	椀	I地区 (o7)	S D 7042	12.0	4.2	5.4	3/12弱	灰白 (N7/0) ~ 暗 灰 (N3/0)	密	内面:ヨコナデ・暗文・ミ ガキ/外面:ヨコナデ・ユ ビオサエ	
48	瓦器	椀	I地区 (o6)	S D 7042	(13.2)	(4.4)	(6.4)	1/12強	灰白 (2.5Y8/1) ~ 灰 (N4/0)	密	内面:ヨコナデ・暗文・ミ ガキ/外面:ヨコナデ・ユ ビオサエ	
49	土師器	皿	I地区 (16)	S D 7056	7.8	1.7	-	9/12	灰白 (7.5YR8/1)	密 (1mm以下の茶・ 白色粒を含む)	内面:ヨコナデ・ナデ/外 面:ヨコナデ・ユビオサエ	
50	土師器	皿	I地区 (16)	S D 7056	8.2	1.3	-	3/12	灰白 (7.5YR8/2 ~ 7.5YR8/1)	密 (1.5mm以下の薄茶・ 白色粒を少し含む)	内面:ヨコナデ・ナデ/外 面:ヨコナデ・ユビオサエ	
51	土師器	皿	I地区	S D 7056 a-a	8.2	1.7	-	10/12	灰白 (7.5YR8/1) ~ 淡緑 (5YR8/4)	密 (1.5mm以下の 赤茶・白・黒・半透 明色粒をやや多く 含む)	内面:ヨコナデ・ナデ/外 面:ヨコナデ・ユビオサエ	
52	土師器	皿	I地区 (16)	S D 7056	8.4	1.4	-	完形	灰白 (7.5YR8/2)	密 (1.5mm以下の赤茶 白色粒を含む)	内面:ヨコナデ・ナデ/外 面:ヨコナデ・ユビオサエ	
53	瓦器	椀	I地区 (16)	S D 7056	11.9	4.4	4.8	9/12弱	黒 (N2/0)	密	内面:ヨコナデ・ミガキ・ 暗文/外面:ヨコナデ・ミ ガキ・ユビオサエ	

報告 番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	調整	備 考
					口径	器高	底径					
54	瓦器	椀	I地区 (16)	S D 7056	120	49	57	6/12留	暗灰 (N3/0)	密	内面:ヨコナデ・ミガキ・ 暗文/外面:ヨコナデ・ミ ガキ・ユビオサエ	
55	瓦器	椀	I地区 (16)	S D 7056	122- 126	47	56- 60	ほぼ完 形	灰白 (25Y8/1)・ 暗灰 (N3/0)	密	内面:ヨコナデ・ミガキ・ 暗文/外面:ヨコナデ・ミ ガキ・ユビオサエ	
56	青磁	椀	I地区 (16)	S D 7056	/	(49)	-	1/12以 下	素地:灰白 (N8/0)・ 釉:灰白 (10Y7/1)	精良	外面:錦蓮弁文	龍泉窯系 青磁Ⅱ類
57	青磁	皿	I地区 (15)	S D 7056	-	(07)	48	底) 9/12	素地:灰白 (5Y8/1)・釉:灰白 (5Y7/2)	精良		阿安窯系 青磁Ⅲ 1 -2 b類
58	白磁	皿	I地区 (16)	S D 7056	-	(09)	68	底) 2/12強	胎:灰白 (N7/0)・ 釉:灰白 (5Y7/1)	精良		白磁Ⅲ Ⅱ類
59	瓦質 土器	羽釜	M地区	S D 10002	-	(30)	-	1/12	暗灰 (N 3/0)	良	内面:ヨコナデ/外面:貼 り付け	
60	白磁	皿	M地区	SD10007	104	28	28	5/12	素地:灰白 (10Y8/1) 釉:浅黄 (25Y7/3)	精良	外面:ロクロケズリ	白磁Ⅲ Ⅰ-1b類
61	土師器	皿	M地区	S D 10007	(120)	(16)	-	2/12	浅黄橙 (7.5YR 8/3) - に、赤い橙 (5YR7/3)	密	内面:ヨコナデ/外面:ヨ コナデ・ユビオサエ	
62	瓦器	椀	M地区	S D 10008	157	53	-	3/12	黒 (N 15/0)	密	内面:ミガキ/外面:ミガ キ・ユビオサエ	
63	瓦器	椀	M地区	S D 10008	127	(43)	-	3/12	暗灰 (N 3/0)	密	内面:ミガキ/外面:ユビ オサエ・ケズリ	
64	瓦器	椀	M地区	S D 10008	130	(40)	-	15/12	暗灰 (N 3/0)	密 (0.5mm 大の白色 砂粒を含む)	内面:ミガキ 外面:ヨコナデ・ミガキ	
65	土師器	椀	M地区	S D 10008	140	(47)	-	4/12	浅黄橙 (10YR8/3)	密 (0.5mm 大の褐色 砂粒を含む)	内面:摩滅 外面:ナデ (摩滅)	
66	瓦器	椀	M地区	S D 10008	138	(30)	-	1/12 未満	暗灰 (N 3/0)	密 (0.5mm 以下の白 色砂粒を含む)	内面:ミガキ/外面:ヨコ ナデ・ナゲユビオサエ	
67	瓦器	椀	M地区	S D 10008	-	-	61	底) 2/12	灰 (5Y4/1)	密	外面:ナデ	
68	白磁	皿	M地区	S D 10008	(100)	27	(26)	1/12	素地:灰白 (25Y8/1) 釉:浅黄 (25Y7/3)	精良		白磁Ⅲ Ⅰ-1b類
69	土師器	皿	M地区	S D 10008	86	10	-	3/12	浅黄橙 (10YR8/3)	密 (1mm 以下の褐色 砂粒少量含む。0.5mm 大の紅石散粒を含む)	内面:ナデ/外面:ヨコナ デ・ユビオサエ	
70	土師器	皿	M地区	S D 10008	86	15	-	完形	淡黄 (25Y8/3)	密 (1mm 以下の半透 明砂粒を含む)	内面:摩滅/外面:ヨコナ デ・ユビオサエ	
71	土師器	皿	M地区	S D 10008	88	17	-	6/12	橙 (2.5YR6/6) 外面一部:暗灰 (10YR5/1)	密 (1mm 以下の赤褐色 砂粒・黒色砂粒を含む)	内面:ヨコナデ/外面:ヨ コナデ・ユビオサエ	
72	土師器	皿	M地区	S D 10008	88	16	-	11/12	灰白 (10YR8/2) 外面:暗灰 10YR6/1	密 (0.5mm 大の褐色 砂粒少量含む)	内面:ヨコナデ/外面:ヨ コナデ・ユビオサエ	
73	土師器	皿	M地区	S D 10008	84	13	-	9/12	に、赤い橙 (5YR7/4)	密 (1mm 以下の褐色 砂粒を含む)	内面:ナデ/外面:ヨコナ デ・ユビオサエ	
74	土師器	皿	M地区	S D 10008	89	13	-	15/12	灰白 (10YR 8/1)	密 (0.5mm 大灰色砂粒 微細量含む)	内面:ナデ・ヨコナデ/外 面:ヨコナデ・ユビオサエ	
75	土師器	皿	M地区	S D 10008	148	16	-	35/12	浅黄橙 (10YR8/3)	密 (1mm 以下の赤褐色 砂粒・暗灰色砂粒を 含む)	内面:摩滅/外面:ヨコナ デ・摩滅	
76	須恵器	甕	M地区	S D 10008	320	(41)	-	1/12 未満	青灰 (5 P B5/1)	密 (1mm 以下の白色 砂粒微細量含む)	内外面:ヨコナデ (口縁部 斜めのヨコナデ有り)	
77	土師器	皿	M地区	S D 10012	84	14	-	5/12	灰白 (10YR8/2)	密 (0.1mm 以下の雲母・ 赤色砂粒を含む)	内外面:ナデ・ヨコナデ	
78	灰釉 陶器	底部	M地区	S D 10012	-	(18)	66	底) 1/12 以下	灰白 (25Y8/1)	密 (1mm 以下の白色 砂粒を含む)	内外面:回転ナデ	
79	瓦器	皿	M地区	S D 10012	90	20	-	6/12	暗灰 (N 3/0)	密	内面:ナデ/外面:ヨコナ デ・ナデ	
80	青磁	皿	M地区	S D 10012	100	21	-	4/12	素地:灰白 (5Y8/1) 釉:灰白 (5Y7/2)	精良		阿安窯系 青磁Ⅲ 1 -2 b類

報告 番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	調整	備考
					口径	器高	底径					
81	青磁	椀	M地区	S D 10012	17.6	4.7	-	2/12	素地・灰白 (7.5Y8/1) 釉：灰サテ (5Y6/2)	精良		龍泉系 青磁椀Ⅱ -b類
82	瓦器	椀	M地区	S D 10030	13.8	5.0	6.3	完形	灰(5Y4/1)暗灰(N 3.0)		内面：ミガキ/外面：ヨコ ナデ・ユビオサエ・ナデ	
83	瓦器	椀	M地区	S D 10030	14.0	(最 大) 4.9	6.5	8/12	灰(5Y4/1)暗灰(N 3.0)	密	内面：ミガキ/外面：ヨコ ナデ・ユビオサエ・ナデ	
84	瓦器	椀	M地区	S D 10030	-	(3.1)	6.75	底) 完存	黒褐(2.5Y3/1)	密	内面：ミガキ/外面：ナデ	
85	瓦器	椀	M地区	S D 10030	12.5~ 13.5	5.1	6.25	8/12	暗灰(N 3.0)	密	内面：ヨコナデ/外面：ヨ コナデ・ナデ・ユビオサエ	
86	瓦器	椀	M地区	S D 10030	12.6~ 13.2	5.1	6.1~ 6.5	9/12	サテ・黒(5Y3/1)	密	内面：ミガキ/外面：ヨコ ナデ・ナデ	
87	瓦器	椀	M地区	S D 10030	14.6	(4.1)	-	2/12	黒(N2.0)	密	内外面：ミガキ・ヨコナデ	
88	瓦器	椀	M地区	S D 10030	15.8	(3.0)	-	1/12	暗灰(N3.0)	密	内面：ミガキ/外面：ヨコ ナデ・ナデ	
89	瓦器	椀	M地区	S D 10030	12.7	4.7	6.0	(口) 5/12 底) 8/12	サテ・黒(10Y3/1)	密	内面：ミガキ/外面：ヨコ ナデ・ナデ・ユビオサエ	
90	土師器	皿	M地区	S D 10030	9.4	1.0	-	2/12	にぶい橙(5YR7/4)	密	内外面：ヨコナデ・ナデ	
91	土師器	皿	M地区	S D 10030	8.9	1.6	-	6/12	にぶい橙(5YR7/4)	密	内外面：ヨコナデ・ナデ	
92	土師器	皿	M地区	S D 10030	8.7	1.2	-	1.5/12	灰白(10YR8/2)	密	内外面：ヨコナデ	
93	瓦器	皿	M地区	S D 10030	9.6	1.7	-	完形	暗灰(N3.0)	密	内面：ヨコナデ・一方向ナ デ/外面：ヨコナデ・ユビ オサエ	
94	土師器	皿	M地区	S D 10030	7.8	1.1	-	3/12	浅黄橙(7.5YR 8/3)	密	内外面：ヨコナデ・ナデ	
95	瓦質 土器	羽釜	M地区	S D 10030	(18.0)	(11.1)	-	3/12	黒(N2.0) 灰白 (2.5Y8/1)	密	内面：ナデ/外面：ヨコナ デ・ユビオサエ・ナデ	
96	須恵器	鉢	M地区	S D 10030	29.8	(5.5)	-	1/12	灰(N 5.0)	密(1mm以下の白・ 灰色砂粒含む)	内外面：回転ナデ	東播系
97	土師器	鉢	M地区	S D 10030	34.2	(3.9)	-	2/12	にぶい黄橙 (10YR7/2)	やや粗(1mm以下の 白・赤・灰色砂粒含む)	内面：ハケテ/外面：ヨコ ナデ・ハケテ	
98	土師器	皿	I地区	S X 7039 南東部	8.0	1.2	-	7/12	灰白(10YR8/2)	密(1mm以下の白・ 褐・灰色粒含む)	内面：ヨコナデ・ナデ/外 面：ヨコナデ・ナデ・ユビ オサエ	
99	土師器	皿	I地区	S X 7039 北東部	8.0	1.6	-	10/12	灰白(7.5YR8/1~ 8/2)	密(0.5mm以下の白・ 茶・透明・白色砂粒含 む)	内面：ヨコナデ・ナデ/外 面：ヨコナデ・ユビオサエ	
100	瓦器	椀	I地区	S X 7039 南西部	11.5	4.3	4.8	11/12 以上	内外：暗灰(N3.0)、 断：灰白(7.5YR8/1)	密	内面：ヨコナデ・ミガキ/ 外面：ヨコナデ・ユビオサ エ	
101	瓦器	椀	I地区	S X 7039 南西部	11.8	4.5	5.3	11/12	灰(N5.0~4/0)	密(0.5mm以下の白・ 灰色粒含む)	内面：ヨコナデ・ミガキ/ 外面：ヨコナデ・ユビオサ エ	
102	瓦器	椀	I地区	S X 7039 南西部	11.8	4.3	6.0	14H 完形	内：灰(N4.0)、外： 暗灰(N3.0)	密(0.5mm以下の白・ 黒色粒含む)	内面：ヨコナデ・ミガキ/ 外面：ヨコナデ・ユビオサ エ	
103	瓦器	椀	I地区	S X 7039	12.0	(3.8)	-	1.5/12	内外：灰(N4.0)、 断：灰白(7.5YR8/1)	密(0.5mm以下の黒・ 赤茶色砂粒含む)	内面：ヨコナデ・ミガキ/ 外面：ヨコナデ・ミガキ	外面に縦 刻
104	瓦器	椀	I地区	S X 7039 南西部	12.0	4.3	6.0	(口) 1/12 底) 5/12	暗灰(N3.0)	密	内面：ヨコナデ・ミガキ/ 外面：ヨコナデ・ユビオサ エ	
105	瓦器	椀	I地区	S X 7039 南西部	12.4	4.5	6.0	5.5/12	黒(N2.0)	密(0.5mm以下の白・ 茶色粒含む)	内面：ヨコナデ・ミガキ/ 外面：ヨコナデ・ユビオサ エ	
106	瓦器	椀	I地区	S X 7039 南西部	12.5	4.5	5.9	11/12 以上	内外：暗灰(N3.0)、 断：灰白(2.5Y8/1)	密(1mm以下の半透 明砂粒含む)	内面：ヨコナデ・ミガキ/ 外面：ヨコナデ・ユビオサ エ	
107	瓦器	椀	I地区	S X 7039 南西部	12.8	4.2	6.2	(口) 1/12 以下 底) 6/12	灰白(2.5Y8/1)・ 暗灰(N3.0)	密	内面：ヨコナデ・ミガキか (摩滅)/外面：ヨコナデ・ ユビオサエ	

報告 番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	調整	備 考
					口径	器高	底径					
108	瓦器	椀	I地区	S X 7039 南西部	130	44	55	5/12	内外:暗灰 (N3-0)、 断:灰白 (25Y8-1)	密 (0.5mm 以下の白 灰色粒含む)	内面:ヨコナデ・ミガキ/ 外面:ヨコナデ・ユビオサエ	
109	瓦器	椀	I地区	S X 7039 北東部	-	(1.8)	5.8	底) 12/12	灰 (N5-0)	密	内面:ミガキ/外面:ナデ	
110	白磁	皿	I地区	S X 7039	-	(0.5)	62	2/12強	胎:灰白 (N8-0)、 釉:灰白 (7.5Y8-1)	精良		白磁皿 区別
111	原忠器	鉢か	I地区	S X 7039 北東部	-	(2.3)	90	底) 5/12	灰 (N6-0)	密 (5mm 以下の白・ 灰色粒含む)	内外面:ナデ	
112	瓦質	甕	I地区	S X 7039	232	(5.9)	-	2/12強	内外:黒 (10YR2-1)、 断:にぶい黄橙 (10YR6-3)	粗 (2mm 以下の白・ 半透明・茶・灰色粒含む)	内面:ヨコナデ/外面:ヨ コナデ・タタキ	
113	土師器	皿	I地区	S P 7058 (SB7099)	81	1.4	-	5/12	灰白 (10YR8-2)	密	内面:ヨコナデ/外面:ヨ コナデ・ユビオサエ	
114	土師器	皿	I地区	S P 7062 (SB7099)	87	(1.4)	-	3/12	内外:灰白 (7.5YR8-1)、断: 黒灰 (10YR5-1)	密 (0.5mm 以下の黒 色粒少し含む)	内面:ヨコナデ/外面:ヨ コナデ・ユビオサエ	
115	土師器	皿	I地区	S P 7051 (SB7099)	90	(1.5)	-	3/12強	内外:灰白 (7.5YR8-2)、断: 灰 (N4-0)	密 (1.5mm 以下の灰・ 茶色粒含む)	内面:ヨコナデ・ナデ/外 面:ヨコナデ・ユビオサエ	
116	瓦器	椀	I地区	S P 7066 (SB7099)	-	(1.3)	60	底) 7.5/12	内:灰 (N5-0)、外: 暗灰 (N3-0)、断: 灰白 (7.5YR8-1)、 黒黒 (10YR3-1)	密	内面:ハケ・ミガキ/外面: ナデ・ミガキか	
117	瓦器	椀	I地区	S P 7057 (SB7099)	11.7	(3.0)	-	3/12	灰白 (25Y8-1・ 5YR8-2)、暗灰 (N3-0)	密 (0.5mm 以下の白・ 黒色粒少し含む)	内面:ヨコナデ・ミガキ/ 外面:ヨコナデ・ユビオサエ	
118	瓦器	椀	I地区	S P 7044 (SB7099)	12.3	4.1	61	1/12強	暗灰 (N3-0)	密	内面:ヨコナデ・ミガキ・ 暗文/外面:ヨコナデ・ユ ビオサエ	
119	瓦器	椀	I地区	S P 7057 (SB7099)	13.7	(3.6)	-	2/12弱	灰 (N5-0 ~ 4/0)	密 (1mm 以下の灰・ 褐色粒含む)	内面:ヨコナデ・ミガキ/ 外面:ヨコナデ・ユビオサエ	
120	土師器	皿	I地区	S P 7064 (SB7106)	12.7	(2.1)	-	2.5/12	灰白 (10YR8-1)	密	内外面:ナデ・ヨコナデ	
121	瓦器	椀	I地区	S P 7065 (SB7106)	12.9	(3.5)	-	3/12	暗灰 (N3-0)	密	内面:ヨコナデ・ミガキ・ 暗文/外面:ヨコナデ・ミ ガキか	
122	瓦器	椀	I地区	S P 7065 (SB7106)	-	(1.2)	63	底) 7/12	暗灰 (N3-0)	密	内面:ミガキ/外面:ナデ	
123	瓦器	椀	I地区 (15)	S X 7035	13.2	4.7	59	11/12	灰白 (N7-0)	密 (2mm 以下の灰・ 白色砂粒含む)	内面:ヨコナデ・暗文・ミ ガキか/外面:ヨコナデ・ ユビオサエ	
124	土師器	皿	I地区	S K 7043	7.7	1.6	-	6/12強	内外:淡橙 (5YR8-3)、断:灰 白 (N7-0)	密 (0.5mm 以下の赤茶 灰・黒色粒を少し含む)	内面:ヨコナデ・ナデ/外 面:ヨコナデ・ユビオサエ	
125	土師器	皿	I地区 (k4)	S K 7043	9.4	1.7	-	2/12	外:淡橙 (5YR8-4) ~ 灰白 (7.5YR8-2)、内: 淡赤橙 (2.5YR7/4 ~ 灰白 (7.5YR8-2)	密	内面:ヨコナデ・ナデ/外 面:ヨコナデ・ユビオサエ	
126	瓦器	椀	I地区	S K 7043	12.5	4.4	57	口) 4/12 底) 12) 完形	灰 (N4-0)	密	内面:ヨコナデ・ミガキ・ 暗文/外面:ヨコナデ・ミ ガキ・ユビオサエ	
127	瓦器	椀	I地区	S K 7043	13.0	4.1	62	3/12強	内外:灰 (N4-0)、 断:灰白 (N8-0)	密 (0.5mm 以下の白 色粒含む)	内面:ヨコナデ・暗文・ミ ガキ/外面:ヨコナデ・ユ ビオサエ	
128	瓦器	椀	I地区	S K 7043	13.1	4.1	63	6/12	内外:灰 (N4-0)、 断:灰白 (N8-0)	密 (0.5mm 以下の白・ 黒色粒少し含む)	内面:ヨコナデ・暗文・ミ ガキ/外面:ヨコナデ・ユ ビオサエ	
129	瓦器	椀	I地区	S K 7043	13.2~ 13.6	4.3	64	12/12	灰 (N5-0)	密	内面:磨滅/外面:ヨコナ デ・ユビオサエ	
130	瓦器	椀	I地区 (k4)	S K 7043	13.4	3.9	72	8/12	灰白 (N8-0) ~ 暗 灰 (N3-0)	密	内面:ヨコナデ・暗文・ミ ガキ/外面:ヨコナデ・ユ ビオサエ	
131	瓦器	椀	I地区	S K 7043	13.6	4.5	59	2/12弱	灰 (N4-0)	密	内面:ヨコナデ・ミガキ・ 暗文/外面:ヨコナデ・ミ ガキ・ユビオサエ	
132	瓦器	椀	I地区	S K 7043	13.8	4.3	61	6/12強	暗灰 (N3-0)	密	内面:ヨコナデ・ミガキ・ 暗文/外面:ヨコナデ・ミ ガキ・ユビオサエ	

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	調整	備考
					口径	器高	底径					
133	瓦器	椀	I 地区	S K 7043	134	45	61	完形	内外・灰 (N3/0)、 断：灰白 (N8/0)	密 (0.5mm 以下の白色粒少し含む)	内面：ヨコナデ・暗文・ミガキ / 外面：ヨコナデ・ユビオサエ	
134	瓦質土器	羽釜	I 地区	S K 7043	109	(45)	-	15/12	内外・暗灰 (N3/0)、 断：灰 (N6/0)	粗 (1.5mm 以下の白黒・透明色を含む)	内面：ナデ・ヨコナデ / 外面：ヨコナデ・ユビオサエ	
135	瓦質土器	溝か	I 地区	S K 7043	(318)	(56)	-	1/12 以下	暗灰 (N3/0)・灰白 (2.5Y8/1)	粗 (2mm 以下の灰・茶・白色砂粒多く含む)	内面：ヨコナデ・板ナデ / 外面：ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ	
136	須恵器	鉢	I 地区	S K 7043	309	41	-	15/12	灰 (N5/0) ~ 灰白 (N7/0)	やや密 (0.5mm 以下の白・黒色粒含む)	内外面：回転ナデ	東播系
137	須恵器	鉢	I 地区	S K 7043	(384)	(48)	-	1/12 以下	灰 (N6/1)	密	内外面：回転ナデ	東播系
138	瓦器	椀	I 地区	S K 7103	134	(38)	-	2/12	暗灰 (N3/0)	密	内面：ヨコナデ・ミガキ / 外面：ヨコナデ・ミガキ	
139	土師器	皿	M 地区	S T 10021	84	15	-	ほぼ完存	内面：橙 (7.5YR7/6) 外面：灰白 (10YR8/2)	密 (1mm 以下の黒色・茶色砂粒を含む)	内面：ナデ・ヨコナデ / 外面：ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ	
140	白磁	皿	M 地区	S T 10021	100	25	30	812	胎土：にぶい黄 (2.5Y6/4) 素地：にぶい橙 (5YR7/4)	精白・密 (微細な白い砂粒を含む)	内外面：施輪 / 外面：下方素地のまま、底にへら切跡あり	白磁皿 VI-1 a 類
141	土師器	皿	M 地区	S T 10021	138	28	-	6/12	灰白 (10YR8/2)	密	内面：ナデ・ヨコナデ / 外面：ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ	
142	青白磁	合子蓋	M 地区	S T 10021	-	12	60	完形	釉：明緑灰 (5GY8/1 ~ 明緑灰 (10GY7/2) 素地：白 (N 9/0)	密 (0.5mm 以下の黒色・茶色・白色・石英の微細砂粒を含む)	内外面施輪	
143	青白磁	合子身	M 地区	S T 10021	48	44	40	完形	釉：明緑灰 (5GY8/1 ~ 明緑灰 (10GY7/2) 素地：白 (N 9/0)	密 (0.5mm 以下の黒・茶・白色・石英を含む)	内外面施輪	
144	白磁	椀	M 地区	S T 10021	178	70	59	ほぼ完存	釉：灰白 (2.5Y7/1) 素地：白	精良	内面：回転ナデ / 外面：回転へらケズリ・回転ナデ	白磁椀 V-4 a 類
145	瓦器	椀	M 地区	S P 10052	148	43	63	4/12	暗灰 (N 3/0)	密	内面：ミガキ・暗文 / 外面：ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ	
146	瓦器	椀	M 地区	S P 10047	-	(23)	60	6/12	暗灰 (N 3/0)	密	内面：ミガキ・暗文 / 外面：ナデ	
147	瓦器	椀	M 地区	S P 10065	118	(35)	-	15/12	暗灰 (N 3/0)	密	内面：ミガキ・ヨコナデ / 外面：ナデ・ユビオサエ	
148	瓦器	椀	M 地区	S P 10058	138	(32)	-	2/12	オリープ黒 (5Y3/1)	密	内面：ミガキ・ヨコナデ / 外面：ヨコナデ・ナデ	
149	瓦器	椀	M 地区	S P 10058	158	(28)	-	1/12	オリープ黒 (7.5Y3/1)	密	内面：ミガキ・ヨコナデ / 外面：ヨコナデ・ナデ	
150	瓦器	椀	M 地区	S P 10036	(150)	(40)	-	2/12	暗灰 (N 3/0)	密	内面：ミガキ / 外面：ヨコナデ・ミガキ	
151	土師器	皿	M 地区	S P 10036	100	15	-	3/12	にぶい黄橙 (10YR7/2)	密	内面：ヨコナデ・ナデ / 外面：ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ	
152	土師器	皿	M 地区	S P 10035	89	17	-	6/12	灰白 (10YR8/2)	密	内外面：ナデ・ヨコナデ	
153	土師器	皿	M 地区	S P 10047	84	15	-	完形	灰白 (7.5YR8/2)	密	内外面：ナデ・ヨコナデ	
154	土師器	皿	M 地区	S P 10052	76	13	-	3/12	灰白 (7.5YR8/2)	密	内外面：ナデ・ヨコナデ	
155	土師器	皿	M 地区	S P 10080	78	14	-	3/12	灰白 (10YR8/2)	密 (1mm 以下の白色・赤色砂粒を少し含む)	内外面：ヨコナデ	
156	土師器	皿	M 地区	S P 10047	128	21	-	2/12	灰白 (10YR8/1)	密	内外面：ナデ・ヨコナデ	
157	土師器	皿	M 地区	S P 10035	151	23	-	3/12	灰白 (10YR8/1)	密	内外面：ナデ・ヨコナデ	
158	須恵器	鉢	M 地区	S P 10065	296	(46)	-	1/12	明緑灰 (7.5YR7/1) ~ 暗灰 (7.5YR4/1)	密	内外面：回転ナデ	東播系
159	青白磁	合子蓋	M 地区	S P 10066	-	16	52	6/12	素地：灰白 (5Y8/1) 釉：明緑灰 (5G7/1)	精良	内外面：施輪 外面：一部施輪のちケズリ	
160	瓦器	椀	7 次 3 区 1 地区	南東根張部調査	136	40	72	4/12 弱	灰白 (2.5Y8/2) ~ 暗灰 (N3/0)	密	内面：ヨコナデ / 外面：ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ	
161	瓦質土器	羽釜	区 (3 ~ 40・p)		(220)	(40)	-	2/12 弱	灰白 (10YR8/1 ~ 8/2)	密 (1mm 程度の白色粒含む)	内面：ヨコナデ・ヨコハケ / 外面：ヨコナデ	

報告 番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	調整	備 考
					口径	器高	底径					
162	瓦質 土器	鍋	7次 4r	精査	(237)	(55)	-	1/12強	明期灰 (75YR7/2)	密 (3mm以下の白色 砂粒含む)	内面: ヨコナデ・ヨコハケ / 外面: ヨコナデ・ユビオ サエ	
163	山茶碗	碗	I地区 (i 4)	包含層	-	(11)	5.6 底	6/12	灰白 (10YR8/1)	密	内外面: 回転ナデ	
164	青磁	杯	I地区	NR7100 最上層 (1層)	/	(21)	-	1/12 以下	素地: 灰白 (N8/0)、 輪: 明緑灰 (7.5GY7/1)	精良		
165	青磁	小碗	I地区 (k・1 5)	包含層	4.1	(37)	-	2/12弱	胎: 灰白 (N8/0) 輪: 灰オリーブ (7.5Y4/2)	精良		龍泉窯系 青磁小碗 Ⅱ類
166	青磁	碗	I地区 (k 4)	包含層	-	(39)	5.0 底	7/12	素地: 灰白 (N8/0)、 輪: 明オリーブ灰 (5GY7/1)	精良		龍泉窯 Ⅱ-b類
167	土師器	皿	M地区 (s 4)	包含層	9.0	1.1	-	6/12弱	浅黄橙 (7.5YR8/4)	密	内外面: ナデ・ヨコナデ 外面: 底部不調整	
168	土師器	皿	M地区 (s 4)	包含層	9.6	1.3	-	6/12強	浅黄橙 (10YR8/3)	密	内外面: ナデ・ヨコナデ	
169	白磁	碗	M地区 (t 4)	包含層	15.8	(4.0)	-	1/12 以下	灰白 (10Y7/1)	精良	内外面: 施輪	白磁碗 Ⅱ類
170	白磁	碗	M地区 (s 4)	包含層	-	(21)	5.5 底	5/12	素地: 灰白 (2.5Y8/1) 施輪: 灰白 (2.5Y8/2)	精良	内面: 施輪 / 外面: 施輪・ ロクろケズリ・ナデ	白磁碗 Ⅳ-2類
171	白磁	碗	L地区 (e 10)	N R 1000 2層	-	(13)	6.2 底	2/12	素地: 灰白 (5Y8/1) 輪: 灰白 (5Y8/2)	精良	内面: 施輪 / 外面: 無輪	白磁碗 Ⅳ-2類
172	灰釉 陶器	碗	10次 3r	東横拡張	-	(19)	6.4 底	3/12	灰 (5 Y7/1)	密 (0.5mm灰・白色 砂粒含む)	内面: 回転ナデ / 外面: 回 転ナデ・糸切り痕	
173	白磁	碗	M地区	S X 10001	16.0	(3.8)	-	3/12	素地: 灰白 (5Y8/1) 輪: 灰白 (5Y7/1)	精良	内外面: 施輪	白磁碗 Ⅳ類
174	青磁	碗	M地区 (q 3)	包含層	16.0	(5.0)	-	2/12	灰オリーブ (5Y6/2) 素地: 灰白 (N 8/0)	精良	内外面: 施輪	青磁碗 Ⅰ-b類
175	白磁	碗	M地区 (s 4)	包含層	15.6	(4.0)	-	2/12弱	素地: 灰白 (N 8/0) 輪: 灰白 (2.5Y7/1)	精良	内外面: 施輪 / 外面: 一部 素地	白磁碗 Ⅳ類
176	青磁	碗	10次 3r	重機掘削 中	16.0	6.7	6.0	14/1 完形	素地: 灰白 (2.5Y7/1) 輪: 灰白 (5 Y8/1)	精良	内外面: 施輪	
177	陶器	鉢	10次 4r	10層	-	(4.2)	-	-	素地: 灰白 (10Y7/1) 輪: にぶい赤褐色 (5 YR4/3)	密	内外面: ヨコナデ	丹波焼
207	須恵器	蓋	L地区 (12 g)	N R 10000	-	(11)	(13.4)	1/12強	灰 (10Y5/1)	密	内外面: 回転ナデ	
208	須恵器	杯B	M地区 (r 4)	包含層	13.4	4.1	-	1.5/12	灰 (N 6/0)	密(0.5mm大の暗灰色 白色砂粒含む)	内外面: 回転ナデ	
209	須恵器 (黒書 土器)	杯B	M地区 (r 2)	12層	-	(0.9)	10.2	1/12 以下	灰白 (N 7/1)	密	内面: 回転ナデ / 外面: ケ ズリ・ナデ	黒書 「中道」
210	須恵器	法門窓	I地区	N R 7100 15層	12.4	(5.8)	-	7/12	暗赤灰 (7.5R3/1)	精良	内面: 回転ナデ / 外面: 回 転ナデ・底状文	
211	土師器	直口窓	I地区 (m 4)	N R 7100 15層	(17.2)	(12.3)	-	7/12	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	やや粗 (2mm弱の白 色・半透明砂粒含む)	内面: ヨコナデ・ヘラケズ リ / 外面: ヨコナデ・横方 面・及び縦方面のハケメ	
212	土師器	直口窓	I地区 (1 4)	N R 7100 15層	18.7	(7.5)	-	3/12	外・断面: にぶい褐色 (7.5YR7/3) 内面: にぶい黄橙 (10YR7/3)	やや粗 (1mm以下の 白・半透明・灰・黒色 砂粒・雲母をやや多く 含む)	内面: ヨコナデ・ハケ / 外 面: ヨコナデ・ハケ	
213	土師器	直口窓	I地区 (1 4)	N R 7100 15層	20.3	(8.2)	-	2/12	内外面: にぶい褐色 (7.5YR6/3) 断面: 灰色 (N 4 /0)	やや粗 (1.5mm以下 の白・黒・半透明・透 明砂粒を含む)	内外面: ヨコナデ	外面係付 着
214	土師器	小形 丸底窓	I地区	N R 7100 15層	9.9	(4.4)	-	4/12	内外面: 浅黄橙 (7.5YR8/4) 断面: 灰白 (7.5YR8/2)	密 (0.5mm以下の白 ・赤茶・黒色・半透明の 砂粒を少し含む)	内面: ハケ / 外面: 細かい ミガキ・ハケ痕	
215	土師器	小形 丸底窓	I地区 (1 4)	N R 7100 15層	9.2	(5.8)	-	3/12 弱	内外面: にぶい褐色 (7.5YR5/3) 断面: 黒 (N 2/0)	やや粗 (1mm以下の 白・赤茶・半透明砂粒 をやや多く含む)	内面: ナデ・ケズリ / 外面: ヨコナデ・やや強めのヨコ ナデ	

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	調整	備考
					口径	器高	底径					
216	土師器	甕	I 地区 (1.4)	NR R7100 14 層	121	(172)	-	2/12強	にぶい橙 (7.5YR7/3)	やや粗 (2mm 以下の半透明・赤茶・白・黒色砂粒少し含む)	内面: ヨコナデ・ナデ・ケズリ・ユビオサエ / 外面: ヨコナデ・篠付着	口縁・体部に保付着
217	土師器	甕	I 地区	NR R7100 15 層	149	(52)	-	2/12弱	内外面: 灰濁 (7.5YR5/2) 断面: 暗灰 (N 3.0)	やや粗 (1.5mm 以下の白・半透明・透明砂粒を含む)	内面: ヨコナデ・ナデ・ケズリ / 外面: ヨコナデ・篠付着・広いハケ痕のちナデ消し	口縁外部に保付着
218	土師器	甕	I 地区	NR R7100 15 層	134	(78)	-	11/12	外面: にぶい褐 (7.5YR5/3) 内面: にぶい褐 (7.5YR6/3) 断面: にぶい褐 (7.5YR6/3)	粗 (1.5mm 以下の白色・半透明砂粒を多く含む)	内面: ハケ・ナデ・ケズリ / 外面: ヨコナデ・ハケ	外面全体に保付着 (口縁を除く)
219	土師器	甕	I 地区 (1.4)	NR R7100 15 層	152	(54)	-	6/12弱	橙 (7.5YR6/6)	やや粗 (1.5mm 以下の白・灰色・半透明砂粒をやや多く含む)	内面: ヨコナデ・ナデ・ケズリ / 外面: ヨコナデ	外面全体に保付着
220	土師器	甕	I 地区 (m.4)	NR R7100 15 層	120	(73)	-	1/12強	にぶい橙 (7.5YR6/4)	密 (1mm 以下の白色・半透明砂粒含む)	内面: ヨコナデ・ケズリのちナデ / 外面: 横方向のハケ・ヨコナデ・ハケ	
221	土師器	甕	I 地区 (K.4)	NR R7100 15 層	152	(49)	-	2/12強	内外: にぶい褐 (7.5YR6/3) 断面: 褐灰色 (7.5YR5/1)	やや粗 (1mm 以下の白・半透明・赤茶色の砂粒多く含む)	内面: ナデ・ケズリ・ヨコナデ / 外面: ヨコナデ・やや強めのヨコナデ	外面全体に保付着
222	土師器	甕	I 地区 (m.4)	NR R7100 15 層	105	(86)	-	5/12	内外面: にぶい橙 (5.5YR7/4) 断面: 橙 (5.5YR7/8)	粗 (4mm 以下の白・赤茶・黒・灰色砂粒を含む)	内面: ハケ後ケズリ・ヨコナデ / 外面: ヨコナデ・やや強めのヨコナデ・篠付着	胴部に保付着
223	土師器	甕	I 地区	NR R7100 15 層	頸 147	(28)	-	15/12	内面: 灰濁 (7.5YR4/1) 断面: 褐 (7.5YR4/3)	粗 (1mm 以下の白色・半透明・赤茶色砂粒を多く含む)	内面: ヨコナデ・ナデ / 外面: ヨコナデ	近江・東海系
224	土師器	甕	I 地区 (m.4)	NR R7100 15 層	頸 108	(37)	-	15/12	内外面: にぶい橙 (7.5YR5/3) 断面: 暗灰 (N 3.0)	粗 (1~2mm 大の白色・半透明の砂粒多く含む)	内面: ケズリのち棒状工具によるナデ / 外面: ヨコナデ・矢羽根状のタタキ	矢羽根タタキ
225	土師器	甕/壺	I 地区	NR R7100 15 層	-	(50)	50	底 12/12	にぶい橙 (7.5YR6/4)	やや粗 (3mm 以下の白色・半透明砂粒含む)	内面: ナデ 外面: 黒色あり	外束系統か
226	土師器	高杯	I 地区 (1.4)	NR R7100 15 層	147	130	脚 124	15/12 脚 124	内外面: にぶい橙 (7.5YR6/4) 断面: 褐灰 (7.5YR5/1) 胴部の一部赤褐 (2.5YR5/0)	粗 (2mm 以下の白色・半透明砂粒含む)	内面: ヨコナデ・底部は工具による放射状のナデ・ミガキ・ケズリ / 外面: ハケのちヨコナデ・細かいミガキ	
227	土師器	高杯	I 地区 (1.4)	NR R7100 15 層	152	(140)	133	2/12強	外面: にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面脚: 暗灰 (N 3.0) 内面腹部・杯部: 明褐色 (7.5YR7/2)	粗 (5mm 以下の白色・半透明・赤茶色の砂粒多く含む)	内面: ハケのちヨコナデ・ケズリ / 外面: ハケ・広いケズリ・細かいハケ	杯部に接点あり
228	土師器	高杯	I 地区 (1.4)	NR R7100 15 層	164	(54)	-	3/12	内外面: にぶい橙 (7.5YR7/3) 断面: 灰 (N 4.0)	やや密 (1~3mm の半透明・白色の砂粒含む)	内面: ヨコナデ・底部ナデ / 外面: ヨコナデ・広いハケのちナデケン	
229	土師器	高杯	I 地区 (1.4)	NR R7100 15 層	(94)	(52)	-	2/12	内外面: 橙 (2.5YR6/6) 断面: 灰 (N 5/0)	密 (1mm 以下の赤茶・白色・半透明砂粒砂粒を含む)	内面: ハケのちナデ消し / 外面: 縦方向の広いハケ痕	
230	土師器	高杯	I 地区 (m.4)	NR R7100 15 層	-	(106)	脚 116	脚 116 4/12弱	灰白 (7.5YR8/1)	やや粗 (2mm 以下の白・黒色・こげ茶・半透明・赤茶色・雲母の砂粒含む)	内面: ヨコナデ・横方向のケズリ・ナデケン / 外面: 横方向の細かいミガキ	杯部の見込みに保付着
231	土師器	高杯	I 地区 (1.4)	NR R7100 15 層	-	(90)	脚 121	脚 121 10.5/12	内外面: 浅黄橙 (7.5YR8/3) [脚柱内面 黒黒 (10YR3/1)] 断面: 褐灰 (7.5YR5/1)	粗 (2mm 以下の白色・半透明・赤茶色砂粒を含む)	内面: ケズリ / 外面: ハケ・ミガキのような痕跡・細かいハケ 部の下部は器表の割れ著しく調整不明瞭	内外ともに保付着
232	土師器	高杯	I 地区 (1.4)	NR R7100 15 層	(50)	(94)	-	14/12 完存	外面: 浅黄橙 (7.5YR8/3) 内面: 浅黄橙 (10YR8/3) 断面: 灰白 (10YR7/1)	粗 (4mm 以下の白・半透明・薄茶・黒色砂粒を含む)	内面: ミガキのような痕跡・ハケ痕 / 外面: ハケ	
233	土師器	小形器台	I 地区 (1.4)	NR R7100 15 層	80	(56)	-	4/12	内面: 橙 (5YR7/6) 外面: 浅黄橙 (7.5YR8/4) 断面: 浅黄橙 (7.5YR6/6) 口縁の一部赤褐色 (2.5YR6/6)	粗 (2mm 以下の半透明・白色・透明・黒色砂粒含む)	内面: 下方に細かいハケ・ナデ / 外面: 細かいミガキ・へつによるなでつけ	

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	調整	備考
					口径	器高	底径					
234	土師器	直口壺	I 地区 (14)	NR 7100	198	(131)	-	1/12強	灰褐 (75YR6/2)	やや粗 (1mm 大の白色・半透明の砂粒含む)	内面: ヨコナデ・ハケメ・ケズリ/外面: ヨコナデ・ハケメ	
235	土師器	二重口縁壺	I 地区	NR 7100 (S W 7132)	230	(120)	-	15/12	内面: 黒褐色 (75YR 3/1) / 外面: にぶい褐色 (75YR 5/3)	粗 (1.5mm 以下の白色砂粒、長石、1mm 以下の透明、茶色の粒を含む)	内面: ハケ、ヘラ状工具によるナデ/外面: ヨコナデ・ハケメ	山陰系統
236	土師器	壺	I 地区 (m5)	NR 7100 Ⅲ層	最大径 208	(41)	-	底 12/12	にぶい赤褐	やや粗 (5mm 以下の白・黒・茶色の砂粒多く含む)	内面: ハケメ/外面: ハケメのちナデ・漆付着か	生駒 or 東国4
237	土師器	甕	I 地区	NR 7100 ビート層	108	(79)	-	ほぼ 完存	内面: にぶい黄褐色 (10YR7/3) 外面: 灰黄褐色 (10YR6/2)	密 (3mm 以下の白・半透明・黒・灰・赤褐色・雲母の砂粒を含む)	内面: 細かいハケのちヨコナデ・ケズリ/外面: ハケのちヨコナデ・細かいハケ	外面全体に漆付着
238	土師器	甕	I 地区	NR 7100 c-c' 中層	136	(36)	-	1/12 以下	にぶい橙 (5YR7/4)	粗 (2mm 以下の砂粒多く含む)	内面: ナデ・ヨコナデ・斜め方向のナデ/外面: ヨコナデ・ナデ	
239	土師器	甕	I 地区 (k4・5)	NR 7100 Ⅲ層	91	(27)	-	1/12 未満	灰黄褐色 (10YR6/2)	やや密 (1mm 以下の白・灰色・半透明砂粒含む)	内面: ヨコナデ・横方向のケズリ/外面: ヨコナデ・ハケメ	
240	土師器	甕	I 地区	NR 7100 c-c' 中層	137	(32.7)	-	1/12	灰白 (10YR8/2)	やや密 (2mm 以下の白・褐色砂粒・半透明の砂粒を含む)	内面: ヨコナデ・ケズリ/外面: 薄黄/外面: ヨコナデ・ハケメ	外面漆付着
241	土師器	甕	L地区 東端青灰色土	NR 10030	170	(18.1)	-	11/12	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	やや粗 (3mm 以下の白・茶・灰色砂粒多く含む)	内面: ナデ・ケズリ/外面: ナデ・ハケ	外面被熱
242	土師器	高杯	I 地区 (k4・5)	NR 7100 Ⅲ層	241	(56)	-	1/12	明赤褐 (25YR5/6)	密 (1mm 以下の白色・半透明砂粒多く含む)	内外面: ヨコナデ	
243	土師器	高杯	I 地区 (14)	NR 7100	185	(56)	-	15/12	内外: にぶい橙 (75YR7/4) 断面: 部分的に明褐色 (75YR7/1)	やや粗 (1.5mm 以下の白色・半透明・透明・赤褐色の砂粒多く含む)	内面: ヨコナデ/外面: ハケのちナデ消し	有様外反
244	土師器	高杯	I 地区	NR 7100 b-b' 中層	-	(69)	-	ほぼ 完存	明褐色 (75YR7/2) 杯部との接着面灰 (N 4/0)	密 (1.5mm 以下の白色・半透明砂粒を少し含む)	内面: ヨコナデ/外面: ヘラによる思いナデ・タタキ	
245	土師器	高杯	I 地区 (m5)	NR 7100 Ⅲ層	-	(62)	-	-	-	密 (1mm 以下の白・茶色砂粒含む)	内面: ナデ/外面: ケズリ (ハケメ一部残る)	
246	土師器	高杯	I 地区 (m5)	NR 7100 Ⅲ層	-	(47)	裾部 205	裾部 2/12	内外面: にぶい橙 (75YR6/3) 断面: 褐色 (75YR4/1)	やや粗 (2mm 以下の白色・半透明・透明・茶色砂粒含む)	内面: ケズリ・ハケのちナデ/外面: ハケメ	
247	土師器	製塩土器か	I 地区 (15)	NR 7100 ビート層	100	(112)	-	25/12	内面: にぶい褐 (75YR5/3) 外面: 灰褐 (75YR5/2) 断面: 褐 (75YR4/3)	やや粗 (1.5mm 以下の白・黒色・半透明・黒色砂粒・雲母を多く含む)	内面: ヨコナデ・ユビオサエ・ナデアゲ/ケズリ/外面: ヨコナデ・ユビオサエ・ハケ・タタキ	外面下方に漆付着
248	土師器	壺/甕	I 地区 (n6)	NR 7100 Ⅲ層	136	(75)	-	底 12/12	褐灰 (75YR5/1)	密 (2mm 以下の白・半透明・赤褐色砂粒少量含む)	内面: ケズリ・ユビオサエ/外面: ハケメ	
249	手づくね土器	平底鉢	I 地区	NR 7100 ビート層 最下層	93	49	-	完形	灰黄褐色 (10YR4/2)	やや密 (2mm 以下の半透明・白・黒色砂粒少量含む)	内面: ユビオサエのちナデ/外面: ヘラ状工具によるナデ・ユビオサエ	粘土の膜を持ち内面を指で押さえつけコップ状に整形
250	土師器	壺/平底鉢	I 地区 (14)	NR 7100 断ち割り	径 7.2	(25)	-	-	外面: にぶい黄褐色 (10YR7/2) 内面: 褐灰 (10YR5/1) 断面: 暗灰 (N 3/0)	やや粗 (1mm 以下の白色・半透明砂粒、黒く充てる砂粒多く含む)	内面: 工具による不定方向ケズリ/外面: ハケの痕跡・雑なケズリ・ナデ	
251	土師器	小形丸底壺	I 地区	NR 7100 c-c' 中層	84	(70)	-	5/12	明褐色 (75YR7/2)	やや粗 (2.5mm 以下の白・白色の砂粒多めに含む)	内面: ハケメ・ヨコナデ・ナデ・細かいケズリ/外面: ヨコナデ・ハケメ	
252	土師器	小形丸底壺	I 地区 (n7)	NR 7100 Ⅲ層	85	(79)	-	皿 6/12	内外面: にぶい橙 (5YR7/4) 断面: 灰白 (8/2)	やや粗 (2mm 以下の白色・半透明砂粒・雲母・黒っぽい砂粒をやや多く含む)	内面: ヨコナデ・ケズリ・強めのユビナデ/外面: ハケ	
253	土師器	高杯	I 地区	NR 7100 (S W 7131 下層)	(16.2)	(59)	-	1/12 以下	内外面: 灰白 (75YR8/2) [外面 - 口縁端付着 灰白 (10YR8/1)] 断面: 灰 (N 4/0)	やや粗 (2mm 以下の白色・半透明砂粒、黒・薄茶色砂粒をやや多く含む)	内面: ヨコナデ・ミガキの痕跡か/外面: ヨコナデ・細かいミガキまばらに施されている・磨長の荒れ	

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	調整	備考
					口径	器高	底径					
254	土師器	高杯	I地区	NR 7100 (S W 7131 下層)	-	(90)	123	底 6/12	にぶい褐 (7.5YR6/3)	やや密 (2mm 以下の 白色・半透明の砂粒を 母含む)	内面: ケズリ・ユビオサエ・ ナデ / 外面: 縦方向のへら ナデのち横方向のぬかい ミガキ・ナデ	
255	土師器	小形 丸底壺	I地区	S W 7131	(7.6)	(6.3)	-	3/12	内面: 灰褐色 (7.5YR 5/2) / 外 面: にぶい褐色 (7.5YR5/3)	やや粗 (1mm 以下の 灰・赤褐色粒、石英を やや多く含む)	内面: ユビオサエ・ナデ / 外面: ユビオサエ・ナデ・ ハケ	
256	土師器	小形 丸底壺	I地区	S W 7131 (期)	(7.0)	(4.2)	-	4/12	内面: 灰褐 (7.5YR 5/2)・部分的に橙 外面: 灰褐 (7.5YR 5/2)	粗 (1mm 以下の白色 砂粒・長石を多く含む)	内面: ケズリ・ナデ / 外面: ヨコナデ・ハケメ	
257	土師器	ミニチ ユア 小形 丸底壺	I地区	S W 7131 (期)	(2.4)	(2.1)	-	6/12	内外面: 灰白 (7.5 Y R8/2)	やや粗 (1mm 以下の 白・黒砂粒を含む)	内面: ユビオサエ・ナデ / 外面: ケズリ・ナデ	
258	土師器	壺	H地区	S H 7005	(17.2)	3.6	-	2.5/12	にぶい褐 (7.5YR6/3)	やや粗 (2mm 以下の 白色・半透明砂粒含む)	内外面: ヨコナデ・沈線 (摩 滅)	
259	土師器	壺	H地区	S H 7005	15.1	22.9	-	8/12 全) 85 %程度	橙 (5YR6/6)	やや粗 (2mm 以下の 白色・半透明砂粒多く 含む)	内面: ケズリ・ユビオサエ / 外面: ヨコナデ・横・斜 め方向のハケメ	外面塚付 着
260	土師器	高杯	H地区	S H 7005 (S K 7147)	-	(7.8)	120	底) 11/12 以上	橙 (2.5YR7/6)	やや密 (1mm 以下の 白色・半透明・黒色砂 粒・雲母をやや多く含 む)	内面: 絞り痕・雫なナデ ハケ・ヨコナデ / 外面: ぬ かいミガキ・下方調整不明 瞭	
261	土師器	小型 丸底壺	H地区	S H 7005 (S K 7147)	6.7	5.4	-	全) 60 %程度	橙 (7.5YR6/6)	やや密 (2mm 以下の 半透明・白色砂粒含む)	内外面: ナデ・刺線	全体的に 磨滅・剝 離が著し い
263	土師器	壺	L地区 (s 9)	S H 10033	-	(2.4)	-	1/12	にぶい赤褐	粗 (1mm 以下の砂粒 含む)	内外面: ナデ・ヨコナデ	
264	土師器	壺	L地区 (q 2)	S H 10033	-	(2.5)	-	1/12	浅黄橙 (10YR8/3)	密	内外面: ヨコナデ	
265	土師器	高杯	M地区	北壁 脚) (35)	(7.4)	-	8/12	橙色 (5YR7/6)	粗 (4mm 以下の砂粒 を含む)	内面: ナデ・ユビオサエ 外面: ケズリ		
266	土師器	高杯	L地区 (e 13)	S K 10005	18.6	(6.1)	-	9/12	橙 (5YR 6/6)	密 (3mm 以下の白・ 乳白・褐色砂粒を含む)	内面: ハケメ・ナデ / 外面: ヨコナデ・ハケメ・ユビオ サエ	
267	土師器	高杯	L地区 (e10)	N R 10030	-	4.9	124	2/12	にぶい橙 (7.5YR6/4)	密 (2mm 以下の白色 砂粒を含む)	内面: ケズリ・ヨコナデ 外面: ケズリ・ナデ・ヨコ ナデ	
268	須恵器	杯・日蓋	I地区 (n 5)	NR 7100 II層 (砂層)	12.3	(4.7)	-	2/12	内面: 暗青灰 (5 P B4/1) 外・断面 灰 (N 6/0)	密 (1mm 以下の白・ 黒色・半透明砂粒を少 し含む)	内外面: 回転ナデ	
269	須恵器	杯・日身	I地区 (k 3)	S D 7084	9.9	(5.2)	-	3/12	内外: 灰 (N5/0) / 断面: 灰白 (N7/0)	密 (0.5mm 以下の白 色砂粒・黒色粒をやや 多く含む)	内面: 回転ナデ / 外面: 回 転ナデ・回転ヘラケズリ	
270	須恵器	高杯	I地区 (k 3)	S D 7084	(128)	(9.5)	(94)	3/12	杯底: 灰白 (N7/0) / 脚部外面: 灰白 (2.5Y7/2) / 脚部 内面: 灰 (N5/0)	密 (1mm 以下の白色 砂粒・黒色粒をやや含 む)	内面: 回転ナデ / 外面: 回 転ナデ・ナデ	
271	須恵器	瓶 / 壺	H・I 地区 (k・1 3)	S D 7084	9.2	(7.0)	-	2/12	褐灰 (10YR6/1) ~黄灰 (7.5Y5/1)	密	内外面: 回転ナデ	
272	須恵器	杯・日身	I地区	S D 7056	10.1	3.4	-	1/12 完存	内面: 青灰 (5PB6/1) / 外灰 白 (N7/0)	精良	内面: 回転ナデ / 外面: 回 転ナデ・回転ヘラケズリ	
273	須恵器	杯身	I地区 (m 6)	NR 7100 II層 (砂層)	受) 15.2	(3.3)	-	受) 1.5/12	灰白 (N 7/0)	やや粗 (2mm 以下の 白・黒色砂粒含む)	内外面: 回転ナデ	
274	須恵器	杯・日身	7次 3 t r	灰土	9.6	(2.2)	-	1/12	灰 (7.5YR7/2)	密	内外面: 回転ナデ	
275	須恵器	杯・日身	L地区 (g 10)	N R 10030	(10.4)	(2.3)	-	1/12	灰白 (N 7/0)	密	内外面: 回転ナデ	
276	須恵器	杯・日身	M地区 (q 2)	S D 10029	12.5	(2.7)	-	1/12	灰 (10Y4/1) 灰 (N 6/0)	密	内面: 回転ナデ / 外面: 回 転ナデ・回転ヘラケズリ	
277	須恵器	杯・日身	L地区 (a 10)	瓦倉類	(12.6)	(2.7)	-	1/12	灰白 (N 7/0)	密	内外面: 回転ナデ	

付表18 大剣遺跡出土木製品観察表

報告 番号	種類	地区名	出土地点	法量 (cm)			樹種	備考
				長さ/径	幅	高さ/ 厚さ		
178	柱根	I地区	S P 7096 (S B 7099)	133 - 144	-	(23)8	-	芯持材
179	柱根	I地区	S P 7098 (S B 7099)	最大: 142	-	(24)3	-	芯持材
180	柱根	I地区	S P 7126 (S B 7099)	122 - 145	-	(18)8	-	芯持材
181	柱根	M地区	S P 10073	149	162	26.0	-	芯持材 工具による加工痕有り
182	柱根	M地区	S P 10066	-	16.0	26.6	-	
183	柱根	M地区	S P 10076	-	17.8 (15.0)	26.0	-	
184	柱根	M地区	S P 10060	133	134	-	-	加工痕有り
185	杭	M地区	S A 10085	222	4.8	-	-	
186	杭	M地区	S A 10085	301	3.9	-	-	
187	杭	M地区	S A 10085	305	4.4	-	-	
188	杭	M地区	S A 10085	365	4.0	-	-	
189	杭	M地区	S A 10085	286	3.4	-	-	
190	容器	M地区	S T 10015	71.0	38.8	26.7	イヌマキ	全体的に腐食している
191	容器(部材)	M地区	S T 10015	9.0	3.5	2.4	イヌマキ	容器の小口
278	建築部材(梁)	I地区	S W 7131	445.2	16.2	5.8	アスナロ属	追眼目 摩滅のため加工痕は見 られず
279	建築部材(梁)	I地区	S W 7131	445.2	15.7	4.8	アスナロ属	板目
280	建築部材(柱)	I地区	S W 7131	390.8	8.5	7.6	コウヤマキ	芯持材
281	建築部材 (壁板小)	I地区	S W 7131	146.9	15.4	3.4	アスナロ属	腐食進む、片面に1.3cmの不規則 な圧痕見られる
282	建築部材	I地区	S W 7131	193.9	16.8	14.3	コウヤマキ	芯持材 腐付着 腐食進む
283	建築部材	I地区	S W 7131	219.2	10.3	2.0	ヒノキ属	
284	建築部材	I地区	S W 7131	160.3	11.4	-	アスナロ属	
285	建築部材	I地区	S W 7131	180.3	14.2	8.3	アスナロ属	追眼目 表面腐食進む
286	建築部材小	I地区	S W 7131	79.2	2.9	2.3	-	追眼目 全面平らにする加工施さ れる
287	建築部材小	I地区	S W 7131	72.2	4.2	1.4	-	
288	棒材	I地区	S W 7131	119.5	3.9	3.4	-	追眼目 加工直らしきものがある が圧迫されて不明瞭
289	棒材	I地区	S W 7131	79.3	3.0	2.5	ヒノキ属	全面に加工施される 先端は幅を 保らつつ薄くする加工を施す
290	建築部材 (壁板小)	I地区	S W 7131	65.9	6.2	1.8	ヒノキ属	
291	建築部材小	I地区	N R 7100	52.3	22.1	2.3	ヒノキ属	追眼目 手斧による加工施される
292	建築部材小	I地区	N R 7100 ビード層	52.4	12.9	3.2	ヒノキ属	板目
293	木椀	I地区	N R 7100	106.4	16.5	10.6	本体: コウヤマキ 破片: エゴノキ	先端に向かって幅を狭くする加工 が施されているのか
294	建築部材小	I地区	S W 7132	71.3	15.6	9.0	ヒノキ属	芯持材
295	建築部材小	I地区	S W 7132	65.2	16.5	9.5	コウヤマキ	芯持材 樹皮をはく、枝を払う
296	建築部材 (壁板)	I地区	S W 7131	113.2	16.6	3.2	ヒノキ属	全体に滑らかにする加工痕有り
297	建築部材 (壁板)	I地区	S W 7132	54.5	6.2	1.5	ヒノキ属	板目 表・裏面ともに手斧の後に ヤリカンナで平らにする加工施さ れる
298	建築部材小	I地区	S W 7132	179.8	3.8	2.3	ヒノキ属	全面加工施される
299	建築部材	I地区	S W 7131	145.3	5.0	2.4	ヒノキ属	
300	槽	I地区	N R 7100 ビード層	73.6	46.6	14.0	スギ	加工痕は全体にほんやり残る程度
301	槽	I地区	N R 7100 ビード層	10.3	36.0	3.7 (0.7)	アスナロ属	
302	広縁身	I地区	N R 7100 ビード層	17.2	35.3	2.2 (1.1)	アカガシ亜属	

報告 番号	種類	地区名	出土地点	法量 (cm)			樹種	備 考
				長さ/径	幅	高さ/ 厚さ		
303	広葉身	I 地区	SW 7132	146	288	26 (0.7)	アカガシ亜属	
304	田下駄	I 地区	SW 7132	27.4	129	13	アスナロ属	
305	杵子型木器	I 地区	NR 7100 ビート層	47.6	40	09	ヒノキ属	全面滑らかに加工施される。
306	不明木製品	I 地区	NR 7100 ビート層	50.9	30	15	スギ	追樋目 全体に加工施される、 穿孔3か所有り
307	木材	I 地区	S W7131	27.4	49	15	-	全体に腐食進む、表面は平らで手 茶の当たった痕跡見られる
308	木材	I 地区	NR 7100	36.1	79	25	-	追樋目
309	不明部材	I 地区	NR 7100 ビート層	22.8	106	33	ヒノキ属	
310	部材	I 地区	SW 7132	50.5	47	11	アスナロ属	表面はなめらかに加工施される、 表面は加工痕もあるが腐食進む
311	棒材	I 地区	NR 7100	32.5	27	22	-	面取り、平らにする加工、細くす る加工等施される
312	棒 (かぜ)	I 地区 (1 5)	NR 7100 ビート層	14.0	159	135	ヒノキ属	全体的に加工施される、表面腐食 進む
313	部材	I 地区	NR 7100	29	202	13	ヒノキ属	
314	部材	I 地区	NR 7100 ビート層	6.5	224	11	アスナロ属	
315	棒材	I 地区	NR 7100 ビート層	21.9	24	07	ヒノキ属	
316	燃えさし	I 地区	S W7131	23.5	16 (1.3)	-	ヒノキ属	工具痕なし (側面・表面は焼き割 りか)
317	席串	I 地区	S W7131 ビート層	15.0	22	07	ヒノキ属	
318	部材	I 地区	S W7131 ビート層	13.5	79	16	スギ	
319	板材	I 地区	NR 7100 ビート層	12.2	103	22	ヒノキ属	

付表19 大洞遺跡出土銭貨観察表

報告 番号	銭貨名	国	初铸年	地区	遺構	法量 (cm)			備 考
						径	厚さ	重さ	
192	至道元寶	北宋	995	I 地区 (o 6)	S D 7036	24	0.1	1.4	大門行書
193	天禧通寶	北宋	1017	I 地区 (m 6)	S D 7036	24	0.1	2.8	
194	祥元通寶		1008	I 地区	S D 7042	24	0.1	2.2	
195	景祐元寶	北宋	1034	7次 4 t r	精査	25	0.1	2.1	
196	皇宋通寶	北宋	1038	I 地区 (n 7)	西壁精査	25	0.1	1.0	
197	□□元寶	-	-	7次	重機樹洞	24	0.1	1.5	
198	熙寧元寶	北宋	1068	7次	精査	24	0.1	3.2	
199	元豊通寶	北宋	1078	7次 1 t r	表土	24	0.1	2.1	
200	元豊通寶	北宋	1078	7次 4 t r	精査	25	0.1	2.8	
201	熙寧元寶	北宋	1068	M地区北拉張	S D 10012	24	0.1	2.3	(背) 鐘范か
202	開元通寶	南唐	960	M地区北拉張	S D 10012 下層	26	0.1	3.3	
203	元祐通寶	北宋	1086	M地区北拉張	S D 10008 第1層	24	0.1	3.1	

付表20 大洞遺跡出土石製品観察表

報告 番号	種類	地区名	出土地点	法量 (cm)			材質	備 考
				長さ	幅	厚さ		
204	砥石	I (n 6)	S D 7036 周辺	(6.5)	40	39	凝灰岩	
205	有孔石製品	I (k 5)	精査	(3.7)	30	6.6	泥岩	穿孔あり
206	礬石	I	S P 7044 (S B 7099)	2.3	20	1.0	石英	乳白色
262	砥石	I	S H 7005 床直	13.3	47	(3.4)	1900	凝灰岩

圖 版

図版第1 犬飼遺跡第7・10次

第7次



(1)調査地遠景(北東から)



(2)H地区全景(上が北)

図版第2 犬飼遺跡第7・10次

第7次



(1) I地区上層遺構面全景(上が北)



(2) I地区上層遺構面全景(北東から)

図版第3 犬飼遺跡第7・10次

第7次



(1) 溝 S D 7036 検出状況(南から)



(2) 溝 S D 7036 遺物出土状況
(西から)



(3) 溝 S D 7036 遺物出土状況
(西から)

図版第4 犬飼遺跡第7・10次

第7次



(1) 溝 S D7036 b-b' 断面
(北から)



(2) 溝 S D7036 c-c' 断面
(南から)



(3) 溝 S D7036 d-d' 断面
(北から)

図版第5 犬飼遺跡第7・10次

第7次

(1) 溝S D7036 e-e'断面
(北から)



(2) 溝S D7036木板片出土状況
(北東から)



(3) 溝S D7036木板片出土状況
(北東から)



図版第6 犬飼遺跡第7・10次

第7次



(1) 溝 S D7037 全景 (北から)



(2) 溝 S D7037 の北側検出状況
(西から)



(3) 溝 S D7037 遺物出土状況
(西から)

図版第7 犬飼遺跡第7・10次

第7次

(1) 溝 S D 7038 検出状況(西から)



(2) 溝 S D 7038 遺物出土状況
(南から)



(3) 溝 S D 7040 断面(南から)



図版第8 犬飼遺跡第7・10次

第7次



(1) 溝S D7042遺物出土状況近景
(南から)



(2) 溝S D7042錢貨出土状況近景
(南から)



(3) 溝S D7042断面(西から)

(1) 集石土坑 S X 7039 検出状況
(北から)



(2) 集石土坑 S X 7039 東西断面
(南から)



(3) 集石土坑 S X 7039 東西断面
(北から)



図版第 10 犬飼遺跡第 7・10 次

第 7 次



(1) 集石土坑 S X 7039 南北断面
(東から)



(2) 集石土坑 S X 7039 完掘状況
(南西から)



(3) 掘立柱建物 S B 7099 全景
(東から)



(1)掘立柱建物 S B 7099 柱穴 S P 7044 検出状況(東から)



(2)掘立柱建物 S B 7099 柱穴 S P 7044 断面(東から)



(3)掘立柱建物 S B 7099 柱穴 S P 7047 礎石残存状況(東から)



(4)掘立柱建物 S B 7099 柱穴 S P 7057 断面(南東から)



(5)掘立柱建物 S B 7099 柱穴 S P 7058 断面(西から)



(6)掘立柱建物 S B 7099 柱穴 S P 7059 断面(西から)



(7)掘立柱建物 S B 7099 柱穴 S P 7063 断面(西から)



(8)掘立柱建物 S B 7099 柱穴 S P 7066 断面(南から)



(1) 掘立柱建物 S B 7099 柱穴 S P 7087 残存状況(北西から)



(2) 掘立柱建物 S B 7099 柱穴 S P 7088 断面(南から)



(3) 掘立柱建物 S B 7099 柱穴 S P 7090 断面(西から)



(4) 掘立柱建物 S B 7099 柱穴 S P 7066 柱材残存状況(南東から)



(5) 掘立柱建物 S B 7099 柱穴 S P 7098 断面(南から)



(6) 掘立柱建物 S B 7099 柱穴 S P 7101 断面(西から)



(7) 掘立柱建物 S B 7099 柱穴 S P 7123 断面(南から)



(8) 掘立柱建物 S B 7099 柱穴 S P 7128 断面(南東から)

(1) 掘立柱建物 S B7106 全景
(東から)



(2) 掘立柱建物 S B7106
柱穴 S P7065 検出状況
(南西から)



(3) 掘立柱建物 S B7106
柱穴 S P7065 断面 (北から)





(1) 掘立柱建物 S B7106
柱穴 S P 7064 断面(北から)



(2) 掘立柱建物 S B7106
柱穴 S P 7067 断面(北から)



(3) 掘立柱建物 S B7106
柱穴 S P 7122 断面(南から)

図版第 15 犬飼遺跡第 7・10 次

第 7 次

(1) 欄列 S A7068
掘立柱建物 S B7099 全景
(東から)



(2) 欄列 S A7068
柱穴 S P7116 断面 (西から)



(3) 欄列 S A7068
柱穴 S P7081 断面 (西から)



図版第 16 犬飼遺跡第 7・10 次

第 7 次



(1) 横列 S A 7078 全景 (南西から)



(2) 横列 S A 7078
柱穴 S P 7070・7071 断面
(北から)



(3) 横列 S A 7078
柱穴 S P 7074・7077 断面
(北から)

(1) 横列 S A 7091 全景 (北から)



(2) 横列 S A 7091
柱穴 S P 7092 断面 (西から)



(3) 横列 S A 7091
柱穴 S P 7093 断面 (西から)





(1) 土器溜まり S X 7035 検出状況
(東から)



(2) 土坑 S K 7043 遺物出土状況
(北西から)



(3) 土坑 S K 7043 東側土器
出土状況(南東から)



(1) H・1 地区下層遺構面遠景(東から)



(2) H・1 地区下層遺構面全景(右が北)



(1) 竪穴建物 S H7006 拡張部検出状況(北西から)



(2) 竪穴建物 S H7006 内 S K7147 遺物出土状況(南西から)



(1) 竪穴建物 S H7005 全景 (北東から)



(2) 竪穴建物 S H7005 拡張部断面 (東から)



(1) 竪穴建物 S H7006 南部遺物出土状況(北東から)



(2) 竪穴建物 S H7006 南部遺物出土状況(南西から)



(1) 自然流路 N R 7100 全景 (南西から)



(2) 井堰 S W 7131 出土状況 (北東から)



(1) 井環 S W7131 木製品出土状況
(北東から)



(2) 井環 S W7131 出土状況
(北西から)



(3) 井環 S W7131 上部除去状況
(西から)

(1) 木器溜まり S W7132 木製容器
出土状況(東から)



(2) 木器溜まり S W7132 木製品
出土状況(南西から)



(3) 木器溜まり S W7132 木製品
出土状況(北西から)





(1) 自然流路 N R 7100 断面 b-b' 近景 (北から)



(2) 自然流路 N R 7100、溝 S D 7084 断面 c-c' 近景 (北東から)

- (1) 自然流路 N R 7100、
溝 S D 7084 断面 c—c' 近景
(北東から)



- (2) 自然流路 N R 7100、
溝 S D 7084 断面 a—a' 近景
(南から)



- (3) 溝 S D 7031、
竪穴建物 S H 7005 断面
(南西から)





(1) 溝 S D7134 全景 (北から)



(2) 溝 S D7084 全景 (南から)



(3) 自然流路 N R7100 完掘全景
(南西から)



(1) 調査地遠景(南から)



(2) L地区上層遺構面全景(上が北西)



(1) M地区拡張後調査地遠景(南から)



(2) L地区下層・M地区中世下層遺構面全景(上が北)



(1) 1トレンチ全景(北西から)



(2) 1トレンチ北壁断面
(南東から)



(3) 2トレンチ全景(南西から)



(1) 2トレンチ北壁断面
(南西から)



(2) 3トレンチ全景(南西から)



(3) 3トレンチ全景(北東から)

(1) 4トレンチ全景(北西から)



(2) 4トレンチ西壁断面
(南東から)



(3) L地区中世遺構面全景
(南西から)





(1) L地区盛り土断面(北から)



(2) 土坑SK10005遺物出土状況
(西から)



(3) 土坑SK10005土層断面
(北から)

(1) 土坑SK10032検出状況
(北から)



(2) 土坑SK10032土層断面
(南西から)



(3) 土坑SK10032土層断面
(北東から)





(1) 柱状図急断面(東から)



(2) 柱状図急断面(東から)



(3) 溝 S D 10007 南半検出状況
(南東から)

(1) 溝 S D 10008 北半検出状況
(南東から)



(2) 溝 S D 10008 北半遺物出土状況
(南東から)



(3) 溝 S D 10008 北半完掘状況
(南東から)





(1) 中世墓 S T 10015 検出状況
(南東から)



(2) 中世墓 S T 10015 土層断面
(南から)



(3) 中世墓 S T 10015 土層断面
(西から)

- (1) 中世墓 S T 10015 木製容器・
中世墓 S T 10021 検出状況
(北東から)



- (2) 中世墓 S T 10015 石組み
検出状況 (南東から)



- (3) 中世墓 S T 10015 完掘状況
(南東から)





(1) 中世墓 S T 10021 検出状況 (南から)



(2) 中世墓 S T 10021 遺物出土状況 (北から)

(1) 中世墓 S T 10021 北側東西畦
断面(北から)



(2) 中世墓 S T 10021 南側東西畦
断面(北から)



(3) 中世墓 S T 10021 完掘状況
(北から)





(1) ピット S P 10052断面
(北東から)



(2) ピット S P 10052炭層検出状況
(北東から)



(3) ピット S P 10052完掘状況
(北から)

(1) 掘立柱建物 S B 10001
柱穴 S P 10034断面(北から)



(2) 掘立柱建物 S B 10001
柱穴 S P 10072断面(西から)



(3) 掘立柱建物 S B 10001
柱穴 S P 10071・10042断面
(東から)





(1) 横列 S A10086
柱穴 S P10082断面(南から)



(2) 溝 S D10020遺物出土状況
(南東から)



(3) 掘立柱建物 S B10001全景
(南東から)

(1) 柵列 S A 10085 検出状況
(西から)



(2) 柵列 S A 10085 断面 (西から)



(3) M地区中世下層全景
(南東から)





(1) 古代土層断面 b-b' (南から)



(2) 畦状遺構 S X 10086 断面 (北から)

図版第47 大飼遺跡第7・10次

第10次



(1) L地区下層全景(北東から)



(2) L地区下層全景(南から)



(1) 自然流路N R 10030完掘状況(南から)



(2) 自然流路N R 10030完掘状況(北から)

(1)自然流路N R 10030
遺物出土状況(北東から)



(2)自然流路N R 10030断面
(北から)



(3)自然流路N R 10030断ち割り
断面(北から)





(1) 竪穴建物 S H10033検出状況
(南から)



(2) 竪穴建物 S H10033土層断面
(東から)



(3) 竪穴建物 S H10033完掘状況
(南から)



41



53



54



55



62



82



83



84



85



86



89



100



101



102



106



108



128



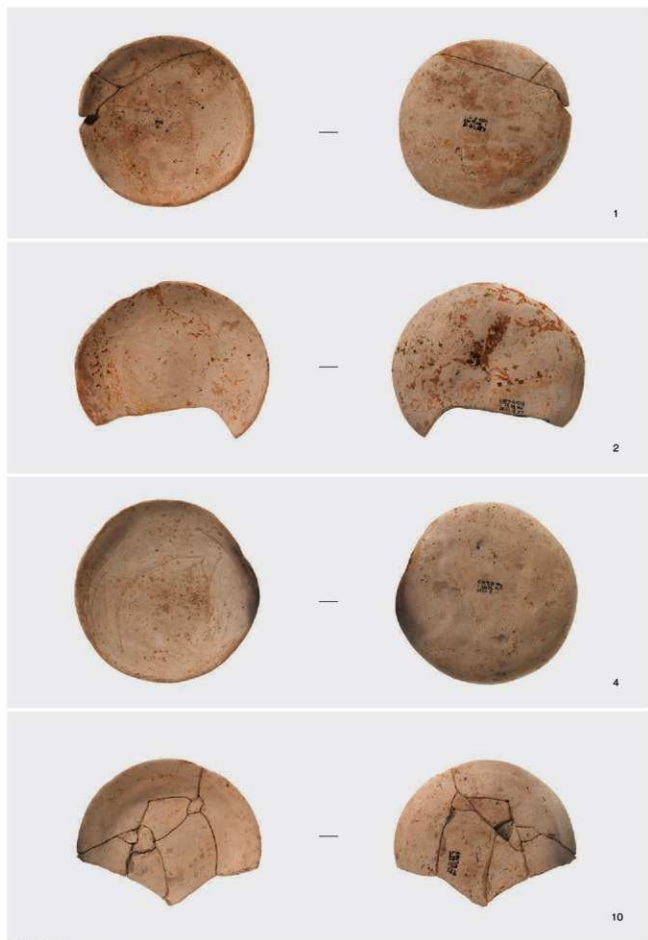
130



133



145





13



14



15



49



50



51



52



70



71



72



73



124



125



139



152



153



—



167



—



168



—



79



—



93



142



140



139



143



141



144



60



209



226



210



230



249



231



266



267



265



213



261



224



251



221



252



219



223



218



211



247



216



259



241



178



179



180



183



185



186



187



188



189



282



282



282



283



283



283



284



277

278

278

279

279

299

報告書抄録

ふりがな	京都府遺跡調査報告集
書名	きょうとふいせきちょうさほうこくしゅう
副書名	
巻次	第190冊
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第190冊
編著者名	桐井理揮、菅博絵、名村威彦、引原茂治、松井 忍
編集機関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40番03 Tel. 075(933) 3877
発行年月日	西暦2023年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ° °	° ° °		m ²	
大阿遺跡第7次	京都府亀岡市 曾我部町法貴 二ノ坪はか	262064	156	34° 59' 30.53"	135° 32' 20.82"	20200608 ~ 20210112	2,000	河川改修
大阿遺跡第10次	京都府亀岡市 曾我部町法貴 二ノ坪			34° 59' 27.36"	135° 32' 16.59"	20210701 ~ 20220117	2,000	

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大阿遺跡第7次	集落	古墳、中世	流路、堅穴建物、井堰、掘立柱建物、溝、欄	土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、木製品	
大阿遺跡第10次	集落	中世	掘立柱建物、溝、墓	土師器、瓦器、青磁、白磁、木製品	

所収遺跡名	要 約
大阿遺跡第7次	上層では、中世の屋敷地や道路状遺構を検出。屋敷地には掘立柱建物や欄があり、溝で区画されている。中世の集落の構造を知る資料となった。下層では古墳時代の護岸施設や井堰を伴う流路を検出した。前期の土器や木製品が出土した。古墳時代の農業用水の利用管理を知る資料。
大阿遺跡第10次	北側の地区では、古墳時代前期の堅穴建物と流路を検出した。流路内から古墳時代前期から後期にかけての土器が出土した。南側地区では、中世の土壇墓2基、溝、溝で区画された掘立柱建物などを検出した。短期間で、居住区から耕作地へと移行したことが明らかになった。

京都府遺跡調査報告集 第190冊

令和5年3月31日

発行 公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社
〒602-8358 京都市上京区七本松通下長者町下る三番町273
Tel (075)467-5151 Fax (075)467-5152